

JICA中部

2017年度 教師海外研修 報告書



エチオピア
8/5(土)~8/17(木)
13日間(現地10日間)



パラグアイ
7/25(火)~8/7(月)
14日間(現地10日間)

■ **主催** : 独立行政法人国際協力機構 中部国際センター (JICA中部)

■ **後援** : 外務省、文部科学省

愛知県教育委員会、三重県教育委員会、岐阜県教育委員会、静岡県教育委員会、
名古屋市教育委員会、静岡市教育委員会、浜松市教育委員会

■ **運営委託先** : 特定非営利活動法人 NIED・国際理解教育センター

目次

巻頭グラフ

I	開発教育指導者研修の概要 -----	1
1	● 開発教育指導者研修の目的	
2	● 「実践編」の概要	
3	● 「初級編」の概要（愛知県、岐阜県、三重県、静岡県浜松）	
II	開発教育指導者研修（実践編）第1回 -----	6
6	● 開催概要、第1回のねらい	
6	● プログラムの内容	
III	開発教育指導者研修（実践編）第2回 -----	16
16	● 開催概要、第2回のねらい	
16	● プログラムの内容	
IV	開発教育指導者研修（実践編）第3回 -----	26
26	● 開催概要、第3回のねらい	
26	● プログラムの内容	
V	実践報告シート -----	35
35	● 実践報告シート一覧	
36	● 実践報告シート 39人分	
VI	開発教育指導者研修（実践編）第4回 -----	75
75	● 開催概要、第4回のねらい	
75	● プログラムの内容	
VII	開発教育・国際理解教育実践報告フォーラム2018 -----	79
79	● 開催概要、開発教育・国際理解教育実践報告フォーラム2018のねらい	
79	● プログラムの内容	
81	● 実践教材体験ワークショップの内容	
85	● ふりかえりシート	
VIII	研修全体のふりかえり・評価 -----	87
87	● 研修の期待と満足度について	
87	● 研修を受けた自分自身の意識の変化について	
90	● 開発教育・国際理解教育の実践について	
95	● 学習者の変化や周りへの波及効果について	
98	● 全体を通して	
101	● 研修・実践報告フォーラムをより良くするための提案	

2017年度 教師海外研修報告書

目次

現地研修で印象に残った2枚の写真	30	● ⑳JICA パラグアイ事務所報告会・懇親会
I. 教師海外研修の概要	31	● ㉑ランバレの丘
1 ● 目的とねらい	31	● パラグアイでの食事
3 ● 派遣国と訪問先	IV. エチオピア現地研修の様子と	受講者の学び
7 ● 募集と研修受講者	32	● ①JICA エチオピア事務所ブリーフィング
9 ● 研修全体のスケジュール	32	● ②フェアトレード会社「Sabahar」
II. 出発前後の国内研修・説明会等	32	● ③エチオピア国立博物館
11 ● 選考後説明会	33	● ④2000 Habesha Cultural Restaurant
13 ● 事前研修	33	● ⑤教育アドバイザーによるブリーフィング
16 ● 出発前説明会	34	● ⑥青年海外協力隊（小学校教育）活動
18 ● 事後研修	34	● ⑦品質・生産性向上（カイゼン）普及能力開発プロジェクト／Ethiopia KAIZEN Institute（EKI）＋職業訓練校 TVETCollege
III. パラグアイ現地研修の様子と	34	● ⑧ハラール新市街・旧市街
受講者の学び	35	● ⑨青年海外協力隊（コミュニティ開発）活動／スーク&クッキー工房マーケット
22 ● ①JICA パラグアイ事務所ブリーフィング	35	● ⑩青年海外協力隊（コミュニティ開発）活動／幼稚園&1-4年生の学校
22 ● ②ニャンドゥティ制作	36	● ⑪青年海外協力隊（コミュニティ開発）活動
22 ● ③青年海外協力隊（小学校教育・現職派遣）活動	36	● ⑫ホーリー・トリニティー大聖堂
23 ● ④青年海外協力隊（野菜栽培）活動	37	● ⑭青年海外協力隊（観光）活動／ボランティアとの懇談／アイェロウ湖＋チェンチャマーケット
23 ● ⑤東部地域・酪農振興のための農業研修拠点の形成と人材育成支援プロジェクト	37	● ⑮少数民族ドルゼ村散策・宿泊（住居ツアー＋工房（機織・焼き物）＋キャンプファイヤー等）
24 ● ⑥ラ・パス日本語学校	38	● ⑯ネッチサル国立公園
24 ● ⑦ラ・パス日本人会	38	● ⑰青年海外協力隊（服飾）活動
25 ● ⑧トリニダ遺跡	38	● ⑱シニア海外ボランティア（自動車整備）活動
25 ● ⑨ホームステイ	39	● ⑲アディスアベバ市内教材収集（郵便局前民芸品店、トモカコーヒー店、スーパーマーケット）
26 ● ⑩ラ・パス市総合コミュニティ開発事業（コミュニティ開発／保健師／生活改善）	39	● ㉑青年海外協力隊とのワークショップ
27 ● ⑪青年海外協力隊とのワークショップ	40	● ㉒JICA エチオピア事務所所員等との懇親会＋報告会
27 ● ⑫農家のための金融包摂に向けた組織強化プロジェクト	40	● エチオピアでの飲食全般・コーヒーセレモニー
27 ● ⑬青年海外協力隊（コミュニティ開発）活動		
28 ● ⑭ゴマ加工品の生産管理技術の普及・実証事業		
28 ● ⑮カテウラ音楽団		
29 ● ⑯シニア海外ボランティア（自動車整備）活動		
29 ● ⑰青年海外協力隊（服飾）活動		
29 ● ⑱白沢商工株式会社		
30 ● ⑲アスンシオン市内見学・教材収集		

V. パラグアイ 帰国後の報告

- 41 ● 現地研修の研修報告書での報告
- 41 ● 1. 現地研修に対する各自の目的とその達成度
- 42 ● 2. 柱1「訪問国に肯定的に出会う」観点から学んだこと
- 44 ● 3. 柱2「日本と訪問国とのつながりや同一性を理解する」観点から学んだこと
- 46 ● 4. 柱3「共通の課題について共に考え・共に越える」観点から学んだこと
- 48 ● 開発教育指導者研修（実践編）第3回での報告
- 48 ● 開発教育・国際理解教育実践報告フォーラム2018での報告

VI. エチオピア 帰国後の報告

- 49 ● 現地研修の研修報告書での報告
- 49 ● 1. 現地研修に対する各自の目的とその達成度
- 50 ● 2. 柱1「訪問国に肯定的に出会う」観点から学んだこと
- 52 ● 3. 柱2「日本と訪問国とのつながりや同一性を理解する」観点から学んだこと
- 53 ● 4. 柱3「共通の課題について共に考え・共に越える」観点から学んだこと
- 56 ● 開発教育指導者研修（実践編）第3回での報告
- 56 ● 開発教育・国際理解教育実践報告フォーラム2018での報告

VII. パラグアイ 実践報告書

- 57 ● パラグアイ実践報告書の内容一覧
- 58 ● 大澤健人「自分も世界も未来へ向かって ～パラグアイとの出会いから～」
- 65 ● 加藤侑子「同じも 違うも みんないい」
- 72 ● 久保田真代「世界が幸せになるために」
- 79 ● 榊原早織「行動しよう！ 未来を変える 地球づくり！」
- 87 ● 野々山尚志「世界に学ぶ ～届け幸せのメッセージ～」
- 95 ● 箱山園江「もしも私がカテウラにいたら」
- 99 ● 濱田蒼太「夢見る力 ～自分の世界を広げる～」
- 108 ● 脇田佐知子「みんなつながっている。さあ、わたしたちも動いてみよう！」

VIII. エチオピア 実践報告書

- 116 ● エチオピア実践報告書の内容一覧
- 117 ● 足立友香「ひらけ！世界のとびら！」
- 124 ● 木村智子「[知る]を[知る] ～knowledge is power to save the world～」
- 132 ● 児玉恵理「世界とのつながり ～日本で生きる自分と世界で生きるあなた～」
- 139 ● 三小田京子「笑顔をふやそう！～違いを認めて～」
- 146 ● 白神大典「誰かのことを想うとき、あなたと世界の枠が外れる。」
- 153 ● 白木純子「食から広がる MY WORLD」
- 160 ● 谷口加恵「[ものがたり]を知って豊かになるわたしと世界」
- 165 ● 前地直樹「エチオピアを知り、自分を知る」

IX. 研修全体のふりかえり・評価

- 171 ● 研修受講者のアンケート結果から
- 171 ● 1. 研修の満足度について
- 171 ● 2. 開発教育・国際理解教育の実践について
- 172 ● 3. 学習者のより良い変化について
- 173 ● 4. 研修内容への評価
- 175 ● 5. 教師海外研修全般を通してのより良くするための提案
- 176 ● 実践内容の評価
- 177 ● 1. 学びの3つの柱についての実践度
- 177 ● 2. 参加型、収集教材の活用の実践度



● 大澤 健人



「なにげない今日という日に感謝」

始業前の校長先生のお話。「日本の先生との出会いに感謝。みなさんを成長させてくれるでしょう。」「学ぶことに感謝。今日も何かを得て持って帰りましょう。」「今日の出会いが最初で最後にならないように。」



「首都アスンシオンを眺めて」

ランパシの丘から見えたのは、大きなビルが立ち並ぶ様子と、貧困地区カテウラのゴミ山の様子。こんなに近くに存在する経済格差の現状。よりよい未来をつつていくために私たちは何ができるのか。

○ 加藤 侑子



「AMOR(愛)」

ホームステイ先のお父さんお母さん。「お父さんは車の修理をしていますすごいよ。」「お母さんの作る料理はおいしい。」と互いのことを尊敬している。結婚後20年が経っても変わらない愛がそこにはあった。



「視線の先」

カテウラ地区にて。無表情に何かを見る二人。Favioさんの「この学校を一步出ると虐待や紛争など大きな課題がある。せめて学校内では、彼らに安心を与え、視野を広げさせたい」の言葉が思い出される。

● 久保田 真代



「私の家族@パラグアイ」

ホームステイの最後、迎えが来る前にみんなで撮った写真。一日でこんなに打ち解けられるとは思っていなかった。初めてのホームステイだったが、とても楽しかった。今度は私たちが日本を案内する番だ。



「みんな笑顔 ♡」

最初に訪問した小学校での写真。長縄でひとしきり遊んだ後、集合写真を撮った。一時間も遊んでいないのに、子どもたちは輝く笑顔に向けてくれた。子どもの笑顔は世界共通。この笑顔がずっと続く社会を作らなくては、と思った。



● 榊原 早織



「繋がったよ！日本とパラグアイ！」

日本の新聞紙で子どもたちと一緒にバッグを作った。その後、ソーラン節を披露し、日本の子どもたちが作った折り紙をパラグアイの子どもたちにプレゼントした。日本とパラグアイの子どもたちが繋がった瞬間だった。



「オレンジの食べ方が面白い！」

＜オレンジの楽しい食べ方＞ ①白い皮が残るようにナイフでむく→②上部を切る→③上部から吸う→④吸い終わる→⑤中身を裏返す→実を一つずつ食べる→⑥白い皮だけが残る。

○ 野々山 尚志



「万国共通!!子どもの笑顔」

新聞紙で買い物袋を作った後に一緒に遊んだ子どもたち。破れたところを補修すると、満面の笑みで感謝の気持ちを伝えてくれた。子どもの笑顔は万国共通。子どもの可能性が広がるよう、さらなる教育の発展を望みたい。



「パパ手作りの機械で焼くアサード」

ホストファミリーのお父さんがバイクのギアを使って作った回転式アサード焼き機。食べきれないほどの肉を焼いておもてなししてくれた。「友達が来たら平日でもやるよ」という話からも、今あるつながりを大切にしていると感じた。

● 箱山 園江



「母のぬくもり」

伝統工芸院には繊維製品とともにこの陶芸作品があった。この素朴な作品は命に対する慈しみに溢れている。この伝統工芸品の作者である女性は、自分自身の生き方を通してあたたかでゆるぎない母の愛を伝え続けている。



「Harmonic カテウラ音楽団」

貧困と格差に苦しむ子どもを救いたいという思いが、この音楽団の活動の源である。Landfill(廃棄物埋立処理場)にこだまする Harmonic(ハーモニー)は Philharmonic(交響楽団)になった。さまざまな音が互いに混ざり合い、豊かな音楽が生まれている。



● 濱田 蒼太



「だんらん」

ホームステイでの1枚。家族や友だちを交えてマテを回し飲んでいる。駅伝のたすきのように同じ容器で飲むため、そこにいる人たちの絆を感じ、一体感があつた。距離が近くなつたような気がして、会話が弾んだ。



「売り子」

パラグアイでは、昼間からいたるところで売り子が商売をしている。信号待ちには、車を磨くなどのサービスやサッカーのリフティングなどのパフォーマンスを子どもが行い、チップを稼ぐ。

○ 脇田 佐知子



「パラグアイの学校の朝(昼)会」

パラグアイで初めて訪れた学校の朝(昼)会。学校が午前と午後に分かれていることや日本のように整列せずに円を作って集まっていたことなど、日本の当たり前は、当たり前ではないことを目の当たりにした瞬間だった。



「私の決意」

大切な仲間。この仲間がいたからこそ、より多くのことを深く学ぶことができた。背景には都市とスラム街の格差が広がる。世界には課題が沢山あるが、人と人のつながりを大切に、自分にできることを始めたい。



集合写真

上：酪農振興のための農業研修
拠点の形成と人材育成支援
プロジェクト／セタパール
財団



中：ラ・パス日本語学校
交流授業



下：移動の途中で立ち寄った
菜の花畑



● 足立 友香



「My name is…」

アディスアベバ市内の小学校訪問。子どもたちに名前を尋ねると、次々とノートに書いて自己紹介してくれた。学校で学んだ英語を使って、一生懸命伝えようとしてくれることがとても嬉しかった。



「ドルゼ族との出会い」

ドルゼ民族の生活を体験。歓迎の儀式的掛け声や夜のキャンプファイヤーの思い出を胸に、モケさん一家と記念撮影。エチオピア全土の発展を願う一方で、民族の伝統や人々の心はそのままであってほしいとも感じた。

● 木村 智子



「チエンチャマーケットでの一枚」

滑る泥道の中、手を繋いでくれた子ども達。「汚れた手を洗おう」と向かった先は水たまり。そして「マネー！」とのこと。エチオピア人の優しさとインフラ整備の遅れと情操教育の遅れを一度に感じた出来事であった。



「自信あふれる Sabahar の女性の姿」

オーナーの Cathy さんが糸の紡ぎ方を紹介している場面。収入が無かった女性に働く場を与え、安定した正当な賃金を支払い、彼女の子どもたちが学校へ行けるよう支援している。自信あふれる女性の美しい姿の1枚。

● 児玉 恵理



「みんなで「1、2、3！」」

小学校を訪れた際、子どもたちと触れ合うことができた。貴重な交流の時間、これしかない！と大縄をやってみたところ、みんな大興奮！息を合わせるのが難しかったが、子どもたちの笑顔が光った瞬間だった。



「先生大集合！」

青年海外協力隊(小学校教育)の先生方と！子どもたちにとっての授業がより良くなるために、子どもたちの笑顔のために日々頑張っている先生方。国問わず、先生の役割は世界共通！と感じた。



● 三小田 京子



「共存」

交通量の多い首都の道路にもヤギが歩いてた。暴れることもなく、走り回ることなく、のどかに当然のように草を食べる動物たちと、それを当たり前で過ごしている人たちが、とても素敵に感じた。



「礼拝」

イスラム教とエチオピア正教が混在し、早朝からアザーンが流れていた。イスラム教、エチオピア正教別々に流れるので、ずっと放送が流れている気がした。

● 白神 大典



「未来」

ハラールの旧市街の路地裏で出会った子。他にも何人かの子どもたちがいて、カメラに興味津々で元気いっぱいだった。日本もエチオピアも子ども達の笑顔は輝いており、その瞳は未来へ向けられていると感じた。



「心を繋いだソーラン節」

ディレダワの学校での1枚。僕たちが心を合わせたソーランの舞に対して、温かい拍手を送ってくれた地元の方々、子ども達と撮った写真。言葉や人種に境目はなく、ともに笑顔になるのに理由はいらない。そう思った瞬間だった。

● 白木 純子



「Sabahar で働くこと」

ふと目が合った男性が機織りを止めて、ニコッと笑ってくれたその笑顔に、キャンシーさんが願っている「働くことの幸せ」が宿っているように感じ、思わずシャッターを切りました。



「滑った私の手を取ってくれた子」

チエンチャマーケットで、転んで土でべたべたになった手を取って、最後まで一緒に歩いてくれた女の子の優しさにジーンとききました。



● 谷口 加恵



「KARATE Boy」

日本の伝統文化として中学生以来の空手の演武をさせてもらった。子どもから大人まで笑顔を増かして喜んでもらえるのが嬉しかった。彼はとても良い目をしている。きっと愛するものを守る強さがあるに違いない。



「しゃぼんに映るエチオピア」

歩きながら子どもたちとの交流を求めたエチオピアでは、シャボン玉が本当に重宝した。とり出して吹いて見せ、今度は子どもの目の前に差し出すと、どの子も必ず照れくさそうに吹いた。どの子も好奇心満点だった。

● 前地 直樹



「どろだらけの雨空マーケット」

チェンチャ市場は霧だらけ。家畜やら食料やらいろいろ売っていたが、霧が深く、雨季のため、日本ではありえないような道路事情。こけて全身泥だらけになりました。エチオピアの人もみんな笑ってくれた。



「近くでワニ」

アルバミンチのネッチサル国立公園内チャモ湖。思った以上に目の前でたくさんの野生のワニが出てきて大迫力。川辺で水を飲みに来る野生動物は餌食になるそうだ。

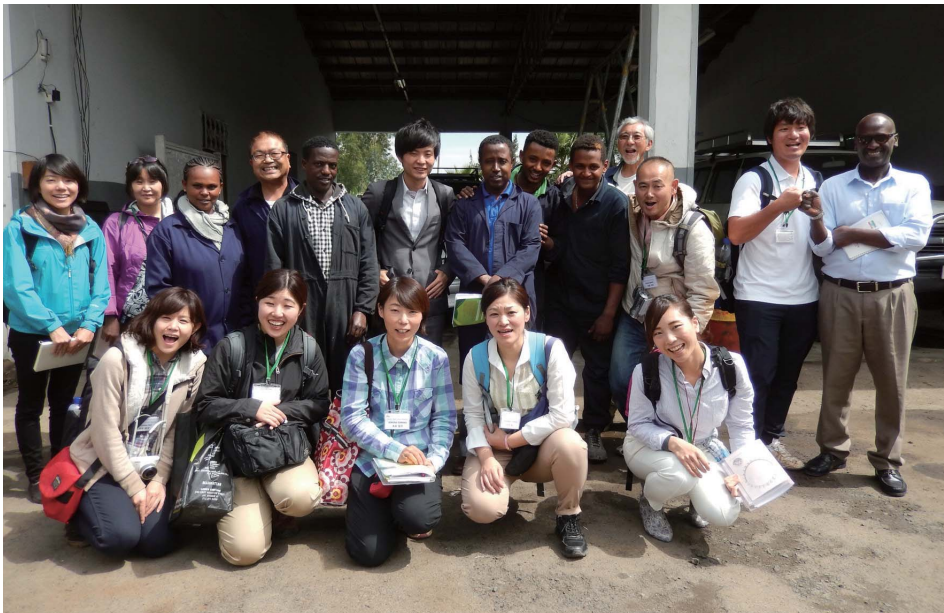


エチオピア現地研修で印象に残った2枚の写真集 4/4



集合写真

上: シャバハール
フェアトレード会社「Sabahar」
見学後 オーナーの Ms,Kathy と



中: シニア海外ボランティア
(自動車整備) 活動/農業研究
機構中央整備場
農業研究機構中央整備場の
方々と



下: 最終日
JICA エチオピア事務所での
報告会を終えて

1. 教師海外研修の概要

● 目的とねらい

(1) 事業の目的・教師海外研修の目的

開発教育に熱心に取り組んでいる小学校・中学校・高等学校・特別支援学校等の教師（以下「教師」という。）を対象に、指導者研修等の国内研修および JICA が支援している国への教師海外研修を有機的に組み合わせた上で実施し、各国の置かれている現状と日本との関係（国際協力を含む）への理解を深め、その成果を、次代を担う生徒の教育に役立てて頂くこと、また、研修参加後、JICA 国内機関と協力し、

教育現場で開発教育を推進する中核となるような人材を育成することを本事業の目的としている。

この事業の目的を踏まえた教師海外研修の目的を次のとおり設定している。



海外研修のテーマを「持続可能な開発」とし、教師の皆さんが、パラグアイ・エチオピアの暮らしや社会、JICA の協力活動等の体感を通じて、人類の多様性、心の同一性、問題点、課題を解決するために必要なことなどを調べ考え、その経験を共通の教材にし、日本の児童・生徒への開発教育・国際理解教育に活かしてもらうことを目的とする。

パラグアイ・エチオピア現地研修の学びの視点

1. 訪問国に肯定的に出会う	<ul style="list-style-type: none"> ◇ 世界の多様性を知り、多様な人やものと出会うこと・交流することの楽しさを伝える。 ◇ 多角的に肯定的に相手国と出会い、人の顔が見え、つながりを感じられるようになる。
2. 日本と訪問国とのつながりや同一性を理解する	<ul style="list-style-type: none"> ◇ 地球規模で進むグローバル化の恩恵と課題を理解し、日本とパラグアイ・エチオピアとのつながりに気づき、つながりを築く。 ◇ 国や人の多様性だけではなく、共通するものがあること（同一性）を理解する。
3. 共に考え・共に越える共通の課題の解決をめざす	<ul style="list-style-type: none"> ◇ 相手を知ることで自国（自分）をふりかえり、互いの誇りや課題を確認する。 ◇ 共に学びあい、知り、考え、気づき、よりよい未来を共に築く入り口を提供する。

(2) 開発教育指導者研修（実践編）全体のねらい

教師海外研修は、JICA 中部が行う開発教育支援事業のうち、下記内容の「開発教育指導者研修（実践編）」（以下「指導者研修」という。）の特別プログラムとして位置づけ、実施するものである。

教師海外研修受講者は、全4回の指導者研修および開発教育・国際理解教育実践報告フォーラム2018（以下、実践報告フォーラム2018）に参加し、パラグアイやエチオピアで得たものを同研修にも還元し、相互に学び合うことをねらいとしている。

テーマ「ESD（持続可能な開発のための教育）とグローバル人材」

- 開発教育・国際理解教育の目的・内容・進め方と、ESDを始めとする他の教育との関連性を理解する。
- 「知り・考え・気づく」場の提供と、「自己肯定感」「コミュニケーション力」「参加・協力」の力を育てることを通して、人の行動変容を支える「参加型」についての理解を深め、習熟する。
- 人がよりよく学び、よりよく変わることに寄り添う「ファシリテーターの役割」とそのための手立てを確認し、習熟する
- 3回までに学んだことを基に、各自の現場で開発教育・国際理解教育のプログラムを実践し、その成果と課題を第4回に持ち寄り共有し、よりよい質の教育（BQOE[※]）につなぐ。
- 1年間に及ぶ本研修の成果を、仲間と共に一般の人々に向けてフォーラムで発表することを通して、次なる担い手を増やし、「学びの好循環」を作る。

※BQOE...Better Quality of Education

◇ 第1回：『開発教育・国際理解教育のめざすもの』

- ① 研修の全体像を理解し、各自の参加の目的を振り返り、共に学び合う仲間同士知り合う。
- ② 課題を掘り下げる前に、自分とは何か、自分は社会とどう関わっているのかを明らかにする。
- ③ グローバル社会の現状を理解し、自ら考え行動するたえに役立つ「学び」と「学び方」を学ぶ。

◇ 第2回：『開発教育・国際理解教育にできること』

- ① 持続可能なよりよい未来を共に築く教育である開発教育・国際理解教育の学びの柱を理解する。
- ② 社会のよりよい変化のために「知り、考え、気づき、動く」をつなぐ教育の必要性を確認する。
- ③ 課題解決とビジョン実現に必要なスキルと、スキルビルディングに役立つことを考える。

◇ 第3回：『開発教育・国際理解教育のすすめかた』

- ① 流れのあるプログラムの作り方について学び、参加型手法を習熟する。
- ② 実際にプログラムを作り、ファシリテーターとしてプログラムを実施する練習をする。
- ③ ファシリテーターの役割とよりよい参加型の進め方についてポイントとなることを確認する。

◇ 第4回：『開発教育・国際理解教育をつなげよう』

- ① 第3回以降、研修での学びを基にした各自の実践を共有する。
- ② 1年間を通じた研修の成果を共にふりかえる。
- ③ 研修成果と実践を一般市民に向けて参加型する準備を行い、次へとつなぐ。

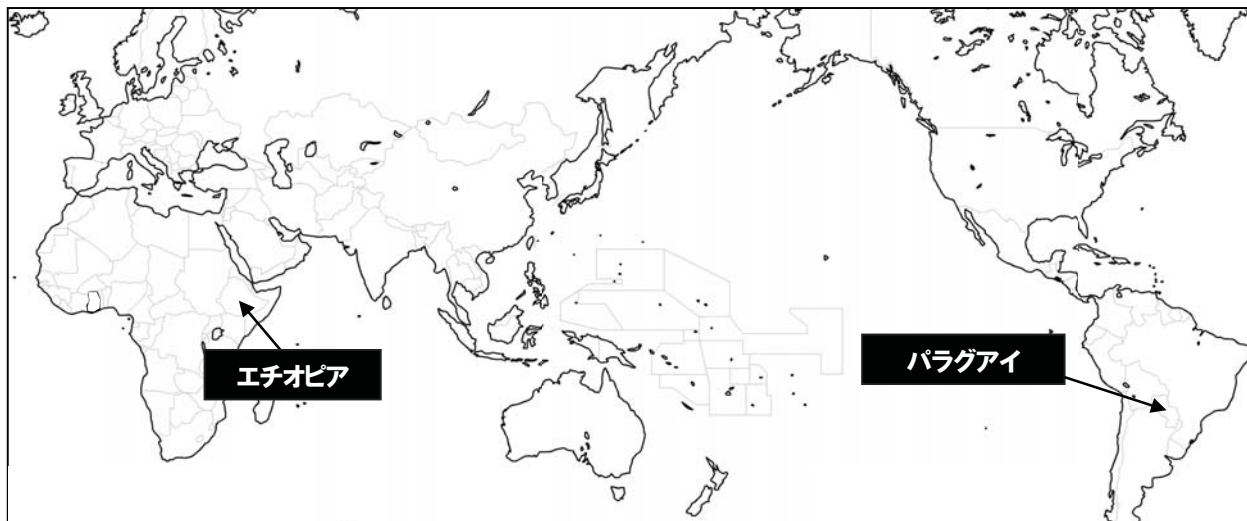
◇ 実践報告フォーラム2018『ヒントが見つかる！仲間に出会える！』

- ① 【受講者】 実践報告、モデルプログラムのファシリテートと参加者との意見交換を通して、実践の自己確認、総括を行い、ネクストステップへの意欲を高める。
- ② 【参加者】 実践者の成果と課題を共有し、自らの実践のヒントとネットワークを得てもらう。
- ③ 【主催者】 国際理解教育・開発教育を推進し、研修事業の次の参加者を広げる。

● 派遣国と訪問先

(1) 派遣国

本年度は、派遣国をパラグアイとエチオピアとした。



(2) 現地研修における訪問先

パラグアイとエチオピアの現地研修における現地スケジュールと訪問主要都市地図を P.4～6 に示した。

訪問先の選定にあたっては、JICA、運営委託先である NIED・国際理解教育センター、現地研修同行ファシリテーターを交えて検討を行った。

手順としては、現地研修の学びの視点を満たす主要テーマを設定し、各国の概要、過年度の研修の訪問実績および現在の JICA の活動を踏まえ、在外事務所と調整しながら、最終的な主要テーマを下表のとおり設定し、それに沿った訪問先に決定した。

学びの視点ごとの主要テーマ

学びの視点	パラグアイ主要テーマ	エチオピア主要テーマ
1. 訪問国に肯定的に出会う	A 衣食住 B 自然・文化・歴史 C 人々の気持ちや考え D 学校・子どもの生活	A 衣食住 B 自然・文化・歴史 C 人々の気持ちや考え D 学校・子どもの生活
2. 日本と訪問国とのつながりや同一性を理解する	E 日本とのつながり (もの) F 日本とのつながり (ひと)	E 日本とのつながり (もの) F 日本とのつながり (ひと)
3. 共通の課題について共に考え・共に越える	G 教育・職業訓練 H 格差是正・持続的経済開発	G 教育・職業訓練 H 農業・農村開発、民間セクター支援

パラグアイ現地研修の訪問スケジュール

期日	訪問先	研修場所等
7/25 (火)	07:40 中部発 (NH338/1h10m)→08:50成田着(乗換7h15m)－16:05発 (UA006/12h10m)→14:15ヒューストン着(乗換7h30m)－21:45発(UA105/10h05m)→	機内
26 (水)	09:50 サンパウロ着(乗換1h50m)－11:40発 (G37480/2h00m) →12:40アスンシオン着 ① JICA/パラグアイ事務所ブリーフィング ・陸路(カピアタへ1h30m) ② ニヤンドウティ制作 @ホテル	アスンシオン ↓ カピアタ
27 (木)	・陸路(ファン・エウロヒオ・エスティガリビアへ 3.2h) ③ 【ボラ】青年海外協力隊(小学校教育・現職派遣)活動/第3946番小学校 ・陸路(カアグアスへ0.7h) ④ 【ボラ】青年海外協力隊(野菜栽培、建築)活動/カアグアス職業訓練高校 ・陸路(イグアスへ1.7h)	ファン・エウロヒオ・ エスティガリビア ↓ カアグアス
28 (金)	⑤ 【草の根】東部地域・酪農振興のための農業研修拠点の形成と人材育成支援プロジェクト/セタパール財団 ・陸路(ラ・パスへ 4.5h) ⑥ ラ・パス日本語学校	イグアス ↓ ラ・パス
29 (土)	⑦ ラ・パス日本人会 ・陸路(ラ・パス←→トリニダー 0.7h) ⑧ 【世界遺産】トリニダの遺跡 ⑨ パラグアイ人宅でのホームステイ 11:45～	ラ・パス ↓↑ トリニダー
30 (日)	⑨ パラグアイ人宅でのホームステイ ～13:00 ★中間ふりかえりミーティング@ホテル	ラ・パス
31 (月)	⑩ 【ボラ】ラ・パス市総合コミュニティ開発事業(コミュニティ開発、保健師、家政・生活改善) ⑪ 青年海外協力隊とのワークショップ ・陸路(カアサパへ 4.0h)	ラ・パス
8/1 (火)	⑫ 【技協】農家のための金融包摂に向けた組織強化プロジェクト/農業信用公庫 ・陸路 (イトウルベへ 1.0h) ⑬ 【ボラ】青年海外協力隊(コミュニティ開発)活動/◇小規模農家訪問・昼食、 ◇農村部小学校訪問、◇コミュニティ開発体験講座・活動紹介 ・陸路 (パラグアリ へ 2.5h)	カアサパ ↓ イトウルベ
2 (水)	・陸路(アスンシオンへ 2.0h) ⑭ 【民間連携】ゴマ加工品の生産管理技術の普及・実証事業/アスンシオン国立大学 ⑮ カテウラ音楽団/カテウラ地区	アスンシオン
3 (木)	⑯ 【ボラ/無償】シニア海外ボランティア(自動車整備)活動/カルロス・アントニオ・ロペス職業訓練校 ⑰ 【ボラ】青年海外協力隊(服飾)活動/パラグアイ伝統工芸院 ⑱ 白沢商工株式会社 (ゴマ生産)	アスンシオン
4 (金)	⑲ アスンシオン市内見学・教材収集 ★全体ふりかえりミーティング ⑳ JICA/パラグアイ事務所報告会・懇親会	アスンシオン
5 (土)	㉑ ランバレの丘 13:20アスンシオン発(G37481/2h00m)→16:20サンパウロ着(乗換4h50m)21:10発－	アスンシオン 機内
6(日) 7(月)	(UA104/10h20m)→ 05:30 ヒューストン着(乗換5h05m)－10:35発(UA007/13h25m)→ 14:00成田着(乗換3h05m) ※成田－中部国際空港間遅延のため成田空港で解散	機内

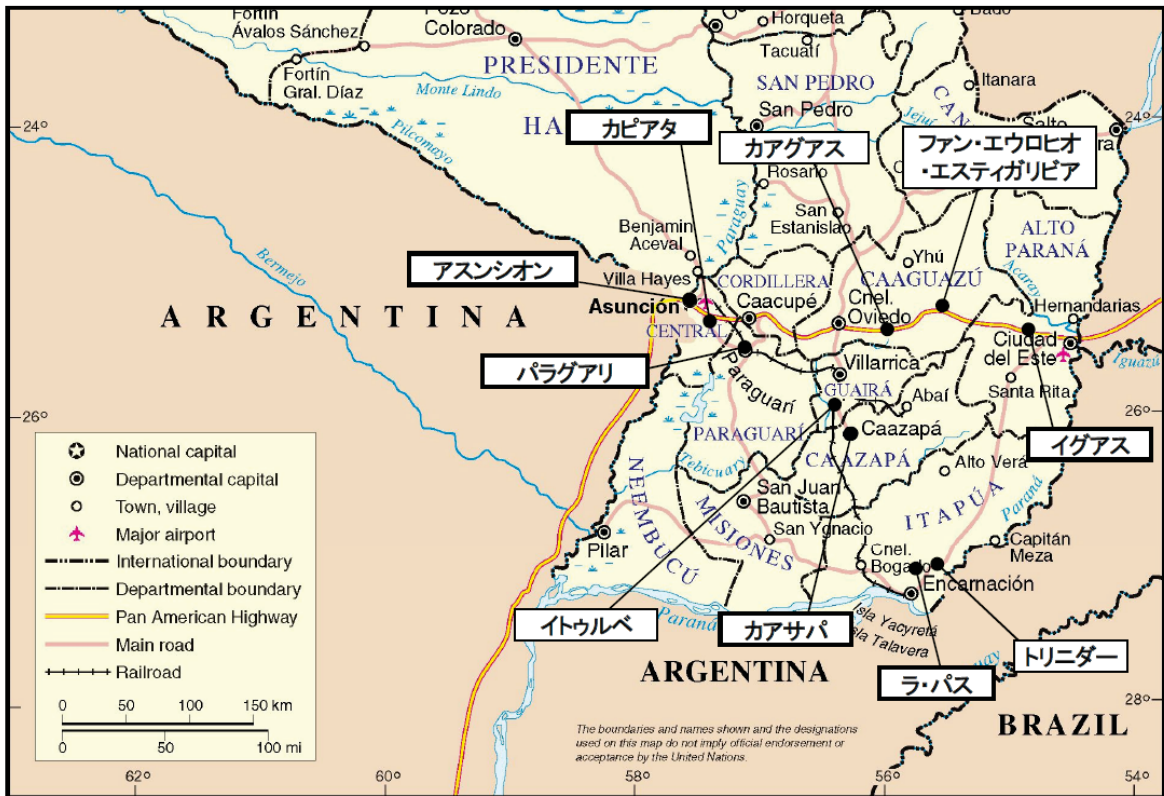
注:ボラ…JICAボランティア、技協…技術協力プロジェクト、草の根…草の根技術協力プロジェクト、無償…無償資金協力

エチオピア現地研修の訪問スケジュール

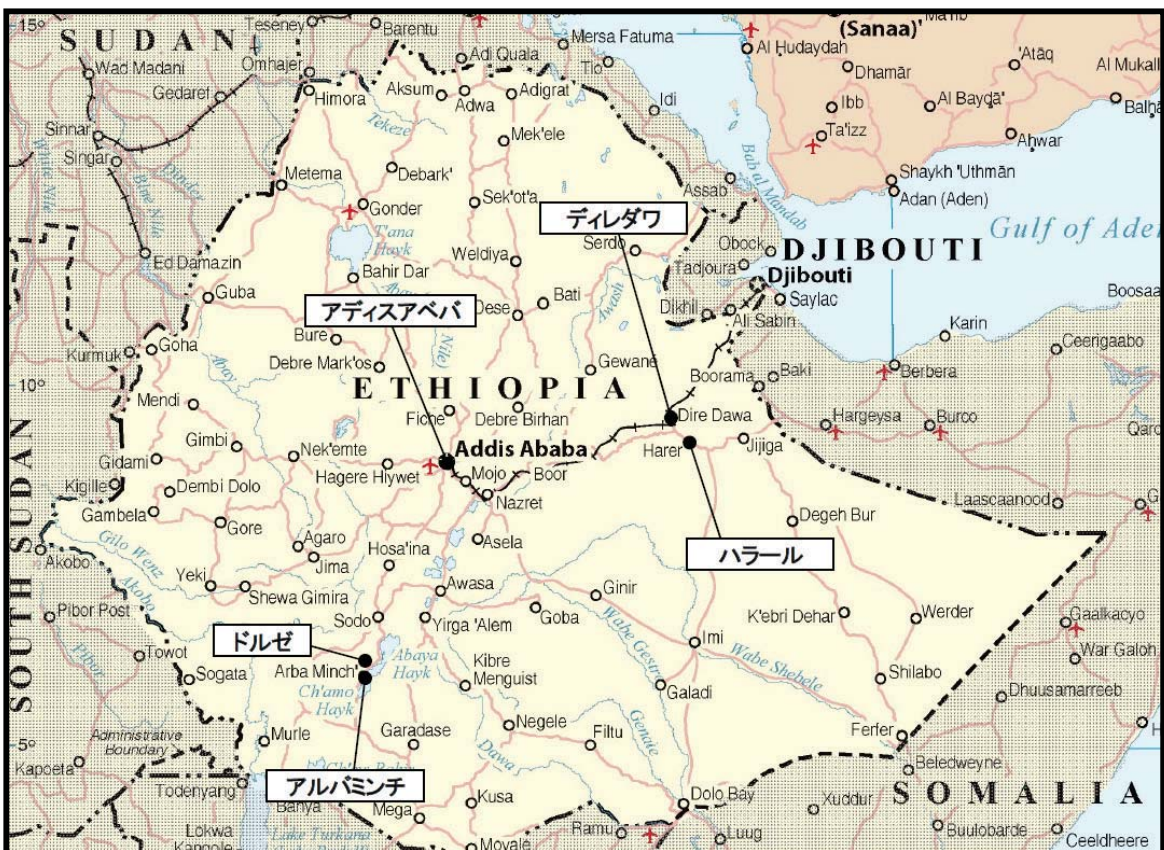
期日	訪問先	研修場所
8/5 (土)	15:00 名古屋駅太閤通口発 (連絡バス/3h30m) →18:30 関西国際空港着(乗換5h10m) -23:45発-(EK317/10h05m) →	-
6 (日)	04:50 ドバイ着(乗換5h40m) -10:30発-(EK723/4h05m) →13:35 アディスアベバ着 ①-1 JICAエチオピア事務所安全ブリーフィング@ホテル	アディスアベバ
7 (月)	①-2 JICAエチオピア事務所ブリーフィング ② フェアトレード会社「Sabahar」訪問 ③ エチオピア国立博物館 ④ 2000 Habesha Cultural Restaurant (エチオピア料理と伝統ダンス)	アディスアベバ
8 (火)	⑤ 教育アドバイザーによるブリーフィング@JICAエチオピア事務所 ⑥ 【ボラ】 青年海外協力隊(小学校教育)活動/アディスアベバ市内の2つの小学校 ⑦ 【技協】 品質・生産性向上(カイゼン)普及能力開発プロジェクト /Ethiopia KAIZEN Institute(EKI)、職業訓練校TVETCollege	アディスアベバ
9 (水)	・空路 ET200 (7:30アディスアベバ発→8:30ディレダワ着) ・陸路(空港→ハラール1.5h/ハラール→ディレダワ1.0h) ⑧ ハラール新市街・旧市街 見学・教材収集	ハラール
10 (木)	⑨ 【ボラ】 青年海外協力隊(コミュニティ開発)活動/スーク&クッキー工房マーケット ⑩ 【ボラ】 青年海外協力隊(コミュニティ開発)活動/幼稚園&1-4年生の学校 ⑪ 【ボラ】 青年海外協力隊(コミュニティ開発)活動/織機工房、配属先 ・空路 (17:00ディレダワ発→18:00アディスアベバ着)	ディレダワ
11 (金)	⑫ ホーリー・トリニティー大聖堂 ⑬ アディスアベバ市内教材収集/郵便局前民芸品店 ・空路 (15:55アディスアベバ→17:00アルバミンチ) ⑭-1 【ボラ】 青年海外協力隊(観光)活動/ボランティアとの懇談	アディスアベバ アルバミンチ
12 (土)	・陸路 (ドルゼ村へ 1.0h) ⑭-2 【ボラ】 青年海外協力隊(観光)活動/アイエロウ湖+チエンチャマーケット ⑮-1 少数民族ドルゼ村散策・宿泊/住居ツアー、宿泊、キャンプファイヤー	ドルゼ
13 (日)	⑮-2 少数民族ドルゼ村散策/工房(機織・焼き物) ・陸路 (アルバミンチへ 1h) ⑯ ネットサル国立公園 ・空路 (15:05 アルバミンチ→16:45 アディスアベバ)	ドルゼ アルバミンチ
14 (月)	⑰ 【ボラ】 青年海外協力隊(服飾)活動/生産性向上センター ⑱ 【ボラ】 シニア海外ボランティア(自動車整備)活動/農業研究機構中央整備場 ⑲ アディスアベバ市内教材収集/トモカコーヒー、スーパーマーケット	アディスアベバ
15 (火)	★全体ふりかえりミーティング ⑳ 青年海外協力隊とのワークショップ ㉑ JICAエチオピア事務所所員等との懇親会	アディスアベバ
16 (水)	㉒ JICAエチオピア事務所報告会 15:55 アディスアベバ発(EK724/4h10m)→21:05 ドバイ着(乗換5h25m) -	アディスアベバ
17 (木)	-03:30発-(EK316/9h10)→19:10 関西国際空港着 (乗換1h50m) - (連絡バス/3h30m) →22:30名古屋駅太閤通口着 (解散)	-

注:ボラ…JICAボランティア、技協…技術協力プロジェクト

パラグアイ現地研修の訪問先主要都市



エチオピア現地研修の訪問先主要都市



● 募集と研修受講者

(1) 応募資格と参加条件

①～③を募集資格とし、④～⑩をすべて満たす者を参加資格とした。

- ① 応募および研修参加時点で愛知県、岐阜県、三重県、静岡県の国公立、私立の小学校、中学校、高等学校、中等教育学校、高等専門学校、特別支援学校の教員または教育委員会の指導主事等であること。
- ② 所属する学校の校長（教育委員会であれば所属長）の推薦があること。
- ③ 原則、JICA が実施している教師海外研修、ボランティア、専門家、国際協力レポーター（ODA 民間モニター）等 JICA から海外に派遣された経験がないこと。
- ④ 教師海外研修の趣旨・目的を十分理解し、同研修の実施および以後 JICA が実施する開発教育支援事業に協力可能であること。
- ⑤ 授業やクラブ活動で開発教育を実践していること、また今後実践する予定にあること。
- ⑥ 国内で実施される研修・説明会および海外研修の全行程に参加可能であること。
- ⑦ 派遣国の事情（道路状況や衛生環境等）を勘案した上で、全研修行程に参加するに耐えうる健康状態であること。
- ⑧ 帰国後、所属長の承認を得たうえで、1) 所定の期日内に海外研修報告書を提出すること、2) 本研修の定めた期間内に所属校において授業実践を行い当該授業の実践報告書を提出すること、3) これら提出物を報告書冊子や JICA ウェブサイトなどで一般公開されることに同意すること。
- ⑨ 本研修の事前および事後連絡における効率化のため、パソコンメールアドレスでの連絡が可能なこと。
- ⑩ 参加者メーリングリストなどでの情報共有に賛同いただけること。

(2) 選考

書類審査および面接審査を行い、最終選考の結果、受講者 16 名を決定した。

(3) 研修受講者

◇同行者を除く 16 名（パラグアイ 8 名、エチオピア 8 名）の属性

{	性別：女性 11 名、男性 5 名
	年代：20 代 4 名、30 代 9 名、40 代 2 名、50 代 1 名
	地域：愛知 10 名、岐阜 1 名、三重 3 名、静岡 2 名
	校種：小学校 7 名、中学校 4 名、高等学校 4 名、特別支援学校 1 名

パラグアイ派遣受講者および同行者

No.	名前	所属先	教科等	地域
1	大澤 健人	伊賀市立阿山中学校	理科・社会 1・2年	三重
2	加藤 侑子	春日井市立玉川小学校	全科 1年	愛知
3	久保田 真代	静岡県立静岡中央高等学校	国語 1・2年	静岡
4	榊原 早織	名古屋市立西築地小学校	全科 3年, 図工	愛知
5	野々山 尚志	豊明市立沓掛小学校	全科 6年	愛知
6	箱山 園江	名古屋市立桜台高等学校	英語 3年	愛知
7	濱田 蒼太	弥富市立弥富北中学校	理科 2年	愛知
8	脇田 佐知子	名古屋市立植田東小学校	社会 6年	愛知
9	堀川 絵美	NIED・国際理解教育センター	ファシリテート	愛知
10	倉坪 久美	JICA中部 市民参加協力課	業務調整	愛知

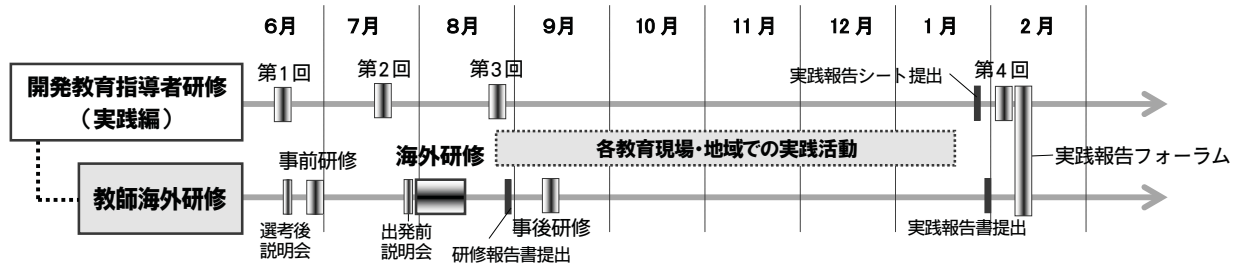
エチオピア派遣受講者および同行者

No.	名前	所属先	教科等	地域
1	足立 友香	静岡県立富士特別支援学校	全科 中学部3年	静岡
2	木村 智子	学校法人愛知学院愛知高等学校	英語 1年	愛知
3	児玉 恵理	いなべ市立藤原中学校	英語 2年	三重
4	三小田 京子	名古屋市立宮前小学校	全科 3年	愛知
5	白神 大典	愛西市立立田中学校	数学 1年	愛知
6	白木 純子	揖斐郡大野町立東小学校	全科 4年	岐阜
7	谷口 加恵	愛知県立天白高等学校	国語 3年	愛知
8	前地 直樹	津市立一身田小学校	算数 専科	三重
9	久世 治靖	NIED・国際理解教育センター	ファシリテート	愛知
10	後藤 千明	JICA中部 市民参加協力課	業務調整	愛知

● 研修全体のスケジュール

(1) 研修全体の流れと研修・説明会の日時・場所等

次のような年間を通じた流れで、開発教育指導者研修（実践編）および教師海外研修の各研修・説明会等の日時・場所等は、下表のとおり行った。



各研修・説明会等の日時・場所等

回	日時	場所	内容（予定）	
指導者研修 第1回	6月10日（土）13:00～17:00 ～11日（日）10:00～15:00	JICA中部	・「開発教育・国際理解教育がめざすもの」をテーマに参加型学習を行います。	
パラグアイ エチオピア 選考後説明会	6月11日（日）15:30～17:30	JICA中部	・出発準備や研修について説明し、質問にお答えします。 ・参加者同士が知り合う機会とします。	
パラグアイ エチオピア 事前研修	7月1日（土）13:00～17:00 ～2日（日）10:00～15:00	JICA中部	・海外行程の説明、訪問先の情報提供、渡航手続きを行います。 ・チームとしての現地研修の目標の共有、情報収集の方針、現地での交流の準備、役割分担について参加型で確認します。	
指導者研修 第2回	7月15日（土）13:00～17:00 ～16日（日）10:00～15:00	JICA中部	・「開発教育・国際理解教育にできること」をテーマに参加型学習を行います。	
パラグアイ	出発前説明会	7月24日（月）13:00～18:00	JICA中部	・渡航の最終確認、チーム内の各種調整を行います。 ・最後に立食による結団式を予定しています。
	現地研修	7月25日（火）～8月7日（月） （14日間/現地10日間）	アスンシオン ほか	・「持続可能な開発」をテーマに、JICA等のプロジェクト先、都市や農村を訪れます。 ・気づきを共有し、お互いから学びあう時間を多く設けます。
エチオピア	出発前説明会	8月4日（金）13:00～18:00	JICA中部	・渡航の最終確認、チーム内の各種調整を行います。 ・最後に立食による結団式を予定しています。
	現地研修	8月5日（土）～8月17日（木） （13日間/現地10日間）	アディス アベバほか	・「持続可能な開発」をテーマに、JICA等のプロジェクト先、都市や農村を訪れます。 ・気づきを共有し、お互いから学びあう時間を多く設けます。
指導者研修 第3回	8月26日（土）13:00～17:00 ～27日（日）10:00～17:00	JICA中部	・「開発教育・国際理解教育のすめかた」をテーマに参加型学習を行います。	
パラグアイ エチオピア 事後研修	9月9日（土）13:00～17:00 ～10日（日）10:00～15:00	JICA中部	・海外での気づきや資料を教材化し、授業で実践するためのプログラムについて考え合います。	
9月～1月：各自、学校の授業などで実践！				
指導者研修 第4回	2月10日（土）10:00～18:00	JICA中部	・「開発教育・国際理解教育をつなげよう」をテーマに実践の共有およびフォーラムの準備を行います。	
実践報告 フォーラム	2月11日（日）10:00～16:30	JICA中部	・指導者研修および教師海外研修受講者による、一般向けの実践報告等を行います。	

現地研修に向けた準備

現地研修

実践準備

実践

発表

研修全体の内容

期日	内容	受講者
6/10-11	開発教育指導者研修（実践編）第1回の実施	参加
6/11	選考後説明会の実施	参加
7/1-2	教師海外研修 事前研修の実施	参加
7/15-16	開発教育指導者研修（実践編）第2回の実施	参加
7/24	教師海外研修 出発前説明会の実施	参加
8/4	教師海外研修 現地研修	参加
7/25~8/7	◇7/25 中部国際空港発 ◇7/26 パラグアイ着 <現地滞在 10泊 11日>	
8/5~8/17	◇8/5 名古屋駅発 ◇8/6 エチオピア着 <現地滞在 10泊 11日> ◇8/5 パラグアイ発 ◇8/7 成田空港着 ◇8/16 エチオピア発 ◇8/17 名古屋駅着	
8/26-27	開発教育指導者研修（実践編）第3回の実施	参加
8/31 ㄨ	ウェブ一般公開 最終報告書へ ← 受取・まとめ	研修報告書の作成・送付
9/9-10	教師海外研修 事後研修の実施 教材化、授業プログラム検討	参加
9月~1月		教育実践
1/31 ㄨ	受取・まとめ	実践報告書の作成・送付
2/10	開発教育指導者研修（実践編）第4回の実施	参加
2/11	実践報告フォーラムの実施	報告（発表）
2~3月	研修受講者へのアンケート実施	回答
	教師海外研修報告書の編集	編集への協力
3月下旬	教師海外研修報告書のまとめ・送付	受取・活用

II. 出発前後の国内研修・説明会等

● 選考後説明会 6月11日(日)15:30~17:30/JICA中部

<ねらい>

- ◇ 教師海外研修の目的・内容、受講者に期待されていることなどを確認する。
- ◇ 共に学び合う仲間として、知り合い、訪問国への関心や授業等実践構想を共有する。
- ◇ 海外に行って学んでくる私たちが担うミッションを、自分たちの言葉で表し共有する。

<プログラム>

時間	内容	担当	備考
15:30 (5分)	1. 開会 ・主催者あいさつ ・スタッフ紹介等	JICA 倉坪	・研修の目的、JICAとNIEDの協働による実施など ・同行者の紹介とその役割
15:35 (15分)	2. 教師海外研修の目的・内容 ・研修の全体概要 ・受講者への期待 ・JICA/NIEDによる学びの支援	NIED 川合	① 児童・生徒への還元…得た情報や学びを教材化、授業に生かし、気づきや行動変容を促す。 ② 周田への還元…各報告、第3回研修時、フォーラムなど文書、対話により、学んだことを伝える。 ① 教材の共有（写真、映像、ハンズオン等） ② 事前・事後研修での授業につながるワーク など
15:50 (40分)	3. 各国現地行程案の説明 ・国別説明 ・質疑応答	パラグアイ：倉坪 エチオピア：川合	・フライトスケジュール ・パラグアイ・エチオピアの海外研修行程（案）
16:30 (50分)	4. 共通基盤作り ・お互いの思いを知り合う ・海外で学んでくる私たちが担うミッションとは？	NIED 伴	(同行者も参加) ・訪問先への関心、実践構想（子ども達への還元法） ・各国2チームずつに分かれ、ブレインストーミング→5カ条づくり
17:20 (10分)	5. その他事務連絡 ・連絡・確認 ・書類の回収	NIED 川合 JICA 倉坪	・連絡・交流（メーリングリスト） ・事前研修に関する確認…宿泊、懇親会 ・提出書類の回収

<開催の様子>



▲現地スケジュール案の説明



▲海外で学んでくる私たちが担っている役割をグループで出し合う



▲全体で発表・共有

<成果物> 「海外で学んでくる私たちが担っている役割」

●パラグアイチーム

- 1) そのままを楽しむ
- 2) パラグアイも日本も伝える
- 3) 五感をフル活用
- 4) 広げよう友達の輪
- 5) 終わらせないトドス
- 6) 『チームパラグアイ』(つながる・楽しむ・助け合う)
- 7) 事前準備をバッチリと
- 8) 吸収力 MAX ↑ ↑
- 9) 伝わる授業・深まる授業
- 10) 国際理解教育の実践モデルになる

●エチオピアチーム

- 1) エチオピアを丸ごと好きになる！
- 2) たくさんの人とモノに出会う！
- 3) 常にアンテナを高くして感動を共有する！
- 4) 心も身体も元気にみんなで帰国する！
- 5) 様々な視点を持ち、自分の言葉で伝える！
- 6) 研修の全てを楽しむ
- 7) 力を合せて教材収集
- 8) 研修で出会う全てのことを肯定し、日本の良さに気づく
- 9) 一人でも多くの人に伝える(生徒・保護者・地域の人・研修仲間)
- 10) 愛をもってつながりを深めよう！

● 事前研修

7月1日(土)13:00~17:00、2日(日)10:00~15:00

<ねらい>

- ◇ 訪問国の JICA 事業および訪問先の詳細な情報を共有する。
- ◇ 海外研修の経験を授業につなげるための教材のテーマ、収集方法を検討する。
- ◇ 現地で行うチームの役割分担、役割係ごとの内容を検討する。
- ◇ 海外研修の準備・留意事項（フライト、持ち物、健康・安全対策など）を確認する。

<プログラム>

■ 1日目：7月1日（土）

時刻	内容	講師等
13:00 (5分)	1. 開会【全体】 (1) あいさつ (2) 事前研修のねらいとプログラム	JICA 倉坪 NIED 川合
13:05 (15分)	2. アイスブレイキング【全体】 (1) 学び合う仲間になろう！	NIED 伊沢
13:20 (10分)	3. JICA 事業及び各国の援助重点分野【全体】 (1) 各国の ODA の概況の説明	JICA 倉坪
13:30 (30分)	4. 海外研修の訪問国・訪問先情報の共有【国別】 (1) 各国の概要、生活情報の共有 (2) 各国の行程（案）・訪問先の紹介、自分の関心事メモ (3) 質疑応答	NIED 堀川、久世 JICA 倉坪、(後藤) NIED 伊沢、川合
14:00 (20分)	5. 海外研修を生かした教材化の視点の確認【全体】 (1) 学習者の学びの3本柱とねらい (2) 教材づくりのポイントの説明	NIED 伊沢
14:20 (40分)	6. 海外体験を授業につなげるための計画①/個人作業【国別】 (1) 私たちのミッションと「事前-現地-事後」研修のねらいの確認 (2) 自分の関心事×子どもたちと共に学びたいことの洗い出し (3) 学びの柱ごとの8つのテーマに分類	NIED 堀川、久世
15:00	休憩 (15分)	
15:15 (45分) + (25分)	7. 海外体験を授業につなげるための計画②/チーム作業【国別】 (1) 教材チームメンバー（2チーム）の発表、担当するテーマの決定 (2) 訪問先情報集の担当テーマ部分を分担読解・ネット検索・相談 (3) 個人洗い出し意見の確認とテーマ別教材収集シートの作成 ・ねらい/カテゴリー/収集内容/方法	NIED 堀川、久世 JICA 倉坪、(後藤) NIED 伊沢、川合
16:00 16:25 (各25分)	8. フライト関連情報【国別】 (1) 出発・帰国、乗継の方法、手荷物制限、紛失等、他留意事項 16:00-16:25 パラグアイ、16:25-16:50 エチオピア	旅行会社担当者
16:50 (10分)	9. 事務連絡【全体】 (1) 海外保険加入手続き、ESTA 確認（パラグアイ） (2) その他	JICA 倉坪 NIED 川合

■ 2日目：7月2日（日）

時刻	内容	講師等
10:00 (10分)	10. 朝の体操【国別】 (1) カラダとアタマとココロの柔軟体操	NIED 堀川、久世
10:10 (80分) + (20分)	11. 海外体験を授業につなげるための計画③／チーム作業【国別】 (1) 担当テーマの教材収集シートの作成（続き&重点化） (2) 教材収集シートの教材チーム内での共有 (3) 教材収集で事前準備や工夫が必要なものの検討・計画 (4) ここまでの成果の全体共有、提案会 (5) 提案を受けて、再検討	NIED 堀川、久世 JICA 倉坪、(後藤) NIED 伊沢、川合
11:30	途中お昼休憩 (50分)	
	(6) 教材収集の具体的準備	
12:40 (60分)	12. 子どもたちとの交流&チームでの役割の検討【国別】 (1) 子どもたちとの交流についての検討（出し物、グループ活動） (2) チームとして行う各活動の内容把握と役割分担	NIED 堀川、久世
13:40 (60分)	13. 参加の準備や注意事項【全体】 (1) 海外研修中の留意事項（安全、健康、ルールなど） (2) 持ち物・準備事項 (3) 質疑応答	NIED 川合 JICA 倉坪
14:40 (20分)	14. 最終調整、事務連絡【全体】 (1) 連絡事項 (2) 全体を通しての質疑応答	NIED 川合 JICA 倉坪

資料1：事前研修レジュメ

資料3：現地日程案

資料5：学習者の学びの柱・ねらいの解説

資料7：訪問先資料集

資料9：旅行会社フライト関連資料

資料11：安全・健康などの留意事項

資料2：各国の基礎・生活情報集

資料4：各国のODA・JICA事業の概要

資料6：学びの柱に沿った教材テーマ設定

資料8：教材収集シート

資料10：チーム内の係の説明

資料12：持ち物・準備に関する資料集

<開催の様子>



▲学び合う仲間になろう！



▲担当テーマの情報を分担して読み解く



▲教材収集の具体的準備

<成果物>

■ 学習者の学びの柱ごとに設定したテーマ

学習者の学びの柱	設定したテーマ (パラグアイ エチオピア)	
1. 訪問国に肯定的に出会う (多様性と同一性)	A	暮らし 衣食住
	B	伝統・歴史 自然・文化・歴史
	C	協力隊 人々の気持ちや考え
	D	子ども・教育 学校・子どもの生活
2. 日本と訪問国とのつながりを 理解する	E	日本とのつながり (物: ゴマ・テレレ [※]) 日本とのつながり(物)
	F	日本とのつながり (人: 日系人) 日本とのつながり(人)
3. 共通の課題について共に考え 共に越える	G	仕事 (教育・職業訓練) 教育・職業訓練
	H	課題 (格差是正・持続的経済開発) 農業・農村開発・ 民間セクター支援

※テレレ…パラグアイで日常的に飲まれている冷たいマテ茶

■ 作成した情報収集シート例
(パラグアイ)

教材収集シート C. 協力隊系
(ゆうこりん、たまよ)

● **ねらい** … 子どもたちが、何に気づき、どう感じ、考えられるようになるか？

訪問国を身近に感じられるようになる
 自分たちとは異なるやり方、考え方、文化をオモシロイ！それもアリ！と思える
 多様な中でも人々の暮らしや感情・希望には多くの同一性があることに気付く

● **集める方法**…見る・聞く・味わう・におう・さわる～五感で学ぶ体験！

p 写真 m 動画 h 実物 i インタビュー e アンケート f 体感

● **具体的な収集物・情報** ※枠付きは重点項目

カテゴリー	収集内容	主な方法
参加の 想い・動機	<input type="checkbox"/> 国際協力に携わる人の想い <input type="checkbox"/> 携わったきっかけ <input type="checkbox"/> なぜ来たのか？	m i
気持ち	<input type="checkbox"/> 活動する上で大切にしていること <input type="checkbox"/> 現地で1番うれしかったこと <input type="checkbox"/> 一番悲しかったこと <input type="checkbox"/> 新しくできた夢 <input type="checkbox"/> 困っていること	m i
生活	<input type="checkbox"/> 普段の暮らし (アフターファイブ)	p i
活動に対する 現地の想い	<input type="checkbox"/> 日本からの取り組みに対する現地の方の想い <input type="checkbox"/> 現地の人は本当に困っていると感じているのか？ <input type="checkbox"/> 日系の農家が働いていることについて	m i
国際協力の 必要性	<input type="checkbox"/> 協力隊として働く→あちらにプラスなのか？ <input type="checkbox"/> 貧困に対する支援は必要？	m i
効果・成果	<input type="checkbox"/> 国際協力が現地の人たちのどんな力になっているか <input type="checkbox"/> 国際協力がどう貧困の連鎖を断ち切ることに役立ったか <input type="checkbox"/> 技術協力…困り具合・効果 <input type="checkbox"/> 実際にやってみて (どんな) 効果があったか？	m i
方法	<input type="checkbox"/> 現地の課題を解決するためにしている方法	p m h i e f
課題	<input type="checkbox"/> 現地の人と関わる上での問題 <input type="checkbox"/> 協力隊の方が考える現地の課題	i

● 出発前説明会

パラグアイ：7月24日(月)13:00~18:00

エチオピア：8月4日(金)13:00~18:00

<ねらい>

- ◇ 海外研修の最新情報について共有し、出し物・お土産・情報収集などの最終調整を行う。
- ◇ 気持ちよく豊かに学び合うための約束・心がけを決め、結団し、出発する。

<プログラム>

時刻	内容	講師等
13:00	1. 開会	あいさつ：JICA 後藤
13:05 (60分)	2. 最新情報と確認事項 ・ マナビノオトの見方、使い方 ・ 海外研修行程の1日の流れ（訪問、ふりかえり） ・ デジカメの時刻設定統一 など	全体説明：NIED 川合 1日の流れ：NIED 堀川、久世
14:05 (30分)	3. 教材収集の確認 ・ 教材収集シートでの情報収集内容の確認・共有	進行：NIED 堀川、久世
14:35 (30分)	4. 気持ちよく豊かに学び合うための約束・心がけ ・ 仲間として ・ 個人として	進行：NIED 堀川、久世
15:05	休憩（15分）	
15:20 (70分)	5. チーム活動の準備・調整・練習 ・ 出し物の練習 ・ お土産の仕分け ・ 子ども・生徒等との交流の調整	進行：NIED 堀川、久世
16:30 (30分)	6. フリータイム	
17:00 (60分)	7. 結団式 at カフェクロスロード ・ 主催者からエール→参加者からの抱負 ・ 飲食、歓談	進行：JICA 倉坪、後藤、課長挨拶

<開催の様子>



▲教材収集の確認



▲約束・心がけづくり



▲出し物の練習

<成果物> 「気持ちよく豊かに学び合うための約束・心がけ」

● パラグアイチーム

- ① Be ポジティブ
- ② みんなで一緒にハウレンソウ
- ③ リスペクト
- ④ お互いを思いやろう
- ⑤ 心の余裕
- ⑥ シェアしよう
- ⑦ オープンに
- ⑧ ラ・ファミリア



▲出発時の記念撮影

● エチオピアチーム

- ① あいさつしよう！マナーを守ろう！リスペクトしあおう！
- ② SOS！困った時は困ったと言おう！
- ③ みんな仲良く笑顔で過ごそう！
- ④ ポジティブに考えよう！行動しよう！声を掛け合おう！
- ⑤ 一期一会の機会を大切に、積極的に英語とアムハラ語で話そう！
- ⑥ たくさん聞き、たくさん言葉にしていこう！
- ⑦ みんなで相談して決めよう！
- ⑧ 予想外の事態でも協力して解決し、すべてを楽しもう！
- ⑨ よく寝て健康第一でいこう！
- ⑩ 学校の子どもたちや授業をイメージしながら教材収集しよう！



▲出発時の記念撮影

<出発当日のプログラム>

● パラグアイ

時刻	内容	講師等
6:30	1. 中部国際空港 集合 ・チェックイン、荷物預け、出発口前で記念撮影 ・保安検査、出発ゲートへ	見送り：NIED 伊沢、川合
7:40	2. 中部国際空港 発	

● エチオピア

時刻	内容	講師等
14:30	1. JR 名古屋駅太閤通口前広場 集合 ・ゆりの噴水前 記念撮影	見送り：NIED 伊沢、川合
15:00	2. 名古屋駅 発 ・エミレーツ航空専用バス	

● 事後研修

9月9日(土)13:00~17:00、10日(日)10:00~15:00

<ねらい>

- ◇ 海外研修で集めた情報を使ったアクティビティのアイデアを共有する。
- ◇ 教師海外研修で学んだこと・得たことを基にした個人の授業実践プログラムを作成し、評価指標の活用、相互提案などを通してより実践的な内容に深める。
- ◇ 実践報告フォーラムでの海外研修報告の準備を行う。

<プログラム>

■ 1日目：9月9日（土）

時刻	内容	講師等
13:00 (10分)	1. 事後研修のねらいとスケジュールの確認 【全体】	JICA 倉坪 (挨拶) NIED 伊沢
13:10 (20分)	2. アイスブレイキング 【全体】	NIED 伊沢
13:30 (30分)	3. 情報収集した教材の共有・活用法提案 【訪問国別】 (1) 教材を使ってどんな展開（アクティビティ化）ができるか教材チームでアイデア出し (2) 各チームの教材収集結果と展開アイデアの発表・共有	NIED 堀川、久世
14:00 (35分)	4. 授業実践プログラム作り①（ねらいの設定）【訪問国別】 (1) 実践編第3回のプログラムづくりのふりかえり (2) 実践時間・対象に応じた「ねらい」の検討 派生図→「知る・気づく／行動する」対比表 (3) 全体発表・共有	NIED 堀川、久世
14:35 (35分)	5. 授業実践プログラム作り②（プログラムの試作）【訪問国別】 (1) ねらい・実践時間に沿ったプログラムの流れづくり (2) プログラムへのアクティビティの当てはめと、学習者への「問いかけ」の検討	NIED 堀川、久世
15:10	休憩 (15分)	
15:25 (10分)	6. 指標による授業実践プログラムの自己評価 【訪問国別】 (1) 6つの指標による自己評価	NIED 堀川、久世
15:35 (40分)	7. 授業実践プログラムの発表・相互提案 【訪問国別】 (1) 4人グループで授業実践プログラムの発表（4分/人） (2) お悩みの相談、よりよくするための提案（6分/人）	NIED 堀川、久世
16:15 (35分)	8. 授業実践プログラム作り③（評価・提案を受けて再検討） (1) 相談・提案を受けての再検討 【訪問国別】 (2) NIED・JICA スタッフへの個別相談	NIED 堀川、久世
16:50 (10分)	9. 事務連絡 【全体】	JICA 倉坪、NIED 川合

■ 2日目：9月10日（日）

時刻	内容	講師等
10:00 (10分)	10. アイスブレイキング 【訪問国別】	NIED 堀川、久世
10:10 (55分)	11. 授業実践プログラム作り④（最終まとめ）【訪問国別】 （1）1日目に引き続きプログラムの作成、個別相談 （2）模造紙への記入・完成	NIED 堀川、久世
11:05 (15分)	12. 授業実践プログラムの展覧会【全体】 （1）壁に貼ったプログラム模造紙をギャラリー方式で共有	NIED 堀川、久世
11:20 (30分)	13. 授業実践プログラムの発表&提案会①【ミックス3グループ】 （1）発表者：5分間プレゼン（3人） （2）聞き手：よかった点/よりよくするための提案	NIED 堀川、久世、伊沢
11:50	休憩（60分）	
12:50 (30分)	14. 授業実践プログラムの発表&提案会②【ミックス3グループ】 （1）発表者：5分間プレゼン（2～3人） （2）聞き手：よかった点/よりよくするための提案	NIED 堀川、久世、伊沢
13:20 (30分)	15. 提案を受けた授業実践プログラム改善【ミックス3グループ】 （1）よかった点/よりよくするための提案カードを見て、 必要に応じてプログラムの改善、個別相談	NIED 堀川、久世、伊沢
13:50 (30分)	16. 実践に向けての私宣言！&エール【訪問国別】 （1）今後の授業実践に向けた抱負・宣言 （2）エールの交換	NIED 堀川、久世
14:20 (30分)	17. フォーラムでの教師海外研修報告の検討【訪問国別】 （1）実践報告フォーラムの海外研修報告の検討	NIED 堀川、久世
14:50 (10分)	18. 事務連絡【全体】	JICA 倉坪、NIED 川合

<開催の様子>



▲収集情報の確認



▲作成したプログラムの発表



▲実践に向けての私宣言&エール

■ 授業実践プログラムの6つの評価指標

● 開発教育・国際理解教育における「学習者の学びの3つの柱」に関する指標

指標① 柱1：学習者が、「訪問国に肯定的に出会う」次のような学びがあるか。

指標② 柱2：学習者が、「日本と訪問国とのつながりや同一性に気づく」次のような学びがあるか。

指標③ 柱3：学習者が、「共通の課題について共に考え・共に越える」次のような学びがあるか。

● 学習者主体の参加型、収集教材の活用に関する指標

指標④ プログラムに流れがあり、気づきから行動へとつながるものとなっているか。

指標⑤ 学習者が、主体的に考え、学習者同士が学び合えるような問いかけや手法となっているか。

指標⑥ 現地で収集・整理した教材が効果的に活用されているか。

<成果物>

■ 教材活用アイデア(抜粋)

● パラグアイ

教材テーマ	教材	活用方法・手法
B 伝統・歴史	・テレレ ・アオポイ ・ニヤンドウティ	・いろいろな文化を知ろう ・文化体験（テレレ回し飲み、チパ試食、衣装試着） ・日本の文化との比較
C 青年海外協力隊・シニアボランティア	・インタビュー「活動において大切にしていること」「あなたの大切なものは？」	・協力隊・ボランティアの人達の想いを知る→現地での活動を知る【ロールプレイ】→活動に大切なことを考える【指標づくり】
F 日本とのつながり（日系人）	・子ども達の絵「大切なもの」 ・ゴマ ・日系人のストーリー（田岡さん、白沢さん）	・1日のスケジュール比較 ・「大切なもの」比較【対比表】
H 課題（格差是正・持続的経済開発）	・カテウラ音楽団（写真、動画、ファビオさんインタビュー）	・貧困解決のために、もしもカテウラの子もだったら/ファビオさんだったら【ロールプレイ】 ・何があれば希望もてる？話し合い ・必要なものは何？アイデア出し

● エチオピア

教材テーマ	教材	活用方法・手法
A 衣食住	・民族独自の色で作られた製品 ・コーヒーポット、カップ ・コーヒーセレモニー写真、動画	・民族を知る、出会う ・民族問題を考える ・文化体験
D 学校・子どもの生活	・エチオピアの子どもの1日の生活	・1日の生活をグラフにし、日本・自分との比較【円グラフ】
E 日本とのつながり(物)	・現地の写真（車、日本語が書かれた製品）	・身のまわりにある外国のものを探す【リスト化】→世界はつながっていることに気づく
F 日本とのつながり(人)	・Sabahar キャシーさんコメント	・「もしもフェアトレードがなかったら？」 ・フェアトレードのある世界/ない世界を考える ・世界的課題の解決策を考える【ブレインストーミング】
G 教育・職業訓練	・インタビュー「なぜ勉強するのか？」	・エチオピアの幸せ/日本の幸せ【対比表】 ・勉強することで起きること【派生図】

■ 授業実践プログラム例

● パラグアイ

タイトル	世界が笑った行動宣言 Takassy 野山 尚志	
ねらい	○世界で起きていることに関心をもち、自分にできることを考える ○著者の思いと進め関わりを考える。行動で終わらせない。	
対象	香掛小学校 6年生 96名	所要時間 24時間
全体の展開	起 日本とパラグアイのつながりから世界を身近に促せる。 承 多様な価値観や文化を知り、肯定的に促せる。 転 課題解決の方法を探る。 結 自分たちができることを考え、発信する。	
回	プログラムの流れ	問いかけ・教材
0-1	世界に目を向けよう (70-10ミニッツ)	
0-23	世界がもし100人の村だったら7-7シニア	
0-45	パラグアイに大切なものを絵で届けよう	
1-1	日本とパラグアイのつながりを知ろう ①パラグアイの日本とのつながり分かるような写真を教材とする。②グループ対比表をつくる。③他のグループで考えたことと共有する。	①「オランダ」(1人1枚) 「似たこととグループの友達に伝えよう」⇒オランダのパラグアイの写真 ②対比表 共通点とちがうところは何かある? ⇒オランダと対比する。
1-2	食から日本と世界のつながりを考えよう ①日本食を挙げて、自給率を示す。ゴマはパラグアイで採れたものを知る。②チョコレート・ピーナツ油 → 児童労働の現状を知る。	①「オース」→ ゴマを食べる ②「ピーナツ油」→ 課題とつながり ⇒ 課題と意識
1-3	ジャガイモとお友だち お友だちの気持ちと、世界の課題と自分を知る。	ジャガイモ、貧困格差、児童労働、ジャガイモ写真
2-1	キミが先生にインタビューしよう ①休みの日 ② 朝 ③ 夜	①アリスト 書き出す ②話 ③良さをアリストに
2-2	人のつながりを大切にしよう ①テレビ体験 役割演技 → 体験する。②パラグアイ研修のこと	①シミュレーション 写真 ロールプレイ 「こんなことを感じた?」 ②
2-3	日本とパラグアイの子どもの大切なものを比べよう ①自分から大切に思うものの写真やイラストを撮る。②パラグアイの子供から大切に思うものを撮る。	①タイムトラベリング (1人1枚) ②大切に思うものをアリストに 「アリスト」から共有
2-4	先輩から話を聞こう (インタビュー) ①日本人のイメージ、ステレオタイプに気づく。②話を聞く ③ 聞きながら感じたこと、思ったこと。	①日本人はどんな人? 何を考えている? → アリスト ②生きようとして感じること、生活する中で感じたこと、気づき ③アリスト ⇒ ④ 対比表
2-5	外国人から見ると日本のいい所、好きな所を伝えよう ①自分から伝えたいこと ② 朝 ③ 夜	
3-12	アフリカから来る転校生	10月11日 検討
3-34	インドネシアの村でのボランティア活動 (72分-10分)	11月11日 検討
3-56	貧困問題の原因を探ろう ① 貧困の原因 ② 貧困の原因 ③ 貧困の原因	因果関係図
3-7	世界の課題解決のために自分たちができること 海外で活躍している人たちの話を聞いて、自分たちができることを考え、発信しよう!! 「私たちの行動宣言!!」	①自分たちができること ②自分たちができること ③自分たちができること ④自分たちができること ⑤自分たちができること ⑥自分たちができること ⑦自分たちができること ⑧自分たちができること ⑨自分たちができること ⑩自分たちができること

● エチオピア

タイトル	ひらけ! 世界のとびら 齋藤 足立 友香	
ねらい	・世界には、様々な文化があることを知り、興味をもち、関心をもつ。 ・世界と日本のつながりに気づく。 ・世界に向けて、自分ができること、今後できることを考える。	
対象	特別支援学校(知的) 中学部3年	所要時間 5時間+
全体の展開	起: 世界を知ろう! 承: 世界の文化を体験しよう! 転: 世界とのつながりを見つけよう! 結: ぼくもわたしも世界の仲間! できることを考える。	
日・時間	プログラムの流れ	問いかけ/現地
1	<世界を知ろう!> ~肯定的に出会う~ 1. ワールドクイズ <オランダ> ① 国旗 ② 食べ物 2. 世界の言葉で「ありがとう」 <オランダ> 3. エチオピアについて知ろう ① エチオピアクイズ <オランダ> ② 文化の違いを考えよう <対比> エチオピアの慣習 エチオピアの慣習	「どの国だろう?」 「世界地図で場所をさがす」 「エチオピアは、トリスや水に漬はしません。どうして?」 「現地のトリスや水」
2	<世界の文化を体験しよう!> ~肯定的に出会う~ 1. エチオピア文化体験 ① アムハラ語のあいさつ (体験) ② コーヒーセレモニー (体験) ③ 衣装を着せよう (体験) 2. アフリカ体験ふもあい(体験) 3. 日本の文化 <アリスト> ① 自分の住んでいるところ ② 修学旅行(京都奈良)で行ったこと <世界とのつながりを見つけよう!> 考える 1. 教室にある外国をさがそう! <アリスト> 2. エチオピアで見た日本のモノ <アリスト> <ぼくもわたしも世界の仲間!> 考える 世界のためにできることを考えよう	→ 現地の文化を体験して → アムハラ語のあいさつ → 現地で購入した衣装 スカーフ アリスト 「外国をさがす」 「エチオピアで見た日本のモノ」 「世界のためにできることを考えよう」
	1. 発展途上国の現状を知る <オランダ> 2. 世界のためにできること ① 今しているエコキャップ運動 <対比> ・ どうなっている? / やらないとどうなる? ② 自分ができること宣言 <行動宣言>	「エコキャップは何に使用されているの?」 「エコキャップ運動がやらないとどうなる?」 「世界の仲間のために自分ができることを何ができる?」

III. パラグアイ現地研修の様子と受講者の学び

※ 現地研修の「研修報告書」を一部編集して掲載した。
なお、訪問先の番号は、4 ページの現地行程表の番号と一致させている。

[7/26 (水)]

① JICA パラグアイ事務所ブリーフィング

JICA パラグアイ事務所の吉田所長に「日本から一番遠い首都アスンシオンによろこそ。」とあたたかく迎え入れていただき、お話をしていただいた。特に印象に残っているのは、「パラグアイの歴史の一部に日本がかかわっている」「この歴史を経て、パラグアイは日本に対して、親日といわれる以上の敬意がある」「この敬意が日本に住んでいる人に伝わっていない」というお話である。1936年に初めて日本からの移民があり、今も存在している日系社会。われわれ日本人の先人たちが築いてきたパラグアイとのつながり。キラキラと輝くパラグアイの子どもたちの表情。これからの2週間の学びが本当に楽しみとなるお話をたくさん聞くことができた。また、村上司員から、地理・気候、通貨、治安・安全、交通、健康、政治・経済、歴史など、パラグアイでの滞在について説明を受けた後、パラグアイにおける JICA 事業について、技術協力、有償資金協力、無償資金協力など、多岐にわたる支援の概要を説明していただいた。(大澤健人)



[7/26 (水)]

② ニヤンドゥティ制作

パラグアイ到着後、初めてのホテルにバンが到着した。眠い目をこすりながら中に入ると、そこには色鮮やかなニヤンドゥティが置かれていた。細い糸と太い糸、カラフルなものや単色なもの、ピアスからテーブルクロスまで、様々な組み合わせに加えて手作りだからこそ同じものはひとつもないニヤンドゥティに、飛行機の疲れは吹き飛び、私たちは大興奮しながらどれにしようか選び出した。だが、作り手の方から話を聞くことによって、いつもの自分中心の買い物から、生産者側を考える買い物となった。驚いたことは3つある。1つ目は、100円ほどの安さのものでも制作時間が2時間ほどかかっていること。2つ目は、ニヤンドゥティの模様には220種類ほどあり、その一つ一つに「太陽」「花」のようにモチーフがあること。3つ目は、パラグアイ国内での需要が減り、海外向けに要望を受けて作っているため伝統的なカラフルカラーだけでなく、受けのよい単色の作品が多くなってきていること。一つ一つに意味のあるこの伝統工芸品が、国内でまた脚光を浴びるにはどうしたらよいか、フェアな価格で海外にアピールするにはどうしたらいいのか、考えさせられた。(加藤侑子)



[7/27 (木)]

③ 青年海外協力隊 (小学校教育・現職派遣) 活動

赤土の校庭の、小さな学校を訪問した。最初の集会で、校長先生が我々を生徒に紹介してくださり、国歌と歓迎の歌で迎えてくれた。お返しに、事前研修から練習をしていた島唄とソーラン節を披露した。その後、生徒たちと長縄で交流した。一緒に身体を動かすとすぐに打ち解けられる点は、日本もパラグアイも共通している。ここでは青年海外協力隊の石川涼子さんと仲地康成さんのお話を聞くことができた。お二人とも同僚との文化の差異に苦労しながらも、活動していた。今回の研修では、訪問する学校に事前アンケートをお願いしていた。そのアンケートに一つ、気になる回答があった。「今、あなたは幸せですか?」という質問に「幸せではない」と答えた子だ。「理由は苦しんでいる人をたくさん目にするからです。例えば家がない人たちがいます。家族を欲しがっている孤児もたくさんいます。他にもたくさんありますが、このような理由で私は幸せではありません」。また、彼女は「みんなが幸せになること」を自分の夢として回答していた。彼女の夢を叶えるために、我々が出来ることは何だろうか。(久保田真代)



[7/27 (木)]

④青年海外協力隊 (野菜栽培) 活動

カアグアス職業訓練校の生徒たちは、家族や自分の将来のことを大切にし、未来に繋がる今を一生懸命に生きていた。皆、「自分の農場を持ちたい」「大学に行きたい」「獣医師になりたい」と具体的な夢を持ち、そのために一回一回の授業を大切に学んでいる姿に感心した。また、農業の授業を見たときは、子どもたちが作っている、形の整えられた畑に驚いた。生徒たちに「雑草もなく、こんなにきれいに畑を作っていてすごいね」と言うと、生徒たちは喜んで、他に雑草はないか、見つけようと探していた。そんな生徒たちの素直な姿に私たちは自然と笑顔になった。そして、それは青年海外協力隊の太田さんを始め、意識の高い先生の指導を生徒たちが真剣に学んでいるからだと思った。子どもは大人を見て学ぶ、だから教師が心を込めて準備して考えた授業は子どもたちの心に必ず届くことを再認識した。世界中どこにいても、教師は子どもたちが楽しみながら学んでいけるよう、自らが常に成長し続けて教えていかなければならないことに改めて気付かされた。(榊原早織)



[7/28 (金)]

⑤東部地域・酪農振興のための農業研修拠点の形成と人材育成支援プロジェクト

セパタール財団では、土壌の成分測定、種子の発芽率の研究、病原菌への抵抗性や遺伝子解析などの研究・調査と、人材育成を行っている。肥料会社は化成肥料を売りたいがために、本来知るべき情報が農家へ伝えていないことがある。財団では、化学肥料によって土壌成分を変えるだけでなく、堆肥や炭、木酢を使ったりして物理的に土壌改良をしていくことの必要性を伝えたり、各農協の農業普及員に向けて、生産性と品質の向上のための研修を行っている。ここでは主に次の2点について学んだ。1つ目は、将来を見据えた研究に力を入れているということである。パラグアイではまだ遺伝子組み換えの

トウモロコシが多く流通しているため、遺伝子組み換えの種子の研究依頼もあるが、お金にはならない非遺伝子組み換えの研究を続けている。生物の研究は結果が出るまでに10年かかることもある。10年後には非遺伝子組み換え作物が主流になることを見据えて研究を進めている。2つ目は、農家の立場に立って仕事をすることである。今の農家に合ったやり方で、一緒に考え一緒に悩んで取り組むことで、農家は良い方向が見えると感心を示す。この姿勢は他の支援や教育にも共通する考え方であると感じた。(野々山尚志)



[7/28 (金)]

⑥ラ・パス日本語学校

「人」「大地」——まさにパラグアイにふさわしい習字の授業を見せて頂いた。子ども達はみな工夫しながら一生懸命に取り組んでいた。授業の最後に掃除の時間があり、手際よく掃除道具を出し、雑巾を丁寧に洗い、トイレを念入りに拭く姿には感動した。あの立派な子ども達の姿は忘れられない。この学校で、日本文化とともに、挨拶、時間を守ること、整理整頓を子どもたちは学んでいる。先生方は、子ども達が日本語を学んで良かったと将来思えるようにと願っている。しかし、家庭でスペイン語中心の子どもも多く、クラスの中で子どもの日本語力に差があり、授業には課題もあるようだ。日本語学習に関する保護者の考え方の違い、日本語教師の不足などの課題もある。また中学卒業後に日本語学習が途切れるため、日本語を習得して活躍できる場がより多く必要とされている。子ども達の家族はみな知り合いだという。日系人の繋がりは強く、お互いを最もよい形で手助けすることができるのだという。「大きな家族だ」という言葉が印象的だった。(箱山園江)



[7/29 (土)]

⑦ラ・パス日本人会

入念に身なりを整え、部屋を出た。これから訪れる日本人会へ表敬するための。会長の田岡さんは日系1世としてパラグアイを切り拓き、現在の日系社会の形成と、パラグアイの発展に大きく貢献されている。出会ってまもなく私たちの緊張をジョークでほどいてくれる温かさや、話し方や内容から伝わる謙虚な人間性に私たちは惹き付けられた。これまでの移住地の歴史や、活動の内容、苦労したことなどを聞いた。話の端々に「JICA やパラグアイの人たちのおかげで」とおっしゃっていたのが印象的だった。パラグアイに日本が親しまれているのは、こういった姿勢で活動されてきたからだ実感した。最も印象に残ったことは、課題と向き合い、子どもたちの未来を良くしようという強い想いを感じたことである。日本語学校の先生は奉仕的な活動だということや、先生不足、日本語を必要としなくなってきている現状などの課題を教えてもらった。また、日系社会の課題だけでなく、パラグアイの貧困や教育格差についてなど、広い視野から子どもたちの未来を考えている姿に感動した。(濱田蒼太)



[7/29 (土)]

⑧ トリニダ遺跡



パラグアイに来て初めての、世界遺産でもある観光スポットにやって来た。遺跡の案内係の方が、「トリニダ遺跡は、カトリックの教えを広めるために、スペインのイエズス会がパラグアイに作った30の宣教村のうちの29番目に作られたものである。文字をもたないパラグアイの先住民であるグアラニー族に宗教的な教えを広めるだけでなく、政治や文化、社会教育なども伝えるために入って来た。イエズス会が力を持ち、パラグアイで

独裁をすることを危ぶみ、スペイン国王によって追放されるまでの間、村を築き上げてきた。村では、先住民は奴隷ではなく、協同作業や自分たちが作ったものを良い値段で売ってお金を稼ぐ知恵などを宣教師から教わった。」ことなどを丁寧に説明してくれた。特に、「グアラニー族はアジア系の民族であるため、「イポナ」という言葉の意味は韓国語でも同じ意味である。また、蒙古斑がグアラニー族にもあり、パラグアイ人の中にも先住民の血が強い人は、蒙古斑が出る。昔は歯を茶こし代わりにテレレを飲み、吸った時の音が「テレレ」と聞こえたことから、テレレとなった。」ことなどは、とても興味深かった。(脇田佐知子)

[7/29 (土) ~ 7/30 (日)]

⑨ ホームステイ



パラグアイの人たちは「人とのつながり」を大切にする人たちだった。「家族」「親戚」「友人」…自分と繋がった人たちは皆、大切な人だというのだ。見ず知らずの日本人を温かく迎えてくれたことから、それが事実であることが分かる。ホームステイ先の家に到着後、すぐ始まったテレレの時間。一つのコップをみんなで回して飲むため互いの距離も必然的に近くなる。のんびりと周りの自然を見て音楽を聴きながら「家族」との時間を

楽しんだ。お父さんから「心に余裕があれば、人に優しくできるんだよ。」と言われ、自分の日本での余裕のない日々で逃しているものがあることを知った。また、結婚後20年を経過しているにもかかわらず、お母さんは「この人は私のことが大好きなのよ。」と言い、それに対してお父さんは「ああ、とても愛している。」と言い合う夫婦。時間的な問題だけでなく、家族に愛されていることを自覚しているからこそ、心に余裕があり、人に優しくできるのだと思った。(加藤侑子)



私がお世話になったのは、ラ・パス移住地内のお宅であった。パパが日本人移住者(6歳のとき、家族でパラグアイに移住)で、ママがパラグアイ人の家庭である。娘さんは少し離れた市に旦那さんと子どもたちと暮らしている。息子たちは日本に住んでいるそうだ。人生初のホームステイにとても緊張していたが、お手伝いさんも含めて皆とても優しく、身振り手振りや拙いスペイン語をなんとか理解しようとしてくれた。テレレを飲

みながら折り紙をする、のんびりとした時間は本当に素敵だった。言葉は交わさずとも、同じ時間を同じ空間で過ごすことの大切さを実感した。全く同じ形ではなくとも、忙しさの中で人の大切さを感じられるような時間や経験を、生徒たちや日本の人々にもしてほしいと思う。娘さん夫婦は夜景の綺麗な場所や遺跡へ連れて行ってきて、パラグアイを満喫できるよう気を遣ってくれた。娘さん夫婦は、娘（パパママからすると孫）の15歳の誕生日（来年！）に日本に来るそうなので、そのときに会おうと約束をしている。見知らぬ日本人を家庭に受け入れてくれたホームステイ先含め「人の温かさ」を強く感じた一日だった。（久保田真代）



テレビはなかった。お湯は少ししかでなかった。けれど、最高に「ぜいたく」だった。ぜいたくというと、お金があって、モノがたくさんあって便利な生活と思い描いていたけれど、このホームステイで全く違う「ぜいたく」にたくさん出会った。私たちのことを家族として温かく迎え入れてくれたグレニョさん一家。自己紹介などしているうちに、外出していた家族が帰ってくる。すると、ハグやキス、握手をして喜び合う。食事は必ず一緒にとり、テレレヤマテ、ビールを回し飲む。そのたびに会話が生まれ絆が深まる家族だんらんの時間。みんな家族は宝物だと言い、家族との時間を非常に大切にしていた。私はそんな時間に心満たされ、ぜいたくだと感じた。また、親戚の家や牧場など、どこに行っても温かく迎え入れてくれた。誕生日には、親戚みんなが集まって祝うようだ。翌日は「友情の日」と呼ばれる日であり、友達も家族みたいに集まって、一緒に食事をとりプレゼントを贈り合う。人の温かさにつれ、つながりを感じるぜいたくな時間だった。夜、空を見上げると満天の星空。目に入るもの、感じることをすべてがぜいたくだった。ぜいたくとは何か。新たな価値観に出会えたホームステイだった。（濱田蒼太）

[7/31 (月)]

⑩ラ・パス市総合コミュニティ開発事業（コミュニティ開発／保健師／家政・生活改善）

到着すると、市長さんが私たち一人ひとりに丁寧にあいさつをしてくださり、人と人との出会いを大切にパラグアイの文化を味わうことができた。また、「ここに来ているJICAボランティアは責任感が強く、親切で、ボランティア精神がある。だから帰ってほしくない。」と話していただき、グループ型派遣として、ラ・パス市へかかわる高倉克佳さん、松田梓さん、塚口朋美さん、シニア海外ボランティアの一柳澄男さんの活躍を実感できた。その後、地域の小学校、農協、保健所、日本人会などと協力しながら、生活基盤の改善と所得向上に取り組む活動の様子や思いを聞かせていただいた。そのなかで、特に印象に残っているのは、松田さんの「学校で教員が介入しにくい分野、地元の人がしにくいことだからこそ、海外から来た私たちがしたい。」という言葉である。現地の人と一緒に考え、迷いながらも、さまざまな格差を少しでもなくすために活動しているみなさんの表情はとてもあたたかく、いきいきとしていた。（大澤健人）



[7/31 (月)]

⑪青年海外協力隊とのワークショップ

ラ・パス市総合コミュニティ開発で保健師として活動をしている青年海外協力隊の松田梓さんから話を伺った。他の青年海外協力隊の方からも話を伺ったが、どの方もみな口をそろえて、「人間関係の構築がとても重要」とおっしゃっていた。正しいと思っていることを押しつけて、昔からの習慣をいきなり変えようと思う人はいないし、反感をくらってしまう。そこで人間関係までこじれてしまったら、活動自体できなくなってしまう。「もうあいつにやらせるな」と言われてしまった松田さんは、ある方からこんな言葉を言われたという。「早く行きたかったら一人でいけ。遠くに行きたかったらみんなで行け。」一人でもがいてもできることは限られていて、大きな目標を達成することは難しい。仲間がいれば、大きな目標を達成することができる。それから松田さんは、一緒に働く人たちとのコミュニケーションを大切に、一緒に行くことを重要視するようになったという。「それで大きな成果が出ているのか分からないが、私の意見を大切に扱ってくれるようになった。」と話す松田さんは、一人ではない仲間を得た顔をしていた。(加藤侑子)



[8/1 (火)]

⑫農家のための金融包摂に向けた組織強化プロジェクト

はじめに生田専門家から説明を受けた。パラグアイ人は貯金をする習慣がないそうだ。そこで、折りたたみ貯金箱や貯金カレンダーを作る工夫をしている。価値観を無理矢理押しつけず、相手の視線での支援の例をここでも知った。また日本・パラグアイ以外の国の力を使っての活動も行っている。チリやコロンビアの知見を参考にパラグアイでの実践をする、いわゆる南南協力への支援も行っているそうだ。その後、支所で職員の方々にお話を聞いた。職員一人で約500人もの農家を相手にするが、事務所にあるのは最低限の設備だけという大変な仕事であった。この仕事をする上で大切なことはコミュニケーション能力、それによって信頼関係を築くことだと言われていた。関係を築くためには、相手の話をきちんと聞き、現場に足を運ぶ。相手が困っているときは手助けする。「この人たちは助けてくれる」という安心感があってこちらを信頼してくれる。ただ、何でもできるわけではなく「出来る範囲」で最善の方法を「共に」考えていくことが大切であるというお話を聞いた。これらはそのまま教員にも通じるところがあると感じた。女性への支援も行っており、経済的自立の一步となっている。

(久保田真代)



[8/1 (火)]

⑬青年海外協力隊 (コミュニティ開発) 活動

青年海外協力隊として生き生きと活躍している稲葉さんに出会った。稲葉さんの言葉で印象に残っている言葉がある。「途上国の子どもたちは別に可哀想ではないんだよ。みんな楽しんで幸せに暮らしているよ。」その後、小学生の子どもたちと一緒に新聞紙で紙袋作りをした。みんな、人懐っこく私たちを受け入れてく

れ、紙袋作りでは物覚えも早くテキパキと制作をしていた。日本の子どもたちと何も変わらなかった。稲葉さんの言葉の通り、子どもたちは楽しく幸せに暮らしていた。最後に稲葉さんに日本の子どもたちにメッセージをいただいた。それは、「物事を多面的にみることに。そのために視野を広げること。」という言葉だった。私は、そのために一番大事なのは「教育」だと思った。裕福な子どもも貧しい子ども、日本の子どももパラグアイの子ども、学ぶことで平等に視野を広げることができる。そして、私が今すぐにできることは、クラスの子、日本の子に「生き続ける教育」をすることだと思う。その子と関われる限られた時間の中で、最大のパフォーマンスができるような授業をする必要があると感じた。稲葉さんのように、常に全力投球で。(榊原早織)



[8/2 (水)]

⑭ ゴマ加工品の生産管理技術の普及・実証事業

アスンシオン大学の農学部種子研究所では、大学と民間企業が連携して生産管理技術の普及事業を行っている。ゴマは元々綿花栽培をしていた農家にとっては、生産方法が近いので導入しやすく、手作業で行わなければならない工程が多いので、小規模農家に委ねなければならない。この事業に携わっている方たちは、小規模農家が自立し、貧困が改善されることを目指していた。パラグアイのゴマは高品質になり、輸出の際の純度もほぼ100%という管理体制ができています。しかし、生産したゴマのほとんどは輸出しており、輸出できなかった分は鶏の飼料としていた。パラグアイ人の口に合う商品を開発することで、国内で安定的に消費されるようになれば、農家が貧困から脱出することができる。そのため、現在7商品のモニタリングを行っており、これから市場展開していくそうだ。私たちも試食させていただいたが、どれもとてもおいしかった。新しいものを受け入れる文化がないパラグアイで、どれだけ受け入れられるかがとても楽しみである。(野々山尚志)



[8/2 (水)]

⑮ カテウラ音楽団



廃棄物の埋立処理場の近くにカテウラ音楽団はある。廃棄物の中から作られた世界に一つしかないユニークな楽器から美しい音楽が紡ぎだされていた。ここには輝く瞳の子どもたちがいた。練習が始まった頃に、温厚な風貌の男性が現れた。この音楽団の創業者、ファビオ・チャベスさんだ。彼の目標は、助け合い精神の世界、持続的に発展する私たちの世界を作ること。その為に音楽を通じて感受性豊かな子どもを育てることだ。困

っている人がいたら必要なものを与えれば良いと一般的には考えがちだが、物を与えるだけでは人は変わらない。いろいろな国・音楽・感じ方を教えていく中で、意識・考え方を教えて子ども達の視野を広げてあげたいと彼は考えている。貧困による暴力や犯罪など子ども達を取り巻く環境は厳しいが、子ども達が自立し

て生活できるようにする場所であり、困ったときに最初に相談に来る場所が音楽団なのである。ファビオさんの言葉は、とても分かりやすく穏やかで力強い信念に満ち溢れていた。貧困という大きな課題の解決に向かう確かな希望の光を見ることができた。また、教師という仕事の使命を改めて痛感した。(箱山園江)

[8/3 (木)]

⑩シニア海外ボランティア (自動車整備) 活動

学校に到着すると、パラグアイ伝統の帽子をもった生徒と先生方が出迎えてくれた。手に職を付け、一年で卒業をするコースに通う生徒たちの年齢は様々であったが、学ぼうという意欲が高いように感じた。シニア海外ボランティアの水野さんをはじめ、先生方もすぐに職に就けるよう一生懸命に教えていることが伝わってきた。その後、情報科と建築科に通う生徒達に、事前をお願いしていた大切な物と将来の夢の絵を活用して、クラスの仲間や日本の子ども達と共有するビンゴをした。日本の子ども達も挙げていた「家族」「友達」が大切なものである子が多かったが、日本の子ども達にはなかった「お母さん」や「自然」という回答があった。理由を聞くと「困ったときにいつも助けてくれるから」「いつもそこにあり、美しいから」とすてきな答えが返って来た。最後に将来の夢を教えてもらい、活動の感想を発表し合った。「日本の子ども達の夢も叶うといいです。」という発表をうなずきながら聞く生徒達を見て、心が温かくなった。(脇田佐知子)



[8/3 (木)]

⑪青年海外協力隊 (服飾) 活動

ニヤンドゥティ・アオパイ・エンカヘジュといった裁縫製品、皮革製品、陶器などの工芸品をつくる様子を視察・体験させていただいた。1つ1つの作業が素早く繊細であり、たいへんな労力を要するものだった。青年海外協力隊の山川いずみさんは裁縫・洋裁技術の指導とともに、伝統的な工芸品をきちんと生かすための支援をされていた。観光地化が進んでいない部分があり、こういった魅力的な技術や生産が趣味の範囲を超えていかず、仕事としての価値(利益)を持ちにくいということである。現地の人と同じ目線でよりよい持続可能性を考えていく活動のなかで、「自分自身がパラグアイ人になることの大切さ」に気づいたと話されていた。山川さんが心掛けている「自分の意見を押し付けることなく、自分が学び、自分を変えていく」姿勢というのは、国際協力だけではなく、さまざまな課題解決にもつながるものだと感じた。(大澤健人)



[8/3 (木)]

⑫白沢商工株式会社

白沢商工株式会社の白沢社長の「自分のことだけを考えても長持ちしない。社会のためであれば、たとえ障害物があっても必ず道は開ける。」という言葉が、白沢社長の生き方を表現していると感じた。小規模農家の貴重な収入源だった綿花の価格が低下した影響で、30万家族が職を失う危機が起きていた。そ

ここで、小規模農家にゴマを生産してもらおうと交渉を続け、できたゴマは白沢会社で買い取りを保証することで信頼を得、他の農家にもゴマの生産が普及していったそうだ。「今の世の中は、悪いことや間違っていることがまかり通っている。反対に、正しいことは時間がかかってしまうけど、最後は正しいことが勝つと私は信じている。」日本の子どもたちだけでなく、大人にも聞いてほしいメッセージだ。間違ったことが正しいとされる環境は、どこかなんて分からない。でも、今自分のいる環境にとどまるのではなく、「そのコミュニティを、その国を抜けて外から日本を、自分を見ることで視野を広げてほしい。」私自身の教訓でもあり、子どもたちに伝えていきたい言葉である。(加藤侑子)



[8/4 (金)]

⑱ アスンシオン市内見学・教材収集

大統領官邸に向かうバスを止めたのは、巨大な鉄格子と銃をもった警官だった。カルテス大統領が、農民への債務補助法案に対して拒否権を発動させたことによる大規模な農民デモだった。格差に不満をもつ大勢の農民たちが大統領官邸へ向けて行進していく様には、考えさせられた。私たちは迂回し、その場を後にした。歴史を感じさせる柱で囲まれた通りは、ところ狭しと店が並んでいる。雨が降っても問題なさそうなコロン通りだ。数々のパラグアイを代表する伝統工芸品や、パラグアイをモチーフとしたマグネットなどの小物が陳列されており、児童生徒にパラグアイを感じてもらうにはうってつけだった。他にも、伝統工芸品を中心とした屋台が並ぶ公園や、サッカーユニフォームを売る露店等で、教材収集を行った。また、本屋にも立ち寄った。大量の教科書がここで売っていた。地方の小学校に訪問した時、教科書は教師だけがもっているという状況を思い出した。格差について考えさせられる場面であった。首都には格差を考えさせられる場面が多くあり、子どもたちと一緒に悩み考えられる教材を収集できた。(濱田蒼太)



[8/4 (金)]

⑳ JICA パラグアイ事務所報告会・懇親会

今までの振り返りを踏まえ、報告会を行った。パラグアイで学んだことはそれぞれに違う。自分を含め10人の視点から見たパラグアイ、研修成果を共有した。現地へ来たことで意識の変化が生まれており、改めて体験することの重要性を確認した。研修はこれで終わりではない。私たちだけが学んで終わってしまっただけでは意味がない。地球規模の課題解決の一歩として、まずパラグアイで学んだことを周囲へ伝えていくことが必要である。そしてよりよい未来の為に何が出来るのかを考え、自身が学び続けること、将来を担う子どもたちに伝え続けていくことをしなくてはならないと感じた。懇親会ではアルパの生演奏やダンスの披露があり、大



変盛り上がった。有り難いことに、現地でお世話になった青年海外協力隊やシニア海外ボランティア、専門家の方々が参加してくれた。遠いところからわざわざ来てくれ、嬉しく思うと同時にこのつながりを大切にしたい。研修中に聞けなかったことを沢山質問でき、有意義な懇親会であった。美味しい食事、素敵な演奏、素晴らしい仲間と共に過ごす夜は、最高であった。(久保田真代)

[8/5 (土)]

②1 ランバレの丘



研修最終日、ランバレの丘からアスンシオン市内を眺めた。遠くにはゴミであふれかえったカテウラ地区が見えた。ゴミ山の中には人が沢山いてトラックが行き交っていた。あの中に子どもはどのくらいいるのだろう。カテウラ音楽団のことを思いだした。そして、ランバレの丘でドライバーをしてくれたエミリオにみんなで島唄を歌った。「いつも君たちが歌っていた歌だね。この曲好きだよ。」と言われてうれしかった。そして、日本

のお菓子と交通安全のお守り、みんなからの寄せ書きが書いてある扇子をプレゼントした。エミリオとはスペイン語でしか会話ができず、なかなか話すことが難しかった。けれど、エミリオのユーモアとわかりやすいジェスチャーで伝えてもらい、私たちはいつも笑わせてもらった。パラグアイに行くまで、英語は世界共通語だと思っていた私は、パラグアイで英語が全く通じないことを知り、衝撃を受けた。もっとたくさんの人と話したい、友達になりたい。そのためにいろいろな言語を学びたいと心から感じた。(榊原早織)

[全般]

● パラグアイでの食事

私たちが食事をした街のレストランは、ビュッフエスタイルのパラグアイ料理、ピザやパスタのあるイタリアン、日本食である。日本食レストランでは内陸国なのに寿司が食べられることに驚いた。日系人経営の民宿に泊まった時は、みそ汁や納豆、焼き魚を食べることができた。スーパーマーケットにも日本の調味料や食材が売られている。ホテルでは、日本食だけでなく中華料理も食べることができた。パラグアイはまさにグローバルな食文化であり、日本人がいつ移住しても食べ物で困ることはないだろう。ホームステイでは、パラグアイの伝統的な家庭料理をいただいた。牛肉の炭火焼き（アサード）は感動的なおいしさだった。目の前の畑でとったマンディオカ（キャッサバ芋）を揚げたものも素朴な味だがやみつきになる。チパ（マンディオカの粉とチーズを混ぜて焼いたパン）は帰国してから作ってみたが、あの食感を再現することができない。農村部で食事をした時、トマトベースのパスタに日本ならひき肉を使うことがあるが、パラグアイでは大きな肉のままの方が好まれることを聞いた。パラグアイ料理は牛肉や鶏肉を中心とした肉料理が多く、炭水化物も多い。常にお腹にたまっている感覚があってないと食べた気がしないのかもしれない。(野々山尚志)



IV. エチオピア現地研修の様子と受講者の学び

※ 現地研修の「研修報告書」を一部編集して掲載した。
なお、訪問先の番号は、5 ページの現地行程表の番号と一致させている。

[8/7 (月)]

① JICA エチオピア事務所ブリーフィング



石原所員から、エチオピア安全対策マニュアルのプリントをもらい、エチオピアの概況と安全で健康に滞在するための心得を聞いた。同じアフリカであっても、ケニアやナイロビでは、昼間でも一人で歩くことが危険だとされる一方で、エチオピアは治安が良いと聞き安心した。しかし、一般のスリ犯罪は増えており、2人以上で、且つ子どもも入っているケースが多らしい。貴重品はポケットに入れず、体に触られないことが大切だと聞いた。政情としては、私たちが来る直前に非常事態宣言の解除がなされたが、明日も反政府に対するストライキ情報が入っているの、群衆には近づくことのないようにとのこと。健康面では、地方や市内でもコレラの感染が確認されたので、食事の前には手を洗うことや、基本的には生肉は控え、生野菜は注意して取るようにとのこと。到着したアディスの空港では、嵐のような豪雨と雹の歓迎を受け、ほっとした矢先のブリーフィングは、改めてエチオピアに来たのだという緊張感と、明日から始まる滞在の期待を感じさせた。(白木純子)

[8/7 (月)]

② フェアトレード会社「Sabahar」



女性経営者であるキャシーさんが、絹製品ができるまでの一つひとつの工程を丁寧に解説してくれた。まさに「一匹の幼虫からシルクの製品が生まれるまで」を辿ることができた。ツアーのようにして歩いて回ることで1時間程度。糸つむぎから染色、機織りから製品になるまでの全てを間近に見ることができた。こぢんまりとした工場に全てが凝縮されている。ところがこの小さな作業場のいたるところに、命への慈しみやゆとりあ

る暮らしの豊かさが感じられた。自然に優しい染色方法、天然の染料の中にはコーヒーの粉まであった。そして、キャシーさんと従業員たちの関係性。人の手がかかるフェアトレード商品を手がけることにより、エチオピア人の雇用を生み出したキャシーさんは、教師はこの世界で最も大切な職業だと語ってくれた。改めて次世代を担う子どもたちを育てる私たちの職務を誇りに感じた。(谷口加恵)

[8/7 (月)]

③ エチオピア国立博物館

博物館は4階ある。2階が入口になっており、1階は先史時代を中心とした人間や動物の骨、2階は絵画、3階は、様々な農耕や武具などの道具が展示されていた。何といても目玉は1階にあるアウストラロピテクスのルーシー（のレプリカ）。今は諸説あり、人類の直接の祖先ではないとも言われているが、世界的に有名である。みんなも「これかなあ」と感動して見ていたが、実は隣のもので勘違いしていた。3階の絵画はキリスト教とエチオピアの文化が融合しているようなものがいくつかあった。4階の農機具や武具などの道具では、日本でも似たようなものがあり、道具の伝播は世界的にあって、影響を受けてきたのがわかった。（前地直樹）



[8/7 (月)]

④2000 Habesha Cultural Restaurant

まず、出入り口でのセキュリティーチェックに「レストランなのにここまでの警備とは！」と驚きつつ、多国籍の人が出入りするからこそ警戒が必要、つまりはお客様への安全の提供の形なのかと考えた。エチオピア北部の伝統ダンスを目の前で堪能でき、エチオピア料理をいただけるとも贅沢な空間であった。我々はまず各種銘柄のビールを飲み比べ、噂で聞いていたハニーワインにも挑戦した。ハニーワインはフラスコのような透明な瓶に入っていたので人数分（お酒が飲める人8つくらい）小さいグラスを注文したのだが、何度言ってもグラスは運ばれて来ず、結局8回程、注文しようやく5つのグラスを手に入れることができた。基本的に瓶に口を付けて飲むタイプのお酒だそうなので、グラスは不要だと判断されたのか、店にグラスがないのか、サービスの質という面では早速日本との違いを感じた。舞台上どうしてもソーラン節を踊りたいというチームの願いを店のマネージャーは快諾してくれ、各国のお客様の前で日本の伝統ダンスを披露できたことは何よりの思い出となった。日本とエチオピアがダンスで繋がれた瞬間は感動的であった。（木村智子）



[8/8 (火)]

⑤教育アドバイザーによるブリーフィング



教育アドバイザーの宮崎さんにお話を伺った。エチオピアでは、初等教育のグレード1では就学率がほぼ100%であり、高い割合で学校に通っている。しかしグレードが上がるにつれてドロップアウトしたり、家庭の事情で学校に通えなくなったりしてしまい、多くの子が教育を受けられていない現状がある。学校へ通っていてもそこで十分な学力をつけられているかというところではない。学校現場でも「設備がない」という理由で理科の実験などをやれない現状があったり、講義型で板書を写す授業になりがちだったりすると言う。青年海外協力隊の方々が、身近なものを使って実験器具を作り、それを使って実験の仕方を実演するなどして授業は改善を図っている。また理数科教員の育成にも力を入れている。「学校に行ける＝学力が

つく」ではないのだと知り、教師という仕事の重要性を感じた。(児玉恵理)

[8/8 (火)]

⑥青年海外協力隊 (小学校教育) 活動



授業の終わりのサイレンが鳴ると、子どもたちが教室から出てきた。話しかけるとピカピカの笑顔で応えてくれる。英語を話せる子も多く、ノートを見せてもらおうとボールペンでびっしりと書かれていて、頑張っていることが伝わってきた。日本から持って行った大縄にも一緒にチャレンジすることができた。1回も飛ぶことはできなかったが、一体感を味わい、国や人、言葉の違いが気にならなくなった。その後、違う小学校に向かい、青年海外協力隊の方達と懇談会をした。理科科目に重点を置いているそうだが、エチオピアでは一斉授業が主体で、計算のような演習はほとんどない。また理科では、器具などが揃わないことを理由に実験はやらないため、ペットボトルでピーカーや試験管立て等の器具を作って、実験ができることを伝えているようだ。前向きにとらえる人は多くないが、少しずつ現地の先生が取り入れ、変わってきているようで、青年海外協力隊の方たちの前向きな行動力、強さに頭が下がった。授業は45分×7時限で、休み時間は、2時限と3時限目の間に15分とランチタイムが1時間だった。留年もある。日本は学習環境に恵まれていると思った。(三小田京子)

[8/8 (火)]

⑦品質・生産性向上 (カイゼン) 普及能力開発プロジェクト / Ethiopia KAIZEN Institute (EKI) + 職業訓練校 TVETCollege



日本の改善=カイゼンという言葉がエチオピアという遠く離れた国に広く浸透し、ビジネスにおいて実践されているという事に驚きを覚えた。カイゼンは3つのフェーズから成り立っている。1st フェーズは change of attitude, work place organization。人々のマインドセットを変え、仕事場のスペースを効率的に運用する。物を整理するとそれを探す時間を省けることをスタッフに伝えたり、スペースを上手く使うことで人や物の流れをスムーズにすることを指す。2nd フェーズは total change, system innovation。総合的な変更と仕事方法の改革とを実行する。例えば、階段を左側通行にするために床に矢印を書くこと。工作機械を等間隔に置く場所の位置を示すこと。PDCA サイクルや5W1H、3M (ムダ・ムリ・ムラ)の考えをもとに業務を遂行することを指す。3rd フェーズは innovation management。行ってきたカイゼンを持続管理しながら、カイゼンを行えるスタッフを育成する。日本から入っていった考え方ながら、日本人である自分が逆に見習わなければならない点があると感じた。(白神大典)

[8/9 (水)]

⑧ハラール新市街・旧市街



新市街は車やバイク、バスが多く、道路を横断するにも車が来ないことを確認しなければならなかった程、とても活気のある街だと感じた。街には、銀行や政府機関、ホテル、レストラン、ショップが立ち並び、働いている若者や道を歩いている若者が多い。路地を折れると香辛料の匂いがあたり一面に漂っている。石畳の上に唐辛子やチャットを並べ乾燥させているからだ。1袋10キロはありそうなテフ粉やトウモロコシなどの穀物が口を開けて並んでいる。石炭やコーヒーの豆も全て量り売りで、お店には大きな文鎮と量りが置いてある。また、コーヒーセレモニーで使うコーヒーポットも大小様々あり、ガイドさんに値切ってもらいながら買い物をした。旧市街地は、ジュゴルという城壁で囲まれ、イスラム教徒のメッカと呼ばれ世界遺産に登録されている。5つのゲートがあり、そのゲートにもイスラム教の意味があるとガイドさんは話してくれた。82ものモスクがあり、その数は50メートルごとに1つの割合だ。大抵は白の家が連なっているが、時折モスクや家が鮮やかな緑やピンク色で塗られていることがある。女性が路上にかたまって座りジャガイモなどの農作物を売っている様子や細い路地を、羊を追い立てる男の子が印象的だ。ハラール式住居を案内してもらい、家の壁いっぱい女性編んだ民芸品が飾られ、部屋での座る場所も男性と女性とで決められているようだ。また、詩人ランボーの家やハラールコーヒーを作っている工場も見学することができた。(白木純子)

[8/10 (木)]

⑨青年海外協力隊 (コミュニティ開発) 活動/スーク&クッキー工房マーケット

海外青年協力隊の工藤さんが経営支援をされている零細企業を見学させていただいた。クッキー工房では、販売所の奥まで見せていただくことができ、部屋中が熱気で歪んで見えるような籠や、できたばかりの商品を見せていただいたりした。ここで店自慢の商品であるマフィン50円程度で購入した。見た目にはおいしそうなマフィンであるが、粉の保存状態や商品の保存状態があまり「清潔」ではなかったために、本当のことを言うと自分の身体に耐性があるかどうか自信がなかった。しかし、マフンはやわらかく、どの材料がそうさせるのかわからないがとてもしっとりして美味しかった。もちろん体調を崩すこともなかった。その後で乗ったアディスアベバ行きの機内食で出されたマフンは、こちらはビニールできちんと包装された「きれいな」マフィンだったが、驚くほどディレダワのものより美味しくなかった。それからクッキー工房のマフィンの美味しさが忘れられない。(谷口加恵)



[8/10 (木)]

⑩青年海外協力隊 (コミュニティ開発) 活動/幼稚園&1-4年生の学校

郊外の小学校に行った。夏休み中で残念ながら子ども達はいなかったが校長先生をはじめ教職員方々



が応対してくれた。壁面には学習に使われる道具や掲示物があった。算数で使う100玉そろばん(20~30しかなかったが)のようなものもあった。貸し出し用の様々な教科の教科書(エチオピアでは教科書は貸し出し)がたくさんあった。情報教育用のパソコンも少しあったり、工作の作品が保管されていたりここでは比較的恵まれた教育がされているように思った。運動場は狭く、ドッチボールがやっとできるぐらい。グループでそれぞれ2、3人ずつで話し合う機会もあった。現地の先生は小学校でも教える教科が限られているようだった。一方通行的で知識伝達型の授業中心が多いと聞いていたが、こちらの先生達はグループ学習での話し合いや学びあいの授業もやっているとのことだった。最後にソーランを披露すると、近所の大人や子ども達も入ってきて鑑賞してくれた。その後はジュースを御馳走してくれたり、一緒に写真を撮ったりして交流を深めることができた。(前地直樹)

[8/10(木)]

⑪青年海外協力隊 (コミュニティ開発) 活動/織機工房

学校に訪問して、エチオピアの学校の中を実際に見たこと、先生方とお話したこと、ソーラン節を披露したことはとても良い経験となった。工作等の道具は生徒が自分で倉庫から用意するために、授業時間が確保できないこともあること。昼休みは日本の学校よりも長く設定されており、子どもたちは一度家に帰って昼食を食べて再登校すること。「教育は社会にとって、すごく大切だと思っている。(女性の社会的地位が低いことを背景に) 女性への教育は特に関心を持っている。」という先生方の言葉。学ぶものが多かった。ディレダワでの青年海外協力隊の工藤幸介さんへのインタビューで、「幸せとは、目の前に常にあるもので、それに気づけるか気付けないか、だと思います。」という言葉に感銘を受けた。実際にディレダワの市役所で勤務して現地の人々と信頼関係を築き、コミュニティ開発を通してエチオピアの産業を良くしていくと考えている工藤さんの姿勢は、本当に素晴らしいと感じた。幸せは与えるでも与えられるでもなく、そこにあるものに気付くことという視点を学んだ。(白神大典)



[8/11(金)]

⑫ホーリー・トリニティー大聖堂

トリニティーとはキリスト教で三位一体の意味があると学んだ。聖堂内は、靴を脱いで上がった。静寂に包まれて厳かな雰囲気を感じることができた。アダムとイブやノアの方舟、モーゼの十戒等のステンドグラスを見ることができ、その細部の繊細さがとても美しいと感じた。聖堂内奥には、この聖堂を建立したハイレセラシエ皇帝とその妻の棺が並んで安置されており、その偉大さを感じつつ少し緊張しながら棺に両手をあててみた。



訪れた曜日のためか、聖堂には、礼拝に来ている方はそれほど多くはなかったように思った。その中でも、教会の地面や壁にキスをする人もいて、その姿が印象に残っている。私たちのドライバーさんも車外に出て、聖堂前でお祈りをされていた。エチオピアを知る上でも、エチオピア正教を信仰する人々を知る上でも訪問することができて良かった。(足立友香)

[8/11 (金)]

⑭青年海外協力隊（観光）活動／ボランティアとの懇談／アイェロウ湖＋チェンチャマーケット

観光活動とは、お土産や広報の仕方などの知識面での協力がメインの活動ではなく、インフラが不十分な現地までどのように国内外から観光客を増やせばよいか考える活動だそう。エチオピア南部には少数民族が多く、世界遺産もいくつかあるが、どこに行くにも距離や道路状態が悪く人がなかなか訪問しづらい現状がある。国の協力がなくて難しい状況の上、北部のような都市部ではない中、地域の方々と協力して、部族のカラーを織り交ぜた布を小さいポーチ型にし、観光客に売り出したり、そのポーチの中にコーヒー豆を入れて付加価値を出す商品を提案したり、現地の言葉を覚え、コミュニケーションを取る姿はとても印象的で、こんなところにも一生懸命に人のために役立つととする日本人がいるということに感動した。チェンチャマーケットは、ぬかるみを必死で転ばないように歩くので精一杯でマーケットの様子はあまり見られなかったが、滅多にこない日本人の集団に地元の方々が押し寄せ、興味深そうにゾロゾロと一緒に移動する様子が面白かった。転ばないように少年2人が両手を握り、「足元気を付ける、危ないよ！」と一緒に歩いてくれた。大変助かったので「お金！」という子どもたちにチップを渡そうと思ったのだが、「自分から人を助ける事」＝「お金を手に入れること」は手段として間違っている、ということを理解し渡さなかった。もっと長く子どもたちと触れ合いたかったが、時間もなくてマーケットを後にした。(木村智子)



[8/12 (土)]

⑮少数民族ドルゼ村散策・宿泊（住居ツアー＋機織り・焼き物工房＋キャンプファイヤー等）



ドルゼ村で一番感じたことは、自然とともに生活し、民族で協力しあいながら生活しているということ。例えばドルゼ村の家はとても特徴的で、笹と偽バナナの木でできている。この家はすべて手作りで、100年以上も住み続けられる。家の中では牛ややぎなどの家畜と共に住み、人間も動物も一つの入り口から出入りすることを大切にしている。庭に生えている偽バナナの木からは、コチョコというパンを作り、繊維はひも状にして使用。家を建てる、機織り、農業は男性の仕事、糸をつむぐ、料理などは女性の仕事といったように男女の役割がしっかりと決められていた。何より印象的だったのは夜のキャンプファイヤー。ドルゼの方々と私たち日本人がキャンプファイヤーを真ん中にして向かい合わせになり、それぞれの歌やダンス

を紹介しあう。その中で共に踊ったり歌いあったりできたことが楽しかった。ドルゼの方々は老若男女問わずみんなで歌い、踊っていた。上の世代から代々と伝えられてきたものを大切にしているのだと感じた。日本のソーラン節も披露したが、その中でもドルゼの方々が一緒に「ソーランソーラン」と歌って盛り上げてくれたときは、国や文化の壁を越えて通じ合えた気がしてとても感動した。(児玉恵理)

[8/13 (日)]

⑩ネッチサル国立公園

とても自然豊かで、人の手が入っていない森林、湖があった。サルが出迎えてくれ、1mほどに近づいても逃げなかった。ここで、ボートツアーをした。湖には、漁の準備だろうか、湖の中に入って作業をしている人がいた。許可を受けて漁をしている人だけでなく、不許可の人も漁をしているようだ。不許可の人はいかだに乗っていて、ワニに襲われることもあるという。運が良ければカバが見られるとのことだった。ボートを進めると、ペットボトルを浮きにして網が仕掛けてあり、湖面にワニが浮かんでいるのが見えた。対岸に近づくと、2mを超えそうなワニがたくさん日向ぼっこしていて、さらに近づくとその大きいワニたちが一斉に湖に入り、その姿は結構な迫力であった。ワニは養殖もしているが、国内に皮をなめす人がいないので、外貨を稼ぐに至らないようだ。様々なところで、のんびりとした国民性を感じた。(三小田京子)



[8/14 (月)]

⑪青年海外協力隊 (服飾) 活動

青年海外協力隊の木ノ下望さんのお話より、日本とエチオピアの違いの話は非常に勉強になった。①環境…道具がない、使えない、買えない。②教育…はさみの使い方、メモリの読み方、線の引き方が分からない。③文化…言語が分からない。英語はおろか、アムハラ語すら分からない人がいる。文字が書けない。断食の時期は元気がない。日本では当たり前だけど、ベーシックなこと (はさみの使い方・名前の書き方・紙を角と角を合わせてきちんと折る等) は学校で教えるべきであるという意見から、日本の教育は情操教育だけでなく、生活に必要な知識もしっかりと教えていることに気が付いた。ここで出会った方の話は、私の胸に刺さった。「自分がストリートチルドレンだった頃、煙草やドラッグや様々な良くないものに手を出した。しかし将来的にマインドセットが変わって良い方向に考えが変わるときが来るので、それらに手を出さないで欲しいと、日本の子どもたちに伝えてほしい。」と言ったのだ。必ず生徒へ伝えたい。(白神大典)

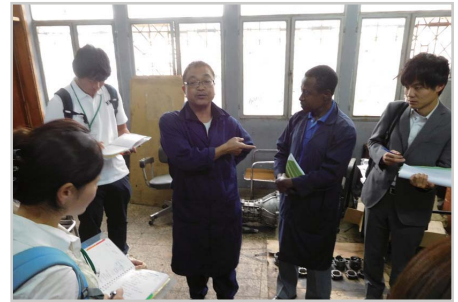


[8/14 (月)]

⑫シニア海外ボランティア (自動車整備) 活動

こちらでは、トヨタの中古車が多く、50万キロ走ることもあるそうで、古くなった部品は全て新品に取り換えて乗るようだ。半年で5~6台のエンジンをバラして、組み立て直している。シニア海外ボラ

ンティアの熊丸さんは、生き生きとしていて、カウンターパートの方との良好な関係が印象的であった。それを聞くと、熊丸さんが「カウンターパートが酒を飲まないで、私も飲みません。」とのことだった。現地に溶け込もうとする心がけや、まず自分を変えて相手に合わせるという姿勢を学んだ。熊丸さんの「ここに来られて幸せ」と、カウンターパートの方の「日本人のボランティアが来てくれることが幸せ」という言葉が、とても心に残った。何でもエチオピアは分業になっているので専門以外は知らないことがあるらしいが、日本人は電気・整備など1人でいろいろなことを知っている、とのことだった。熊丸さんの持っている技術のすごさに、日本の技術の高さを改めて感じる事ができた。(三小田京子)



[8/11 (金)・14 (月)]

⑬⑱ アディスアベバ市内教材収集 (郵便局前民芸品店、トモカコーヒー店、スーパーマーケット)

アムハラ語で「カニス」は「下げる」や「下がる」を意味する。したがって何かを購入する際に店員の提示した金額に対し「カニス」というと、「金額を下げて」と値切ることになる。「値切る」という行為は、売り手と買い手の合意形成という過程を経た相互理解につながるということに気づいた。日本で生活していると、スーパーなどで値切る機会はほとんどない。開発途上国に来て教材やお土産を購入する時に値切る日本人はなんだか卑しくて、気前よく払ってしまえば気が楽なのだが、なぜ値切るのだろうと考えていた。ところが値切る様子を横で見ていると、値切られているのに現地の人もだんだんなんだか楽しそうになり、しまいには私たちがブラザーと呼んでいた。言われた金額で払えば都合の良い外国人だが、値切り交渉をしながらお互いに腹の探り合いをすることで確実に心の距離は近づいていくように感じた。(谷口加恵)



[8/15 (火)]

⑳ 青年海外協力隊とのワークショップ

JICA エチオピア事務所にて、青年海外協力隊で幼児教育をしている浦田さん、陸上競技をしている小山さん、小学校教育をしている伊藤さんと一緒にワークショップをした。10日余り滞在していたため、エチオピアについてのイメージはある程度言えるようになっていたが、現地生活が長い青年海外協力隊の3名が加わってくれたおかげで、宗教面や医療面についての知らなかったことを知ることができた。例えば、狂犬病の怖さ等医療面はこの滞在ではあまり学ぶ機会がなかったところだった。社会主義国の部分についても、普段表面上はわからない所である。数日間で見えた部分、見えなかった部分を知る良い機会だった。(前地直樹)



[8/15 (火)・16 (水)]

②①②② JICA エチオピア事務所所員等との懇親会＋報告会



懇親会では、牛肉をぶつ切りにして油で揚げてあるティプスという料理をいただきながらとても和やかに懇談した。青年海外協力隊の方の話の中で、「辛いと思う時期もあったが、自分の考えを改め、変えることで道が拓けた。」「相手が自分の意図することを少しでも汲んでくれた時、認められたことを感じた時が最高に嬉しい。」等、と様々な経験をしている隊員だからこそ発信できる話を聞くことができた。報告会では、現地研修

を通して「何を学び、何を生かしていきたいか」を1人ずつ約5分間でスピーチした。見たことや気づいたことを共有し、互いの考えを伝え合い、様々なワークショップを通して学びを深めてきた仲間たちのスピーチは、想いが溢れていて、とても心に響いた。スピーチの中で、日本にいるそれぞれの児童生徒たちを思い浮かべていたように思う。『みんながみんなのサポーター！』この仲間たちと一緒にエチオピアに來られて本当に良かったと心から感じた。(足立友香)

[全般]

エチオピアでの飲食全般・コーヒーセレモニー



エチオピアの主食と言えば、テフ粉を発酵させてからクレープ状に焼いてからいただくインジェラというものだ。インジェラの上には肉や魚やパスタや野菜や何でも乗せていいようで、エチオピアの人は大好きな料理だ。毎回、食事のメニューには載っているのに、毎日インジェラを食べているのかと思ったら、インジェラはとっても贅沢なので週末にしか食べられないという声を聞いた。ちょっと酸味があり、色々なおかずと一緒に

食べられ、家族の色が出そうだなあという印象を持った。研修中は、ちょっと日本の味付けとは違うパスタやピザなども食べ、歴史的にイタリアの影響を受けていると聞き納得した。ちなみに、さようならはアムハラ語でもチャオ！だった。食後や歓迎を表す時は、必ずコーヒーセレモニーがある。コーヒー豆を香ばしく炒り、豆を磨り潰し、沸騰したお湯の中に入れコーヒーポットで煮出し、たっぷりのお砂糖を入れた小さなカップに注ぐのがエチオピア流。そしてポップコーンやコロというお菓子が振舞われることが多かった。香ばしいコーヒーの匂いにおもてなしの心を感じる日々であった。(木村智子)

V. パラグアイ帰国後の報告

● 現地研修の研修報告書での報告

※現地研修の「研修報告書」を一部編集して掲載した。

1. 現地研修に対する各自の目的とその達成度

● 大澤 健人

世界の現実から深く学び、さまざまな背景をもつ子どもに寄り添うことができるようになりたい。現地で自分が感じたありのままの姿や思いを、わたしから自分事として子どもたちに伝えたい。自分の目で見て、自分の足で歩いた経験をもとに、教科書やインターネットからではわからない、その国の空気感や人々の表情を大切に授業をした。教師として、さまざまな成長や変化を望んだ本研修であった。ファシリテーションのスキルを体験しながら、国際理解教育を学び仲間とともに過ごした2週間は、本当に濃密な時間であった。この経験をしたことで、外国にルーツをもつ子どもと関わることや社会科という教科を担当するなかでもっていた迷いが、ずっと軽くなった実感がある。子どものもつ背景を知ること、子どもの想いに気づき、子どもと同じ立場に立つことを大切にしながら、日々の授業実践で子どもたちと一緒に世界とつながっていきたい。

● 加藤 侑子

私がこの研修に参加した理由は2つある。一つ目は、私自身の今まで、そしてこれからの他国での経験や感じたことをより分かりやすく楽しく子どもたちに伝える方法を学ぶことである。二つ目は、日本人の移民はどんな生活を送っていて、彼らを受け入れた国はどんな国なのかを知ること。6月からの研修を含め、様々な手法を実際に自分が体験しながら学んできた。そして、今回大切な仲間とともにパラグアイに行ったことで、自分だけでは気付かなかった視点で物事を見ることができ、学びを深めることができた。また、パラグアイに住む日系の方と話をすることができただけでなく、ホームステイを通してパラグアイの方とも話をすることができ、この国について少しだが知ることができた。当たり前だが、「知らないことは、子どもたちには教えることができない」ので、自分がパラグアイで感じたこと知ったこと見てきたことを、仲間の視点を含めて自分の中で咀嚼し、教えてもらった手法を参考にして子どもたちに伝えることができることに、幸せを感じている。

● 久保田 真代

私は今回の研修に2つの目的をもって臨んだ。一点目は、

ナショナルな視点の再確認である。他者を理解する前に自分を理解すること。それは国際理解教育でも大切だと思うからだ。パラグアイ文化に触れるたび、日本との相違点が見えてきた。挨拶や食文化、住空間など些細な違いを発見する度に、自身の背景にある「日本」を意識した。そしてパラグアイ人の日本に対するイメージを聞く度に、客観的な「日本」を知った。外側から見ること、今まで気付かなかった日本を発見できたと思う。2点目は、グローバルな視点・ローカルな視点を持つことである。生徒たちへ国際理解教育を行う前に、自分が世界を見ること、知ることが必要だと考えるからである。現地で出会った様々な人やものを通して、たくさんの気づきを得た。自分と世界は見近などころでつながっていること。支援の方法、課題解決の姿勢。世界で働くことの大変さとやりがい。現地で経験したことをもとに授業実践を行い、生徒達が世界と繋がれるように、自分の世界から飛び出すきっかけ作りをしたい。

● 榊原 早織

私の本研修への参加目的は現地の子どものたちの生の声を日本の子どものたちに届けることと、私が新しい価値観を得たり、違いを楽しめる考え方を吸収したりしてすることである。パラグアイで体験した、日本とは異なるBBQの肉の焼き方やオレンジの食べ方、頬に触れ合わせる挨拶の仕方など、私が感じた驚きを子どもたちに伝えたい。また、青年海外協力隊の方々や民間連携での社員の方々、カテウラ音楽団のファビオさんなど普段では出会えない方とお話することで、日常生活で忘れがちな「人とのつながりに感謝する」ということに気付くことができた。そして、そういったことは一度の体験では実感できず、二度、三度、と繰り返し感じて、考えることによって本当に実感することができた。だから授業でも、伝えたいことは繰り返し伝え、子どもたちが心で感じることによって気付くようにさせていきたい。最後に、違いを楽しむ考え方は感受性を育てることで得ることができるのではないかと感じた。そのために、自主的に新しいことを知ろうとする好奇心を高めることで、物事をプラスに捉えられるようにさせていきたい。実践を通して、そんなきっかけを与えることができたらと思う。

● 野々山 尚志

長い間、海外に行き全く違う価値観に触れたいと思って

いて実現できずにいた。今回の研修の機会をいただいて、他では得られない大変貴重な経験ができた。今年度、担当する6年生の総合的な学習の時間のテーマを「国際理解」とし、本研修で学んだことを生かして国際理解教育の実践モデルをつくるつもりで参加した。理解しているつもりであった「異なる価値観に寄り添うこと」「外から日本を見ること」の意義を実感することができた。その意義をどう教材化し、子どもたちに実感させられるかが今後の課題である。今回の研修で最も心に残ったのは、人のつながりを大切に作る心である。日本のことを大切に思うパラグアイの人たちや、使命感をもって活動している人たちの輝く姿には何度も涙した。この経験を十分に生かし、「関わる子どもも一人一人の可能性を広げる」という使命感をもって教育活動に励んでいきたい。目的が達成できるかはむしろ今後にかかっている。

● 箱山 園江

パラグアイという日本から遠く離れた地で人々がどう暮らし、どのような文化を育み、生きているのか、それをこの目で見て、体験したい。それを生徒に伝えることで、他者のことを『他人事』ではなく、『自分事』として考えることができるような想像力を養う助けになりたい。それが、私が教師海外研修に参加した目的だ。そしてもう一つには、何歳になっても新しいことにチャレンジできることを生徒たちに見せたいと思っている。歳を取るにつれて保守的になると思われがちだが、気持ち次第で新しい挑戦ができ、自分自身を変えていけると私は信じている。無事に現地研修を終えたいま、私の体験した出会いと発見を生徒たちに伝え、授業実践の中でこの研修の目標を達成していきたい。この研修を通じ、現地の空気、町の喧騒、人のあたたかさを感じ、そして、難しい課題に取り組む逞しい人々に出会うことができた。今後の授業の中で、写真・映像・物品などを見せて、現地の息遣いを感じさせることによって、生徒たち自身に考えさせ気付けさせるような働きかけを行いたい。実体験に基づいた働きかけは力強く伝わると確信している。

● 濱田 蒼太

昨年度より国際理解教育に取り組み、本年度で2年目である。実践していく中で、自分自身の見えていることはほんの少く、国際理解教育を進めるにはまだまだ知ることがたくさんあると感じた。自分自身が広い視野を身につけ、自分が見たものや感じたことを生徒に広げられるようにしたい。また、今後の教師人生で世界の課題と長く向き合っていきたい、「教育者」という立場から国際協力をしたと考え、本研修に参加した。現地研修では、パラグアイの自然や歴史などの生活基盤を肌で感じ、様々な人と出会った。その中で、パラグアイの良いところや課題、日本との違いやつながりを感じた。自分の価値観が揺さぶられることが何度もあった。また、感じたことや気づいたことを仲間と共有することで、違う視点に気づくことができた。本研修は、教材収集だけでなく、自分自身の生き方に

もつながった。本研修を生かして、広い視野をもち相手に寄り添う豊かで豊かな生き方をしたい。自分が背中を見せ、生徒とともに学び、悩み考え、心に残り続ける教育をしていきたい。

● 脇田 佐知子

今回の研修の目的は、パラグアイがどのような国であるのか、日本とどのようなつながりがあるのか、課題に対してどのように向き合っているのかを、実際に見たり、聞いたりすることで、正しく知ることであった。そして、この研修で得たことを社会科の授業で生かそうと考えていた。研修を終えて、今回見たり聞いたりしたことが、パラグアイの全てではないが、目的は、かなり達成できたと思う。何より、様々な地を訪れ、多くの方に出会う中で、社会科の授業だけで伝えるのではもったいないと思うくらい、子ども達に伝えたい様々な大切なことを学ぶことができた。さらに、自分自身の考え方も変化をもたらすことができた。パラグアイの人々の温かさやつながりを大切にする姿勢、課題に向き合う人々の、相手を思いやる心や未来を見据える視点など、現地で味わったからこそその感動を子ども達にもぜひ伝えていきたい。

2. 柱1「訪問国に肯定的に出会う」観点から学んだこと



● 大澤 健人

パラグアイは「出会い」そのものをとても大切にしている国であった。「日本という本当に遠いところから私たちのところにやってきてくれてありがとう」「この出会いが最初で最後にならないように」とあたたかく迎えていただいた。教えたりほめたりしたら、必ず「ありがとう」と返ってきた。ありがとうと言うと、必ず「どういたしまして」と言葉で伝えてくれた。このように、まずは純粋に「出会い」を楽しめる人でありたいと思う。肯定的に出会えたことで、自分と相手の可能性を大きく広げることができた。日本での生活を当たり前とせず、自分との違いに対するこだわりを捨て、国やそこに住む人々の誇れる部分に積極的に目を向ける。そのような意識をもつことで、「人と人とのつながり」のあたたかさを感じられるのだと思う。この気づきを目の前の子どもたちに返していき、これから子ども

たちが経験する数多くの出会いを肯定的なものにしてあげたらと考えている。

● 加藤 侑子

私が訪問国に肯定的に出会う前に、訪問国であるパラグアイに肯定的に受け入れてもらった。それも想像以上に。どの訪問先でも、私たちを見るとすぐ笑顔で迎え入れてくれる人々がいた。それは、日系人が努力して作り上げてきたパラグアイ人との関係だったり、JICAをはじめ日本の支援が多いからだったり理由はいくつも考えられるが、一番大きいのはパラグアイ人の人柄ではないかと感じた。テレレやアサードのように、誰かと一緒になって楽しむ食文化が示していることから分かるが、彼らの人との距離はとてに近い。そして、日曜日の「家族の日」や「友情の日」、人が来ればいつでも歓迎するなど、人と接する時間をしっかり確保している。だから、学校現場でよく子どもたちに伝える「人の気持ちを考える」とか「人に寄り添って」とか、そんなことは言われなくても自然に彼らはできている。そんな彼らだから、どこの国の人であっても彼らは同じように歓迎の意を示して迎え入れてくれたのだと感じた。

● 久保田 真代

現地に着くまで、私は何があっても前向きに受け入れよう気構え、とても緊張していた。しかしそれは杞憂であった。パラグアイで出会う方は皆、すぐに我々を肯定的に受け入れてくれた。その嬉しさや安心感はとてつもなく大きかった。出会う人はみな笑顔で対応してくれた。特にホームステイではテレレに混ぜてくれたり、一日しか過ごしていないのに別れ際には「また来てね」と何度も言ってくれたりした。人と人との繋がりを大切にしている、素敵な文化だと思う。もちろん、日本文化と異なる部分もあったが、それすらも「面白い」「もっと知りたい」と思えた。それは、パラグアイに対する興味関心が私の中にあったからだろう。好奇心の重要性も感じた。「多様性を受け入れる」。言うことは簡単だが、実践することは難しい。ともすると日本は同一性を求めがちだが、本来は皆違う存在であり、だからこそ（分からないからこそ）相手のことを知りたくなるのである。肯定的に出会うことは決して相違点を見ない（無視する）ということではない。違いをまず知り、「面白い」「良いな」と感じ、受け入れ楽しむことである。言葉で何度も聞いていたことを、身をもって感じた研修だった。

● 榎原 早織

突然「あなたの大切なものは何ですか。」と聞かれたら、「私の大切なものは『家族』です。」と即答することができるだろうか。私たちは、パラグアイ訪問中、会う人々にこの質問をしていった。小学生、中学生、高校生、大人、いろいろな年齢の方々聞いた。その中で一番多かったのが『家族』という回答だった。なぜだろう。ホームステイで現地の方のご家庭に訪問させていただいた時に、私は家族間の距離がとてに近いことを感じた。ご飯を食べる時にはお互いを認め合う会話が多かったり、写真を撮る時は仲

良くくっついて撮っていたり、一緒に居るだけでとても温かくて優しい気持ちになった。私は、自分の周りに居る人達によって毎日楽しく過ごすことができていると改めて感じた。そして、自分の周りで温かく見守っていてくれる人たちからもすごいパワーをもらっているのだなと感じた。パラグアイの方のように、周りの人に感謝の気持ちをもっと伝えていかなければいけないと思った。パラグアイでは、たくさんの人から大切なことに気付かせてもらった。これからもたくさんの人と繋がり、その繋がりを大切にしていきたい。

● 野々山 尚志

国の良さや豊かさは何ではかるのだろうか。パラグアイには豊かな自然、おいしい料理こそあるが、農業以外の産業は発展していないし、観光地としても整備されていない。しかし、たった数日間滞在しただけなのに、この国の魅力に心奪われた。パラグアイは多くの課題を抱えており、国の社会保障制度も未熟なのは事実だが、もし困難な状況に陥ったとしても、誰かが助けてくれる、何とかなるという安心感がある。日本のように自分だけが責任を負って生きづらさを感じるようなことは、この国ではないのかもしれない。それは、人とのつながりがとても豊かな国だからであろう。例えば、若いシングルマザーは働きに出られず、貧困な生活に陥るのではないかと考えていたが、この国では、家族や親戚はもちろん、近所の人たちが一緒に子どもを育ててくれる。失業して食べるものに困っても、近所の人に分けてくれる。生きづらさを感じる前に、生き心地を感じられる。パラグアイの良さや豊かさはまさに、「人」にある。帰国後、外国語学部のスペイン学科で学んでいた教え子にパラグアイに行ったことを話したら、「パラグアイの人は温かくて優しいですね。」と話してくれた。私たちが出会った人たちが特別なわけではなく、パラグアイの国民性であることを改めて実感した。

● 箱山 園江

パラグアイでは、人と人との距離が近いと感じた。快適に楽しく滞在できるようにしてくれたホストファミリーの温かなもてなし。農場を丁寧に案内してくれた親戚の方々の歓迎。信号のない交差点で見知らぬ老人の手を取って道を渡る若者の姿。首都アスンシオンにおいても、混雑した昼食時にさりげなくレジの順番を譲る人の姿があった。日常の中に心遣いが感じられた。日本ではどうだろうか。日本では、交通量の多い交差点には信号や歩道橋がある。見知らぬ人に声をかけるのを遠慮してお年寄りや道を渡ることも少ないだろう。昼食時にはなるべく早く昼食を済ませて会社に早く戻ろうとするであろう。自分自身、時間の余裕も心の余裕も失いがちだと感じる。私が出会ったパラグアイの人たちには、心の余裕・豊かさがあった。そしてそれを行動で表す文化があった。握手、ハグ、頬にキスなどを通してお互いの存在を愛おしんでいるようだった。気持ちを率直に、相手に伝わるように言動で表すことの大切さをあらためて学んだ。

● 濱田 蒼太

パラグアイが大好きになった。好きになったものをうまく言葉に表せないが、やはり人が魅力的だった。行く先々で、出会った人たちはいつも温かく私たちを迎え入れてくれた。どの訪問先でも、同僚や友達、親戚、家族を一人ずつ丁寧に紹介してくれる。別れの時には、「この出会いが最後にならないように。」と言ってくれた。本当に出会いや人を大切にする人たちだった。そんなパラグアイ人は、家族や身のまわりの人を大切にする。また、貯金をすることが少ない。「いつ死ぬか分からない未来より、今いる家族や親戚、友達にお金や時間を使いたい」という考え方を知ったとき、それもいいねと思った。また、「あなたの大切なものは何ですか。」というインタビューに対して一番多かったのは「家族」だった。驚いたのが、「自然」という答えが多かったことだ。理由を聞くと、「私たちの身のまわりにいつも存在していて、生活の基盤となっているから」と答えてくれた。そういったものが大切だと感じる価値観を素敵だと思うとともに、改めて考えさせられた。

● 脇田 佐知子

まず、人とのつながりを大切にすることがすばらしいと感じた。テレレを回し飲みすることで人との距離が縮まり、会話も生まれるのだと思う。また、「友情の日」というパラグアイ発祥の特別な日に、友達や家族とプレゼント交換をする文化もつながりを大切にしているからこそだと思った。テレレに関しては、ホームステイ中、庭先でのんびりと飲むという体験をすることができた。時間に追われず、ゆったりとした時間を過ごすのは大切だと思った。次に、広大な土地が広がり、自然が多く残っていることが印象的だった。パラグアイの子ども達の大切なものの中には、日本の子ども達の中には一つもなかった「自然」が多くあった。街灯や店の明かりが少ないため、夜には満点の星を見ることができたのも良かった。そして、子どもから大人まで誰もが気軽に「こんにちは」「ありがとう」「どういたしまして」の挨拶をすることができる場所もすてきだと思った。人とのコミュニケーションにおいて、挨拶が大切であることを改めて感じた。

3. 柱2「日本と訪問国とのつながりや同一性を理解する」観点から学んだこと



● 大澤 健人

わたしが2週間の現地研修で学んだことを一言で伝えると、「あなたの知らない地球の裏側であなたにとっても感謝している人がいた。」と表現する。日本と深いつながりをもつパラグアイが、日本に対してあたたかい敬意を持っている。研修前には全く気づくことができていなかった、本当に嬉しい事実である。グローバル化が進み、人やモノを通して、日本とさまざまな国々はつながっているということは知っていても、本当の意味で理解できてはいなかったのだと実感した。ゴマを見たときに、パラグアイをイメージする人はどれくらいいるのだろうか。ゴマにかかわる人々の思いや表情、その背景に見える日系社会まで考える人はどれくらいいるのだろうか。日本がすでにもっているつながりを再発見し、より太く長いものにしていくとともに、自分のもつつながりを広く大きくしていくことが大切である。

● 加藤 侑子

今までにたくさんの日本人が移民としてアメリカやカナダ、ブラジル、ペルーに渡ったことは知っていたが、パラグアイにも移民していたことは、初めて知った事実だった。実際日本人の移住地であるラ・パスを訪れてみると、思った以上にそこには日本があった。スーパーに並ぶ日本の生活用品や食材、飛び交う日本語、そして日本語学校。この先、日本で住む可能性が多くない彼らがどうしてこれほどまでに日本人らしく生活しているのか、日本語を学ぶのか、とても興味がわいた。「スペイン語とグアラニー語しか話さないこの国で、日本語を勉強するのは負担だからやらない方が…」と思ったからだ。しかし、「日本語を学んでほしいのではなく、日本語で日本文化を体感してほしい。」というラ・パス日本人会会長の田岡さんの話にはっとさせられた。たとえパラグアイに住んでいても自分たちのルーツである日本に大切な思いを抱いていて、日本の伝統や習慣を守ろうとしていることを知ったからだ。こういった思いで生活している人がパラグアイにいることを、日本人はほとんど知らない。「伝えていかなくては。」と強く思った。

● 久保田 真代

パラグアイと日本の繋がりを考える上で、日系社会は外せないと思われる。パラグアイの発展に日本人が大きく寄与している。パラグアイにゴマ栽培を持ち込んだ白沢寿一社長のお話や、ラ・パス日本人会の田岡功会長のお話を聞きながら、日本とパラグアイを今もつなげている方々がいることを知った。特に印象的だったのは子ども達の笑顔だ。どの学校へ行ってもキラキラと輝く眩しい笑顔を見せてくれたが、それは日本も同じだと思う。無気力・無関心と言われる日本の子どもたち。しかし、本当は知的好奇心や夢、素敵な部分をたくさんもっている。そこをうまく引き出せる教員になりたいと思う。人見知りをする生徒がいるところも共通していた。人種も文化も違うけれど、中身は変わらないんだと実感することができた。人と人の繋がり、

そのあたたかさを感じた研修だったが、言い換えれば人の繋がりによって生きている、一人では生きていけない社会だと感じた。それは日本も同じだと思う。日本は無縁社会だと言われるが、まだ「お互い様」の文化が残っていると私は考える。我々も決して一人で生きているわけではない。パラグアイと日本のつながりを知り、相手の属性に感わず人と接していきたい。

● 榊原 早織

日本とパラグアイ、いや世界中の国々に共通すること、それは「教育は国づくり」であるということだ。子どもたちが国の未来を創っていく。この研修を通して私は、そのことを実際に見て、感じて、考えて、初めて身に染みて実感した。それと同時に教員という仕事の責任の重大さを感じた。パラグアイでは、青年海外協力隊、シニア海外ボランティア、専門家の方々からの印象的な言葉を頂いた。「現地の方と一緒に悩み、一緒に考え、一緒に学びながら伝えている。」「どんなに高度なスキルをもっていても、押しつけでは伝わらない。一番大切なのは信頼関係。」「今すぐに結果が出なくても、人の役に立つことをやっていく。」と教えていただいた。これらの考え方は教員であっても同じだなと思った。私は、毎日の授業で、子どもたちに伝わる言い方で伝え、子どもたちの中に生き続けていく知識を伝えていかなければならないと感じ、身が引き締まった。国際協力も教員も教育を通して国づくりをしているということに親近感を感じた。

● 野々山 尚志

地球の真裏にあるパラグアイで、こんなにも日本とのつながりを感じられるとは訪問前には思っていなかった。私たちが日本で食べているゴマ商品がパラグアイで作られたものであることを実感したが、このつながりは、パラグアイの農家のことを思う日本人の熱い思いから始まったものである。日系人の方の厳しい時代に切り開いてきた努力によって、日本人へのイメージは良くなっている。日本語学校があり、日本食文化も根付いている。JICA が支援した数々の機器や建物、技術、思いがパラグアイで生きている。距離は遠くても、この国に来たら私たちはずっとパラグアイ人になることができそうだ。はたして、逆の立場だったらどうだろう。日本でももっとパラグアイのことを知り、受け入れられる土壌が必要ではないかと感じている。パラグアイと日本の同一性として一番に挙げたいのが、子どもたちの笑顔である。この研修で、子どもたちとの出会いをとて楽しみにしていた。「大切なもの」を語り合う授業を通して、夢を語る姿はどちらも同じであると感じた。素直に夢を抱くことができ、素直に語れる子どもを増やしていきたいと感じている。

● 箱山 園江

日本とパラグアイのつながりと言えば「ゴマ」と「日系人」である。小麦が干ばつで大打撃を受けた後に、日系人の白沢さんがゴマ栽培を小農に普及させた。現在ではゴマ

は農家の重要な収入源となっている。日本のゴマのほとんどが輸入されており、パラグアイのゴマは全輸入ゴマのおよそ4分の1を占めている。ゴマのパイオニア的存在である白沢さんは貧しい小農を救うために危険な地域に足を踏み入れ、農家の方々の信頼を得て、ゴマの商業利用にこぎつけたという。日系人の「誠実さ」「真面目さ」「勤勉さ」が周囲の人々の信頼を得たようだ。遠く離れたパラグアイで日系人の方が懸命に活躍されたおかげで、パラグアイにおいて日本は敬意と親しみを抱かれているという。研修前はパラグアイについてほとんど知らなかったが、日系人の方々の活躍を知り胸が熱くなった。「地球の裏側にも日本があることを日本の子供たちに知らせてほしい」と、ある日系人の方がおっしゃっていた。授業の実践を通じて、必ず伝えていきたい。

● 濱田 蒼太

私はドレッシングが好きだ。私の中でのベストドレッシングは、断然ゴマドレッシングだ。これまで、たくさんの容器を空にしてきた人生だったが、原料のゴマが、地球の裏側のパラグアイという国から輸入されてくることを知ったのは、この歳になってようやくである。実は日本で消費されているゴマの70%がパラグアイ産であることを知った。こんなにお世話になっているのなら、これまでで1度くらいパラグアイについて知る機会があってもよかったですのではないかと。日本ではあまりパラグアイのことが知られていないのかもしれない。しかし、パラグアイは日本のことをよく知っているようだった。「親日国以上の親日だよ」と教えてくれたのは JICA パラグアイ事務所の吉田所長である。私たちは様々な場所に行き人に出会うたび、この言葉を実感した。道中では日本食のレストランや日本車、鳥居などを見た。パラグアイでは、ごく自然に日本が浸透している印象だった。また、訪問先の児童生徒の笑顔は、地球の裏側でも同じだった。

● 脇田 佐知子

日本とのつながりを一番感じたのは、日本語学校を訪れた時である。習字や掃除を見学させてもらったが日本語学校は、現在の日本よりも、かつての日本の良いところを伝えている学校という感じがした。近所には、日本食を売るスーパーなどもあり、地球の裏側でこんなにも日本らしい場所があることにびっくりした。ホームステイ先も、日系の方のお宅であったため、ごはん、みそ汁に漬物が出てきたときには、日本と変わらない生活があるのだと思った。また、普段よく口にしているゴマのほとんどが輸入に頼り、その多くをパラグアイから仕入れていることは、パラグアイを身近に感じるために子ども達にもぜひ伝えたい。そして、様々な地を訪れる中で、青年海外協力隊やシニア海外ボランティアをはじめ、企業や大学などから多くの日本人がパラグアイの発展のために、パラグアイの人々の目線になって働きかけを行っていることが分かった。そこでは、様々な機械や道具に日本の国旗をモチーフにしたシールが貼られており、日本から送られた物がパラグアイで有効

利用されていることも分かった。

4. 柱3「共通の課題について共に考え・共に越える」観点から学んだこと



● 大澤 健人

「国際協力」や「開発」というと、新しい技術やモノを導入し、先進国と同じように変えていくための支援を思い浮かべていたが、それは大きな間違いだったと気づくことができた。例えば、教育に対するとらえ方や価値観は国や地域、人や文化によってそれぞれ異なり、現地の教員や子どもたちに困り感がない場合も多い。そのため、日本のやり方を押し付けても受け入れられない、または残らず消えてしまうこともある。やはり、現地に合う形を共に考え、さらによりよい手だてを一緒に探していく姿勢が大切なのだと感じた。上から目線ではなく、現地の人々と同じ目線や立場に立つ。「与えていく」ことを基準にするのではなく、現地の人々の力を「引き出していく」ことが求められ、引き出すために「共に」学びあう。それが、国際理解教育のスタートになり、課題の解決やよりよい未来を共に築く入り口につながるのだろう。

● 加藤 侑子

「楽しくわかりやすい授業」を目指して、私は今まで教材研究をしてきた。授業の導入を工夫すると子どもたちは興味を示して学習を始めるし、参加型の内容にすると友達とにこにこ顔で学ぶ。もちろん、学習の単元ごとにねらいがあって、使う手法も違う。だからこそ、その選択にも私たち教員は知恵をしばって考えるべきなのだ。子どもたちは素直だ。曖昧な教材研究のまま授業に臨んだり、やり方を間違えたりすると子どもたちは「授業をうけさせられている」顔になる。板書をそのまま写すだけのスタイルが授業だと思っていたら、授業なんて楽しくないしみんなと一緒に学ぶ意味が感じられなくなってしまう。教育基本法にある「教員は、研究と修養に励み」という言葉は、日本にもパラグアイにも当てはまることで、今回の研修のように、互いの国の教育現場を見て意見を交わすことで、互いにプラスになるのではないかと感じた。

● 久保田 真代

貧困や環境問題、弱者への差別など、日本社会も抱える課題がパラグアイにもあった。私が一番感じたことは「豊かさ・幸せとは何か」である。日本は豊かな国だと言われる。しかし、果たしてそれは本当なのだろうか。日本人は幸せで、パラグアイ人は幸せではないのか。決してそんなことはない。「幸せ」は人それぞれ異なるだろう。課題を乗り越え、各自が思う幸せな状態になるためにはどうしたらいいのか。一つの答えが、JICA ボランティアをはじめとした国際協力なのだと思う。現地研修では様々な立場で協力活動をしている人々に出会った。そこで皆さんが口をそろえて言っていたことは、「相手の立場になって、一緒に考えることが大切だ」であった。共に越えていくための支援方法についても考えさせられた。上から目線の協力では、何も変えられない。また、カテウラ音楽団のファビオさんのお話にあった、「もので人は変わらない。」という言葉が強く心に残っている。人の意識を変えることは、時間もかかるし困難も多い。それでも、人のための行いは長く続いていくのだという思いのもと、活動をしている人々が增える教育を実践していきたい。

● 榊原 早織

「感受性」。パラグアイで最貧困のカテウラ地区で、ゴミから作った楽器で音楽団を創設したファビオさんが大切にされていた言葉だ。私が、この研修で一番考えさせられた言葉である。私は、これからグローバルな世界でたくさんの人や情報と関わり合って生きていく子どもたちの、感受性を育てていきたいと考えるようになった。そのため、何事もプラスに受け取れる子を育てていきたい。なぜなら、物事をどう受け取るかによって、その後の行動に大きな差が生まれていくと思うからだ。そこで、私ができることは、「こんな世界もあるよ。」「こんな文化もあるよ。」と多種多様な分野の世界を子どもたちに浅くでもいいから知らせること。そして、やりたい、知りたいと興味をもって主体的に深めていけるようにさせていくことだと思う。なぜなら、目的意識をもって学ぶことは、既存以上の吸収力や気付きの力を発揮できると思うからだ。そうやって、主体的に学んで気付いたことは必ずプラスに受け入れることができると思う。私と関わったことで、何かの「きっかけ」を与えられる教師になっていきたい。

● 野々山 尚志

パラグアイで活躍されている方たちが共通して大事にしていることは、「相手の視点に立ち、一緒に考え、一緒に解決していこうという姿勢」だった。どの方も、目の前の課題に真正面から向き合いながらも、自分の任期が終わってからのことや、数年、数十年先の将来のことを考えて、一生懸命であった。一生懸命だから、その姿はキラキラ輝いて映った。尊敬できた。パラグアイにも日本にも共通の課題として、貧富の格差や教育格差の問題がある。私はこれまで、それらの問題を解決するためには、国や自治体の保障が充実しなければならないと考えて来た。もちろん、

そのことも大切なのだが、私たち教師が、子どもたちに対して、人のつながりを大切に、困難を抱えそうな人に寄り添うことができ、感謝の気持ちを伝え合える、そんな文化を、目の前の子どもたちの中に創造していくことで、10年後に貧富の格差がなかなか改善されていなくても、生きづらさを感じずに生きていけるようになることが大事だと考えている。

● 箱山 園江

共通の課題は、いかにして貧富の格差を是正するかである。ゴマの栽培によって小農の収入を上げて生活が向上した。カテウラ音楽団の活動によって子どもたちが視野を広げ、奨学金によって進学を叶える子どももいる。しかし、構造によって生じている格差を是正することは簡単ではない。日本では生活保護法によって最低限の生活が保障されているが、それでもまだまだ課題がある。いかにして自立に向けた支援につなげていくかが大きな問題である。困っている人に物や住むところを与えれば、目の前の状況は良くなったように見える。しかし、物を使い果たし住み心地が悪ければ、元の生活に戻ってしまう。本人が主体的に選択し、改善に向けて努力をできるような働きかけが必要である。人を支えるのは、他者とのつながり、主体的な向上心ではないかと思う。家庭や社会での他者とのつながりと教育によって広い視野と技術を身に着けることで、課題の解決に近づくと私は信じている。

● 濱田 蒼太

「共に考え・共に越える」ということを分かっているようで分かっていなかった。そのことに気づかされたのは、青年海外協力隊やシニア海外ボランティア、JICA 民間連携などで活動している方々に出会ったからである。帯広畜産大学の教授であり、酪農振興プロジェクトを進める小川さんが大切にしていたのは、上から目線になってはいけないということだった。「私もこちらの言葉や家畜にかかる病気を知らないから、彼らから学ぶ。彼らの立場に立って、こっちにあるものや状況で何ができるかなということ、彼らと一緒に悩んでいる。」「現地の人を尊重して、信頼し合う。そうじゃないと受け入れてもらえない。」「現地の人々が主役だから、彼ら自身が酪農を進めていかないと意味がない。」「酪農は日本では発展しているのだが、小川さんは押し付けない。あくまで、現地の人々の立場に寄り添い、一緒に悩んでいくのだ。こういった姿勢は、訪問先で国際協力を行うすべての方々に共通するものだった。「共に考え・共に越える」ための入り口は人と人との信頼関係にあるのだと思った。共に学びあい、知り、考え、気づき、よりよい未来を共に築く生徒を育てたい。

● 脇田 佐知子

課題を克服しようと取り組む人々に、活動の中で気を付けていることを伺うと、皆さん共通して次のようなことを教えてくださった。「相手の目線（立場）に立つこと（相手のレベルに合わせること）」「上から押し付けないこと

「つながりを大切にすること」「共に解決しようという姿勢であること」この視点は、決してパラグアイにおける課題解決だけではなく、どこにおいても言えることで、私自身に欠けていたことだと思った。私自身がその視点をもって子ども達に接するだけではなく、子ども達同士も同じ視点をもって接することができたらと思う。さらに、「今が良ければ」という考えではなく、将来のことを見据え、何が正しいのかを考えて活動されていることを知り、この視点も大切だと感じた。また、カテウラ音楽団のファビオ団長のお話の中に出てきた「物質の援助では、人を変えることはできない。本質的な解決をするためには、考え方を变えることが大切である。そのためには、視野を広げてあげることが必要である。」という考えは、一番印象に残った。

● 開発教育指導者研修(実践編)第3回での報告

<現地研修の報告>

- ◇ 同行ファシリテーター挨拶の後、①パラグアイの文化、②ゴミ問題、貧富の格差、③課題問題の好事例、④農村部の課題、⑤教育の質、⑥子ども達の笑顔、⑦現地の子供達へのインタビューとその結果、⑧課題解決の姿勢、⑨日本とのつながり、⑩研修を通して学んだことについて、現地の写真および動画と共に紹介した。



● 開発教育・国際理解教育実践報告フォーラム2018での報告

<ポスターセッション(実践報告)>

- ◇ 実践のねらいとプログラムをまとめた「実践報告ポスター」と実践の教材、成果、写真などをもとに、フォーラムに参加した人たちに、56分間（14分×4セッション）報告を行った。



<教師海外研修報告>

- ◇ 同行ファシリテーターによるチーム紹介後、次の流れで海外研修報告を行った。
- ① パラグアイの場所等、基本情報を紹介
 - ② パラグアイの公用語、パラグアイ文化クイズ、ホームステイ体験と日常の暮らしを紹介
 - ③ 現地で活躍する日本にルーツを持つ方々との出会いと印象的だった言葉、課題解決（国際協力）の姿勢、帰国後実践例、現地研修で得た学びを、現地の写真と音楽と共に紹介
- ◇ 会場内に「パラグアイ展示コーナー」を設け、生活用品や現地の学校で使われている教科書などの紹介を行った。



VI. エチオピア帰国後の報告

● 現地研修の研修報告書での報告

※現地研修の「研修報告書」を一部編集して掲載した。

1. 現地研修に対する各自の目的とその達成度

● 足立 友香

「自分の視野を広げたい! 知らないことを知りたい!」という想いと共に、「世界には色々な国や文化があることを生徒に知ってほしい!」という願いを抱き現地研修に参加した。町の風景、独特の匂い、生活する人々、建設中のビル、交通状況、路上にいる家畜等々…。現地に来たからこそ得られる情報がたくさんあり、体感することができた。また、現地の言葉で挨拶をすることで、現地の人と通じ合う喜びを実感できた。現地の方との交流はもちろん、様々な分野で活躍する青年海外協力隊やシニア海外ボランティアの方々との交流に多くの刺激を受け、全ての出会いが自分の学びとなった。特に、教育の分野で活躍されている方々の生の声を聞くことができ大変貴重であった。改めて、「教育」の重要性を実感した。研修を通して、自分の中でこれまで当たり前感じていた価値観を揺るがす大きな経験ができた実感している。自分の体験と現地で得た教材を存分に活用して、生徒がエチオピアの文化に興味や親しみを持ち、世界への興味が広がるように授業を考えたいと思う。

● 木村 智子

この研修に応募したのは、①国際理解教育の授業展開のノウハウが知りたかった、②実際に開発途上国を訪問し、自分で見て、感じ、生の声が聞けるという点に、自分の言葉で語るには実体験こそものを言うと思った、からである。しかし今は、自分の生徒の学校と部活と塾との三角形の世界から、彼らの視野を広げ「世界と自分とのつながり」に気が付いてほしい、少しでも世界の出来事やそこに住む人々や文化や伝統に関心を持つことで自分を見つめ直すきっかけとしてほしい、世界の中の日本を意識したり、日本の良さに気が付いたり、自分に関わる全てにおいて「物を見る角度」を変えてほしい、と思う。色々な視点が増えることが、自分の進路選択や将来を考える上でも必要だと気が付いた。研修に参加し、様々な職種の青年海外協力隊の方々やシニア海外ボランティアの方々、JICA スタッフの方々のお話を聞き、ワークショップを介し、仲間の考え方を深く知ることで、生徒に国際理解を通して「知ることの意味」、「教育とは?」、「幸せとは?」などの間に於いても自分の言葉で語れるようになった。達成度を表せと言われたら今現在は 80% である。まだまだ、これから考えを熟成させ、生徒への還元をしてこそ 100%の達成感を持つと思う。

● 児玉 恵理

「外の世界を見てみたい! いろいろな世界を感じたい!」私がこの研修に参加したいと思った理由はこれである。教師として、目の前にいる子どもたちに何を伝えられるのか。広い視野を持って物事を見てほしい、そのために私自身が色々な体験をしてみなくては! と感じたからだ。研修では、予想していた以上に濃くて充実した時間を過ごすことができた。多くの人との出会いがあったし、エチオピアの言葉や文化に触れ、人懐っこくとても礼儀正しい人々の姿なども見つけることができた。年上の方を敬ったり、相手をもてなしたりするといった日本と似ている習慣があることも知った。一方でインフラが整っていないかったり、教育格差があったりと課題も知ることができた。日本は恵まれていて、たくさんの選択肢がある中で自分の意思を持って決断できることが多いが、エチオピアではそうでないことが多い。日本の良さに改めて気づくことができたが、だからこそ「自分たちに何ができるのか。何をすべきなのか。」と考える機会となった。今回の研修で体験し学んだことを子どもたちに伝えることはもちろんだが、子どもたち自身に問いかけ、考えさせる授業にもしていきたいと考えている。

● 三小田 京子

今回の研修の目的は、外国籍の児童と日本籍の児童の融和である。各クラスには1割ほど外国籍の児童がいるが、入学前から日本で生活している外国籍の児童が多いのに、休み時間に外国籍の児童でかたまってしまいう傾向がある。そこで、国籍を越えて融和する方法を求めてこの研修に参加した。エチオピアは多民族国家である。また、イスラム教とエチオピア正教が混在し、異文化が同居していた。スーパーに入ると、子ども向けの本があり、その中には、猫とネズミが結婚する話があった。「対話することが大切である」と教えるために昔からあるそう。エチオピアでは、小さい時から、対話の大切さを教えていくことを知った。また、JICA エチオピア事務所所員等との懇親会では、対立している民族を融和させるために、第三国が入って話し合いの場をもつきっかけを作っている、と教えてもらい、話し合うことの重要性、大切さを身に染みて感じた。学校生活の中に話し合うきっかけをつくり、児童が相互理解し融和できるようにしたい。

● 白神 大典

私が本研修に参加した目的は、出会った人々に対して4つの質問を尋ねて記録して、生徒に還元する授業のもとにすることであった。人種・国籍・民族・職業・場所・時間問わず様々な

人へインタビューを行った。「幸せとは何か?」「何のために学校で勉強する必要があるのか?」「あなたの夢は?」「あなたにとって一番大切なものは?」これが4つの質問である。解答はこうであった。「幸せ」については様々な答えがあった。Family。My dad。Teaching。Sharing。Helping for my students。Traveling with my friends。その中でも共通していた部分は、自分以外の誰かを対象に挙げる点であった。「勉強」について、open my mindという答えがあった。目的として、socializedという言葉を使っていた人が多かったように思う。社会の為に自らが知識を蓄える。そういった人々の意見の共通が見られた。「夢」については日本と同じく多くの人が職業を挙げていたが、違ったのは、現状に悲観し夢はないと答えた人がいたことと、自分の周りの人々へ貢献するために夢を描き職業に就きたいと答えた人がたくさんいた点だ。ここに人々が抱える課題と、人々の社会性を私は感じた。「一番大切なもの」について、多くの人が家族と答えた。世界における全てだと答えた人も幾人かいた。授業を行い、生徒が「幸せ」「勉強」「夢」「一番大切なもの」について見つめなおすきっかけを作り、自分なりの答えを見つける手助けをしていきたい。

● 白木 純子

私が教師海外研修に参加したのは、ニュースや本で知っているアフリカ大陸に行ってみたいという興味があったからだ。私が見聞きする多くのアフリカについての情報は、飢餓、民族紛争、過酷な大地など負を連想させるものが多かったように思う。人々は本当に不幸なのかということ自分の目や耳、気候を五感で確かめたかったのである。そして、今回の研修を通じて言えるのは、幸せと感じる幸福度が高い人々が日本よりも大勢いるかもしれないということだ。エチオピアに関して言えば、民族の対立が政治に絡んではいるものの、独立国としての国の誇りが勝っているような感じさえ受けた。私は、通り一辺倒な情報に流されず、自分の目や耳で確認できたことが何よりの宝であると同時に、成長を続けるエチオピアの足元では地道な青年海外協力隊やシニア海外ボランティアの方々の努力があることを知ることができた。それを日本の子ども達に伝えることができることを大変嬉しく思う。

● 谷口 加恵

私の現地研修に対する目的は、あらゆる人に「なぜその職業を選んだのか」という問いかけをし、日本における職業選択の窓口の広さや自分の意思で職業選択ができることを前向きに捉え直させたいというものだ。職業訓練校や私立小学校では、「grade10の試験の結果、今の職業になった」や、「他に道がなかった」と答える者がおり、路傍の靴磨きの成年男性は「自分の意思で職業を変えたい」と語った。これは日本の高校生たちに、職業選択の機会が比較的多いことを自覚させる契機となる。また、青年海外協力隊の工藤さんの「やりたいことをやってください」というメッセージやシニア海外ボランティアの熊丸さんの「やりたいことのできる今の仕事が幸せ」という言葉、職業訓練校で勤務する現地の方の「大学に入り直して若者の雇用のために今の仕事を選んだ」という回答は、高校生に自分の意思で職業選択をする大切さを気づかせてくれる。この経験を生

かし、「総合的な学習の時間」において「自分のやりたいことは何か」と自身に問いかけながら職業選択をする重要性について見つめ直してもらえようような授業を展開したい。

● 前地 直樹

開発途上国であるエチオピアが置かれている現状や国際協力の現場、エチオピアと日本の関係に対する理解を現地訪問して研修を受けることによって様々なことを学んだ。実際にいろいろな情報も日本では得られるが、体験をすることによって日本にいる時よりも何倍もエチオピアに対する理解が深まったと思う。食事や人々との生の交流、予想外の出来事等は実際に現地に行かないとわからないことばかりだったと思う。食事では、ある程度食事に苦労することを予想していたが、インジェラをはじめとするエチオピア料理やイエメン料理などほとんどの料理はおいしかった。生で人々と接することで、日本と変わらないこと、違う所をより考えるようになった。街を歩いたり、お店に行ったり、車に乗っているときに何気ない風景を見ているときに数多くの発見や驚きがあった。沢山のビデオや写真を撮ったが、これらの何気ない気付きや疑問、驚きなどは子ども達に授業を実践するにあたって伝えていきたいところである。

2. 柱1「訪問国に肯定的に出会う」観点から学んだこと



● 足立 友香

エチオピアと肯定的に出会えたと感じたのは、「人々の心」に触れたからである。現地に行くまでは、「発展途上国＝貧しい…」という先入観をもってしまっていた。しかし、現地のあらゆる訪問先で出会った人々は、温かくとても親切だった。コーヒーセレモニーというおもてなしの文化にも何度も出会うことができた。確かに物質的には豊かとは言えない国であると思うが、エチオピアの人々から「心の豊かさ」について逆に気付けられたように思う。何よりも家族との時間を大切に考えるという姿勢はとても素敵だと感じた。自分が日本での生活を思い出した時に、日々の多忙感の中で見失っていたことを振り返ることができた。そして何よりもエチオピア人の人柄にとっても好感をもった。見知らぬ外国人に対して歓迎の言葉をかけてくれたり、こちらから挨拶をすると優しい笑顔を見せて挨拶を返してくれたりした。お辞儀をしたり手を合わせたり、相手と肩を合わせたりする作法も見られた。目上の人を敬い、互いを気

遣うことのできる素晴らしい文化であると思った。

● 木村 智子

まず、チーム全体がエチオピアについて否定的な考えは持っていなかったように思う（ダニに注意！ということを除く）。準備も楽しみつつ、未知なるものとの出会いにワクワクし、一つ一つの発見を興味深く共有していた。到着初日の豪雨＆雹（ひょう）の悪天候でもみんな「ウエルカムシャワーだ！」と言い、開発途上国なのだから当然道もガタガタであり、ゴミも多く建設途中のままの廃墟のような建物が多く、交通違反も多い道路状態をみて、「エネルギーな国」と表現し、言葉一つとって、ものの見方次第で印象はずいぶん違うと感じた。人々の様子は本当に礼儀正しく、にこやかで穏やかな国民性なのは街中に溢れており、よく見る「貧困の国エチオピア」の写真などとは遠い印象を受けた。肯定的に出会えたかどうかは自分ではよく分からないが、ゼロベースでこの国に入り、ただただもっと知りたい！人と話がしてみたい！！と強く思えた。相手に興味を持ち、より深く知り、思いこまず、そのまま受け入れることができた時が、様々な問題解決の入り口に立った時のだろうと思った。

● 児玉 恵理

エチオピアの言語はアムハラ語。聞いたことも見たこともないこの言葉を私は全くイメージできず、出発前は覚えようともしていなかった。しかしエチオピアに到着し、現地の人に「サラームノウ」と笑顔であいさつをしてもらったとき、とても嬉しく言葉の持つ力を感じた。それから自分なりにアムハラ語を手にメモし、チャンスがあれば使ってみようとした。あいさつの力はすごい。日本人の私がアムハラ語であいさつをすることで、エチオピアの人々はとっても嬉しそうに返事を返してくれ、エチオピア流の肩をぶつけ合うあいさつをしてくれる人もいた。言葉は違っても気持ちは伝わるし、たった一言でも相手を笑顔にさせられる。大切なのは「話したい」「伝えたい」という思いなのだと感じた。そこからさまざまな視点からエチオピアに興味をもつことができた。訪問国に肯定的に出会えたことによって、エチオピアを何倍も好きになったし、たくさんのことを学べたと感じている。

● 三小田 京子

エチオピアに行く前に、心配していたのは、衛生面とコミュニケーションだった。サービスが行き届かず、布団にダニがいるのでは、部屋は…と不安だった。また、日本語以外できない私にとって、現地の人に意思を伝えることができるか幾つ方法も考えた。しかし、エチオピアで過ごした期間、特に困ることなくホテルで過ごし、フロントで困っていることはないか心配りをしてもらおう等、特に困ることはなかった。コミュニケーションは勢いで、言語は JICA エチオピア事務所の中川さんや宮中さん、サラさんに通訳してもらい大変助かった。一番驚いたのは、ホテルのオーナーが女性で、他の従業員から一目置かれていたことだ。他の場でも女性の働くことに肯定的な場面があった。男女の区別はあるが、開発途上国、イスラム教の国でも、女性の社会的地位はある程度確立していた。それと共

に、改めて日本の女性の社会的地位の低さを感じた。現地の方に話を聞いていたとき、多くの方が、「他人のために、国のために、未来のために」と熱く語る姿があり、それはとても眩しく思った。

● 白神 大典

まず初めに、海外で学んでくる私たちが担うミッションとして、皆でエチオピア 10ヶ条を決めた。はじめのひとつは、「研修の全てを楽しむ」であった。「意外とおいしい！」が初めてインジェラを食べたときの感想である。昨年の報告書を読んだりして情報収集をして、今回の研修に臨んだため、ある程度インジェラの味については覚悟をしており、研修で出会う全てを楽しむために来たので食べてみたら意外と美味しかった。他にも日本にいたら信じられないようなことがたくさんあった。到着した途端に雨季の大雨がアディスアベバ空港を襲い、雹（ひょう）まで降ってきて空港内で身動きが取れず。水はけが悪いアディスアベバの道路は濁流になっていた。小学校の場所を誤り、予定していた小学校へ着いた頃には生徒達が下校してしまっていた。チェンチャマーケットは想像を超える足場の悪さだったし、ドルゼ村での歓迎のお酒の強さは、私にとって苦しいものであった。しかし、全てが楽しかった。楽しむために訪れ、楽しもうとしていたからである。大雨はエチオピアのインフラ事情を知るきっかけとなった。小学校では思わぬ生徒達との交流もあった。チェンチャマーケットでは2人の子どもが私の手をずっと引いて歩いてくれたし、ドルゼでの一夜は人生の中でかけがえのないものとなった。何よりも一つのこと起こるたびに、ともに過ごす仲間との結束が強まっていったように思う。まずは受け入れ楽しむこと。全てを終えた今、それが重要な事であったと思っている。

● 白木 純子

「チャイニーズ」と町で呼ばれることが辟易としてきた頃、私はある青年海外協力隊の方が、「あれは嫌味で言っている訳でもなく、ただ彼らが私たちを見つけて、話しかけたいから言っているんだよ。」と教えてくれた。現に小学校に勤務する彼女は、クラスの少数民族の子を先生が呼ぶときには、名前ではなくその部族の名前を呼ぶらしい。その話を聞いた途端、彼らの印象が変わった。話すきっかけが、部族名で良いのかは別として、彼ら是我々に興味をもち、私が「アィム ジャパニーズ」と訂正すると、そこから話が続いていくことが多い。彼らを日本人と同じ、恥ずかしがり屋だとばかり思っていた私は、この国の人はフレンドリーなんだという見方に変わっていった。疲れて帰ってきたホテルのレストランでは、料理のオーダーを取った後、1時間近く待っても料理が出てこない。こちらの人は、仕事が一番優先ではなく、家族が一番優先であることを思い出し、状況を俯瞰することができた。このように、最初はびっくりすることでも、その背景を知っていくことで、肯定的に出会い直すことができると思った。

● 谷口 加恵

訪問国での経験より、相互に理解し合うという点において、決めつけることなく肯定的に反応し、相手の反応も受け入れる

ことが重要であると学んだ。エチオピアの国々のようにかけ離れた環境にある人々の表情は、離れて見ている分には何を考えているのか読み取り辛く、話しかけにくい。少し敬遠しがちになるほど目が鋭くて怖いと感じることもある。ところが彼らは車の中で微笑む異国人の私を驚くほど遠くから見つけ、そして頷き返す。少し手を挙げれば口を大きく開けて笑い、手を振り返したり、親指を突き立てて見せてくれる。また、訪問国でチャイナと何度も呼びかけられた経験から、日本人は中国人に間違われやすいということに気づいた。これに対しどのように反応するかも、エチオピア人との出会いは大きく変化する。実際に国を間違われているのは心外な気分ではあるが、ここでむっとしてはお互いを理解し合うのに時間がかかる。エチオピア人も悪気があって言っているのではない場合がある。いちいち訂正するのをやめてから、彼らの好奇心旺盛な表情に気づける余裕ができた。日本人としての誇りを抱くのは大切ではあるが、時としてそれはどうでもいいのかもかもしれない。

● 前地 直樹

沢山のことの中で特に思ったことは、「幸せ」についてである。確かに経済的に恵まれていなくて生きていくのに大変な人々もたくさん見てきた。経済的な充足は不可欠である。一方で、緩やかに「問題ない」と大らかなエチオピア人の多くの国民性に羨ましさも感じる。家庭を大切に、仕事に振り回されていない人が多い。一方、日本人は経済的に満たされている人ばかりではないにしても、飢えることは少なく必要なものは数多く手に入る人がほとんどであるにもかかわらず、幸福感を感じられていない人が少なくない。経済的なものは金額や数字で表しやすいが、ゆとりや人間関係などは数字では表せない。このような数字で表せない部分にも、もっと目を向けてトータルでもっとみんなが「幸せです。」と言える社会にしていくべきではないかと思った。エチオピア人のおおらかさや笑顔から幸せについて考えさせられた。

3. 柱2「日本と訪問国とのつながりや同一性を理解する」観点から学んだこと



● 足立 友香

日本とエチオピアのつながりは、馴染みのある TOYOTA のロゴを街の中で多く発見したことで感じる事ができた。また、Ethiopian Kaizen Institute を訪れてトヨタの生産システムである「KAIZEN」がエチオピアで取り入れられていることを学んだ。

さらに、KAIZEN の取組は政府からも評価され、大学や職業訓練校等の教育の現場にも普及しつつあるということを知り、日本からの影響が良い効果をもたらしていることを嬉しく思った。同時に、日本人がこの状況をもっと知るべきだとも感じた。青年海外協力隊の工藤さんが、「協力隊員として異国の文化に溶け込んで生活することは大切だが、その国らしさを全て「文化の違いだからよし」とすることは違う。どの国や文化であっても起業して成功するには、共通することがある。」と語っていた。現地の方々と共に仕事をする上での苦労がある中、それでもエチオピアの雇用拡大に尽力されている工藤さんの強い思いを感じた。青年海外協力隊やシニア海外ボランティアの方の存在が、日本とエチオピアをつなぐ重要な存在になっていると感じた。

● 木村 智子

到着したその週は、日本とエチオピアとの異なる点に興味があり、はるか遠いアフリカの大地ならではの我々にとっては珍しいものにアンテナが張り、「違っていて面白いなあ」「違って当然だよな」と思っていた。しかし、滞在が長くなると表面的な違いよりむしろ知れば知るほど「なんだか日本と変わらない」「日本と同じだ」と思うことが多くなっていった。それは、TOYOTA 車が多く走っているだとか、意外にイタリアンが美味しいとか、生ビールがあるだとかそういう物理的な共通点ではなく、仲間が聞き続ける質問の答えから見えてくる人間性の面である。日本人でもエチオピア人でも皆ともに、毎日一生懸命生きており、より良い生活を求めているのは同じであり、家族を大切に思い毎日を暮らしているということである。きっとこれほどこの国でも同じことであり、同じ地球に住む誰もがみんな共に持っている感情なのだと思えて感じた。そして、その瞬間から、無性に家族に会いたくなったのを覚えている。開発途上国、先進国問わず共にお互いの今の生活基準を損なうことなくより良い世界になるように考えていきたい。

● 児玉 恵理

私はこの研修に参加するまで、KAIZEN という言葉を知らなかった。日本語で「改善」にあたる言葉が、音もそのままエチオピアに広がっていることを知った時、こんなところで日本とエチオピアがつながりを持っているのだととても意外で驚いた。KAIZEN はいろいろところで見られた。例えばEKI では、ねじを種類別に分けて入れる、何がどこにあるかが一目で分かるように壁に印をつけてしまえるようにする、混雑せずスムーズに動けるよう床に矢印を書いておくなど。クッキー工房や職業訓練校、Sabahar などでも同じように整理整頓されていた。日本でよく言われる「整理・整頓・清掃・清潔・躰」の5Sがエチオピアでも大切にされていることがとても嬉しかったし、日本の文化を誇らしく感じた。また、私たちがさまざまな場所に訪問した際に、「This is KAIZEN!」と笑顔で話してくれる姿やKAIZEN を伝えた日本にとっても感謝してくれている姿を見て、KAIZEN との出会いの中にもエチオピアの方々の真面目さと誠実さを感じる事ができた。こんなにも広がっているKAIZEN を、今度は日本でも改めて見つけてみたいと思った。

● 三小田 京子

日本も多く輸入しているコーヒは、いたるところで目にすることができた。コーヒセレモニーといった他人をもてなすことや、目上の方を尊重する習慣は日本と変わらないと思った。また、悪いことをしている子どもを叱ること、コミュニティを大切にしていること等、少し前の日本と通じることもあった。文字や言語はエチオピア独自で、アムハラ文字は平仮名と同じく一音一文字であり、とても親近感を覚えた。両国のこれまで他の国から侵略されずにきた歴史が、共通する文化をもたせたかもしれないと思った。また、日本の製造業で始まり広がったカイゼンを、エチオピアでは積極的に取り入れられて学校で学ぶことの1つになっていて、大学では学位がつけられていた。そして、職業訓練校で学んだ人が、整頓・清潔などカイゼンを取り入れて自分のお店を作っていた。職業訓練校自体にも取り入れられ、授業を行う場所に、生徒や外部の人から意見を受け付ける、カイゼンシートなども取り入れられていた。人の思いは、世界共通なのだと思った。

● 白神 大典

エチオピアの道路はトヨタの車でいっぱい。日本車が売れている理由は、日本では購入から10~15年立った車は誰も買わず、そういった状態の中古車が海外に安く輸出されているため。シニア海外ボランティアの熊丸さんが出会った車で、一番走っていた車は50万km走っていたという。カイゼンの考え方がエチオピア内で深く浸透していること。小さなスーク等でも商品を整理整頓して、お客さんに見やすく配置して、カイゼンの考えをもとに営業努力をしている。「Do you know KIZEN?」と聞くと多くのビジネスパーソンが「Yes!」と答える。改善という日本語がここまで知られていることは驚きであった。人々の性格や考え方は日本人と共通しているものが多い。控えめで恥ずかしがり屋さん。年上を敬い、礼儀正しくて、親切。街行く人は「サラムノウ」と言って挨拶すれば、「サラムノウ」と返してくれる。そして、子どもたちの笑顔は輝いている。エチオピアでも日本でも、子ども達は元気いっぱい今を生きている。遠く離れた日本とエチオピアとの繋がりを多く発見することができた研修であった。

● 白木 純子

ドルゼ村で、実際に住んでいる家の中にお邪魔した時、家が全て自然のもので作られていることが分かった。象の形をした屋根は藁葺き屋根、柱などは木や竹で作ってある。家は轆にかじられる為、時々玄関の下を切り、その度に天井が低くなり、外観から見ると家も低く小さくなる。瓢箪を吊り下げている紐一本とっても、偽バナナの実を取った後の繊維を紡いでできたものだ。ここでは、自然界にあるものを最大限に利用している暮らしがある。それは、草履を藁で編む日本の昔の暮らしとよく似ていた。「車で渋滞している道路 200メートル中に、TOYOTAの車が40台あった。」というくらいTOYOTAのランドクルーザーなど大型車を沢山見る。車の修理工場ではシニア海外ボランティアがエンジンを解体したものをを見せてくれた。コストやスピードを優先し、壊れた部分の部品交換が主流の現在の日本ではなく、壊れたら修理する昔の日本をここでも思い出

した。

● 谷口 加恵

エチオピアカイゼン機構 (EKI) 訪問において、事例として愛知県のTOYOTAがとりあげられており、研究されていることを知った。TOYOTA 発祥のKAIZENは、業務上の余剰や無駄を排除し、効率的かつ安全に配慮した職場環境を勤労者が中心となって作り上げる発想であり、仕組みである。その発想は、フェアトレード会社のサバハールにおいても導入され、ディレダワの零細企業のスークの経営者が独学で取り入れている現状も目の当たりにし、広く浸透していることがわかった。日本からずっと離れた国で愛知県の企業の業務改善例を学んでいる人々がいて、そこで働く現地の人々が、日本からの訪問者を歓迎し、感謝してくれるということを、日本の高校生はあまり知らないのではないだろうか。EKIの若手社員に日本の高校生へのメッセージをもらったところ、日本への感謝の気持ちといつかアフリカの国やエチオピアを訪れてほしいと言っていた。日本のこれまでの実績に誇りと感謝の気持ちをもち、その上に何を築き上げていくことができるのか、生徒たちと考えていきたいと思う。

● 前地 直樹

つながりについて、日本とエチオピアとの関係は他の国との関係に比べるとまだ大きくないと思った。物については電化製品やメディアでも他の東アジアの中国や韓国がビジネスとして成功している。唯一健闘しているのが車であった。印象としては「エチオピアで売る努力がこれから求められるが、モノづくりの信頼性はある」である。壊れにくい日本車は、10年以上経っても、30万キロ以上走っても、中古車市場で圧倒的人気エチオピアに受け入れられているのだ。同一性について。エチオピアでも日本でも、どこでも、身近な環境のものをうまく利用しながら、長年の知恵を蓄積し、て文化にして上手に生きていると思った。例えば、ドルゼ村では、近くにある竹と偽バナナを使って上手に生活している。竹で作った家、偽バナナを加工して食事にし、紐等道具を作って生活している。その長年の知恵に感心する。世界中、気候に応じた作物を植えてそれらをうまく生かしながら衣食住を行ってきたのだ。その世界中の人間の知恵に驚かされる。

4. 柱3「共通の課題について共に考え・共に越える」観点から学んだこと



● 足立 友香

日本とエチオピアは現状が異なりそれぞれの課題がある中、自国の立場からの視点だけでは、共通の課題解決にはつながらないと感じた。現地研修を通して、エチオピアをより身近に感じられるようになったことで、同じ地球上にある公正な立場の二国に共通する課題は何か？という問いかけが、自分の中に、より響くようになった。それを考えた時に、一番に浮かぶことは「すべての子どもたちに適切な教育を提供すること」であると思う。現地の子どものたちとの出会いから、子どもたちの目の輝きを失わせてはいけないこと、どのような環境に置かれている子も成長したい、学びたいと思っていることを強く感じた。経済的な格差から学力的な格差につながる点は、日本にとっても同様の課題であると感じる。青年海外協力隊の方が、「支援は押し付けであってはならない。相手の伝統や文化を受け入れ尊重した上で一緒に取り組むことが大切だと思う。」と言っていた言葉が印象的である。互いに発展していくために、受け入れ合い、学び合っていくことが大切だと感じる。

● 木村 智子

エチオピアと日本の共通の課題は、「環境問題」や「女性の雇用問題」や「地域格差」など様々であるが共通して解決におけるキーワードは「教育」であると考えた。今回の研修を通して、「知る」ことの意味を考え、「体験」から得られる感情や「教育」のもつ計り知れない影響力を感じた。エチオピアでは幼児時代の情操教育の欠如が、ごみ問題につながり、ルールを守る力や、チームワークで作業する力が育ちにくいということ、物事の達成感が得られにくいため途中で取り組みを放棄してしまう人が多い現状があることを何人かの青年海外協力隊員の方が力説していた。教育こそが、国の力となることを知った。日本では「勉強＝受験合格＝幸せへの切符」のように捉える生徒も多にいる。しかし、本来の学習のあり方とは、得た知識を社会のために用いてこそ、誰かの役に立ててこそ、誰かを幸せにするために用いてこそ、その意味があり、点数だけの知識では無味乾燥な気がする。勉強する意味をもっと深く考えていきたいと思った。

● 児玉 恵理

青年海外協力隊の方とのワークショップの際、「エチオピアの課題を解決する方法」を一緒に考えた。その時、青年海外協力隊の浦田さんが「エチオピアは他国に植民地化されていないから、それを誇りに思っている。しかしそれ故に頑固で、回りからのアドバイスを受け入れようとしないところがある。もっと回りのアドバイスを柔軟に受け止め取り入れていけたら、良くなる部分がたくさんある。」と言われていた。独自の文化や自国を誇りに思うことはとても素晴らしいことではあるが、「より良くしていこう」と考えるときには、みんなで知恵を出し合い、受け止め合い、理解し合うことが大切なのだと思う。そして、その中で必要であれば自分のやり方や考え方を変えていくこ

とが発展へとつながっていくのだと感じた。「してあげている」ではなく「共に」という意識でいることが、支援には必要であることも感じた。

● 三小田 京子

エチオピアでは、授業は先生が教えるだけで、例えば算数の計算などの演習時間はほとんどない。けれど、小学生でもテストができないと留年し、留年すると学費が高騰するせいもあってか、学校に行かなくなる子がいると聞いた。他にも、家計を助けるために小学校をやめて、一人で都市に働きに来て、靴磨きをしている子、親のネグレクトのために、ストリートチルドレンになった子もいるそうだ。日本でも、家庭が落ち着かず、学校でしっかり学ぶことができずに、文字の読み書きさえままならないで小学校を卒業していく子がいる。社会のしわ寄せは、弱者とくに子どもにいくのは、エチオピアだけではなく、日本でもどこでも同じであると思った。これを変えていくためには、個人では非常に難しいことである。地域・社会など、周りが支える仕組みや、周りの人が支える意識が、必要ではないかと改めて感じた。他人を思いやる、助け合う、協力することは、やはり大切で、人が生きていくために不可欠であり、大事に育てていく必要性を強く感じた。

● 白神 大典

日本とエチオピアの共通点として、数学のカリキュラムが日本と変わらないことを知った。むしろエチオピアの方が少し早く、中学生で三角関数である \sin , \cos , \tan を学ぶという事は驚きである。しかしカリキュラムが効果的に運用されておらず、生徒の理解度が低い。また、教員（特に小学校）の給与が低く、待遇が悪いためにモチベーション向上に繋がらず、教員の質が低下していると聞いた。しかしエチオピアの先生たちは定時になると学校を出て、家族と過ごす時間を大切にしているとも聞いた。日本でも教員の過剰労働が問題となっている。エチオピアと比較すると待遇面で恵まれている日本の教員は部活や校務に追われ、家族と過ごす時間もない方が多いと感じる。青年海外協力隊の方々との懇談の中で、「エチオピアの人たちは、幸せを見つけるのがうまい、と感じる」という意見があった。また、JICA エチオピア事務所のナショナルスタッフ Sara Semさんは、「幸せとはとても簡単なことで、家族と共にいること」と言っていた。お互いがお互いの幸せについて意見を出し合い、見直せばよりよい教員にとっての幸せを見つかけられると感じた。

● 白木 純子

「教育の面で地域の格差があること。」東京都と岐阜県の2県で教員として働き感じたことだが、地域ごとにそれぞれの教育文化や習慣があるということである。財政の問題や、古くから伝わる慣習があり、地域に根ざす学校であるからこそ、そのような差があって当然なのだが、日本国民として教育基本法のもと、目指す子どもの姿やそれに向かうアプローチの仕方もある程度そろえておき、質のそ

った教育ができるかと思った。それは、子どもの捉え方にもよるのかなと思う。子どもを、将来を担う宝と捉え、その子の才能を開花させようと思っている先生がいる学校や地域は、子どもの作品が大切に保管されており、授業の教材もあり、教室の壁面には英語などのアルファベット表など所狭しとして貼られている。ディレダワの学校である。教師の子どもへの向き合い方は、日本と共通課題として挙げられる。「発想力を高めること。」エチオピアでは情操教育が重要視されている。発想は机上の学問では身に付きにくく、芸術である音楽性・美術性を幼児期から養っておくことで、輸出分野における商品開発等のアイデアが生まれていくのだろう。加工技術をもつ日本も、それを牽引していきけるだけの情操教育が今後も必要だと思った。

● 谷口 加恵

フェアトレード会社サバハールを訪問して、社会の発展について考えさせられた。全てを効率化し、AIの導入などによって人間の仕事が代替されてゆくような事態が現実になり始めている社会の発展は、本当に全ての人が住み良くなる変化だということができるのだろうか。「人の手間や時間をかけた製品に宿る『物語』が、商品の『価値』を高める。」というキャシーさんの女性経営者としての理念には共感できる。その姿勢を貫き、実践し、エチオピアの市民の生活の変化を目前に見る幸福は、生きがいにつながるだろうと思う。私の携行品が、容易に代替物の見つからない「物語」のあるものばかりだったとしたら、生活がより豊かに感じられると思う。みんなが「選択」することで、「価値」が見いだされる。安価で便利なものに価値を見いだすのか、手間や時間のかけられた物語のあるものに価値を見いだすのか。どちらを重視することがより多くの人の幸福につながるのか。消費者としての行動責任は、日本もエチオピアも共通した課題である。

● 前地 直樹

特に思ったことが2点。1点目が「文化の尊重とやるべきことのバランス」である。開発協力には、エチオピアの伝統や考え方を尊重しながら日本人は協力していかなければならない。自分たちのやり方を押し付ける方法では絶対にうまくはいかない。一方でエチオピア人としての良さでもある大らかさや緩やかさは、時として発展していく上で欠点になりうる場合もある。人として共通してやるべきこともある。相手に合わせることとやるべきことのバランスをお互いにコミュニケーションをとりながらやっていく必要がある。2点目は「自国文化の尊重と他文化の尊重のバランス」である。エチオピア人は、アフリカで唯一植民地化もされていないし、長い歴史をもった国であるためか、自国に誇りを持っている人が多いらしい。一方で、一部かもしれないが、周りの国の人と肌の色が違うなどと言っている人もいると聞いた。このような話は、エチオピアだけでなく、日本でもどこでもよく聞く話である。愛国心を持ち、自国の文化に誇りを持ちながらも、多文化や異質なものを認める柔軟性を、これから今まで以上に直接接し

ながら生きていく社会になる我々ももっていく必要があると思う。

● 開発教育指導者研修(実践編)第3回での報告

<現地研修の報告>

- ◇ 同行ファシリテーター挨拶の後、①現地の言葉「アムハラ語」と挨拶の仕方、②エチオピア基本情報、③エチオピアの文化、④日本とのつながり、⑤教育課題、⑥民族問題、⑦現地研修での気づきについて、現地の写真および音楽と共に紹介した。



● 開発教育・国際理解教育実践報告フォーラム2018での報告

<ポスターセッション(実践報告)>

- ◇ 実践のねらいとプログラムをまとめた「実践報告ポスター」と実践の教材、成果、写真などをもとに、フォーラムに参加した人たちに、56分間(14分×4セッション)報告を行った。



<教師海外研修報告>

- ◇ 同行ファシリテーターによるチーム紹介後、次の流れで海外研修報告を行った。
- ① エチオピアの場所等、基本情報を紹介
 - ② エチオピアの主食インジェラ試食とコーヒーセレモニー用茶器を使用したコーヒー試飲を参加者に提供、エチオピアの特徴的な文化を紹介
 - ③ 日本とのつながりクイズ、エチオピアの教育課題、多民族国家が抱える民族問題、帰国後実践例を、現地の写真と音楽と共に紹介
- ◇ 会場内に「エチオピア展示コーナー」を設け、生活用品や現地の学校で使われている教科書などの紹介を行った。



VII. パラグアイ実践報告書

パラグアイ実践報告書の内容一覧

No.	名前	対象	時間数	タイトル
1	大澤 健人	中学校2年生	13時間	自分も世界も未来へ向かって ～パラグアイとの出会いから～
2	加藤 侑子	小学校1年生	8時間	同じも 違うも みんないい
3	久保田 真代	高校2年生以上	10時間	世界が幸せになるために
4	榊原 早織	小学校3年生	23時間	行動しよう！ 未来を変える 地球づくり！
5	野々山 尚志	小学校6年生	28時間	世界に学ぶ～届け幸せのメッセージ～
6	箱山 園江	高校3年生	2時間	もしも私がカテウラにいたら
7	濱田 蒼太	中学校2年生	12時間	夢見る力～自分の世界を広げる～
8	脇田 佐知子	小学校6年生	11時間	みんなつながっている。 さあ、わたしたちも動いてみよう！

自分も世界も未来へ向かって ～パラグアイとの出会いから～

所属	三重県伊賀市立阿山中学校	実践者	大澤 健人
対象	中学校2年生	時間数	13時間
場所	教室・体育館	実践教科	社会
ねらい	<p>テーマ【異文化理解、SDGs、コミュニケーション、キャリア、自己理解】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・パラグアイとの肯定的な出会いから、世界と日本・世界と自分のつながりを実感する。 ・世界が直面している課題を SDGs から学び、解決のために私たちができることを考える。 ・さまざまな国の現状を知ること視野を広げ、あたり前になっている自分の「幸せ」に気づく。 		
実践内容	回	プログラム	備考
	1	<p>パラグアイについて知る【フォトランゲージ・ブレインストーミング】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ここはどこ？(テレレ・文化・国旗・町並み・日系社会…) ・あなたもつイメージは？(パラグアイ・開発途上国…) ・行ってみたらホントはこんなトコだった 	<ul style="list-style-type: none"> ・教師海外研修の写真 ・世界地図・国旗 ・テレレセット ・パラグアイ紙幣
	2-3	<p>○2～8回は社会科の授業内容に関連づけて取り入れる参加型学習を体験する</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・パワーポイント
	4-8	<p>【派生図・重みづけ・ギャラリー方式・リストアップ】</p> <p>パラグアイについて知る②【フォトランゲージ】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自然トンネル→農業 ・小農家→畜産 ・ニヤンドウティ→伝統工芸品<動画> ・開発と雇用→持続可能な社会 ・トリニダの遺跡→歴史 	<ul style="list-style-type: none"> ・実物「ニヤンドウティ」 ・教師海外研修の動画
	9	<p>パラグアイについて知る③ ※文化祭展示</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・教材「パラグアイBOX」
	10-11	<p>SDGsから世界の現状を学び、私たちができることを考える</p> <ul style="list-style-type: none"> ・SDGsを学び、世界や日本が直面している課題と向かいあう <p>【ポップコーン方式・派生図・ギャラリー方式・重みづけ】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・課題解決のために頑張る人の生き方に学ぶ<動画> 	<ul style="list-style-type: none"> ・冊子「私たちが目指す世界」
	12-13	<p>世界の国々から学ぶ【フォトランゲージ】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ここはどこ？(12カ国を取り上げた) ・パラグアイの日系社会から気づく<動画> ・あなたにとって今なくなったら困ること・ものは？ ・<パラグアイと日本をむすぶアンケート> ・幸せのとらえ方 <世界がもし100人の村だったら> 	<ul style="list-style-type: none"> ・教材「国際理解カード」 ・図書「世界がもし100人の村だったら」
成果	<ul style="list-style-type: none"> ・現地に行ったからこそわかる、その国の空気感や人々の表情・声を大切にして授業を行うことができた。 ・国際理解や他者理解を通して自分を振り返り、生徒1人1人の視野や考え方を広げることができた。 ・通常の社会科の授業と並行して行うことで、既習内容とつなげたスパイラルな学びができたと感じている。 		
課題	<ul style="list-style-type: none"> ・「気づきから行動するためのスキル」へつなげる手立てが弱く、これからも実践し続けていく必要がある。 ・教材ありきの授業ではなく、目の前にいる生徒の姿に合わせて授業を組み立てなければならない。 ・限られた時間のなかで一貫性をもつプログラムを実施できず、断片的な学習になってしまった。 		
備考	<ul style="list-style-type: none"> ・学校全体でペア・グループ学習を取り入れた授業を行っており、主体的に考え学びあう習慣ができていたため、班活動が停滞することも少なく、生徒の力に助けられる部分も多かった。 		

[授業実践の詳細]

1 時限目「パラグアイについて知る」

この時限のねらい

- ・パラグアイを身近に感じ、自分たちとは異なる文化をおもしろいと思う。
- ・自分のなかの思い込みに気づき、正しく知ることの大切さを学ぶ。

1 児童生徒の活動の流れ

- ① 右の写真を見て、ここはどこかを予想する。
また、写真からわかることを書きこむ。【フォトランゲージ】
- ② パラグアイについて知っていることやイメージを書く。
書いたことを班で発表し交流する。【ブレインストーミング】
- ③ 開発途上国や南米の国のイメージを確認する。
- ④ パラグアイについて知る。
(テレレ、アサード、チパ、コシード、地図、国旗、スーパー、ゴマ、学校、町並み、紙幣…など)
- ⑤ 本時の感想を書く。



<ここはどこ？本当に日本？？>

2 児童生徒の活動の成果・反応

- ◇ 最初は日本・お寿司という意見が出るが、じっくり写真を読みとると「外国？」という声が出た。
「レジを打つ女性や後ろのラベルから外国だ」というように意見が広がった。
- ◇ 生徒はパラグアイについて知っていることが少なく、南米の国、サッカーが有名といった程度であった。
- ◇ 生徒は開発途上国に「貧しい」「不便」「怖い」というようなイメージをもっていることが多かった。
自分ももつ先入観や思い込みに気づき、振り返る機会になった。
- ◇ さまざまな写真を見ながら、研修についての話を聴くことで、パラグアイという国に興味をもった。
日本とのちがいを肯定的に受け入れたり、日本とのつながりに気づいたりすることができた。

3 使用した教材

- <教材1> パラグアイの写真(教師海外研修より)
- <教材2> 世界地図・国旗
- <教材3> テレレ・グアンパ・シェルバ・ボンビージャ
- <教材4> パラグアイ紙幣

2-3 時限目「参加型学習を体験する」

この時限のねらい

- ・自分の意見を伝えること、他者の意見を聴くことで、自分や班の考えが広がっていくことを実感する。
- ・学習活動のなかで、自分にできること・意識しておくべきことを見つけることができる。

1 児童生徒の活動の流れ

- ・避難訓練に合わせた防災学習のなかで取り入れた。

- ① 大地震後の生活についてイメージし、ライフラインの確保について知る。
電気・ガス・水道・食料・交通 を中心に書き、【派生図】を書く。
- ② できあがった班の意見を【重みづけ】し、大切にしたいことを赤線で引く。
- ③ 他の班の考えを【ギャラリー方式】で知り、いいなと思ったものに☆を書く。
- ④ クラスの意見を含んで、1番大切にしたいことを【リストアップ】する。
- ⑤ 世界には厳しい生活環境のなかで暮らす人々がいることを知る。



<カテウラの写真>

2 児童生徒の活動の成果・反応

- ◇ ギャラリー方式での交流で、自分の班に戻ってきたとき、「めっちゃ☆ついてる」「〇〇さんのやつ☆多いで！！」などの声が聞こえてきたのが印象的であった。
- ◇ 班で協力しながら課題にとりくむことで、自分1人では考えつかなかった意見まで深めることができた。また、肯定的に反応することで、楽しく活発な雰囲気がうまれ、生徒は自然に学びあえるのだと実感した。



<ギャラリー方式での交流のようす>

3 使用した教材

<教材5> カテウラパワーポイント

4-8 時限目「パラグアイについて知る②」

この時限のねらい

- ・継続的にパラグアイと肯定的に出会うことで、国際理解についての視野を広げる。
- ・社会という教科で学ぶ内容が、実際にパラグアイの現状につながることを知る。

1 児童生徒の活動の流れ

- ・週に1回20分程度で①～⑤を授業のなかで取り入れた。
- ① 自然トンネルを通して農業を考える。【フォトランゲージ】
- ② 小農家のようすを通して畜産を考える。【フォトランゲージ】
- ③ ニヤンドウティを通して伝統工芸品を考える。【フォトランゲージ】
<動画 自分が変えるのではなく、自分が変わる>
- ④ 開発と雇用を通して持続可能な社会を考える。【フォトランゲージ】
- ⑤ トリニダの遺跡を通して歴史の見方を考える。【フォトランゲージ】



<ニヤンドウティの拡大写真>

2 児童生徒の活動の成果・反応

- ◇ 学習する内容と世界の現状を結びつけ、パラグアイに対する興味と学習意欲を高めることができた。

3 使用した教材

<教材6> パラグアイの写真・動画(教師海外研修より)

9 時限目「パラグアイについて知る③」

この時限のねらい

- ・文化祭という場で自分が経験したことを伝えることで、全校生徒へ自分の気づきや学びを広げる。
- ・パラグアイだけではなくSDGsについても展示し、世界が直面している課題を知る機会とする。

1 児童生徒の活動の流れ

- ・文化祭で、研修で経験したことやパラグアイについて説明を聴き、展示見学を行った。

2 児童生徒の活動の成果・反応

- ◇ 展示見学の内容について興味をもち質問などに来た生徒が多数いた。
文化祭の企画の1つである抽選くじでニャンドゥティが当たった生徒も質問に来ていた。



＜パラグアイ展示見学のようす＞

3 使用した教材

＜教材7＞ パラグアイBOX

＜教材8＞ MMI-LAC(セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン)『私たちが目指す世界』2016、JICA 他

10-11 時限目「SDGsから世界の現状を学び、私たちができることを考える」

この時限のねらい

- ・世界や日本、自分に身近な地域のさまざまな課題について自分なりに向かい合うことができる。
- ・JICAなど世界の課題解決のために活動する人々と出会い、これからの自分の生き方につなげる。

1 児童生徒の活動の流れ

- ① 「開発」からイメージすることや知っていることを書く。【ポップコーン方式】
- ② <冊子 私たちが目指す世界> を読みあい、「開発」についての考えを広げる。
- ③ SDGsの17つの目標について知り、それぞれの課題について【派生図】を書く。
その時、必ず他の班員の意見から自分の意見を付け足すようにした。
- ④ 他の班の考えを【ギャラリー方式】で知り、いいなと思ったものに☆を書く。
その後、他の班の【派生図】に自分の班の意見を付け足してもよいとした。
- ⑤ できあがった自分の班の意見を【重みづけ】し、大切にしたいことを赤線で引く。
- ⑥ カテウラ地区のファビオさんの生き方に学ぶ。<動画 演奏のようす、モノでは人は変わらない>
- ⑦ 青年海外協力隊の生き方に学ぶ。<動画 現地で体験するからこそわかること
早く行きたければ1人で行け、遠くへ行きたければみんなで行け>

2 児童生徒の活動の成果・反応

- ◇ 「開発」という言葉に対して、街の発展やモノの技術、ビルや道路などのインフラ面…という声が出た。
冊子から「みんなが安心して、自分の能力を十分に発揮しながら満足して暮らせるようにすること」という新しい視点にふれ、国と国との関係も人と人との関係から始まることを学んだ。
- ◇ 【派生図】の手法において、「聴く」「伝える」「反応する」といった手順を付けくわえることで、どの生徒も参加・交流しやすくなったと感じた。また、自分や班の意見に自信をもって、発表できていた。
- ◇ 実際に現地で課題解決のために活動する人々の言葉は生徒の心へ残るものである。授業後の振り返りでは、「なんか勇気をもらった」「自分も目標に向かって頑張ろうと思った」などの感想が多かった。



<持続可能な開発のためのグローバル目標を達成するために>

3 使用した教材

- <教材9> MMI-LAC(セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン)『私たちが目指す世界』2016、JICA 他
- <教材10> パラグアイの動画(教師海外研修より)

12-13 時限目「世界の国々から学ぶ」

この時限のねらい

- ・パラグアイの日系社会から、日本とパラグアイがつながっていることに気づく。
- ・自分のあたり前が世界のあたり前ではないという意識をもつ。
- ・現在の自分を振りかえり、「幸せ」について自分なりに考えることができる。

1 児童生徒の活動の流れ

- ① 班ごとに <国別写真カード(赤色)> を使って写真 1~3 から気づいたことを書く。【フォトランゲージ】
- ② 板書した国名のなかから自分のカードの国を予想する。
その後、<世界地図カード(黄色)> で答え合わせをする。
- ③ パラグアイカードの日系社会から、移民した日本人の活躍を知る。
<動画 パパから見た日本、宮里さんの宝物、外国へ出てわかること>
- ④ アンケートから、あなたにとって今なくなったら困ること・ものを考える。
その後、それらが今あなたの手元にあるという幸せを実感する。
- ⑤ <世界がもし 100 人の村だったら>を読んだあと、本時の感想を書く。



<班活動のようす>

国別写真カード

1 

2 

3 

国別写真カード

2 

3 

Quiz のこたえ C. イグアス滝

パラグアイ共和国は南アメリカ大陸のほぼ中央にある国で、アルゼンチン、ボリビア、ブラジルに囲まれています。イグアス滝は、この3つの国の境にあります。大小合わせて200以上の滝が、幅4kmにわたって広がり、滝の落差は、高いもので100mを超えます。世界中から多くの人が訪れ、その大きさに、たれもが圧倒されます。

※イグアス滝：アメリカとカナダの国境であるナイアガラ川にある滝です。ゴート島という島で2つに分かれ、右側のアメリカ滝は幅300m、落差51m、左側のカナダ滝は幅300m、落差40mあります。

※ボクトリア滝：アフリカ大陸、ジンバブエとザンビアの国境に流れているザンベジ川上流にある滝です。幅1700m、落差130~120mあります。

写真の説明

1 これは何でしょう。
世界3大瀑布の一つとして有名なイグアス滝です。「100ヶ国」の「100ヶ国」の国境にあり、大小合わせて200以上の滝からなっています。大きく、遠くからでも、滝の雄姿が美しく見えます。世界中から多くの人が訪れる場所です。世界遺産に登録されています。

2 この建物は何だと思いますか。
パラグアイの首都アスンシオンにある大統領府です。アスンシオンの歴史的地区「カスチリャ・ベニグニャ」にあり、17世紀に建てられました。建物はバロック様式で、美しい彫刻が施されています。

3 この人たちは何をしていますでしょうか。
これはアスンシオンにある日系学校での授業です。授業終了後、生徒たちが「フォトランゲージ」活動を行っています。写真は日本人教師が指導し、生徒が、動物の絵かき紙などに切り取った動物の写真を貼っているところです。

<教材 国際理解カード パラグアイ>

2 児童生徒の活動の成果・反応

- ◇ 自分たちとは異なる文化をもつ国やそこに住む人々の生活に積極的に目を向けることができた。また、さまざまな国について知ることで、あらためて日本の良さや自分の幸せについて振り返ることができた。アンケートに答えまわりの友達とワイワイと交流する姿と、<世界がもし 100 人の村だったら>を真剣な表情で読む姿の対照的な雰囲気が印象的であった。

◇ 生徒の振り返りから一部抜粋する。

「なくなったら困るものがなんなのかに迷うくらいたくさんのもが自分のまわりにあることに気づいた。」

「少しのことに幸せを見出せていけることが大切だ。安心できるかどうか豊かさにつながるのかも。」

「わたしは自分とまわり・みんなが笑っていたら私は幸せなんだと思っている。」

「自分を愛せたら自然と幸せになると思った。」

「みんな1人1人がまったく違う人間たちで住んでいることでさえもすごいことなのかなと感じた。」

「私は『幸せ』とは何なのか理解できずにいました。だけど、この本を読んで、私の『幸せ』は当たり前のことだったから気づかなかったのだということを知りました。」

「どこの国も自立できたらみんなが競い合わなくてもみんなが幸せなのかなと思った。」

3 使用した教材

<教材11> 外務省経済協力局『国際理解カード』2000、国際協力推進協会

<教材12> アンケート「パラグアイと日本をむすぶアンケート」(教師海外研修より)

<教材13> 池田香代子(C.ダグラス・ラミス)『世界がもし100人の村だったら』2002、マガジンハウス

■ 全体を通して

1 授業の様子



<学びあう様子>

2 参考文献・資料

- 1) JICA 中部 開発教育指導者研修 資料
- 2) JICA 中部 2016 年度 教師海外研修 報告書

同じも 違うも みんないい

所属	愛知県春日井市立玉川小学校	実践者	加藤 侑子
対象	小学校1年生	時間数	8時間
場所	教室・家庭科室・廊下	実践教科	学活、音楽
ねらい	<p>テーマ【受容】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分と異なるもの・自分が知らないものと肯定的に出会い、知的好奇心に繋げる。 ・自分ができることを考えて、行動する。 		
実践内容	回	プログラム	備考
	1	<p>◆1日に2回、止まらなければいけない国がある？！</p> <ul style="list-style-type: none"> ・それぞれの国に国歌があり、聞く場面や回数は異なることを知る。 	<p>タイ国歌 タイ国歌が流れた際の動画</p>
	2	<p>◆世界には、どんな国がある？【ロールプレイ】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・国旗パズルで、様々な国旗があることを知る。 ・配られた写真の人になりきって自己紹介をし、他国の人に興味をもつ。 	<p>国旗パズル パラグアイ国旗 7カ国の子どもの写真</p>
	3	<p>◆どんな生活をしているの？【4つのコーナー】【フォトランゲージ】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・4カ国の家を提示しどこに住みたいか問うことで、自分ごととして考える。 ・写真から、どこで何をしているところか考えることで、興味をもつ。 	<p>4カ国の家の写真 写真7枚、世界地図 パラグアイ伝統衣装</p>
	4	<p>◆どんなものを食べているの？【4つのコーナー】【フォトランゲージ】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・いつ、だれが食べていて、何が入っており、どんな味がするか考えることで、その食べ物と国に興味をもつ。 	<p>ご飯の写真4枚 写真7枚、世界地図 テレセット、チパ粉</p>
	5	<p>◆あなたの大切なものは何？</p> <ul style="list-style-type: none"> ・友達の大切なものをビンゴカードに書き、パラグアイの子の大切なものを読み上げビンゴを行うことで、住んでいる場所は違っても、大切なものは同じであることに気付く。 	<p>ビンゴカード パラグアイの子が描いた大切なものの絵</p>
	6	<p>◆幸せってなんだろう？【統計ラインアップ】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日本の子ども、パラグアイの子どもの幸せ度を予想する。 ・パラグアイの子の「幸せじゃない」理由から、幸せとは何か考える。 ・みんなが幸せになったらどうなるか、一人ひとりが考える。 	<p>パラグアイ・日本の旗 写真</p>
	7	<p>◆みんなが幸せになるためにできることは何だろう？</p> <ul style="list-style-type: none"> ・他国のエピソードを参考に、みんなが幸せになるために、自分ができることを考える。 	<p>タイ・パラグアイの旗 写真</p>
	8	<p>◆気付いたこと・学んだことを伝えよう</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学習発表会にて、学んだことを保護者に伝える。 	
成果	<ul style="list-style-type: none"> ・本プログラムと並行して授業時間外での活動も取り入れたため、様々な教材から感じる事ができた。 ・自分たちの当たり前が全てではないと、他の国の文化を受容する姿が多く見られた。 ・世界との入口に肯定的に出会えたことで、積極的に知りたいと思い、行動する子どもが出てきた。 		
課題	<ul style="list-style-type: none"> ・クラスで考えた「みんなが幸せになるためにできること」を実践中ではあるが、相手を思いやり、優しい心で行動することはまだ難しい。 ・教師の伝えたい思いが先行し、話しすぎた場面が多かった。その時間を交流の時間にまわすべきだった。 		
備考	<ul style="list-style-type: none"> ・授業時間外で、国旗くじ・スペイン語講座・名探偵からの挑戦状(国旗探しクイズ)をそれぞれ、毎日・不定期・週1の頻度で取り組んでいる。 		

[授業実践の詳細]

2 時限目「世界には、どんな国がある？」

この時限のねらい

- ・世界には、どんな国があるか知る。
- ・他国の人に興味をもつ。

1 児童生徒の活動の流れ

- ① 国旗パズル・・・4 分割された国旗の1ピースを一人一つ持って言葉は発せず歩き回り、国旗が完成したら黒板に貼る。
- ② 国旗の説明・・・パラグアイの国旗は裏表があること、ネパールの国旗は四角ではないことなど、実物を交えた説明を聞く。
- ③ なりきり自己紹介・・・各グループに 1 枚、他国の子どもの写真を配付し、どこの国の人で何をしているところか考え、全体に発表する。【ロールプレイ】
- ④ 感想を書く。



<板書>

2 児童生徒の活動の成果・反応

- ◇ 国旗パズルを行いながら、国が違っても同じ色が使われることが多いことに気付いた子どもがいた。
- ◇ パラグアイの国旗を実際に見ることで、裏表デザインが違うことを知り、「国旗って、片側だけだと思っていた。」という反応が聞けるなど、今まで常識だと思っていたことも違うこともあると気付く姿があった。
- ◇ なりきり自己紹介では、子どもたちの親しみのある誕生日会やハトの写真を取り入れることで、他国の人も日本人と似ていることをしていると驚きの声があがった。
- ◇ 「すごい。」「びっくり」など、他の国と肯定的に出会えていた。

<子どもたちの感想>

- ・ネパールにも、日本と同じようにハトがいてびっくりした。
- ・ネパールも、誕生日があるんだね。
- ・モンゴルの子どもは、一人で馬に乗れるんだね。すごい。
- ・日本の国じゃなくても、同じようなことをしているんだね。
- ・パラグアイの国旗が 2 つあったことにびっくりした。
- ・マダガスカルは、まわり全体が海なんだね。
- ・国旗のこと、お母さんに知らせたいな。

3 使用した教材

- <教材1> 国旗パズル(6 カ国分)
- <教材2> なりきり自己紹介用の写真(6 カ国の子どもの写真)
- <教材3> パラグアイ国旗(パラグアイボックス)

3 時限目「どんな生活をしているの？」

この時限のねらい

- ・他の国の人は、どんな生活をしているのかを知る。
- ・住んでいる国は違って、同じこともある事実を知り、親近感をもつ。

1 児童生徒の活動の流れ

- ① 【4つのコーナー】…4カ国の家を提示し、自分の住みたい家の写真の前に行く。インタビュー形式で、選んだ理由を全体に伝える。
- ② 【フォトランゲージ】…どこの国の写真かは言わず配られた1枚の写真から、「どこで」「何をしているか」グループで予想し、全体に発表する。
- ③ 写真の説明をする。
- ④ 感想を書く。



<1枚の写真から生活の様子を予想>

2 児童生徒の活動の成果・反応

- ◇ 前回、フォトランゲージを利用したロールプレイを行ったため、どのグループもスムーズに活動に取り組むことができた。
- ◇ グループによって配付された写真が異なるので、自分のグループの予想が終わると、「他のグループはどこの国の写真を持っているんだろう」と興味津々だったため、各グループの発表の際は熱心に聞く様子が見られた。
- ◇ サッカーやパレードなど、国が違って日本と似ていることがあることに気づき、「日本と同じだね!」と大興奮だった。
- ◇ タイのバンコク日本人学校の写真はどの子の予想も「日本」だったが、正解は「タイ」であることに衝撃を受けていた。他国にもたくさんの日本人が生活していて、日本の学校と同じように学校があることを知り、興味をもっていた。



<ニヤンドウティってきれいだな>

<子どもたちの感想>

- ・ゴミでバイオリンが作れるんだね! パラグアイってすごい。
- ・車にいっぱい(ニヤンドウティの)かざりをつけて、きれいだね。
- ・インドのおにごっこは変わっているし、大人もするんだね。
- ・パラグアイやタイにも、たくさんビルやマンションがあるんだね。
- ・タイに日本人が行く学校があるなんてふしぎ! 日本までバスが迎えに来るのかな?
- ・エチオピアでキャンプファイヤーして、一緒に踊りたいな。

3 使用した教材

- <教材4> 他国の家の写真(4枚)
- <教材5> 生活の様子の写真(7枚)
- <教材6> 世界地図
- <教材7> ニヤンドウティの衣装(パラグアイボックス)

4 時限目「どんなものを食べているの？」

この時限のねらい

- ・他の国の人は、どんな食べ物を食べているのかを知る。
- ・「日本の食べ物」だと思い込んでいた概念をゆさぶる。

1 児童生徒の活動の流れ

- ① 【4つのコーナー】…子どもたちの好きな食べ物ランキングにあがりそうな4つの料理から、今食べたいものを選び、その写真の前に行く。インタビュー形式で、選んだ理由を全体に伝える。
- ② 【フォトランゲージ】…どこの国の写真かは言わず配られた1枚の写真から、「いつ」「だれが」食べていて「何が入っていて」「どんな味がするか」グループで予想し、全体に発表する。
- ③ 写真の説明をする。
- ④ 感想を書く。



<1枚の食べ物の写真から予想>

2 児童生徒の活動の成果・反応

- ◇ バーベキューやおかゆのように、日本の食べ物だと思っていたものが、他の国で食べられていることを知って、驚いていた。
- ◇ イナゴの写真を見て、「これは、テレビで見たことある！外国のだよ！日本では虫なんて食べないもん。」と口々に言う子どもたちに、「他の国でも虫を食べるけど、この写真は日本のイナゴの佃煮の写真だよ」と伝えると、「知らなかった」という声が多く聞かれた。
- ◇ 実際に子どもたちがテレセットやチパ粉を見たりにおいをかいだりしたことで、行ったことがないパラグアイについて想像し、「行ってみたい！」という気持ちを抱く子もいた。



<全体発表>

<子どもたちの感想>

- ・タイにコーラがあるんだね。日本みたいだね。
- ・パラグアイの食べ物があんなにあるなんてすごい！
- ・違う国の食べ物って面白い。
- ・タイは(日本に比べて)米が大きいんだね。
- ・日本でも虫食べるんだ！知らない食べ物もあるんだな。
- ・タイのご飯、全部おいしそう。

3 使用した教材

- <教材8> 人気そうなご飯の写真(4枚)
- <教材9> 食べ物の写真(7枚)
- <教材10> テレセット、チパ粉(パラグアイボックス)

5 時限目「あなたの大切なものは何？」

この時限のねらい

- ・まわりの友達やパラグアイの子の大切なものを知る。
- ・国は変わっても、大切に思っているものは同じであることに気付く。

1 児童生徒の活動の流れ

- ① アイスブレイキング…歩き回って、できるだけ多くの友達とスペイン語のあいさつ (Hola!) をしながらハイタッチをする。
- ② 自分の大切なものを決め、ビンゴシートの中央に書き込む。
- ③ 大切なビンゴカード作成…歩き回って、会う友達にスペイン語であいさつをした後、大切なものを聞く。聞いた回答をビンゴカードに書いた 8 つの枠を埋める。同じ回答だった場合は書かず、他の友達に聞く。
- ④ 大切なものビンゴ…パラグアイの子に描いてもらった大切なものの絵の紹介を聞きながら、同じものがあったら自分のビンゴカードをチェックする。
- ⑤ 感想を書く。



<大切なものビンゴ作成>



<パラグアイの子の大切なもの>

2 児童生徒の活動の成果・反応

- ◇ 2クラス合同で行ったため、あまり話したことがない友達もいたが、アイスブレイキングで交流を行ったため、緊張感なく次の活動へうつることができた。
- ◇ 覚えたスペイン語のあいさつを、朝教室に入る際に使う子どもの姿が見られた。
- ◇ 一緒にの学校に通う友達同士でも、大切なものが違うことに気付き、意外だと感じる姿があった。
- ◇ 日本から遠く離れた場所に住むパラグアイの子どもたちも、自分たちと同じものを大切だと思っていることを知り、驚いていた。

<子どもたちの感想>

- ・パラグアイの子の(描いた)絵が上手だった。
- ・パラグアイに行って、遊んでみたいな。
- ・パラグアイの人は優しいのかな？家族もいるんだね。
- ・違う国だけど大切なものがいっしょなんだ。すごい！
- ・パラグアイの子は何を考えているのかなって思っていたけど、思っていることが同じって知ったときはびっくりした。

3 使用した教材

<教材 11> ビンゴカード

<教材 12> パラグアイの子が描いた大切なものの絵

6 時限目「幸せってなんだろう？」

この時限のねらい

- ・自分以外の人は幸せと感じているのか、まわりに興味をもつ。
- ・みんなが幸せになったら、どう思うか考える。

1 児童生徒の活動の流れ

- ① アイスブレイキング…「今日あなたは幸せですか？」の質問に、「とても幸せ」「幸せ」「ふつう」「あまり」に分かれる。インタビュー形式で選んだ理由を全体に発表する。【4つのコーナー】
- ② 日本の小学生100人のうち、幸せと答えた人は何人か考える。
【統計ラインアップ】
- ③ パラグアイの小学生100人のうち、幸せと答えた人は何人か考える。
【統計ラインアップ】
- ④ パラグアイの子どもたちが幸せな理由を考える。
- ⑤ 唯一「幸せでない」と答えたパラグアイの子の理由を考える。
- ⑥ みんなが幸せになったらどうなるか考えて、紙に記入する。
- ⑦ 感想を書く。



<幸せと答えた人は何人かな？>

2 児童生徒の活動の成果・反応

- ◇ 100人中、何人の日本人が幸せと思っているか聞いた後にパラグアイの子どもについて同じように質問したところ、日本の人数から考えて、同じくらいの数値の場所に立つ子どもが多かった。前時の授業から、日本とパラグアイの子どもたちの考え方が似ていると思つての判断ではないか。
- ◇ パラグアイの子の幸せでない理由を知った後、「優しいね」と言った子どもたちがいた。自分のことしか考えられない段階の子どもたちだが、相手を思いやる行動が素敵だということを、パラグアイの子から学んだようだ。



<板書>

<子どもたちの感想>

- ・パラグアイの人も(日本の人と)同じことを考えているんだな。
- ・話をいっぱい聞いて、いっぱい会ってなかなよくなったら、幸せになれるね！
- ・パラグアイの女の子は、そんなに人のことを考えてあげているんだね。
- ・パラグアイの女の子は、みんなに幸せになってほしいんだね。
- ・自分より周りの人のことをちゃんと考えていてすごい。
- ・世界中の人がいい気持ちになれるといいね。

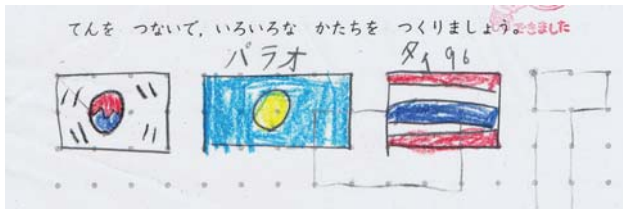
3 使用した教材

<教材13> パラグアイ・日本の旗の写真

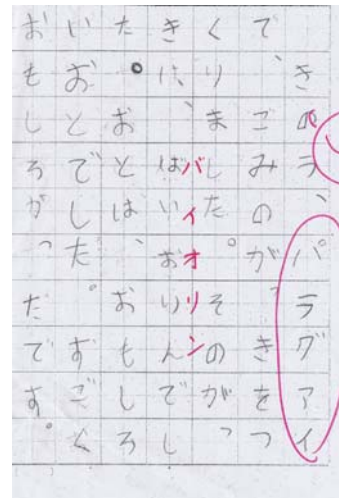
<教材14> 日本・パラグアイの子ども100人のアンケートの集計結果

■ 全体を通して

1 授業の様子



<算数の時間に描いた国旗>



<宿題の嘘カタカナ日記にパラグアイ登場>

あなたはいろいろなことをしらべ、たくさんひとのおなやみをかいけつてきたぬいだんていです。そんなぬいだんていにきょうもおねがいごととどきました。...

わたしのなまえはぬいだんてい...

きょうのおねがいごと

きょう、おんがくのじかに「ひのまる」のぶんぎょうをしたようですね。にほんのはたは、「しろじに あかい」いろをした、ひのまる。じゃあ、にほんのくにのうたは、なんだかしてありますか？ そう、「きみがよ」だったよね。ほかに、きょうタイというくにのうたをぶんぎょうしたときに、こくおのうたはなしがでできたね。こくおのうたは、うまれたようびは、月よう日っていつだったけど... いったいじぶんはなんよう日なんだろう？ ゆうこ先生は、火よう日らしいよ!! みんなは、いったいなんよう日なんだろう？ おうちのひとにきいてみて、なやみをかいけつてきてほしいんだ!!

ほく・わたしが
うまれたようびは、
ようび



<毎朝恒例の国旗くじを貼る様子>

<名探偵からの挑戦状、
タイの国歌を学んだ後に出した、誕生日の曜日を調べる課題>

世界が幸せになるために

所 属	静岡県立静岡中央高等学校	実践者	久保田 真代
対 象	高校2年生以上(12人)	時間数	10時間(1コマ90分)
場 所	教室	実践教科	現代文 A
ねらい	<p>テーマ【共生、貧困、豊かさ、幸福】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日本とパラグアイの共通点や相違点を知り、価値観や文化の多様性に気づき、受け入れる心(態度)を養う。 ・課題を知り、原因を考え、今後皆が幸せに暮らしていくためにできることを実践できる。 		
実践内容	回	プログラム	備 考
	1-4	(教科書教材「文化と理解」「幸せの分量」学習後) ○世界の国について知ろう！ ・世界地図に場所を書き込みながら、ワールドクイズ ・じゃがいもさんとおもだち ・世界の食卓【フォトランゲージ】 ・食料自給率、フードマイレージ【できることビンゴ】	『現代文 A』大修館 愛知県国際交流協会 ホームページ 『地球の食卓』写真 『地球の食卓学習プラン10』『フードマイレージ』開発教育協会 愛知県国際交流協会 ホームページ 教師海外研修の 写真や購入したもの
	5-6	○世界と日本のつながり、パラグアイと世界をつながりを知ろう！ ・大切なものアンケート ・世界と日本のかかわり ・パラグアイクイズ ・パラグアイ体験 ・どれが日本でしょう	教師海外研修の 写真、動画
	7	○パラグアイの課題、日本の課題を考えよう ・なぜ貧困に陥ってしまうのか【因果関係図】 ・翻って日本はどうなんだろう【因果関係図】【派生図】	教師海外研修の 写真、動画
	8	○課題解決に向けてどんな取り組みがあるのか知ろう！ ・小規模農家の自立を促すために【ロールプレイ】 ・実際の取り組み紹介	教師海外研修で いただいた資料、写真、動画
	9-10	○幸せとは？幸せになるためには？ ・「大切なものビンゴ」をしよう！ ・大切なものアンケートの共有 ・それぞれの思う幸せのかたちって？ ・幸せを阻むもの、幸せの条件【プレスト、ダイヤモンドランキング】 ・世界が幸せになっていくために、何ができるだろうか 【できることビンゴ】	『グローバル時代の「開発」を考える』明石書店 教師海外研修での資料、写真
成 果	<ul style="list-style-type: none"> ・パラグアイという今までまったく知らなかった国と肯定的出会い、そこから世界の多様性にも気づけた。そして国際理解について前向きに考え、授業に取り組んでいた。 ・世界のために出来ることを自分なりに考え、実践するきっかけとなった。 		
課 題	<ul style="list-style-type: none"> ・グループワークが苦手な生徒への支援をどのようにするか、考える必要がある。 ・生徒の実態把握が不十分で授業計画通りに進まなかった。来年度以降はメリハリをつけて実践していく。それに付随して、生徒たちの考えを引き出す発問、資料内容を考えていく必要がある。 		
備 考	この他、外国語科の科目「異文化理解」の時間(45分)をいただき、パラグアイクイズを実践した。		

[授業実践の詳細]

1-4 時限目「世界の国について知ろう!」

この時限のねらい

- ・世界にはたくさんの国があり、多様な価値観、多様な文化があることに気付く。
- ・グループワークに慣れ、自ら学んでいく態度を養う。

1 児童生徒の活動の流れ

- ① ワールドクイズ
 - ・グループになり、国クイズに答えていく。該当国の場所を地図に書き込んだ。
- ② ジャがいもさんとおともだち
 - ・1人1つジャがいもを取った。ジャがいもと友達になったと想定してジャがいものストーリーを考え、共有する。その後全員のジャがいもを混ぜ、その中から自分の友達(ジャがいも)を探した。
 - ・世界は、かけがえのない存在で満ちていることを知った。
- ③ 世界の食卓から
 - ・教材『地球の食卓』より、グループ人数分の国の写真を配布。一人一枚取り、写真の中の一人になりきって、写真の家族の自己紹介を行った。【フォトランゲージ】
 - ・写真を見て気付いたことや感想をワークシートに記入。また担当の写真がどこの国か推測した。
 - ・全グループの写真を全て黒板に貼り、「一週間ホームステイするならランキング」「豊かだと思う国ランキング」「幸せだと思う国ランキング」を個人で考え、グループで共有し、グループの結論を発表した。
- ④ 食料自給率とフードマイレージ
 - ・グループ内で一人一つのメニューを担当し、ジグソー法でフードマイレージを共有した。
 - ・食料自給率とフードマイレージの解説を聞き、日本のフードマイレージの高さを知った。その後、フードマイレージが高くなった背景をグループで考え、共有した。【因果関係図】 また、高いことのメリットデメリットをグループでまとめて共有した。【対比表】
 - ・背景の解説を聞き、フードマイレージを下げるために自分には何が出来るのかを考え、表にまとめ、共有した。【できることビンゴ】

2 児童生徒の活動の成果・反応

- ◇ グループワークが苦手な生徒もいるため活動できるか不安であったが「少人数で話し合いをするのが楽しかった。」という感想も多く、前向きに取り組む姿勢が見られた。
- ◇ 「世界には色々な国があることを知った。」「日本は量より質や種類にこだわるのかも。」「日本は他国の影響を受けやすい。」「海外からの物が多く、無駄な所も多いのではないかな。」など、世界の多様さに気づき、課題解決の為に何が出来るのかを自分なりに考える姿があった。

3 使用した教材

- <教材1> 愛知県国際交流協会 各国資料 <http://www2.aia.pref.aichi.jp/koryu/j/kyouzai/kyouzai.html>
- <教材2> 開発教育協会 写真『地球の食卓—世界 24 カ国の家族のごはん』
- <教材3> 開発教育協会 『写真で学ぼう!「地球の食卓」学習プラン 10 改訂版』2017
- <教材4> 開発教育協会 『フードマイレージ どこからくる? 私たちの食べ物』2016

5-6 時限目「世界と日本、世界とパラグアイのつながりを知ろう！」

この時限のねらい

- ・日本は世界の様々な国とつながっていることに気が付く。
- ・パラグアイと肯定的に出会い、パラグアイへの興味関心を高め、パラグアイを身近に感じる。

1 児童生徒の活動の流れ

- ① 大切なもののアンケート
 - ・アンケートを実施した。今後の授業では最終的に「幸せとはなにか・どういう状態のことか」について考えていきたいと説明を受けた。
- ② 世界と日本のかかわりを知ろう
 - ・国名カード、つながりの内容カード、つながりが作り出す現象カードを配布し、11カ国の組み合わせをグループで考えた。(パラグアイと日本のつながりのカードを独自に作成し、教材5に混ぜておく。)
 - ・答え合わせをし、簡単な解説を聞いた。
- ③ パラグアイを知ろう！パラグアイクイズ！
 - ・グループでパラグアイクイズ(三択)を解いた。正答と解説を聞きながら、実物を見たり触ったりした。
- ④ パラグアイ★プチ体験
 - ・チパやマンディオカチップスを食べ、マテ茶を飲んで、パラグアイの食文化を体験した。
- ⑤ どれが日本でしょう？クイズ
 - ・食事風景や学校の様子などの4枚の写真のうち、パラグアイはどれかをグループで考えた。(他3枚は日本の写真) その後、解説カードを読み、グループで共有した。

2 児童生徒の活動の成果・反応

- ◇ 生徒の知らない国も含まれていたためクイズに手こずっていたが、そのような国とも日本がつながっていることに驚いていた。良いつながりも悪いつながりもあることに気付いた。「あらゆるところで日本は世界とつながっていることを知った。」「日本の企業も色んなところに行っているんだなと思った。」
- ◇ パラグアイと肯定的に出会うことができた。日本との共通点を知り、また実際に飲食したり実物を触ったりすることで、身近な国としてとらえることが出来た。「パラグアイは知らない国だったけど、いつか行ってみたいとなった。」「日本食がパラグアイにもあって驚いた」



グループで協力してクイズに挑戦。→

←難しすぎたので、スマホ検索も一部許可しました。



3 使用した教材

- <教材5> 愛知県国際交流協会 国名&つながり カード
<http://www2.aia.pref.aichi.jp/koryu/j/kyouzai/PDF/katsuyo-manyual-2/siryo/H/2/2.pdf>
- <教材6> パラグアイクイズ パワーポイント資料
- <教材7> パラグアイで手に入れた物(茶葉、カップ、ボンビージャ、チパ、マンディオカチップス、ニャンドティ、アオポイ、硬貨や紙幣、本)
- <教材8> パラグアイでの写真(どれがパラグアイでしょうクイズ)
- <教材9> 写真の解説カード

7 時限目「パラグアイの課題、日本の課題について考えよう！」

この時限のねらい

- ・パラグアイにも日本にも課題があること、その原因や結果には共通するものがあることに気が付く。

1 児童生徒の活動の流れ

① なぜ貧困に陥ってしまうのか

- ・前回提示したパラグアイの情報から、都市と貧困層の写真を取り上げ、どういう写真なのか考えた。写真の解説を聞いた後、その原因は何かをグループで考えた。その後全体で共有した。【因果関係図】
- ・①を受けて、ではこのままではパラグアイはどうなってしまうかについて何人かの発表を聞いた。

② 翻って日本はどうなんだろう

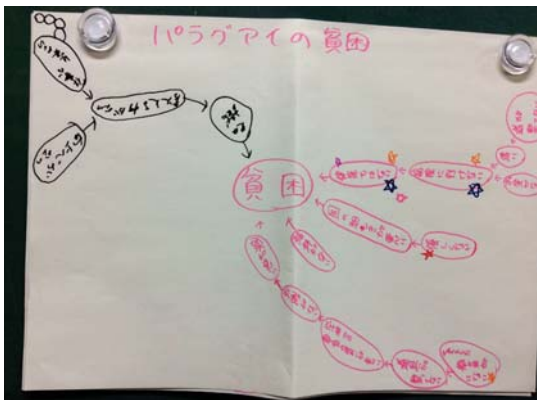
- ・「世界はグローバル化している」「パラグアイって大変な国だ」という感想が上がったのを受けて、日本はどうかを考える。
- ・いくつか意見を聞き、共通する部分があることに気付く。中でも、①の写真と関連する日本の貧困について考えていくこととした。
- ・まずは日本における貧困の原因は何かをグループで考え、共有した。【因果関係図】
- ・その後、このままでは日本はどうなってしまうのかをグループで考え、共有した。【派生図】

2 児童生徒の活動の成果・反応

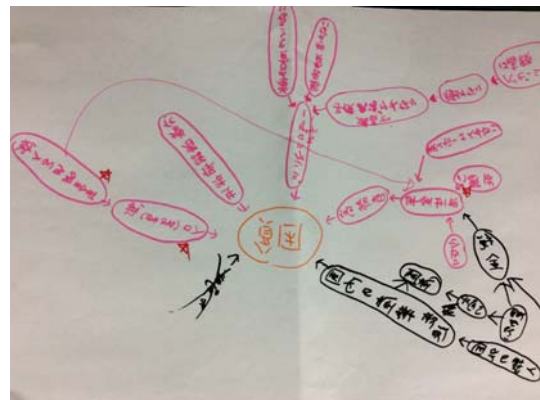
- ◇ やや強引に「貧困」というテーマに結びつけてしまった。そのため生徒にとって唐突で考えにくかったと思われる。さらに、様々な困難を抱えた生徒の多い本校で扱うテーマとしては配慮の必要なものであった。しかし「貧困がこの世からなくなれば良いのに」という感想からも、生徒たちは決して「貧困」を他人事とは思っておらず、どうにかしたいと願っている様子がうかがえる。
- ◇ ワーク内容が難しいようだったが、自分の知識や経験をもとに一生懸命考えていた。パラグアイの派生図を考える予定であったがやりきれず、消化不良をおこしてしまったと思う。

3 使用した教材

<教材8・9> 前回使用したものと同一



<パラグアイの貧困 因果関係図>



<日本の貧困 因果関係図>

8 時限目「課題解決に向けてどんな取り組みがあるのか知ろう！」

この時限のねらい

- ・課題解決のために何が必要なのか、何ができるのかを皆で考える。
- ・課題解決に向けて、実際に行われている活動を知る。

1 児童生徒の活動の流れ

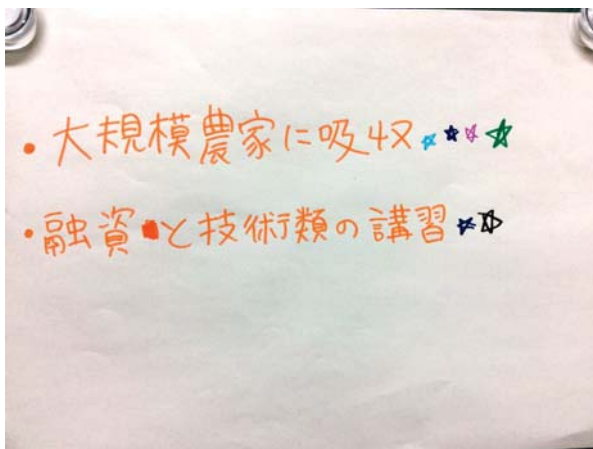
- ① 小規模農家の自立を促すために
 - ・パラグアイで貧困に陥っている小規模農家の話を聞き、彼らの自立を促すためには具体的にどうしたら良いのか考えた。
 - ・「どうしたら悪循環から抜け出せるだろうか？何があったら？」との問いかけ、小規模農家、金融公庫職員、行政機関(国)の職員の3つの立場で考えた。【ロールプレイ】
 - ・グループで出した支援案を全体で共有した。
- ② 実際の取り組み紹介
 - ・実際に、パラグアイで行われている取り組み事例の紹介を受けた。(青年海外協力隊、株式会社わだまんサイエンス、白沢商工株式会社、カテウラ音楽団)

2 児童生徒の活動の成果・反応

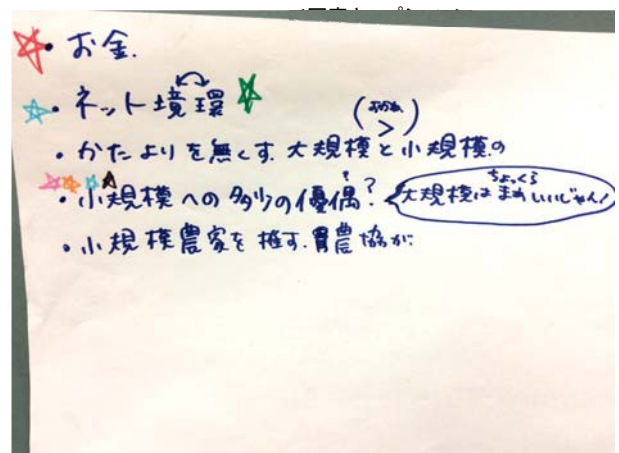
- ◇ 行政機関の立場は身近ではないので考えるのが難しいようだった。話し合いの中で、徐々にアイデアが浮かんできたようだった。また、すぐに解決できるものではないことに気づき、どうしたらよいかグループで悩む姿も見られた。
- ◇ 「グループで出した案にも長所短所があって、根本的に解決するのは難しいと感じた」「意識(考える)って大切だと感じた。何もしないより行動する。」「現地に行くことでわかることがある。」「国だけでは限界があって、遠い日本から助けに行く人たちがいる。すごいと思う。」

3 使用した教材

- <教材10> ロールプレイ用役割カード
- <教材11> 取り組み事例紹介のパワーポイント



<支援案①>



<支援案②>

9-10 時限目「幸せとは？幸せになるためには？」

この時限のねらい

- ・幸せとは何かを考え、その多様性に気付く。
- ・世界が幸せになるために、自分(たち)には何が出来るのかを考え、実践していく。

1 児童生徒の活動の流れ

- ① 「大切なものビンゴ」をしよう！
 - ・事前に「大切なものビンゴ」のマスを埋めてくる(家族や友人、周りの人に聞いてくる)。それを使い、パラグアイでのアンケート結果と照らし合わせてビンゴゲームをした。
 - ・マスが空かなかったものをクラスで挙げた。(=日本とパラグアイで異なるものの確認)
- ② 大切なものアンケートの共有
 - ・①を踏まえ、パラグアイのアンケート結果と生徒のアンケート結果を共有した。国や環境が違っても、共通するものがあることに気付いた。
- ③ それぞれが思う幸せの形って？
 - ・「自分が幸せを感じる時」を10個考えた。その後、「自分が幸せを感じるために必要なモノ・コト」を10個考え、グループでグルーピングしながら共有し、さらに全体で共有した。自分の幸せの形と他者の幸せの形に、共通点と相違点があることに気付いた。
 - ・ブータンの国民総幸福量の9つの指標を見て、自分たちの挙げた「モノ・コト」がどれに当たるかを話し合った。
- ④ 幸せを阻むモノ、幸せの条件
 - ・幸せの条件とは何か、①～③を振り返り、クラスのメンバーが考える幸せの条件を9つに絞った。
 - ・9つの条件を、大切だと考える順に個人でランク付けした。その後、グループで意見をまとめて一つのランキングを作り、全体で共有した。【ダイヤモンドランキング】
 - ・<教材13>の抜粋部分を読み、9つの条件を邪魔するモノ・コト(幸せを阻むモノ、幸せな状態を困難にするモノ・コト)をグループで出し合い、全体で共有した。【ブレインストーミング】
- ⑤ 世界が幸せになっていくために、何が出来るだろうか
 - ・世界にはたくさんの「幸せの形」「幸せの条件」がある中で、そしてそれを阻害するモノ・コトがある中で、誰もが(多くの人々が)幸せを感じられる世界を実現するためには、何が出来るかを考えた(フードマイレージ、貧困、以前紹介した活動も振り返って)。【できることビンゴ】

2 児童生徒の活動の成果・反応

- ◇ 「幸せ」という難しいテーマについて、悩みながらも熱心に考えていた。価値観は多様であり、だからこそ他人の立場に立つこと、それを踏まえて自分がまず行動することの大切さを感じていたようである。
- ◇ 「皆が幸せになるためには、誰もが誰に対しても優しくする。」「幸せの価値観は人それぞれ。だからその“幸せ”がぶつかってしまうこともある。困ったなあ。」「まずは小さなことから実践していく。人の差別はしない！」

3 使用した教材

- <教材12> 大切なものアンケート結果(日本とパラグアイ)
- <教材13> 西あい・湯本浩之編著『グローバル時代の「開発」を考える——世界と関わり、共に生きるための7つのヒント』2017年、明石出版

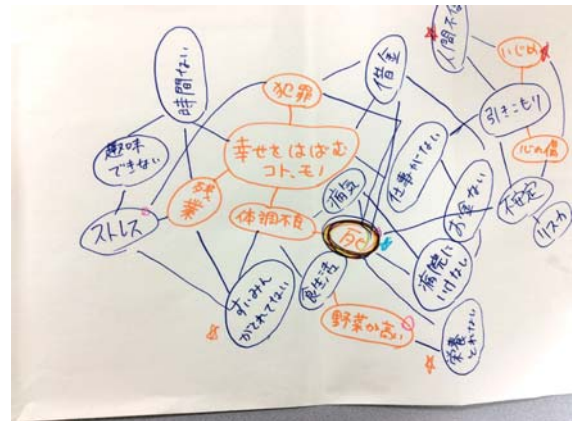
■ 全体を通して

1 授業の様子

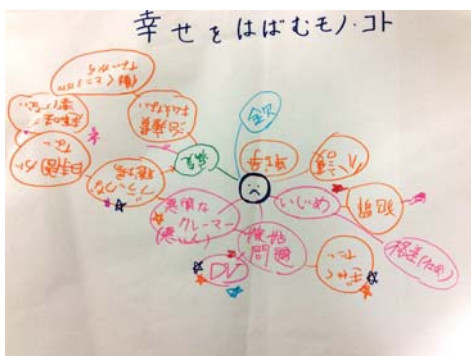
- 様々なバックグラウンドを抱える生徒たちに、貧困や幸せについて考えてもらうことへの抵抗が私の中にあつた。しかし、生徒たちは一生懸命授業に取り組んでいた。彼らの抱える困難さは、社会の抱える困難さである。この社会がよい方向へ進むために、私ができることは何かを考えて実践していきたい。
- また、コミュニケーションが苦手な生徒も多く、どうなるか心配だったが杞憂に終わった。「グループワークが楽しい。他国どころかクラスのお隣さんとも一年話さないこともあるので、話し合いながら行う授業は楽しかった。」という感想が挙がったことに、素直に嬉しさを感じる。同時に国際理解にたどり着く前の、身近な所から意識や授業を改善していく必要があると感じた。



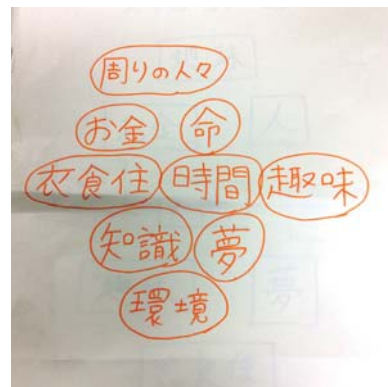
<グループワークの様子>



<幸せをはばむモノ・コト>



<幸せを阻むモノ・コト②>



<ダイヤモンドランキング>

2 参考文献・資料

- 1) 『現代文A』2016年 大修館
- 2) 朝日新聞グローブ 2017年12月3日 通巻200号
- 3) 『豊かさの開発』2016年 特定非営利活動法人 開発教育協会(DEAR)

行動しよう！ 未来を変える 地球づくり！

所 属	愛知県名古屋市立西築地小学校	実践者	榊原 早織
対 象	小学校3年生(35人)	時間数	23時間
場 所	教室・体育館・多目的室	実践教科	総合・体育・図工・道徳・学活
ねらい	テーマ【 肯定的・価値観・多面的・体験・SDGs・主体的 】 ・自分とは異なる考え方、暮らし、文化を肯定的に受け入れ、もっと知りたいと興味をもつ。 ・人・物などを通し、日本と世界がつながっていることを多面的に実感する。 ・自主的に考え、学び、世界の未来のために今、どう行動すべきか考えることができる。		
実践内容	回	プログラム	備 考
	1 2-3 4-6 7-12	① 世界って面白い！ 《 世界と肯定的に出会おう 》 ●パラグアイって？ ●世界の食卓 ●世界のダンス ●世界の動物 	・パラグアイの写真・動画・民芸品 ・冊子「世界の食卓」、巨大世界地図 ・世界のダンス音楽 ・世界の動物の写真、世界の民族柄
	13	② ちがいを楽しもう！ 《 いろんな価値観を知ろう 》 ●大切なものビンゴ ●友情の日 	・パラグアイの子どもが描いた絵 ・パラグアイの写真・動画
	14 15 16-18	③ 私たちが知らない世界 《 世界が抱える問題を知ろう 》 ●日本への輸入がなくなると？ ●カカオ豆って？ ●問題を体験しよう(貿易ゲーム) 	・グローバルフェスタ JAPAN2017 資料 ・エチオピアの少年の動画、ACE HP ・冊子「新・貿易ゲーム」
	19-20 21 22 23	④ 今、私たちができること 《 学び、考え、行動しよう 》 ●SDGs って？ ●2030 SDGs ゲーム ●今、私たちができること ●伝えよう！ 発信しようプロジェクト <日常実践> ●今日のカントリー(朝の会) ●友情カード交換(席替え時)  	・グローバルフェスタ JAPAN2017 資料 ・クラスで考えた SDGs プロジェクト ・ワークシート ・SDGs の17個のロゴ ・巨大世界地図、世界白地図 ・友情カード、総合ファイル
成 果	・パラグアイをきっかけに世界の国々に興味をもち、他の国についてもっと知りたいという意欲が高まった。 ・他国と日本の関わりを知ることで、多様な考え方を受け入れ、自分とは違う価値観に気づくことができた。 ・今、世界が抱えている問題を知り、それを解決するために、自分に何ができるかを考えることができた。		
課 題	・子どもの知りたいという意欲に応えるために、教師が世界の国々について深く知っておく必要がある。 ・自分と違う価値観を受け入れることは、身近な友達との関わりと同じであることをもっと実感させたかった。 ・「伝えよう！ 発信しようプロジェクト」を学校内だけでなく、地域や家庭でも活動をさせるとよかった。		
備 考	・世界のダンス音楽「ブラジルのサンバ」「エジプトのベリーダンス」「アメリカのロボットダンス」 ・グローバルフェスタ JAPAN2017「JICA ブースの SDGs クイズ、日本への輸入がなくなると？の展示資料」		

[授業実践の詳細]

2-3 時限目「世界の食卓」～世界っておもしろい！《世界と肯定的に出会おう》～

この時限のねらい

- ・世界の様々な国の場所や暮らし、食生活を知ることにより、世界を身近に感じたり、もっと知りたいと興味をもったりすることができる。

1 児童生徒の活動の流れ

- ① これはどこの国でしょうクイズ【フォトランゲージ】
 - ・グループで1枚世界の食卓(アメリカ・ドイツ・インド・エクアドル・エジプト・ベトナム・オーストラリア・チャド・マリ)の写真を受け取り、その写真をよく観察し、どこの国の写真かを考える。そして、なぜそう思ったのか、理由と気がついたことを話し合う。
- ② クイズの答え合わせとシェアタイム
 - ・クラス全体に写真を見せながら、なぜその国だと思ったのか、理由をふまえて発表する。
 - 教師からその国の暮らしや文化、生活の様子を聞く。
- ③ 今日の学び
 - ・今日の授業で考えたことや知ったことを記入する。



<「このリンゴみたいな果物はなんだろう？」>



<「写真をじっくり見るとタオルを頭にまいて、家が土でできていることに気がきました」>

2 児童生徒の活動の成果・反応

- ◇ 子どもたちは、様々な国の生活や食卓を知ることとても楽しんでいった。また、写真からの情報だけではわからない、風習や文化についての説明においても、真剣に聞いていた。
- ◇ 日本とは違う、他の国の食生活を知って自国の生活に感謝したり、世界の食糧は輸入と輸出によって成り立ったりしているということを知り、国際協力への関心が芽生え始めた。

3 使用した教材

<教材1> 地球の食卓カード

7-12 時限目「世界の動物」～世界っておもしろい！《世界と肯定的に出会おう》～

この時限のねらい

- ・世界の様々な動物やそこに住む人々の文化を知ることにより、世界を身近に感じたり、もっと知りたいと興味をもったりすることができる。

1 児童生徒の活動の流れ

- ① 知ってる？世界の動物クイズ【フォトランゲージ】
 - ・巨大世界地図を見ながら、世界六大陸に住んでいる様々な動物の写真が画面に表示される。子どもたちは、写真やヒントを基に何という名前か動物かを当てていく。正解の回答ができると教師から、その動物の特徴と住んでいる地域を伝えられる。(紹介した動物は、コブラ、ドードー、ライオン、カモノハシ、

カンガルー、タランチュラ、オオハシ、トナカイ、カメレオン、パンダ、トキ、バイソン、プレイリードッグなど子どもの人数分の動物の写真)

② 私は誰でしょうゲーム

- ・教師からクラス全員の背中に先ほど学んだ動物の名前の紙が貼られる(全員違う動物名)。子どもたちは、自分の背中に貼られている動物の名前を、ヒントを基に当てていく。ヒントは友達に質問して聞くことができる。ただし、質問は友達が「はい」か「いいえ」で答えられる質問をしなければならない。例「私は鼻が長いですか?」。答えがわかったら教師の元へ行く。
- ・この後、世界の動物の特徴を基に版画を制作し、作品展で発表をした。



<僕の背中には何て貼ってあるのだろうか?>

2 児童生徒の活動の成果・反応

- ◇ 絶滅危惧種や既に絶滅してしまった動物など、人間によって動物が被害にあっていることを初めて知り驚いた様子だった。また、今まで知らなかった動物をたくさん知り、子どもたちは授業が終わると黒板に貼られた動物の写真を興味津々で眺めていた。
- ◇ 世界に対しての興味関心が高まった。

3 使用した教材

<教材2> 地球教室(基礎編)

13 時限目「大切なものビンゴ」～ちがいを楽しもう!《いろんな価値観を知ろう》～

この時限のねらい

- ・世界に住む、同じ年の友達の考え方を知り、自分とは違う考え方も「面白い!」「あり!」と受け入れることができる。

1 児童生徒の活動の流れ

① 私たちの大切なもの

- ・自分の生活の中で「大切なもの」をビンゴカードの真ん中に一つ記入する。その後、クラスの友達に「あなたの大切なものは何ですか?」と尋ね、周りの8マスに記入する。

② 大切なものビンゴ

- ・パラグアイの子の「大切なもの」とクラスの子の「大切なもの」でビンゴをする。パラグアイの子と同じものがでてきたらマスに赤丸で囲む。

- ・最後に真ん中のマスが赤丸にならなかった子が自分の「大切なもの」を発表する。その子の「大切なもの」はパラグアイの子との違いになる。黒板には、パラグアイの子と共通のもの、違うものがまとめられる。

③ 今日の学び

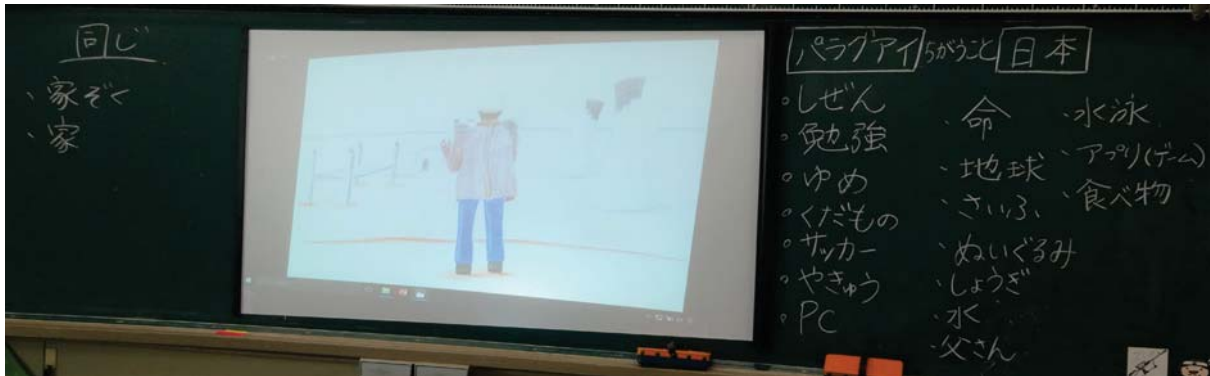
- ・今日の授業で考えたことや知ったことを記入する。



<○はパラグアイの子と同じもの>

2 児童生徒の活動の成果・反応

- ◇ パラグアイと日本は違う、そして性別や性格が違っても「家族」や「家」という大切なものは似ていることに気づくことができた。
- ◇ パラグアイの子との違いだけでなく、クラスの子との違いにも気づくことができた。また、クラスの子の「大切なもの」の多様性も受け入れ、楽しむことができた。
- ◇ 人と人の様々な違いを知ることができた。例えば、「生まれる前からあるもの」「生まれたあとにできるもの」「目にみえるもの」「目にみえないもの」「感情」といったもの。
- ◇ パラグアイの子は「自然」を大切だと描いている子が多かった。自分たちと考え方が違うことを「おもしろい」と感じ、多様な考え方を受け入れていた。



<私たちとパラグアイの子の「大切なもの」。同じところと違うところ>

3 使用した教材

<教材3> パラグアイの子が描いた「大切なもの」の絵

16-18 時限目 「問題を体験しよう(貿易ゲーム)」 ~私たちが知らない世界《世界が抱える問題を知ろう》~

この時限のねらい

- ・友達との交流を通して日本と世界がつながっていることを実感し、世界の現状に気づくことができる。
- ・友達との話し合いを通して、日本や他の国の気持ちを客観的に考えることができる。

1 児童生徒の活動の流れ

① 貿易ゲーム

・2~8人でグループを作り、A国(先進国)、B国(新興国)、C国(開発途上国)に分かれる。

A国…技術力(はさみ・コンパス・色鉛筆)が豊富。原材料(紙)と人手が不足している。

B国…一部の技術がそろってないが、原材料はA国よりも多い。

C国…原材料を豊富に持っているが、技術力が不足している。人手も多い。

- ・ゲームの説明を聞き、他の国よりも多くお金を稼ぐことが目的であることを知る。
- ・各グループには中身の違う封筒が配付される。封筒の中身と説明書を確認する。
- ・ゲーム開始。子どもたちは一斉に動き回る。どの国もいろんな知恵を出しながら活動をする。
- ・ゲーム終了。

② 貿易ゲームは現実世界でも起きている!

- ・結果発表と、実は封筒の中身がそれぞれ違ったことを知る。
- ・「不平等」に気づき、どのような気持ちになったかを話し合う。【ブレイクストーミング】

③ 今日の学び

- ・教師から「生まれる国は選べない、あなたも私も」という話を聞いた後、どのような気持ちになったかを話し合い、発表する。
【ブレインストーミング】
- ・今日の授業で考えたことや知ったことを記入する。



<「はさみついていかなら貸してもらえます?」>

2 児童生徒の活動の成果・反応

- ◇ 子どもたちは集中して意欲的に活動していた。途中から、物々交換をしにいたり、アルバイトをしに行ったりと知恵を使うチームも出てきた。また、情報が全くないC国にもかかわらず、巧みなコミュニケーション能力でA・B国しか知らない情報を得て、新しい稼ぎ方に切り替えているチームもあった。まさに、国際社会の縮図であった。
- ◇ 実は封筒の中身が違ったことを知ると、子どもたちからは「A国(先進国)だけずるい!」という声があちこちから聞こえた。ゲームを通してではあるが、新興国や開発途上国の気持ちを考えることができた。
- ◇ また、教師の話聞いた後での話し合いでは、「日本と外国は全然違う、A国(先進国)に「ずるい」と言ってしまったから謝りたいです。私はバナナを必死で作りました。友達が店番をしてくれたり、はさみで切って売ったり、協力しながらできました。全部の国が幸せになれるように私は願っています。」と、世界の現状に気づき、国際協力への意識の高まりを感じた。

3 使用した教材

<教材4> 新・貿易ゲーム

21 時限目「2030 SDGs ゲーム」～今、私たちができること《 学び、考え、行動しよう 》～

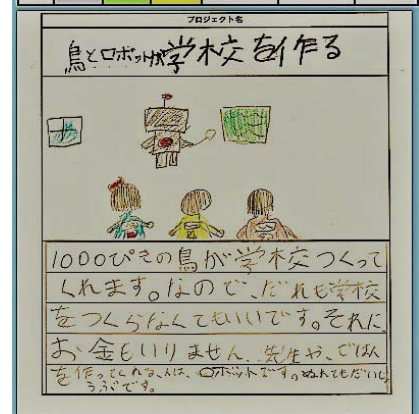
この時限のねらい

- ・世界の課題を知り、それを解決していく 2030 年までの過程をゲームを通して体験することにより、課題を解決するために自分はどんなことをしたらいいのか気づくことができる。

1 児童生徒の活動の流れ

- ① あったらしいな、こんなプロジェクト！
・SDGs についての知識を得たところで、今の世界を変えるために、どんなプロジェクトがあれば、2030年までにSDGsを達成することができるかを考える。今の自分の力ではできない突拍子のないプロジェクトでも構わない。
- ② 2030 SDGs ゲーム
・子どもたちが思い思いに考えたプロジェクトを基に 2030SDGs ゲームを制作し、ゲームを行う。
・貿易ゲームとは違い、各グループに同数の「お金」「時間」「目標」「プロジェクト」カードが配られる。各グループは「目標」カードにかかれた目標を達成しなければならない。そのために、「プロジェクト」をこなして世界を変えていく。但し、プロジェクトを実行するためには、プロジェクトにかかっている数の「お金」と

必要な物	けいざい 5以上	お金 500	時間 2
えらぶ物	メーター	お金 700	時間 2
	けいざい 環境 1	社会 1	意思 経済 1



<あったらしいなと思うプロジェクトを書いた 2030SDGs ゲームのプロジェクトカード>

「時間」、そして「2030 世界のメーター」が必要となる。制限時間内に各グループがゴールを目指す。
 (前半 10 分、中間の振り返り 5 分、後半 10 分、最終の振り返り 10 分)
 ・貿易ゲーム同様、各グループは知恵を出し合って、協力してゴールを目指す。



＜時間とお金を使ってどのプロジェクトを
こなししていくか計画を立てよう＞



＜プロジェクトをこなしたら
2030 年の世界メーターを変えておこう＞



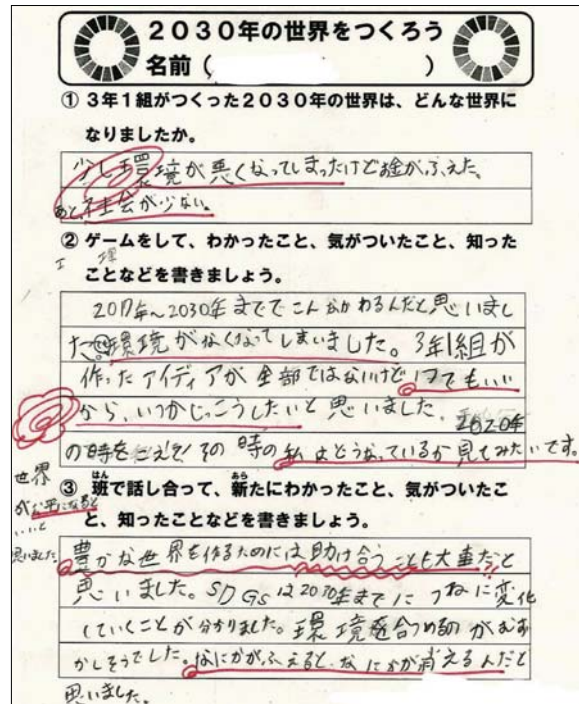
＜目標に書いてあった、「豊かな世界」
を作るには何がどうなればいいのかをどうしよう＞

③ 今日の学び

・今日の授業で考えたことや知ったことを記入する。

2 児童生徒の活動の成果・反応

- ◇ 当日は授業参観で保護者も来ていたため、子どもと一緒にゲームに参加していただいた。親子でSDGsについて考える機会になった。
- ◇ どのグループも始めは、自分たちの目標を達成することに一生懸命になり、「2030 年の世界メーター」の数値をどんどん悪くしていつてしまった。途中、自分の目標を達成したグループから、周りの状況を見る余裕が生まれ、他のグループを助けようという気持ちが生まれた。その気持ちがだんだんと周りにも波及し、最終的にはクラスみんなで環境メーター（地球環境）をよくしよう。まだ目標を達成していないグループを助けてあげようと協力の輪が広がっていた。
- ◇ 最終の話合いでは、体験から感じた素直で温かい意見がたくさん挙げられた。例えば、「このゲームをやっていると、2030 年までにどのようにすれば目標を達成していくことができるのか、自然にわかった。」「環境は簡単にはよくすることはできない」「豊かな世界を作るためには助け合うことが大事」「みんなが考えたプロジェクト、1つでもいいからいつか実行してみたい。2030 年の世界がどうなっているか、私は見てみたい。」「世界の全員が協力すれば、より早く目標を達成できると思う。」といったものだ。実践の初期と現在とでの子どもたちの考え方や意識の成長が感じられた。
- ◇ 保護者から「お～！」と声があがった発言があった。それは、「今が変わると未来も変わる」という意見だ。今の行動が未来に繋がっていることを、体験を通して自然に気がついている様子が感じられた。



＜「私は 2030 年の世界がどうなっているのか見てみたいです」＞

23 時限目「伝えよう！発信しようプロジェクト」～今、私たちができること《 学び、考え、行動しよう 》～

この時限のねらい

- ・世界で起きている課題を解決していくために、「今、わたしたちができる」プロジェクトを考え、行動をすることができる。

1 児童生徒の活動の流れ

- ① 身近なSDGsを見つけよう
 - ・SDGs の17個の目標の中から、自分が興味のある目標を選び、それを解決するために、今の自分に何ができるかを考えたり、調べたりする。
- ② 伝えよう！発信しようプロジェクト
 - ・一人一人が考えたプロジェクトを画用紙に記入し、17個の目標別に分類する。それらをまとめ、目標別の発信ポスターを制作する。SDGs のどの分類に入るかは自分で考える。
 - ・画用紙に記入するときにはカラーペンを使い、多数の子が書いていることが一目でわかるようにする。
- ③ 校内に伝えよう！発信しようプロジェクト
 - ・ポスターを目標に合った場所に貼る。貼るのに適した場所を全員で話し合う。
 - ・クラス全員で校内を周りながら、ポスターを貼っていく。



<省エネはエネルギーの項目かな？>

2 児童生徒の活動の成果・反応

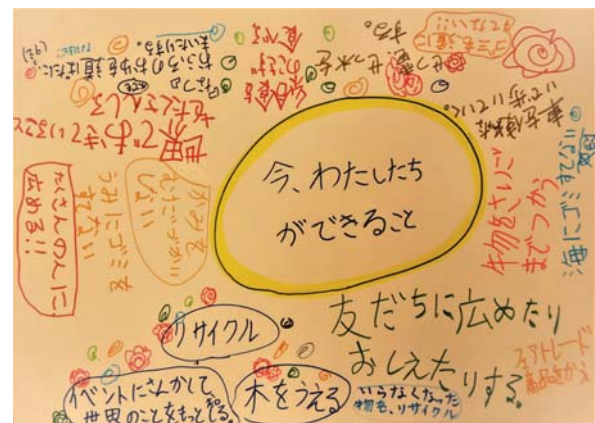
- ◇ プロジェクトを画用紙に書くときには、地球教室の冊子を読んだり、今までの学習ファイルを見て調べたり、自ら進んで調べていた。自ら学ぶ姿勢が身についた。
- ◇ 発信ポスターを通して校内に伝えられること、影響を与えられることを喜び、意欲的に取り組んでいた。世界のために自分たちができる行動を起すことができた。



<飢餓をゼロにプロジェクト>

3 使用した教材

<教材2> 地球教室(基礎編)



<授業参観> 今、私たちができることはたくさんあるんだね

■ 全体を通して

1 授業以外の様子

- ・日常実践として、毎日(9月～2月)の朝の会で「今日のカントリー」を行った。(日直が国名が書かれているシールを引き、その国を自分の白地図の中から探して色を塗る。日直は国を見つけたら、教室の巨大世界地図に色を塗り、国シールを貼る。)3学期にはカラフルで立派な巨大世界地図が完成した。
- ・また、席替えの時にはパラグアイの友情の日を真似て「友情カード交換」を行った。(同じ班だった友達の新しく見つけたいいところや嬉しかったことをメッセージに書いて渡す。)子どもたちは友情カード交換をとっても楽しみにしていた。3学期には、もらったメッセージカードで学習ファイルが厚くなっていた。
- ・その他、環境委員会でも掲示でSDGsを校内に呼びかけた。校内の至るところでSDGsのポスターが目につくので、立ち止まって読んでいる姿が見られた。全校生徒にも興味関心を持たせることができた。



<【朝の会】今日の国(ルワンダ)を見つけたよ>



<【席替え】友情カードをもらったときの笑顔>



<【作品展】世界の動物を版画で表現>

2 参考文献・資料

- 1) 開発教育協会『写真で学ぼう!「地球の食卓」学習プラン 10改訂版』2017年
- 2) 朝日新聞環境教育プロジェクト「地球教室」教材開発委員会『地球教室(基礎編)』2017年
- 3) パラグアイの子が描いた「大切なもの」の絵
- 4) 開発教育・国際理解教アクションプラン研究会『開発教育・国際理解教育虎の巻「新・貿易ゲーム」』2006年

世界に学ぶ ～届け幸せのメッセージ～

所属	愛知県豊明市立沓掛小学校	実践者	野々山 尚志
対象	小学校6年生(96名)	時間数	28時間
場所	教室・多目的スペース	実践教科	総合的な学習の時間・学級活動 ・外国語活動・(家庭科)
ねらい	テーマ【つながり、人権、コミュニケーション、課題解決】 ・世界と日本とのつながりに気づき、世界に関心をもつ。 ・多様な価値観や文化を知り、肯定的に捉える。 ・課題解決の方法を知り、自分たちにできることを考え、発信する。		
実践内容	回	プログラム	備考
	1	1 世界に目を向けよう(5時間) ・世界と自分たちのつながりを知るグローバルビンゴ	ワークショップ版世界がもし100人の村だったら JICA「どうなってるの? 世界と日本」
	2-3	・世界がもし100人の村だったらワークショップ【シミュレーション】	
	4	・パラグアイに折り紙と絵を届けよう	
	5	・日本と途上国とのつながりについて知ろう【フォトランゲージ】	
		2 日本と世界のつながりに気付こう(4時間)	
	6	・日本と世界とのつながりを知ろう～パラグアイ編～【フォトランゲージ・対比表】	チョコレートパッケージ ジャガイモ
	7	・日本と世界とのつながりを知ろう～日本の食事編～【ランキング】	
	8	・チョコレートの真実	
	9	・ジャガイモさんとお友だち(知ることは身近になる)【ロールプレイ】	
	10	3 多様な価値観や文化を知り、よさを知ろう(4時間) ・日本とパラグアイの子どもの大切なもの【ピラミッドランキング・対比表】	大切な物の絵 インドの映像 なりきりカード
	11	・キニ先生にインドについて聞いてみよう	
	12-13	・外国人観光客になりきってインタビューをしよう【ロールプレイ】	
14-15	4 課題解決の方法を探ろう(5時間) ・インドネシアの村でのボランティア【フォトランゲージ・対比表】	FIWC東海委員会 ラッシュセリーナ萌さん 国際理解教育資料集 パラグアイインタビュー 動画	
16	・ちがいを越えて(ハーフの先輩から話を聴こう)【ロールプレイ】		
17	・貧困の連鎖を断ち切る方法を探ろう		
18	・国際協力で大切な視点～海外で活躍する日本人からのメッセージ～		
19-23	5 自分たちにできることを考え、学んだことを発信しよう(6時間) ・各グループのテーマに沿って追究しよう	ゴマ・もち粉	
24	・学習発表会「世界はひとつ～届け、幸せのメッセージ～」		
25-26	番外編 パラグアイのゴマを使ってゴマ団子づくり(2時間)		
27-28	6 国際理解のまとめ～国際協力と夢～(2時間) ・元青年海外協力隊の方から話を聞こう。	稲葉健一さん	
成果	パラグアイをはじめとする世界の様々な課題を知り、課題解決の方法を考えたり、世界と日本とのつながりや幸せについて考えたりしたことで、自分と無関係だと思っていたことが身近なこととして捉えられるようになった。また、積極的に他者と関わったり、相手の立場に立って手助けをしたりする機会が増えた。学習発表会では、これまでの学習で気付いたことや学んだことを自分たちの言葉で発信することができた。		
課題	パラグアイをはじめとする様々な教材を児童に与え、参加型手法を用いて取り組むことにより、情報の中から課題を見つけ、解決方法を考えるという経験ができた。しかし、総合的な学習の時間の探究プロセスの中に位置づけられている「情報の収集」についてはほとんどできなかった。さらに気になったことや疑問に思ったことを追究する機会を設定できるとよい。		
備考	参加型手法を効果的に用いることで、学びに深まりが出た。国際協力の現場で活動する方たちや当事者と出会うことで、現実実がわき、自身の可能性に気付くことができた。		

[授業実践の詳細]

2-3 時限目「世界がもし100人の村だったらワークショップ」

この時限のねらい

- ・世界の現実についてシミュレーション(疑似体験)を通して体験的に学び、自分たちが暮らす日本が世界の中でどこに位置するのかを考える。

1 児童生徒の活動の流れ

- ① スライド資料<教材 1>を用いてクイズを何問か行った後、以下の問題を行い、近くの人と相談したり、実際に役割カード<教材2>に従って分かれて、そのスケールを体感したりする。【シミュレーション】
 - ・「女性と男性どっちが多い？(男女の比率)」「インドや中国で女性よりも男性の方が少ないのはなぜでしょう。」「大人・子ども・高齢者の割合はどれくらいでしょう。(日本の割合と比較)」「世界のどの地域にどれくらいの人に住んでいるでしょうか。(地域ごとに分かれる)」
- ② 地域ごとの一人にロープ<教材 3>を渡し、ロープで作った枠の中に入る。その状況を見て、どんなことに気付いたかを話し合う。【シミュレーション】
- ③ 役割カードの記号別に分かれ、どんなちがいで4つに分かれたのかを考える。(栄養をとり過ぎの人 14%、栄養が十分でない人 13%、死にそうな人 1%、その他の人 72%)
- ④「どの言語が世界では多く話されているでしょう。」役割カードの同じ言語同士で集まる。世界で文字の読めない人が約 2 割いることを知る。【シミュレーション】
- ⑤ 文字が読めない役割の 3 人で【ロールプレイ】
 - ・薬を買いに来たという設定でなぞの文字が書いてあるペットボトルの飲み物<教材4>を飲んで感想を聞く。
 - ・「水」「薬」「毒」と書いてあることを知る。
- ⑥ 本時の学習を振り返り、近くの人と感じたことを話し合う。

2 児童生徒の活動の成果・反応

- ◇ 積極的に活動に参加し、世界の実態を体感できたため、言語や食糧不足の実態を知り、驚く児童の様子が見られた。
- ◇ 世界の課題について興味をもち、今後の総合的な学習(国際理解)に関心をもつことにつながった。



<地域ごとに分けられるとアジアはせまい!!>

3 使用した教材

- <教材1> スライド資料(Microsoft Power Point で作成)※
- <教材2> 役割カード※
- <教材3> 地域別の面積比に応じた長さに切ったロープ※
- <教材4> なぞの文字を書いたペットボトルの緑茶・ミネラルウォーター・ジャスミン茶

※の教材は全て、『ワークショップ版 世界がもし100人の村だったら<第5版>』2016、開発教育協会 を参考に作成または引用。

6 時限目「日本と世界とのつながりを知ろう ～パラグアイ編～」

この時限のねらい

- ・日本とパラグアイとの共通点や相違点を発見し合う中で、日本と世界とのつながりを理解する。

1 児童生徒の活動の流れ

- ① 第一印象から考えたことを伝え合う。【フォトランゲージ】
 - ・各グループに人数分の枚数の別の写真<教材5>を配り、一人1枚の写真を見てその写真からわかることを読み取る。
 - ・グループの他の児童に自分の写真の説明をする。
- ② 写真について知る。
 - ・すべてパラグアイの写真であること、日系人が多く住んでいること、発展途上国で、貧富格差などの課題があることを知る。
 - ・写真の解説カード<教材6>を配付し、自分の写真の解説を読む。解説カードは自分のもののみ読み、見せ合わない。
- ③ パラグアイと日本の共通点と相違点を対比表にまとめる。【対比表】
 - ・自分が知ったことをグループ内で伝え合いながら、対比表に日本との共通点と相違点をまとめる。
- ④ 他のグループと共有する。【ギャラリー方式】
 - ・ギャラリー方式で、他のグループが作った対比表をそれぞれ見に行き、「いいな」「なるほど」と思ったものに☆をつける。
- ⑤ 本時の学習を振り返り、近くの人と感じたことを話し合う。

2 児童生徒の活動の成果・反応

- ◇ これまで全く知らなかったパラグアイという国と日本とが深く関わっていることに気付いた児童がいた。
- ◇ 解説を伝え合ったり、対比表を作ったりする協同的な活動を通して、「他の子の意見を聞くことで、自分にはない考え方が分かった。」「他のグループからもいろんな考え方や気づきがあるのを知れてよかった。」というような、他の児童を肯定的にとらえ、深い学びのある学習となった。
- ◇ パラグアイに対して、「スラム街に住む人たちに政府はどのような政策をしているのか。」など、新たな疑問をもつ児童もあった。



<日本と同じようなこともたくさんあるね>

共通点 (同じところ・似ているところ)	ちがうところ
<ul style="list-style-type: none"> 木がある お肉、お魚を食べる 甘い砂糖を(い) 農家さんの跡地がある。 イスと机で授業をしている。 学校がある 	<ul style="list-style-type: none"> 野菜をあまり食べない 病気にかかりやすい ヒールをつけている(子ども) 教科書がない 机が他の机とくっついている 雨の日は学校に通えない 1つの黒板に1日分の板書が書いてある。

<日本から一番遠い国なのに共通することもたくさんあるね>

3 使用した教材

- <教材5> 教師海外研修で撮影したパラグアイの写真 A:日本語学校の習字、B:日本食を食べるパラグアイ人家族、C:都市ビルとスラム街、D:第3946番小学校、E:イトゥルベ市の農家
- <教材6> 写真の解説を書いたカード

7

時限目「日本と世界とのつながりを知ろう ～日本の食事編～」

この時限のねらい

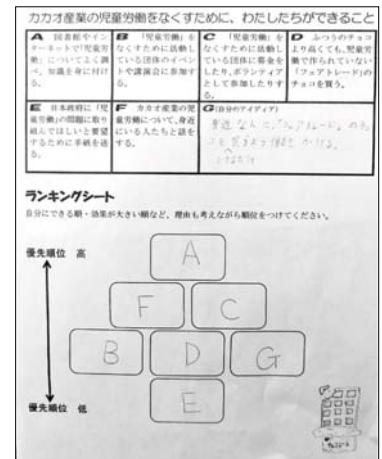
- ・日本の食料が海外からの輸入に頼っていること、
- ・児童労働の問題について考えることにより、日本と世界とのつながりに気付く。

1 児童生徒の活動の流れ

- ① 日本が世界からの輸入に頼っていることを知る。
 - ・日本の自給率は40%。もし日本で作られたものだけで食事をするとうどうなるか、話し合う。
- ② チョコレートの原料カカオ豆の実態を知る。
 - ・チョコレートのパッケージ<教材7>を配り、色や味のもとになっている原料はどれか考える。
 - ・各グループに資料<教材8>を配付し、8分間一人一人が何枚かの資料を読む。
 - ・読んだ資料からわかったことを伝え合いながら書きだす。【ブレインストーミング】
- ③ カカオ豆農家について知る。
 - ・DVD<教材9>を視聴し、カカオ豆農家の様子、子どもが行う作業、「児童労働の背景」貿易の仕組みについてイメージをもつ。
- ④ 自分たちにできることを考える。
 - ・カカオ産業の児童労働をなくすために、アクションリストに自分のアイデアを一つ加える。<教材10>
 - ・優先順位をつけてランキングシートに書きこむ。【ランキング】
 - ・自分のランキングシートをグループで見せ合い、他の児童の考えを聞く。
- ⑤ 本時の学習を振り返り、近くの人と感じたことを話し合う。

2 児童生徒の活動の成果・反応

- ◇ アクションリストに加えた考えの中に「身近な人にフェアトレードのことを伝える。」「児童労働の実態を周りの人に伝える。」というすぐのできることから「児童労働の実態をカカオを作っている国が調査するように呼び掛ける。」「学校に行けない子どものために日本から勉強を教える人を送る」という国際協力につながるような意見も挙がった。
- ◇ 班の仲間と情報をやりとりし、進んで自分の考えをグループの仲間に伝えられた児童は79%、他の児童の意見をしっかりと聞くことができた児童は93%であった。
- ◇ ランキングの優先順位は児童によって多様であるため、意見の違いを認め合ったり、考えを深めたりする活動に楽しさと充実感を得るとともに、他者の意見を肯定的に捉えられるようになった。



<教材10 人によって考え方が違う>



<他の児童の意見を肯定的に受け止めていた>

3 使用した教材

- <教材7> 市販されている数種類のチョコレートのパッケージ
- <教材8> ウェブサイト「世界の子どもを児童労働から守るNGO ACE」
<http://acejapan.org/childlabour/materials/workshop-chocolate> を参考に作成した自作資料 A:カカオ豆の作られている地域、B:アフリカの児童労働、C:カカオの貿易や価格のしくみ、D:フェアトレードチョコレート
- <教材9> 『おいしいチョコレートの真実～働くこどもたちとわたしたちとのつながり～』附属 DVD
- <教材10> アクションリストとランキングシートを記載したワークシート

10 時限目「日本とパラグアイの子どもの大切なもの」

この時限のねらい

- ・ 価値観の多様性を理解する。

1 児童生徒の活動の流れ

- ① 自分にとっての幸せについて考える。【ピラミッドランキング】
 - ・ 幸せリストから6つを選び、ピラミッドランキングにする。〈教材11〉
 - ・ グループでランキングを発表し合い、一番にした理由を伝え合う。
- ② パラグアイの子どもたちの幸せを知る。【対比表】
 - ・ パラグアイの子どもたちの大切なものと、幸せだと感じることを〈教材12〉を見て、自分たちが考えた幸せと比較し、対比表にまとめる。
 - ・ ギャラリー方式で、グループの他の児童の意見を見てまわる。
- ③ パラグアイの子どものアンケートの一人の意見について考える。
 - ・ 「幸せでない」と考えた15歳の子の理由を読み、意見を話し合う。〈教材13〉
- ④ 本時の学習を振り返り、グループで話し合う。数名の意見を全体でも共有した。

2 児童生徒の活動の成果・反応

- ◇ 「幸せ」について深く考えたことがなかったという意見や、多様な価値観に気付くことができたという意見が多くあった。貧困なのに幸せだということが疑問だった児童が、家族がそばにいること、支え合っていることで幸せに感じるができるということに気付くことができた。
- ◇ 15歳の子の考えに驚く児童、共感する児童が多くいた。「幸せではないという発言に驚きました。」「誰もが幸せになってほしいということが夢なんて考えたことがなかった。」「世界中には家がない人、家族のいない人がいる。そんな人たちを幸せにしないと、彼女は幸せになれないのでしょうか。」「平和を自分たちの手で作っていかないといけないと感じた。」「今の自分は自分の幸せしか考えていなかったの、人の幸せを考えられるようにしたいです。」

3 使用した教材

〈教材11〉 幸せリストとピラミッドランキングを記載したワークシート

〈教材12・13〉 教師海外研修で現地校の先生に協力していただいたアンケート用紙から作成

幸せリストから6つを選ぶ (1つまで追加することができます)

ご飯を食べられること	友達と話ができること	家族と一緒にいられること
スポーツができること	教科書を使って勉強できること	健康な体でいられること
お金に困っていないこと	自然がいっぱいあること	学校に通えること

幸せピラミッドランキング

〈クラスの仲間の幸せの捉え方は共通することが多い〉

「幸せですか？」という質問に「幸せでない」と答えた1人の15歳の女の子

「幸せでない」と答えた理由
 No soy feliz porque veo a tanta gente sufriendo. Me refiero a aquellos que ni tienen hogar. Hay tantos huérfanos que quisiéran una familia. Por estas y muchas otras cosas.
 幸せじゃないです。理由は、苦しんでいる人をたくさん目にするからです。例えば家がない人たちがいます。家族を欲しがっている孤児もたくさんいます。他にもたくさんありますが、このような理由で私は幸せではありません。

「夢は何ですか？」の答え
 Mi sueño es mmm pues mi sueño. Osea el sueño que siempre quise es de que todos seamos felices. Pero por lo que veo eso. Practicamente es imposible de cumplir.
 私の夢は、私の夢です。つまり、常に夢見ているのはみんなが幸せになることです。でも、今のところ現実的にこの夢を叶えるのは無理そうです。

〈ひとの幸せを自分の幸せと考える新たな価値観に驚いた〉

16 時限目「ちがいを越えて（ハーフの先輩から話を聴こう）」

この時限のねらい

- ・ちがいを越えて、相手を受け入れる、相手と接する姿勢を身に付ける。

1 児童生徒の活動の流れ

- ① 日本人はどれでしょうかクイズ
 - ・6人の日本人の写真を見て、どの人が日本人なのかを考える。実際はすべて日本国籍をもつ日本人だが、顔や肌の色の特徴で、日本人というイメージをもっている自身のステレオタイプに気付く。
- ② 教師とゲストティーチャーの対話
 - ・子どもの頃、つらいと感じたこと。
 - ・多国籍な国と比べると、日本でハーフの人の数はまだ少なく、生活の中でぶつかる問題は多い。
- ③ 初対面でのあいさつ【ロールプレイ】
 - ・日本人への初対面のあいさつと、ハーフの人とのあいさつを比べ、違うと感じたことを話し合う。
- ④ 嫌だったことや面倒だなと感じたこと、嬉しかったこと。
 - ・日本人に見えないね。・ハーフっぽくないね。・日本語うまいね。・ハーフであることを何も聞かれないと、自分をありのまま受け入れてくれる感じがした。



<卒業生の先輩から多くのことを学び、身近なことで捉えることができた>

2 児童生徒の活動の成果・反応

- ◇ 日本人というイメージのステレオタイプに気付くことができた。
- ◇ ありのままに受け取れることの大切さを実感した。

3 使用した教材

<教材14> 自作のスライド資料(Microsoft Power Point で作成)

19-24 時限目「自分たちにできることを考え、学んだことを発信しよう」

この時限のねらい

- ・総合的な学習の時間(国際理解)で学んだこと、考えたことを元に、各クラス、班ごとに伝えたいことをまとめ、プレゼンテーションや劇などにまとめ、発信する。

1 児童生徒の活動の流れ

- ① それぞれの班のテーマごとに学んだこと・伝えたいことを書き出す。【ブレインストーミング】
- ② 伝える方法を考え、さらに調べたいことを追究する。
- ③ 台本を考え、資料や小道具をつくり、発表の練習を行う。
- ④ 学習発表会「世界はひとつ～届け、幸せのメッセージ～」

[発表内容]

第1部 チョコレートの真実～世界のさまざまな課題～

- 食料自給率から世界と日本のつながりを考える
- チョコレートを例に児童労働へ加担している実態

○学校に行けない子どもたちの実態 ○自分にできること(フェアトレード) <国際協力にとって大切な姿勢を劇で伝えた>



第2部 パラグアイから考える幸せ

- 日本人はどれでしょうクイズ(見た目で判断しない) ○パラグアイにある日本文化
- 日本とのつながり(国際協力・ゴマ) ○パラグアイの課題(貧富格差等)→幸せと感じている人が多い
- 人を大切にする文化 ○幸せって何だろう?(パラグアイの子どもたちが描いた絵・アンケート)

第3部 世界の課題を解決するための姿勢

- 先輩から学んだ「ちがいを受け入れる」「知ることで、問題は起きなくなることもある」
- インドネシアの村でのボランティアから学んだこと「言葉を越えて、仲良くなるためには」
- 外国人観光客に「笑顔」でインタビューをした経験。
- パラグアイで国際協力に携わっている人たちの姿勢から「現地に足を運び、現地の人と一緒に考え、一緒に悩むことが重要」

第4場面 わたしたちの行動宣言+学年合唱「U&I」

2 児童生徒の活動の成果・反応

- ◇ ゴマの輸入割合を円グラフで表したり、イラストを用いたりしてわかりやすいプレゼン方法を考えた。
- ◇ パラグアイの農村部での国際協力の例を劇で表現した班は、セリフを何度も考えたり、小道具を使ったりしてわかりやすい事例を出して伝えた。
- ◇ パラグアイと日本の子どもたちの「幸せ」について学習したことから、聞いている人にうまく伝えるために、場面を設定して、わかりやすく劇にして伝えることができた。
- ◇ テーマと合った学年合唱「U&I」を心を込めて歌い上げ、保護者や参観者の感動を呼んだ。

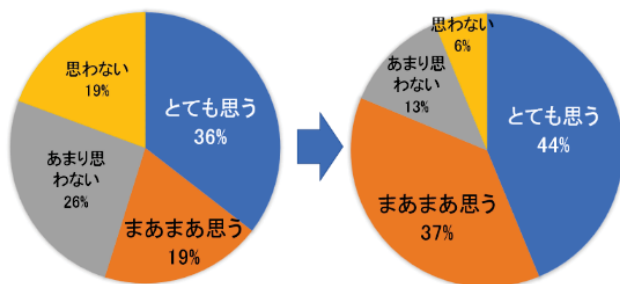
3 使用した教材

<教材17> 児童が画用紙に書いた資料またはこれまでの学習で使用した資料を読み込んで作成。

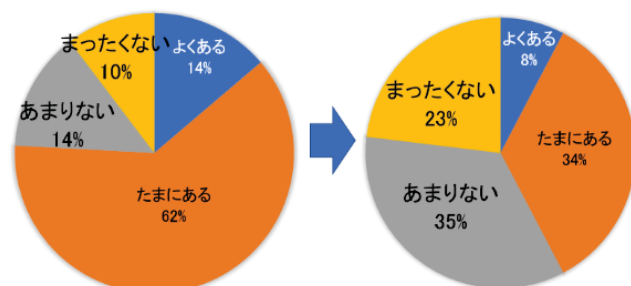
全体を通して

本実践では、参加型手法を用いた協同的な活動を通して得た「気づき」を、他者と共有する時間を大切にしました。また、学習発表会で発信するために準備する段階で、仲間同士で学びを深めることができた。実践前後のアンケート調査で、「自分たちの努力で、平和な世界にすることができる」と答えた児童が54.8%から81.3%(約1.5倍)に増えた。苦手な人と関わらないように「していない」児童が24.1%から57.7%(約2.4倍)に増えた。文化や価値観の違いを越えて理解すること、積極的に他者と関わることの喜びや楽しさを実感した児童が多かったからだと考えられる。

自分たちの努力で平和な世界にすることができる



苦手な人と関わらないようにしている



1 授業の様子



<4時限目 パラグアイに折り紙と絵を届けよう>



<ゲストティーチャーの話を受けて考えを深めた>

2 参考文献・資料

- 1) 『ワークショップ版 世界がもし100人の村だったら<第5版>』2016 開発教育協会
- 2) 『おいしいチョコレートの真実～働く子どもたちとわたしたちとのつながり～』2008 特定非営利法人 ACE
- 3) 開発教育・国際理解教育指導者研修(実践編) 資料
- 4) 国際理解教育実践資料集 2013 国際協力機構(JICA) 地球ひろば

もしも私がカテウラにいたら

所属	愛知県名古屋市立桜台高等学校	実践者	箱山 園江
対象	高校3年生	時間数	<46分×2>授業×3クラス
場所	第1講義室	実践教科	英語
ねらい	<p>テーマ【共生】課題解決のために考え、工夫し、行動する力を育む】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・パラグアイという国に肯定的に出会う ・自分のこととしてカテウラでの生活を考える ・貧困について考え、自分にできることを考える 		
実践内容	回	プログラム	備考
	1	<ul style="list-style-type: none"> ◆アイスブレーキング <ul style="list-style-type: none"> ・5人一組のグループに分かれて自己紹介する ◆『パラグアイってどこにあるの?』(グループ活動) <ul style="list-style-type: none"> ・南米の白地図を見て国名を考える ・地図上に国旗を表すカードを置く ◆『パラグアイってどんな国?』(グループ活動) <ul style="list-style-type: none"> ・パラグアイの自然・言葉・日本からの距離等についてのクイズに答える ◆『もしも私がカテウラにいたら…』 <ul style="list-style-type: none"> ・英文 Landfill Harmonic を読み、カテウラに住む子どもまたはファビオさん(ソーシャルワーカー)の立場になって考える(各自で考える) ・子どものグループとファビオさんのグループそれぞれで意見を共有し、模造紙に書いていく 【ブレインストーミング】 ・模造紙に書いた内容を他のグループと共有する(回し読み) 	南米の白地図 国旗カード カラーペン PC 4択の答えカード 資料①…子ども ②…ファビオさん 模造紙(1/2サイズ)
	2	<ul style="list-style-type: none"> ◆『お母さんと子どもたちはどうなった?』【ブレインストーミング】 <ul style="list-style-type: none"> ・グループを再編し、子どもとファビオさんの両者がいるグループを作る ・路上生活を送るお母さんと子どもが用意された家に移り住んだ1年後の暮らしを考える ・各グループで出た意見を発表する(ポップコーン方式) ◆『お母さんと子どもはなぜ路上に戻ったのか?』【ブレインストーミング】 <ul style="list-style-type: none"> ・グループで話し合いながら理由を半模造紙に書いていく ◆『ファビオさんはなにをした?』 <ul style="list-style-type: none"> ・カテウラやファビオさんの映像を見せながら、実際に行われたことを伝える ◆『わたしたちに何ができるだろう』(振り返り)(各自で考える) <ul style="list-style-type: none"> ・貧困とは何か、状況を変えるために何ができるかについて、自分の言葉で書く(各自で考える) ・全体で感想を共有する(ポップコーン方式) 	模造紙(1/2サイズ) スピーカー プロジェクター 振り返りシート
成果	参加型の授業は私にとっても生徒にとっても新鮮だった。生徒たちが生き生きと楽しそうに活動する姿を見ることができた。授業後に講義室に残り、溢れる感動を伝えてくれた生徒たちもいた。2コマという短い授業ではあったが、生徒の心を動かすことができたと感じている。		
課題	限られた時間内で流れのあるワークショップにするために時間の管理に気を付けたが、最後の振り返りの時間が足りなかった。もっと時間を取ることができれば全体での共有がより深まったと思う。		
備考	受験勉強に忙しい高校3年生に対して、卒業後も心に留めておいてほしいメッセージが伝わったと思う。		

[授業実践の詳細]

1 時限目 「もしも私がカテウラにいたら」

この時限のねらい

- ・パラグアイという国に肯定的に出会う
- ・自分のこととしてカテウラでの生活を考える

1 児童生徒の活動の流れ

- ① アイスブレーキング
 - ・5人一組のグループに分かれて自己紹介する
- ② 『パラグアイってどこにあるの?』(グループ活動)
 - ・南米の白地図を見て国名を考える
 - ・地図上に国旗を表すカードを置く
 - ・パラグアイの自然・言葉・日本からの距離等についてのクイズに答える
- ③ 『もしも私がカテウラにいたら…』
 - ・英文 Landfill Harmonic を読み、カテウラに住む子どもまたはソーシャルワーカーのファビオさんの立場になって考える(各自で考える)
 - ・子どものグループとファビオさんのグループのそれぞれで意見を共有し模造紙に書いてい【ブレインストーミング】
 - ・模造紙に書いた内容を他のグループと共有する(回し読み)



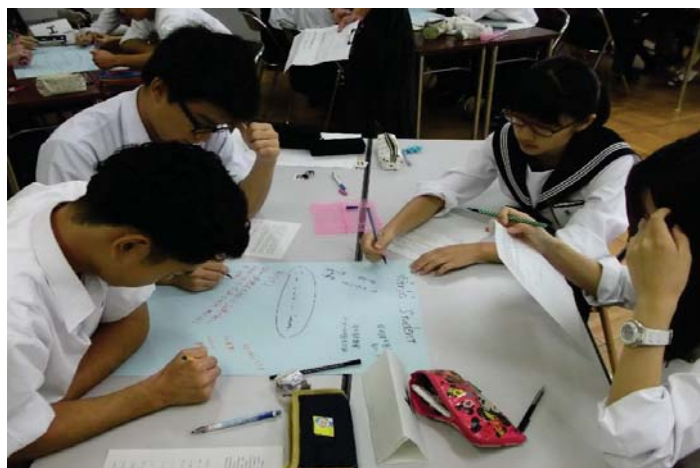
<地図でパラグアイの位置をつかむ>



<模造紙を使って意見を共有>

2 児童生徒の活動の成果・反応

- ◇ 南米の国パラグアイを身近に感じ、日本とのつながりを知ることができた。
- ◇ いつもの授業とは違う雰囲気、自分の中にある考えを外に出す授業はとても新鮮だったようだ。
- ◇ 一つの話題に関しても、人によって見方が違うことを実感し、楽しみながら新しい刺激を感じていた。
- ◇ 打ち解けた雰囲気の中で、のびのびと積極的に参加する生徒たちの姿が印象的だった。



<じっくり考える…自分の考えを整理する>

＜生徒の振り返り＞

- ・クラスのいろいろな意見や、現地の人たちの状況を知れて面白かったです。楽しみながら新しい刺激をもらえてよかったです。
- ・自分が英文を読んで想像していたよりもはるかに悲惨な状況があって、ショックを受けた。将来、そういう国を少しでも良くするための活動に携わりたいと思ったし、そのために、どんな状況なのか詳しく知って、英語とかももっとできるようになって生かしたい！！
- ・いつもの授業とは雰囲気違って、自分の中にある考え方とかを外に出す感じの授業で楽しかった。人の考え方を見聞きしたり、自分の頭の中から考えることをひねり出したり、自分の気づいていないことに触れられてよかった。こういう授業は楽しいと思います。

3 使用した教材

- ＜教材1＞ 南米の白地図
- ＜教材2＞ 南米の国々の国旗のイラストカード
- ＜教材3＞ 『もしも私がカテウラにいたら…』ワークシート 2 種類

2 時限目「貧困ってなんだろう」

この時限のねらい

- ・貧困について考え、自分にできることを考える

1 児童生徒の活動の流れ

- ① 『お母さんと子どもたちはどうなった？』【ブレインストーミング】
 - ・グループを再編し、“子ども”役と“ファビオさん”役の両者がいるグループを作る
 - ・路上生活を送るお母さんと子どもが用意された家に移り住んだ1年後の暮らしを考える
 - ・各グループで出た意見を発表する(ポップコーン方式)
- ② 『お母さんと子どもはなぜ路上に戻ったのか？』【ブレインストーミング】
 - ・グループで話し合いながら理由を配付された模造紙に書いていく
- ③ 『ファビオさんはなにをした？』
 - ・カテウラやファビオさんの映像を見せ、実際に行われたことを伝える
- ④ 『わたしたちに何ができるだろう』(振り返り)
 - ・貧困とは何か、状況を変えるために何ができるかについて、自分の言葉で書く(各自で考える)
 - ・感想を共有する(全体で、ポップコーン方式)

2 児童生徒の活動の成果・反応

- ◇ 自分が恵まれた生活をしているとわかっただけでなく、自分の価値観を相手に強要するのは間違っていると感じたようだ。
- ◇ 『わたしたちに何ができるだろう』を考えた時に物質面のことしか考えつかなかったが、実際にはファビオさんは精神面から『音楽』を通じて変えているのだと知り、大きな驚きと気づきがあったようだ。
- ◇ 今あたり前に生きていることが貴重であると気づき、自分と直接関係がなくても、さまざまな生活をしている人々のことを知り、自分自身の視野を広げる必要性を感じたようだった。

<生徒の振り返り>

① 『貧困』とはなんだと思いますか？

- ・それぞれの国で独自に発展したために、結果的に裕福な国とそうでない国に分かれてしまっただけ。先進国が貧困だと定義しているが、路上生活をしている人の例のように、それがいいと思っている人たちもいる。その状況を『変えたい！かわいそう！』と思って行動するのではなく、『こういう見方もあるよ』と視野を広げる手伝いをすべき。
- ・お金がないことだけでなく、いろいろな考え方とか見方とかそういうのが教育として得ることができない状況だと思う。『衣食足りて礼節を知る』ができて、貧困から抜け出せると思う。
- ・お金がない、食糧がないことも貧困だとは思いますが、今日の授業を受けて、外の世界を知らないことや、自分の可能性を知らないことも貧困だと思った。

② 状況を変えるために自分に何ができると思いますか？

- ・とりえず、その人たちを取り巻く状況・環境を改善し、貧困であることが当たり前である発想から少しずつ抜けることが必要だと思う。そのためには、寄付が一番自分にできる最大のことであると思う。
- ・貧困の親からの連鎖を止めるために、勉強ができる環境を与えられたらいいなと思う。自分ができるとは、事実を知り、知人に話すことしかできないけど、知っている人が増えれば何か変わるかもと思いました。
- ・貧困で困っている人たちがいるという事実をまずはきちんと受け止めること。1人の力では国を動かすことができないから、貧困で苦しむ人を助けたいと思っている人々で団結して訴えること。苦しんでいる人がいることを考えながら日々生活すること。

3 使用した教材

<教材4> パラグアイの映像

<教材5> 振り返りシート

■ 全体を通して

1 授業の様子

生徒たちは、資料の英文を読んで想像したよりもはるかに悲惨な状況であると知り、大きなショックを受けた。そして、状況を少しでも良くするために自分に何ができるのかを真剣に考えた。状況についてより詳しく知り、具体的な活動に取り組みたいと感じた生徒がとても多かった。



<考えが広がって深まる楽しさ>

2 参考文献・資料

- 1) 奇跡体験アンビリバボー 貧困の子どもを救え☆南米スラム街に音楽を
www.fujitv.co.jp/unb/contents/131205_2.html
- 2) 世界の国旗と地図 講談社
- 3) PROMINENCE English Communication I
Lesson 4 “Landfill Harmonic” 東京書籍



<思いを言葉にして行動へとつなぐ>

夢見る力 ～自分の世界を広げる～

所 属	愛知県弥富市立弥富北中学校	実践者	濱田 蒼太
対 象	中学校2年生(145名)	時間数	12時間
場 所	教室・体育館	実践教科	総合的な学習の時間
ねらい	<ul style="list-style-type: none"> ・世界が抱えている課題をつかみ、それらの課題のつながりに気付く。 ・課題の原因や背景を知り、自分も無関係ではないことに気付く。 ・課題を抱えている国を「かわいそう」と考えるのではなく、同じ地球の一員として対等な立場で自分にできることは何かを考える。 		
実践内容	回	プログラム	備 考
	夏休み	《1学期「夢をもとう 生き方を考えよう!」》 ・世界一大きな授業 ・ 職場体験「Challenge for the dream～働くことの大切さを体験しよう～ (職業調べ・働く人へのインタビュー→体験→まとめ→プレゼン) ・JICAエッセイコンテスト・プランジャパン読書感想文 《2学期「世界平和に向けてわたしたちにできること」》 ・ 理解するってどんなこと?! 4時間計画 1 じゃがいもさんとおともだち(1時間目) 2 賛否両論の両論を知ろう(2時間目) 3 ジェインがやってきた!(3時間目) 4 豊かさって何だろう?(4時間目) ・ 校外学習「グリーン平和と愛を広げよう!」 ゃないC A! (なごや地球広場・ささしま散策・ピースあいち) (事前学習→訪問・見学→まとめ→プレゼン) ・ 広島研修「8.6→平和への道～千羽の想いを届けよう～ (事前学習→訪問・見学→まとめ→展示) ・ つながりに気づき、つながりを築く 4時間計画 5 世界と日本つながりクイズ(1時間目) 6 つながりによる影響を知ろう(2時間目) 7 つながりによる悪影響にもしかして自分も…(3時間目) 8 よりよいつながりを築くには(4時間目) 《3学期「より良い未来のために、わたしたちにできること」》 ・ 平和を創り出すわたしたち! 4時間計画 9 世界のSOS(1時間目) 10 課題の原因を追求しよう(2時間目) 11 平和を創り出すわたしたち!(3時間目) 12 平和を創り出すために活躍する人たち(4時間目) ・ 修学旅行にむけて(企業訪問探し) SDGs達成に向けて取り組んでいる企業やNPOの国際協力・国際貢献の現状について調べ、修学旅行に訪問させてもらえるように電話する。	・「教育協力 NGO ネットワーク JNNE」教材 ・じゃがいも(実物) ・意志表示カード(自作教材) ・図書「地球家族」 ・教師海外研修の写真 ・SDGs展示 ・パラグアイクイズ(自作教材) ・図書「ゾウの森とポテトチップス」 ・「飢える国・飽食の国」地球デーマップ第10回 ・教師海外研修体験談 ・教師海外研修の写真 ・教師海外研修の動画 ・JICA ボランティアで活躍した人の出前授業
成 果	生徒は、遠い国で起こっている様々な課題と自分とのつながりを知り、自分ごととして考えられるようになってきたと感じる。これまでは、「世界の課題を解決するにはとにかく募金」と考える生徒が多く、視野がもう少し広がればいいなと感じていた。このプログラムを通して、物を買う時にその物がどんな過程で作られたものかを考えたり、フェアトレード商品を選んだり、食べ物を残さず食べたりするなど、より身近なところで自分にできることを考えられるようになったと思う。		
課 題	ねらいとする力を育むために、アイスブレイクを含めたアクティビティの流れや的確なファシリテートをもっと熟考する必要があると思った。今後はさらに、世界共通の課題をもった「地球市民のひとり」という自覚がある生徒を育てたい。日常の中でも広い視野で考え、行動する力をつけられるプログラムが必要である。普段の生活の中で世界のSOSに反応できることが増えるといいなと思う。		
備 考	来年度は、修学旅行を通して、日本(東京)の企業やNPOのSDGs達成に向けた国際協力・国際貢献の現状について学ぶ。よりグローバルな視野を広げ、自分たちにできることを考えて行動していく国際理科教育を進めていきたい。		

[授業実践の詳細]

1 時限目「じゃがいもさんとおともだち」

この時限のねらい

- ・私たちは、一人一人“わたしの大切な物語”を生きる存在であることに気づく。
- ・世界の問題を解決するためには、その人たちに心馳せることが重要であることを知る。

1 児童生徒の活動の流れ

- ① 《アイスブレイク》自分の名前のイニシャルで始まる自分を表す言葉を添え、自己紹介する。
- ② グループ対抗でワールドクイズに挑戦する。
- ③ 1人1つじゃがいもを手に取り、友達になったと想定して3分間観察し、じゃがいもの生い立ちを考える。
- ④ グループで生い立ちを発表し合う。
- ⑤ グループのじゃがいもを混ぜ、その中から自分が友達になったじゃがいもを探し出す。
- ⑥ 個人で、③～⑤の作業を通して、気づいたこと・感じたこと・分かったことを紙に書く。
- ⑦ グループでその内容を共有し、何人かが全体で発表する。



<③北海道出身、兄弟は5人で…>



<⑤あ、これ私のじゃがいもだ！>

2 児童生徒の活動の成果・反応

- ◇ じゃがいもを手にとった生徒は、想像をふくらませ、真剣に生い立ちを考えていた。グループで生い立ちを発表するときは、まるで本当の友達を紹介するようだった。
- ◇ 生徒はじゃがいもを混ぜた時、「え、混ぜるの?!」と驚いていた。探し出すことができるか不安そうだったが、全員自分のじゃがいもを見つけることができ、生徒は嬉しそうにしていた。じゃがいもと同じように人間にも大切な物語があり、理解するには、まずその人に心を馳せることが重要であることに体験的に気づくことができた。

3 使用した教材

- <教材1> じゃがいも(実物) 145個
- <教材2> ワールドクイズ 愛知県国際交流協会『国際理解教育教材「世界の国を知る・世界の国から学ぶ わたしたちの地球と未来」』<http://www2.aia.pref.aichi.jp/topj/indexj.html>

2 時限目「賛否両論の両論を知ろう」

この時限のねらい

- ・価値観は多様であり、私の当たり前≠あなたの当たり前であることに気づく。
- ・片方からの情報だけでは価値観が固まることに気づく。

1 児童生徒の活動の流れ

- ① 「はい」「どちらかといえばはい」「いいえ」「どちらかといえばいいえ」と書いたカードを作る。

- ② ファシリテーターが出す質問に対して自分の考えに当てはまるカードを出し、理由を話し合う。
- ③ 「生命保険加入」について、A(加入に肯定的)と B(加入に否定的)の 2 種類の資料のうち、1種類だけを読み、大切だと思うところには線を引く。
- ④ 生命保険に将来入ろうと思うかどうかの質問に挙手で答える。
- ⑤ グループで理由を話し合う。
- ⑥ 分かったこと、気づいたことをグループでリストアップし、全体で共有する。

【リストアップ】

- ⑦ 個人で、③～⑥の作業を通して、気づいたこと・感じたこと・分かったことを紙に書く。
- ⑧ グループでその内容を共有し、何人かが全体で発表する。



<②セーの！ハイ。え？なんで？>



<④僕は加入しないでおうかな>

2 児童生徒の活動の成果・反応

- ◇ セーの！の合図でいっせいにカードを提示する活動は、普段自分の意見を表現することが苦手な生徒も参加しやすかったようである。
- ◇ 自分と違うカードを出した時や同じカードだけれど理由が違う時には、積極的に対話する姿が見られた。
- ◇ 「生命保険に将来入ろうと思う人は手を挙げて下さい」という質問に対して、多くの生徒が手を挙げた。加入に否定的な資料 B を読んだ生徒も、手を挙げていることがあった。生徒に、はじめから知識があったためだと思われる。
- ◇ ④では、手を挙げなかった生徒は、まわりの生徒を見て驚いていた。理由を話し合うときは、資料の内容を紹介し合い、2種類の情報があったことに気づいた。片方の情報だけでなく、それぞれ違ったあらゆる価値観があることが大切なことに気づいた。

3 使用した教材

- <教材3> 意思表示カード(マグネット+シール)
- <教材4> 保険加入についての資料 2 種類

3 時限目「ジェインがやってきた！」

この時限のねらい

- ・周囲とよりよいコミュニケーションをとれるようにするためにできることを考える。
- ・他者を理解するということを考え、行動計画を作成することができる。

1 児童生徒の活動の流れ

- ① 「立つ、座る、手を挙げる」などの動作を記した言語カード A(スペイン語)、B(英語)のうちのひとつを読み、ファシリテーターの指示(スペイン語)に従って動作を行う。
- ② パラグアイからある中学校に転入してきて、困った経験をしているジェインという女の子と、その周りにいる教師やクラスメイトをグループで演じる。【ロールプレイ】
- ③ それぞれの人物がどんな気持ちでいるのかを考え、表に書き込む。【対比表】
- ④ 「ジェインの気持ちの聞き取りをした支援員の話」を読む。
- ⑤ ジェインが周囲とよりよいコミュニケーションをとれるようにするにはどのような方法があるかを考え、「個人でできること」「クラスでできること」「学校全体でできること」と分けて書く。【行動計画表】

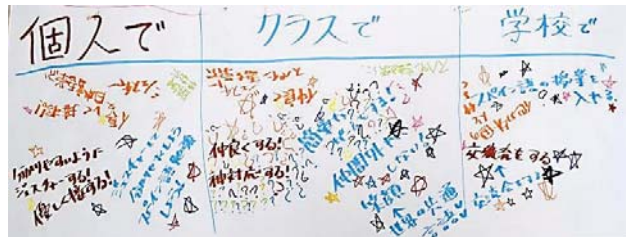
- ⑥ できた表をクラス全体で共有する。なるほど、いいなと思った部分に☆印をつける。これってどういうこと？
と思ったところには？印をつける。【回し読み】
- ⑦ 個人で、②～⑥の作業を通して、気づいたこと・感じたこと・分かったことを紙に書く。
- ⑧ グループでその内容を共有し、何人かが全体で発表する。



<③ロールプレイ後 それぞれの人物の気持ち 対比表>

2 児童生徒の活動の成果・反応

- ◇ ①では、カード A を読んでいた生徒が言葉が分からなくて困った。生徒は、言葉の分からない国に転校したときの気持ちを体験することができた。
- ◇ ロールプレイの冒頭はシナリオを用意したが、一部のグループはその後が続かなかった。
- ◇ ③では、ジェイン以外の気持ちは、生徒はロールプレイをやらなくても分かるため、ジェインの気持ちだけに絞って考えてもよかったと思った。
- ◇ 「転校生がやってくる」という設定は生徒には分かりやすく、ジェインの気持ちになった上で、自分にできることを具体的に行動計画表に書くことができた。



<⑤ジェインとよりよいコミュニケーションをとるためにできること>



3 使用した教材

<⑤クラスで交流会はどう？サッカーしたり…>

<教材5> 言語カード、役割カード、ジェインの気持ちの聞き取りをした支援員の話

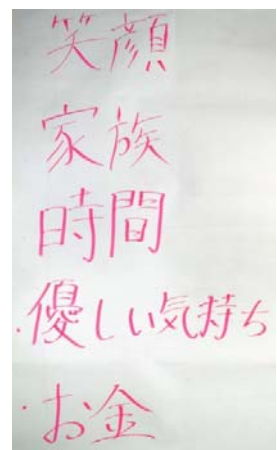
4 時限目「豊かさって何だろう？」

この時限のねらい

- ・「地球家族」の写真から、豊かさの視点を考えることができる。
- ・豊かさのとらえ方の多様性に気づき、豊かなくらしのために必要なこと(もの)を考えることができる。
- ・「豊かさ」も感じ方や考え方次第であることに気付くことができる。

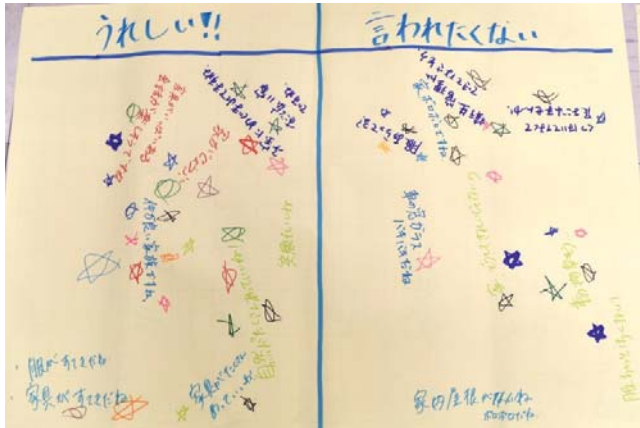
1 児童生徒の活動の流れ

- ① 各国の暮らしを撮影した写真を1人1枚手に取り、写真の中の一人になりきり、写真の家族の自己紹介をする。
- ② もしも自分がこの写真の家族だとして、「言われて嬉しいこと」「言われたくないこと」を考える。
- ③ 班で②を対比表にして、全体で共有する。【対比表】
- ④ 「地球家族」の写真を見て、豊かだと思ふ順番を話し合って決める。【フォトランゲージ】【ランキング】
- ⑤ 順番と豊かさの視点について、グループ毎に発表する。
- ⑥ 日本とパラグアイの写真を提示しながら、教師が現地で見たと感じたこと等を伝える。



<⑦豊かな暮らしのために必要なもの(こと)5つ>

- ⑦ グループで「豊かな暮らしのために必要なもの(こと)」を考え、5つ書き出す。【指標作り】
- ⑧ グループ毎に発表する。
- ⑨ 個人で、①～⑦の作業を通して、気づいたこと・感じたこと・分かったことを紙に書く。
- ⑩ グループでその内容を共有し、何人かが全体で発表する。



<③言われて嬉しいこと／言われたくないこと 対比表>



<④この写真の人、いい笑顔だね>

2 児童生徒の活動の成果・反応

- ◇ ②③では、写真の家族の気持ちになって考えることができていた。
- ◇ ④⑤では、写真のどこで豊かさを判断しているかを話し合い、順番を決めた。グループごとに豊かさの視点も順番も違いがあった。
- ◇ パラグアイで見た豊かさは、今まで思っていた豊かさとは全く違ったことを伝えた。生徒は「そういう豊かさもあるんだな」と目を輝かせていた。
- ◇ 「豊かさ」も感じ方や考え方次第であることに気づき、⑦では視野を広く考えることができた。



<⑤順番と豊かさの視点をグループ毎にまとめた>

3 使用した教材

- <教材6> マテリアルワールド・プロジェクト(代表 ピーター・メンツェル)(翻訳 近藤真里、杉山良男)『地球家族 世界30か国のふつうの暮らし』1994年11月、TOTO出版
- <教材7> 教師海外研修の写真・体験談

5 時限目「世界と日本つながりクイズ」

この時限のねらい

- ・私たちの生活は、世界とのつながりによって支えられていることに気づく。
- ・何気なく使っているものでも、つながりがあることを知る。

1 児童生徒の活動の流れ

- ① 4～5人のグループをつくり、日頃お世話になっている外国のものを発表する。【ブレインストーミング】
- ② グループの中でインドネシア、パラグアイ、エチオピア、スイス、カナダのいずれかの国を担当する人を決める。
- ③ 各自、担当した国と日本とのつながりに関するクイズを解き、解説を読んで理解し、どんなつながりがあったか整理しておく。
- ④ 自分の担当した国についてグループメンバーにクイズを出題する。【クイズ】
- ⑤ 個人で、①～④の作業を通して、気づいたこと・感じたこと・分かったことを紙に書く。
- ⑥ グループでその内容を共有し、何人かが全体で発表する。



<④パラグアイに行くのに何時間かかるでしょうか?!>

2 児童生徒の活動の成果・反応

- ◇ 自分がクイズの出題者になるということで、自分の担当する国と日本とのつながりをよく見て大事なところに線を引くなど、しっかりと理解しようとしていた。
- ◇ 理解が難しい生徒については、ペアを組んで同じ国のクイズに取り組んだ。
- ◇ 生徒たちは普段の生活で、たくさんの国にお世話になっていることを実感できた。⑤では、お世話になっている国が困っているなら、もっと協力していきたい・助け合っていきたいと書く生徒が非常に多かった。

3 使用した教材

- <教材8> つながりクイズ 愛知県国際交流協会『国際理解教育教材「世界の国を知る・世界の国から学ぶ わたしたちの地球と未来」』<http://www2.aia.pref.aichi.jp/topj/indexj.html>
- <教材9> パラグアイクイズ(自作教材)

6 時限目「つながりによる影響を知ろう」

この時限のねらい

- ・世界と日本とのつながりが、どんな影響を生み出しているのかを知る。
- ・世界とのつながりの中で、環境問題、貧困問題など知らず知らずに自分達が加担している場合があることを知る。

1 児童生徒の活動の流れ

- ① グループ替えをして、前時の気づいたこと・感じたこと・分かったことを新しいグループで共有する。
- ② 「国名カード(写真付)」と「つながりカード(★印付)」の正しい組み合わせを考え、カードを合わせる。【マッチング】
- ③ 正解を聞き、間違った場合は正しくカードを合わせる。
- ④ さらに配られた「影響カード(●印付)」が、②③で並べた国のうち、どの国のことか考え、カードを合わせる。
- ⑤ 正解を聞き、間違った場合は正しくカードを合わせる。



<②～⑤この国には、このカードかな～?>

- ⑥ マイナスの影響を生み出している4カ国(フィリピン・ガーナ・コンゴ共和国・モンゴル)の資料を1人1カ国(5人グループは1カ国重複する)担当して読み、後でグループメンバーにポイントを説明できるようにまとめる。
- ⑦ グループで共有する。
- ⑧ 個人で、①～⑦の作業を通して、気づいたこと・感じたこと・分かったことを紙に書く。
- ⑨ グループでその内容を共有し、何人かが全体で発表する。

2 児童生徒の活動の成果・反応

- ◇ ②～⑤では、つながりが作り出す影響には、プラスの側面とマイナスの側面があることに気づくことができた。
- ◇ ⑥では、理解の難しい生徒はペアを組んで取り組んだ。
- ◇ ⑧では、「私たちがチョコレートやカシミアなどを求めれば求めるほど世界に悪い影響を与えてしまうこともあるんだと感じました」「私が知らない間に私のせいで苦しむ人々がいなくなったらいいと思った」「私たちが苦しめている人々を少しでも救うためにも、今行われているプロジェクトなどの大切さを改めて感じた」など、つながりによるマイナスの課題を自分ごととして捉える生徒が多く見られた。

3 使用した教材

<教材10> 国名-つながり-影響カード、マイナスの影響を生み出している国の資料 愛知県国際交流協会『国際理解教育教材「世界の国を知る・世界の国から学ぶ わたしたちの地球と未来」』
<http://www2.aia.pref.aichi.jp/topj/indexj.html>

7 時限目「つながりによる悪影響にもしかして自分も・・・」

この時限のねらい

- ・世界とのつながりの中で、環境問題、貧困問題など知らず知らずに自分達が加担している場合があることを知る。
- ・課題がある世界とのつながりを、よりよいつながりにするための方法を考える。

1 児童生徒の活動の流れ

- ① 「最近食べたものの中で一番おいしかったもの」を発表し合う。
- ② 「食べ物を選ぶ時どんなことを大切にして選ぶか」をふせんに書き出す。【ブレインストーミング】
- ③ 書き出したふせんに順位をつける。【ランキング】
- ④ 世界との大きなつながりである「貿易」について、関連する課題を取り上げたビデオを視聴する。
- ⑤ ビデオを見て感じたことをグループで共有する。
- ⑥ 先ほどのふせん以外に、付け足したい基準を付け足す。
- ⑦ 書き出したふせんに順位をつける。【ランキング】
- ⑧ 隣のグループ同士(2グループ間)で、ランキングを発表し合う。
- ⑨ 個人で、①～⑦の作業を通して、気づいたこと・感じたこと・分かったことを紙に書く。
- ⑩ グループでその内容を共有し、何人かが全体で発表する。



<⑧一番はやっぱりその商品の背景を考えることです！>

2 児童生徒の活動の成果・反応

大きさ、味、内容量、栄養価、食品表示、アレルギー、安全性、賞味・消費期限、生産地、値段、無農薬、生産者、生産時期、見た目(インスタ映え)、新鮮さ、品質

◇ ②③では、生徒は上記のようなことをふせんに書き出し、ランキングにした。

本当に必要かを考える、どういう過程で生産されたかを考える、地産地消、フェアトレード商品、ムダに高級なものを買わない、食べない、食べきれぬ量だけ、消費期限が近い商品を選ぶ

◇ ⑥では、上記のような基準を書き足すことができた。⑦では、ランキングにも変化が見られた。

「食べ物を残さない、食べきれぬ量を買うなど、自分でやれることをやりたいと思いました」
「少しでも主食を魚の日を増やすとかをたくさんの方が実行したらいちばん良いと思う」
「私が牛肉を食べているせいで、発展途上国の人々は食糧不足で困っているなんて、想像したこともありませんでした。でも、私たちが牛肉を買うのをやめて、食糧不足をなくそうとしても、仕事を失う人がでてしまいます。しかし、このままでもいけません。制度が変わらないと、食料不足もなくなるのではな

◇ ⑨では、上記のような気づきを書く生徒が見られた。課題がある世界とのつながりを、よりよいつながりにするために自分にできることや失業の可能性も視野に入れ、新たな課題を発見する生徒の姿あった。

3 使用した教材

<教材11> 「飢える国・飽食の国」:地球データマップ第10回
<http://www.veoh.com/watch/v160953038zAzPeRa>

8 時限目「よりよいつながりを築くには」

この時限のねらい

- ・世界とのつながりの中で、環境問題、貧困問題など知らず知らずに自分達が加担している場合があることを知る。
- ・課題がある世界とのつながりを、よりよいつながりにするための方法を考える。

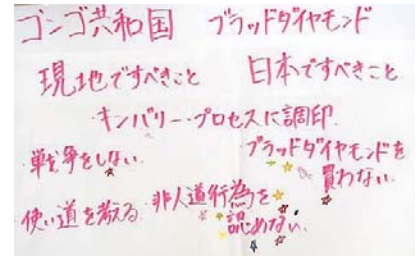
1 児童生徒の活動の流れ

- ① 「私の好きなお菓子」を発表し合う。
- ② お菓子のパッケージを見て、原材料を調べる。
- ③ 植物油の正体が「パーム油」であることを知り、パーム油が他にどんなものに使われているかを知る。
- ④ 絵本「ゾウの森とポテトチップス」の読み聞かせを聞く。
- ⑤ 6 時限目の⑥で扱った4カ国(フィリピン、ガーナ、モンゴル、コンゴ共和国)と本時のボルネオ島から1カ国をグループで担当し、マイナスの影響を起こさせないよりよいつながりを築くために、「現地ですべきこと」「日本ですべきこと」を考え、模造紙上に国名+問題となっているものをタイトルとして書き、その下に対比表にまとめる。【対比表】
- ⑥ 回し読みで共有し、自分達のグループになかったアイデアでなるほど!と思ったものに、☆印をつける。



<②これとこれは同じ?>

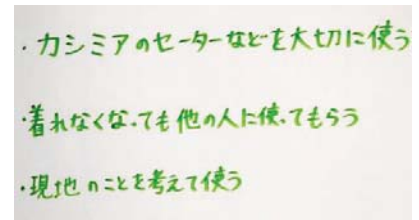
- ⑦ 各自、「現地ですべきこと」「日本ですべきこと」に貢献するために、自分にできることを考え、紙に3つ書く。【指標作り】
- ⑧ グループで「自分にできること」を共有し、何人かが全体で発表する。
- ⑨ 個人で、①～⑧の作業を通して、気づいたこと・感じたこと・分かったことを紙に書く。
- ⑩ グループでその内容を共有し、何人かが全体で発表する。



<⑤現地ですべきこと／日本ですべきこと>

2 児童生徒の活動の成果・反応

- ◇ ②③では、生徒は、パーム油がほとんどのお菓子に使われていて、実はパーム油が身のまわりにありふれていることを知って驚いていた。
- ◇ ⑦では、「できるだけフェアトレード商品を買う」「現状を知り、他の人に伝える」「自分が何かを食べたり使ったりしている裏で色々な問題が起こっていることを忘れない」など、これまでの知識から自分にできることを一生懸命考える姿が見られた。



<⑦自分にできること3つ>

3 使用した教材

<教材12> お菓子のパッケージ数種類(実物)

<教材13> 横塚 眞己人『ゾウの森とポテトチップス』2012年12月、そうえん社

■ 全体を通して

1 授業の様子



<この考えいいな…>



<なるほど！その視点いいね>



<これは、こうじゃない？なんで？>

2 参考文献・資料

- 1) 愛知県国際交流協会『国際理解教育教材「世界の国を知る・世界の国から学ぶ わたしたちの地球と未来」』<http://www2.aia.pref.aichi.jp/topj/indexj.html>
- 2) マテリアルワールド・プロジェクト(代表 ピーター・メンツェル)(翻訳 近藤真里、杉山良男)『地球家族 世界30か国のふつうの暮らし』1994年11月、TOTO出版
- 3) 横塚 眞己人『ゾウの森とポテトチップス』2012年12月、そうえん社

みんなつながっている。さあ、わたしたちも動いてみよう！

所 属	愛知県名古屋市立植田東小学校	実践者	脇田 佐知子
対 象	小学校6年生(143人)	時間数	11時間
場 所	教室・多目的室	実践教科	総合的な学習の時間・道徳
ねらい	<p>テーマ【コミュニケーション・共生・人権】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分と世界がつながっていることに気付き、世界に興味をもつ。 ・物・人・国などを多面的に見ることで、違いを肯定的に捉えたり、課題に気付いたりする。 ・課題を解決する人々を知り、身近な課題解決のためのプロジェクトを作り、自分にできることを考え、行動を起こす。 		
実践内容	回	プログラム	備 考
	1	<p>◆ わたしたちは世界とつながっている！</p> <ul style="list-style-type: none"> ・アイスブレイキング(4つのコーナー)…多面的に見ることの大切さ ・(グローバルビンゴ)…世界と様々な面で関わりがある 	ビンゴカード
	2	<p>◆ 日本も世界とつながっている！</p> <ul style="list-style-type: none"> ・アイスブレイキング(名刺で自己紹介)…自分や他人をよく知る ・(日本の食料自給率クイズ)…外国からの輸入に頼る 	A4用紙 ペン パワーポイント
	3	<p>◆ 日本の食卓と世界の食卓</p> <ul style="list-style-type: none"> ・(地球の食卓)【フォトランゲージ】…日本との共通点や相違点 ・【ブレインストーミング】…国や地域が違うと違うことってたくさんある 	「地球の食卓」 A3用紙 ペン ワークシート
	4-5	<p>◆ 違いを楽しもう① ～世界の民族衣装編～</p> <ul style="list-style-type: none"> ・アイスブレイキング(きつとあなたはこんな人)…思い込み訂正できること ・(民族衣装クイズ)(民族衣装・楽器体験)…日本との違いを肯定的に 	A4用紙 民族衣装・楽器等 パワーポイント
	6-7	<p>◆ 違いを楽しもう② ～パラグアイ編～</p> <ul style="list-style-type: none"> ・アイスブレイキング(海外旅行に行こうよゲーム)…人との関わりを楽しむ ・(パラグアイクイズ)…パラグアイの習慣・食事・文化 ・(パラグアイの体験)…日本との共通点や相違点を肯定的に 	テレレ・チパ・アルパ ニヤンドウティ ゴマ
	8	<p>◆ ちがいのちが い みんなちがっていて本当にいいのかな？</p> <ul style="list-style-type: none"> ・アイスブレイキング(Yes、No カード)…考えの違い ・(ちがいのちが い)…あってよい違い・あってはいけない違い ・【派生図】…あってはいけない違いを放っておくとどうなるか 	Yes・No カード ちがいのちが いカード
	9	<p>◆ あってはいけない違いとその解決について考えよう</p> <ul style="list-style-type: none"> ・カテウラ地区の貧困問題…パラグアイのあってはいけない違い ・カテウラ音楽団…課題を解決する人・課題解決に大切なこと 	A4用紙 ペン パワーポイント
	10-11	<p>◆ わたしたちのクラスや学年はどうだろう？卒業までのわたしのプロジェクト</p> <ul style="list-style-type: none"> ・【対比表】良いところ・改善したほうがよいところ…クラスや学年の課題 ・プロジェクトづくり…自分にできることを ・【みんながみんなのサポーター】…お互いに応援しよう ・パラグアイで出会った人々からのメッセージ…相手の立場に立つこと 	A3用紙 ペン パワーポイント
成 果	自分たちや日本は世界の様々な国とつながりがあること、その世界には様々な国や文化があり、その違いも受け入れていくこと、しかし、違ってはいけない部分は改善していかなくてはならないこと、課題解決には、大切にすべきことがたくさんあること、自分たちも課題解決に向けて努力していくべきであることを理解することができた。		
課 題	教師から提示した国について知ったり考えたりすることはできたが、子ども達が調べ、追及していく活動を設けることができなかった。今後は、興味をもった国について、そのような活動を取り入れ、課題解決のプロジェクトも世界に向けたものが考えられるようにしていきたい。		
備 考	この実践の成果や課題を受け、リトルワールドに出かけて(2/9)様々な異文化を体験したり、興味をもった内容を追及したりする活動を行う予定である。		

[授業実践の詳細]

1 時限目「わたしたちは世界とつながっている！」

この時限のねらい

- ・自分や友達が世界とどれだけ関わっているかを調べる中で、世界とのつながりについて関心をもつ。
- ・国際理解とはどのようなものなのかを知る。

1 児童生徒の活動の流れ

① アイスブレイキング(4つのコーナー)

- ・「好きな季節」「好きなこと」「好きなテレビのジャンル」「好きなお菓子」「遊びに行くなら」という質問で、4つのコーナーに分かれる。切り口が変われば、印象が変わるように、人は多面的にできているので、いろいろな角度から知り合い、より良い関係を築くことが大切であることを知る。



<ビンゴを通していろんな人に話しかけよう！>

② グローバルビンゴ

- ・ビンゴカードの中で、自分に当てはまるものにチェックを入れる。
- ・カードを持ちながら、学年のいろいろな人と関わり、当てはまる人の名前を書いていく。

③ ふりかえり

- ・自分たちが世界と関わっていること、世界で起こっていることは他人事ではないこと、遠く離れた世界の人々のことを理解するためにも、身近な自分や他人を理解すること、違いを受け入れていくことが国際理解の第一歩であることを知る。
- ・活動を通して感じたことや考えたことを書く。

2 児童生徒の活動の成果・反応

- ◇ アイスブレイキングの4つのコーナーを通して、同じ学校の同じ学年でも様々な違いがあることを理解することができたようだった。また、いろいろな角度から知り合うことの大切さを伝えていたため、様々なクラスの人と積極的に関わろうとする姿が見られた。
- ◇ グローバルビンゴを通して、知らないところで世界との関わりを多くもっていることに気付いていた。
- ◇ ふりかえりのプリントには、国際理解に興味をもつことができたという感想がいくつか見られた。

3 使用した教材

<教材1> グローバルビンゴシート

3 時限目「世界の食卓」

この時限のねらい

- ・様々な国の食卓の様子の写真を見ながら日本との違いや共通点などを考えることで、世界の多様性に触れ、他の国に住む人々のことに興味をもったり、身近に感じたりする。

1 児童生徒の活動の流れ

- ① 地球の食卓【フォトランゲージ】(アメリカ・イギリス・インド・エクアドル・グリーンランド・中国・トルコ・ブータン・マリ)
 - ・グループに1枚写真を配り、写真の中の家族の一人になりきって、自分の家族や食事の内容についての紹介を考える。気づいたことや疑問に思うこと、写真の家族が住んでいる国がどこなのかを話し合う。
 - ・写真を見せながら、家族になりきって紹介し、どこの国と考えたのかを発表する。
- ② 違いを探す【ブレインストーミング】【回し読み】
 - ・国や地域が違っていると違って来るものにはどのようなものがあるのかを紙に書きだす。
 - ・様々な班の書き出したものを、お互いに見合う。
- ③ ふりかえり
 - ・国によって食材や食事の量、調理器具など様々な違いがあったことから、世界の多様性に気づき、違いを受け入れることの大切さを知る。



<この国は野菜が多いね！>



<写真からいろんなことに気付いたよ！>

2 児童生徒の活動の成果・反応

- ◇ 国による食事の様子に大きな違いがあり、その違いをおかしいと受け取るのではなく、理解していくことの大切さに気付いている子どもが多かった。
- ◇ 食事の量の違いに気付いたふりかえりの中には、「違いを受け入れることは大切だけれど、貧しい所もあるので、全部がいいとは限らない」とあった。
- ◇ 食事以外の違いも知りたいという感想も見られ、様々な国に興味をもち始めたことを感じた。

3 使用した教材

<教材2> 地球の食卓(写真)

4-5 時限目「違いを楽しもう① ～世界の民族衣装編～」

この時限のねらい

- ・五感を通して異文化に触れることで、異文化を身近に感じられるようにする。
- ・異なる文化を比較することで、日本の文化や生活を見つめ直す。

1 児童生徒の活動の流れ

- ① アイスブレーキング(たぶんあなたはこんな人)
 - ・グループで、隣の人のことを想像し、好きな色・好きなおでんの具・好きな遊び・好きな果物を書いて渡す。もらった人は、違っていた部分を訂正しながら自己紹介を行う。人は誰でも自分のことを理解してほしいと思っている存在だということを伝え、誤解や思い込みをされていた場合、修正する機会があれば肯定的な出会いにつながることを伝える。
- ② 民族衣装クイズ
 - ・パワーポイントで、様々な民族衣装を見せ、どこの国のものか考える。

③ 民族衣装・楽器体験

- ・紹介した衣装以外にもいくつかの衣装や楽器、おもちゃなどを用意し、を実際に着たり、演奏してみたりする。外国のお金もいくつか用意し、実際に触ることができるようにする。



<モンゴルの服はあったかいね>

2 児童生徒の活動の成果・反応

- ◇ 紹介したものを実際に着ることができ、子どもたちはとても興奮してうれしそうに着ていた。
- ◇ 暖かい地域と寒い地域では使う素材に違いがあることや、自然の素材が多く使われていること、日本と似た形の物やまったく違う形の物があることなど、様々なことに気付いていた。

3 使用した教材

<教材3> パラグアイボックス 2016

<教材4> エチオピアボックス 2016

<教材5> モンゴル・ラオス・韓国・インドネシア・カンボジアの民族衣装、アフリカの楽器、各国のお金

6-7 時限目「違いを楽しもう～パラグアイ編～」

この時限のねらい

- ・パラグアイについて見たり、聞いたり、体験したりすることを通して、違う文化をもつ国に対して肯定的に見ることができるようにする。
- ・ゲームや感想の共有などを通して、多くの人と交流する楽しさを味わうことができるようにする。

1 児童生徒の活動の流れ

- ① アイスブレイキング(海外旅行に行こうよゲーム)
 - ・国名の文字の数でグループを作るゲームを行う。徐々に、クラスの違う人や男女混合、今まで一緒のグループになっていない人などの条件を付けて、より多くの人と関わることができるようにする。
- ② どこの国かなクイズ
 - ・トリニダ遺跡・小農家・お寿司・学校・アスンシオン・職業訓練校・サッカー・日本人学校の写真を見て、どこの国のものか考える。
 - ・全てパラグアイの写真だと伝え、様々な面があることを伝える。
- ③ パラグアイクイズ
 - ・テレレ、チパ、アサード、友情の日、ゴマに関することを3択クイズにして出題する。
 - ・グループの仲間と考え、ホワイトボードに答えを示す。
 - ・答えとともに、簡単に解説をする。
- ④ パラグアイ体験
 - ・マンディオカチップス、チパ、テレレの飲食とともに、パラグアイのカードゲームや教科書、新聞、お金や民族衣装などパラグアイの文化を体験する。
- ⑤ ふりかえり
 - ・パラグアイの文化に触れて感じたことや、考えたことをふりかえり、グループの仲間と共有する。



<パラグアイの国旗は表と裏があるんだよ>

2 児童生徒の活動の成果・反応

- ◇ パラグアイクイズで、テレレは回し飲みをするということを知ると、「えーっ」という驚きの声が返ってきた。しかし、テレレを体験した子どもの中には、実際に体験してみると、イメージしていたものと違って偏見がなくなったという感想もあった。
- ◇ パラグアイについて様々な体験をしながら知った子どもたちは、他の国の文化も知りたいと異文化に触れることの楽しさを感じているようだった。
- ◇ パラグアイという国についてほとんど知らなかった子どもたちだが、ゴマや日系人がいることなど、日本と多くのつながりがあることを知り、興味を高めることができた。

3 使用した教材

<教材6> パラグアイボックス 2016

<教材7> テレレセット・チパ・ゴマ



<テレレボットを使ってみよう>



<ちょっと苦いけれどおいしい！>



<ニヤンドウティってすごい細かいね>

8 時限目「ちがいのちがい みんなちがっていて本当にいいのかな？」

この時限のねらい

- ・ あってもよい違いを考えることで、一人一人の違いを肯定的に捉えることができ、あってはいけない違いがあることを考えることで、相手を思いやることや、他人を傷つけてはいけないこと、人として大切にすべきことを考える。

1 児童生徒の活動の流れ

- ① アイスブレイキング (Yes, No カード)
 - ・ 教師の質問に対し、「はい」「どちらかといえばはい」「どちらかといえばいい」「いいえ」で答える。
 - ・ その答えを出した理由をグループの仲間に 20 秒で伝える。
 - ・ この活動をした感想を共有する。
- ② ちがいのちがいを考える
 - ・ 様々な違いが書かれた 12 枚のカードの内容をグループで話し合いながら「あってもよいちがい」「あってはいけないちがい」「どちらともいえないちがい」の 3 つに分ける。
 - ・ 分類したカードの共通点について考え、言葉で表現する。
 - ・ どのような言葉で分類したのかを全体で共有する。



<考えていることは少しずつ違うんだね>



<うーん、これはどれに入れようかな>

③ あってはいけない違いを放っておくと【派生図】【回し読み】

- ・あってはいけないちがいを放っておくとどうなるか、グループで派生図を作成する。
- ・派生図の回し読みをする。
- ・なるほどと思った考えに☆を付ける。

④ ふりかえり

- ・これまでの学習を振り返りグループで感想を伝え合う。
- ・あっていい違いと、あってはいけない違いがあることを確認する。



<放っておくと大変なことになるね>

2 児童生徒の活動の成果・反応

- ◇ 参加型のグループでの学習を続けてきたことで、お互いの意見が違ってても、それを、認め合える雰囲気が出てきた。
- ◇ 「あってはいけないことを放っておくと誰かが傷ついてトラブルになってしまう。だからなくしていきたい。」というような感想が多く見られた。
- ◇ ワクチン接種により助かる命と助からない命や、小学生がガムを売って生活している現状などに対して、国の事情だから、あってはいけない違いではなく、どちらともいえないに分類している子どもたちがいた。これに関しては、子どもたちの意識を変えないといけなと感じた。

3 使用した教材

<教材8> Yes、No カード

<教材9> ちがいのちがいかード

9 時限目「あってはいけない違いとその解決について考えよう」

この時限のねらい

- ・パラグアイと日本の違いを肯定的に受け取りながらも、あってはいけない違いについて知る。
- ・パラグアイの貧困という課題に対して働きかける人について知り、課題解決に大切なことは何かを考える。

1 児童生徒の活動の流れ

① パラグアイの陰

- ・パラグアイあってもよい違いについて写真を通して確認する。
- ・パラグアイのあってはいけない違い(貧困)について写真を通して知る。
- ・動画と教師の説明により、カテウラ地区の現状について知る。
- ・カテウラ地区の困ることについて想像してグループで考える。

② 課題を解決するために

- ・課題を解決するためにはどのようなことができるのか話し合っ考える。
- ・課題を解決しているカテウラ音楽団について知る。
- ・カテウラ音楽団とその創始者ファビオさんの動画を見る。
- ・課題を解決するために大切なこと5か条を考え、グループで共有する。

③ ふりかえり

- ・学習を通して感じたことや考えたことを書き、共有する。



<物ではなく、心が大切なんだ！>



<課題を解決するには・・・>

2 児童生徒の活動の成果・反応

- ◇ パラグアイを、平和で楽しいイメージの国ととらえていた子どもが多く、カテウラ地区の動画を見せた際には、食い入るように真剣に見ていた。そして、このような貧困の問題はあってはいけない違いだから、自分も関わって解決していきたいと考えた。
- ◇ ファビオさんの話の、「物では、人は変えられないから視野を広げることが大切である」ということが印象に残った子どもが多かった。
- ◇ 課題解決に大切だと思うことを考える際には、これまでの学習や普段のクラスの活動として行ってきたクラス会議でのことを生かし、一人一人が真剣に考え、発表しあうことができた。

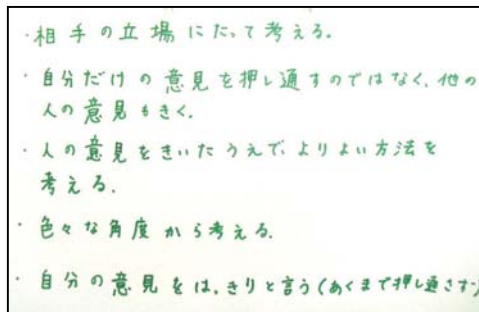
3 使用した教材

<教材10> パラグアイの写真

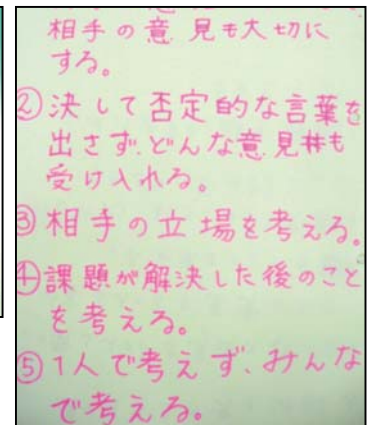
<教材11> カテウラ地区・カテウラ音楽団・ファビオさんの話の動画



<あってはいけないちがいを放っておくと>



<課題解決に大切なこと5か条>



10-11 時限目「わたしたちのクラスや学年はどうだろう？卒業までの私のプロジェクト」

この時限のねらい

- ・クラスや学年の良いところ、改善したほうが良いところを出し合う中で、クラスや学年を見つめ直す。
- ・卒業までに自分の取り組めることを考え、プロジェクトを作り、行動に移していく。

1 児童生徒の活動の流れ

- ① クラスの良いところ、改善したほうが良いところ【対比表】
 - ・グループでクラスの良いところ、改善したほうが良いところを対比表に出し合う。
 - ・出し合ったものを見て、学年にも関わるものはないか考える。
 - ・表を見ながら、優先的に解決したほうが良いものを個々に考える。
- ② プロジェクトづくり
 - ・をリストアップした中で、卒業までに自分が取り組むことができそうな内容を自分・クラス・学年に分け、すぐにできる・ちよつとの努力・努力で何ができるのか考える。
 - ・プロジェクトを作る。(なぜ、どのように、いつ、だれが行うのかが分かるように)
- ③ プロジェクトの発表
 - ・自分の考えたプロジェクトを発表する。

④ みんながみんなのサポーター

・プロジェクトに対する応援のメッセージをお互いに書き合う。

⑤ パラグアイで出会った人々からのメッセージ

・課題と向き合い、解決をするために活動していた人々からのメッセージ動画を見る。

2 児童生徒の活動の成果・反応

◇ 今後実践していく予定である。

3 使用した教材

<教材12> メッセージ動画

■ 全体を通して

1 授業の様子



<お互いのことを知って大切だね>



<世界にはいろんな食卓があるんだね>



<チパっておいしい!>



<ラオスとモンゴルの衣装を着てみたよ>

2 参考文献・資料

- 1) 開発教育協会『写真で学ぼう!「地球の食卓」学習プラン 10 改訂版』2017年
- 2) 開発教育協会『開発教育実践ハンドブック』2012年
- 3) 開発教育指導者研修資料

VIII. エチオピア実践報告書

エチオピア実践報告書の内容一覧

No.	名前	対象	時間数	タイトル
1	足立 友香	特支学校中学部3年	22時間	ひらけ！世界のとびら！
2	木村 智子	中学校3年生以上	3時間	「知る」を「知る」 ～knowledge is power to save the world～
3	児玉 恵理	中学校2年生	6時間	世界とのつながり ～日本で生きる自分と世界で生きるあなた～
4	三小田 京子	小学校3年生	9時間	笑顔をふやそう！～違いを認めて～
5	白神 大典	中学校1、2年生	8時間	誰かのことを想うとき、 あなたと世界の枠が外れる。
6	白木 純子	小学校4年生	12時間	食から広がるMY WORLD
7	谷口 加恵	高校3年生	4時間	「ものがたり」を知って豊かになるわたしと世界
8	前地 直樹	小学校4年生	4時間	エチオピアを知り、自分を知る

ひらけ！世界のとびら！

所属	静岡県立富士特別支援学校	実践者	足立 友香
対象	知的障害課程 中学部3年(30名)	時間数	22時間
場所	教室	実践教科	総合的な学習の時間 生活単元学習
ねらい	<p>テーマ【共生】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・世界の国に興味関心を持つ。 ・国の文化の違いに気が付き、互いの良さを見つけることができる。 ・他国の言語や文化について調べたことを、自分なりの表現で他者に伝えることができる。 ・学年の仲間と協力して活動に取り組んだり、互いの良さに気が付いたりすることができる。 		
実践内容	回	プログラム	備考
	1-2	<p>【ひらけ！世界のとびら】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・知っている外国の名前を書き出してみよう<ブレインストーミング> ・ワールドクイズに挑戦！（国旗、食べ物）<クラス対抗クイズ> 	A3用紙、マジック 世界地図、地球儀 パワーポイント
	3-5	<p>【エチオピアについて知ろう ～足立先生が行ってきました！～】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・写真や動画を見てみよう！ <フォトランゲージ> (風景、言葉、文字、人、食べ物、町の様子、動物等) ・見て・触って・感じよう(エチオピアコーヒーセット、紙幣) <実体験> ・エチオピアクイズ！（日本のトイレとの違いは？）<対比> ・エチオピアコーヒーの話を読み聞かせ ・友達とアムハラ語で挨拶をしてみよう <実体験> ・衣装を選んで着てみよう <実体験> ・エチオピアダンス(足のステップ)をしてみよう <実体験> <p>【アフリカンミュージックを楽しもう】(学校行事:スクールコンサート)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・コンガやタンザニア出身の演者によるジャンベの生演奏を味わう <p>【インジェラを味わおう】(学校給食:アフリカの料理)</p>	エチオピアで撮影した画像や購入した物(コーヒーカップ、ポット、エチオピアブル、衣装等)
	6-7	<p>【自分のお気に入りの国について調べよう】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日本(修学旅行先)について (着物、音楽、方言等) ・エチオピアについて (アムハラ語、ダンス等) ・イギリスやアメリカ(ALTの出身国)について (歌、英語等) 	A3用紙 各国の特徴的な名物や名産の写真
	8-21	<p>【ワールドリサーチイッテQ！～発表会で保護者に伝えよう！～】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各国の衣装や文化、音楽を知ろう <対比表><実体験> ・3カ国の国旗カラーを使用したミサンガやコースターを作ろう ⇒保護者参加型の発表会、生徒作品をプレゼント 	アムハラ語の表 衣装、国旗
	22-23	<p>【いいとこリサーチイッテQ！】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・発表会のビデオを見て振り返りをしよう ・自分の頑張ったこと、友達の良かったことを発表しよう 	
	成果	<p>・エチオピアの自然、音楽、言語、衣装など現地で得た情報や実物を活用したことで、とても興味をもって、五感で感じながら学ぶことができた。エチオピアという未知の国を肯定的に受け入れ、親しみをもつことができた生徒が多い。情報や体験を受けるだけでなく、学んだことやもっと調べてみたいと思ったことを発表会に向けて生徒自身がまとめ、表現できたことがとても良かったと思う。</p>	
課題	<p>・日本で暮らす中でも身の回りに外国の物が多くあることに気がつき、世界の恩恵を受けていることに感謝の気持ちをもつことや日本と世界が繋がっていることに気がつくことができるような内容に今後取り組んでみたい。</p>		
備考			

[授業実践の詳細]

1-22 時限目「ひらけ！世界のとびら」

この時限のねらい

- ・外国の文化に興味をもつことができる。
- ・クラスの友達と話し合ったり声を掛け合ったりしながら活動に取り組むことができる。

1 児童生徒の活動の流れ

- ① 外国の名前 いくつ知っているかな？クラスで挙げてみよう
【ブレインストーミング】
- ② ワールドクイズに挑戦！（国名⇄国旗）（国名⇄料理）



<どこの国の国旗だろう？>

2 児童生徒の活動の成果・反応

- ◇ 1クラス 10カ国ほど、国名を挙げる事ができた。
- ◇ 日本でもよく知られている料理と珍しい料理を織り交ぜて問題にしたことで、「分かる！知ってる！」というものから「初めて見た！なんだろう？」と友達や教師と会話を交わしながら考える事ができた。
- ◇ クラス対抗形式にすることでクラスの仲間と協力して考える事ができた。また、正答の時は、友達とハイタッチして喜び合う姿も見られた。



<地球儀でさがしてみよう！>

3 使用した教材

<教材1> パワーポイント



3-5 時限目「エチオピアについて知ろう ～足立先生が行って来ました！～」

この時限のねらい

- ・エチオピアの文化に興味をもち、映像を見たり話を聞いたりすることができる。
- ・楽しみながら文化体験(民族衣装の扮装体験、ダンス)をすることができる。

1 児童生徒の活動の流れ

- ① 写真を見て、気がついたこと、興味をもったことを発表しよう【フォトランゲージ】
- ② エチオピアブル(紙幣)を見てみよう、エチオピアコーヒーの匂いはどう？
- ③ エチオピアと日本の違い ～トイレの使い方編～
どうしてトイレトペーパーを流さないのだろう？トイレトペーパーの比較実験をしてみよう！【対比】
- ④ エチオピアのコーヒーはとて有名！「コーヒーの始まり物語」読み聞かせ
- ⑤ アムハラ語で挨拶をしてみよう
- ⑥ 民族衣装を着てみよう お気に入りを選んで写真を撮ろう！ アフリカンファッションショーをしよう
- ⑦ エチオピアのダンスをやってみよう！

2 児童生徒の活動の成果・反応

- ◇ インジェラを写真で見ると「おいしそう！食べてみたい！クレープみたい」と様々な感想が聞かれた。
- ◇ 紙幣(エチオピアブル)を見て、「日本のお金と違う！」「かっこいい」と感想をもつ生徒がいた。
- ◇ チャモ湖のワニの映像を見たときは、テレビに釘付けになっている生徒が多かった。本物のワニがとても近くで写っていることに驚きながらも、「動いた～！！大きい！」などと興奮している様子だった。
- ◇ エチオピアのアムハラ族の言語であるアムハラ語で「サラーム！」(やあ！)という挨拶を行なった。挨拶の時に、自分と相手の肩を合わせる所作を伝えたところ、友達と一緒にやってみようとする生徒がいた。
- ◇ 学年の先生方に協力していただき、エチオピア、ガーナ、カメルーンの民族衣装を着て登場してもらった。生徒たちは、興味津々で注目することができた。また、その衣装に惹かれ自分も着てみたいと意欲的に衣装を選択して試着することができた。
- ◇ トイレの使い方の違い(紙を流さない)を伝えたところ自分たち(日本)との違いに驚いている生徒や「どうして？」と疑問を抱く生徒がいた。実際に、トイレットペーパーと水を入れたペットボトルをふって対比実験をすると、「日本のトイレットペーパーは溶けた！」「エチオピアのトイレットペーパーは溶けない！！」と気がつくことができた。「水に溶けないペーパーをトイレに流したらどうなる？」と投げかけると、「詰まって溢れちゃう、トイレが壊れる」と反応があった。「なるほど！だからゴミ箱に捨てなきゃいけないのか」と、とても納得した様子だった。
- ◇ テレビに本の挿絵を映しながら行った「コーヒーの始まり物語」の読み聞かせは、興味深く聞くことができた。現地で購入したコーヒーやコーヒーセレモニーのセットもとてもよく見ていた。
- ◇ エチオピアダンスは現地の JICA 職員が教えてくれたものである。その映像を見せながら、挑戦すると、「難しい～」という感想が多かった。その中でも、1人の女子生徒は休み時間になると私の元へ来て、「ダンスをやりたいです。」と言って練習をした。繰り返し行うことで、リズムカルに足のステップを踏むことができるようになった。その女子生徒は、後の発表会で保護者の前でエチオピアダンスを披露することができた。



〈ワニだ！大きい～！〉



〈アムハラ語で挨拶「サラーム！」〉



〈トイレットペーパーのちがいがい！〉



〈エチオピアのダンス〉



〈エチオピア・カメルーン・ガーナの民族衣装を着てみよう〉

3 使用した教材

- 〈教材2〉 『原木のある森 コーヒーのはじまり物語』 アフリカ理解プロジェクト著
- 〈教材3〉 エチオピア海外研修で購入した民族衣装
- 〈教材4〉 知人から借りたガーナ、カメルーン衣装
- 〈教材5〉 エチオピア海外研修で購入したコーヒーセレモニーのセット
- 〈教材6〉 エチオピア海外研修の滞在先ホテルで入手したトイレットペーパー

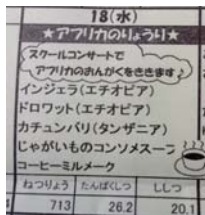


「アフリカンミュージックを楽しもう」(学校行事:スクールコンサート)



＜生徒の感想＞
 ・ダンスがとても楽しかったので、またやりたいです。
 ・オールスターズのみなさんの演奏する太鼓がとてもかっこよかったです。

「アフリカ料理を味わおう」(学校給食)



＜生徒の感想＞
 ・(見本で掲示したインジェラの匂いをかいで) いい匂いがしました。
 ・ドロワットがカレーみたいな味がしておいしかったです。
 ・インジェラの生地がもちもちしていて食パンよりおいしかったです。

6-7 時限目 「自分のお気に入りの国について調べよう」

この時限のねらい

・自分の興味のあること、もっと知りたいことを考え、調べることができる。

1 児童生徒の活動の流れ

- ① これまでの学習を振り返ろう 勉強してきたことは？【ブレインストーミング】
- ② 日本・エチオピア・イギリスアメリカの中でもっと調べたい国を選択しよう



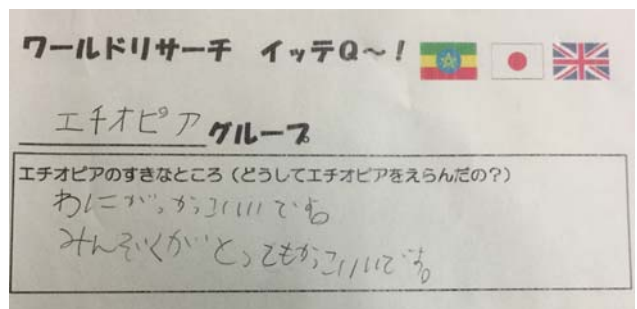
＜どの国の名物、名所だろう？＞

2 児童生徒の活動の成果・反応

- ◇ 学習を振り返り、修学旅行(京都・奈良)を通して学んだことは日本の文化、総合的な学習「ひらけ！世界のとびら」で学んだことがアフリカ、エチオピアの文化、ALTにはイギリスやアメリカの文化を学んできたことを思い出すことができた。
- ◇ 写真を見て、「これは日本の着物だ！」「給食で出たエチオピアの料理だよね？」等と友達と話しながら、各国の写真を振り分けることができた。
- ◇ 3カ国の中からエチオピアを選択しもっと知りたと思った理由を尋ねると、「ワニがかっこいい。民族がかっこいい。エチオピアの言葉をもっと覚えたい、ダンスをやりたい。」という答えだった。

3 使用した教材

＜教材7＞ 各国の名所、食べ物、衣類等の写真



＜エチオピアのどんなところに興味をもったのかな？＞

8-21 時限目「ワールドリサーチ イッテQ 発表会をひらこう！」

この時限のねらい

- ・世界について興味関心を持ち、日本や世界の国々について進んで調べることができる
- ・友達や保護者に向けて、自分が調べたことを相手に分かるように表現することができる。

1 児童生徒の活動の流れ

- ① グループごとに発表会の構想を考える、役割決め、役割練習
- ② プレゼントグループの生徒は、国旗カラーをモチーフにした作品を制作し、保護者にプレゼントすることを目的に活動に取り組む。ミサンガとアイロンビーズを制作する。

2 児童生徒の活動の成果・反応

- ◇ 何を発表したいかと尋ねると、アムハラ語を話したい、ダンスを発表したい、トイレットペーパーの実験を見せたい等と学習をしてきたことを思い出して発表することができた。
- ◇ エチオピアの国旗を作成する中で、国旗色の意味にも触れることができた。希望、愛、平和等の意味が込められていることを覚えて、発表会で伝えることができた。
- ◇ アフリカ大陸の中から、エチオピアの位置を覚え、世界地図を指して発表することができた。
- ◇ アムハラ語で自分の名札を作る活動を行なった。アムハラ文字に「難しい」「絶対に読めない」と苦戦しながらも、形を捉えて書くことや「英語の m みたいだなあ」と様々な感想をもちながら取り組んでいた。
- ◇ アムハラ語のやりとりを友達と行い、会話形式で寸劇を交えて発表することができた。セリフをただ言うのではなく、声に強弱をつけたり身振りをつけて発表したりと表現力を高めることができた。
- ◇ 発表会当日は、アムハラ語を保護者にも話してもらい機会を設けた。勉強したことを親に伝え、一緒に取り組めたことに喜びを感じている生徒の様子が見られた。



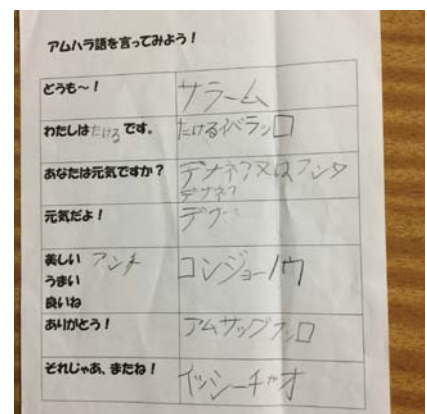
<国旗色の意味を調べました>



<エチオピアの国旗を作りました>



<アムハラ語を書いてみよう&話してみよう>



「ワールドリサーチ イッテQ 発表会の様子」



＜日本グループの発表：琴の発表＞



＜イギリスグループの発表：兵隊の行進、敬礼＞



＜エチオピアグループ：トイレの使い方を説明＞



＜エチオピアグループの発表：国旗色の意味について＞



＜お母さんとアムハラ語で会話をしました＞



＜国旗のアイロンビーズをプレゼント＞

3 使用した教材

＜教材8＞ JICA 職員のサラさんにもらったアムハラ語の表

＜教材9＞ ウェブサイト名 Ethiopia Bet

<http://www.geocities.co.jp/ethiopiabet/amharic/amari/index.html>

22-23 時限目「いいとこリサーチ イッテQ ～発表会の振り返り～！」

この時限のねらい

- ・自分や友達の発表を振り返り、自分や友達の良さを見つけ伝えることができる。
- ・自分の表現について課題を見つけ、今後の学習に向けて目標をもつことができる。

1 児童生徒の活動の流れ

- ① 発表会のビデオを見て、振り返りをする。
- ② 自分の頑張ったところ、友達の良かったところを伝え合い、認め合う。
- ③ 発表会の成功、保護者の賞賛を受けて、全員で達成感を感じる。

2 児童生徒の活動の成果・反応

- ◇ 自分の役割を成し遂げたことで、達成感を感じている生徒が多かった。また、友達の良かった点についても、具体的に「〇〇さんの声のはっきり聞こえて、分かりやすかった。」「衣装がとても素敵だった」等、相手に伝えることができた。
- ◇ 保護者からは「楽しい発表会で世界の国のことを学ぶことができた。」「友達と協力して発表している様子や楽しそうに演じている様子、自分の役割が分かって取り組んでいる様子が良かった。」という感想を聞くことができた。生徒たちは、親に褒められることで、とても嬉しそうだった。

3 使用した教材

<教材10> 発表会を撮影した映像

■ 全体を通して

1 授業の様子

エチオピア海外研修で得た映像資料や現地で購入した物は、全てが教材となり、生徒たちに提示することができた。本物に触れることは、生徒たちの興味関心をひき、「おもしろい！」「もっと知りたい！」という意欲を引き出すことができた。特別支援学校の生徒にとっても、世界を知ること、世界に興味をもつことは大変意義があり、やりがいを大いに感じることもできた。自分自身の実践の第一歩になったので、今後も国際理解教育について学びを深めて、実践をしていきたい。



<帰国後、夏季休業中に学年部の教員に報告>～エチオピアコーヒーとコロをお供に～

- ・チームティーチングで授業を行うにあたって、学年内の教員にもエチオピアの素敵なところを知っていただきたく、研修の学びを共有させていただいた。
- ・コーヒーの産地を気にするようになったと話してくれる同僚や、エチオピアがテレビで取り上げられていたと声をかけてくださる同僚がいた。授業を考える中で、共に学びあうことができた。



<中学部職員に教師海外研修の報告>



<報告時のパワーポイント資料の一部>

2 参考文献・資料

- 1) JICA 中部 開発教育指導者研修資料
- 2) 教師海外研修の写真

「知る」を「知る」～*knowledge is power to save the world*～

所属	愛知県私立愛知高等学校	実践者	木村 智子
対象	中学3年生以上～一般	時間数	3時間(90分×3)
場所	教室	実践教科	土曜講座(国際理解講座)
ねらい	<ul style="list-style-type: none"> ・自分が「地球人」であることに気が付き、参加型の活動を通し、新しい自分や他者との共通点、相違点を認める。【コミュニケーション】 ・世界に目を向けつつ自分の環境を振り返り、これからの自分の起す行動が世界を変える可能性に気付く。 ・すべての「学び」が「よりよい未来」に繋がるところを知る。【教育】 		
実践内容	回	プログラム	備考
	1	<ul style="list-style-type: none"> ・グローバルイシューの提示/参加型への心構えとお願い4C ①6か国語で自己紹介(いきなり難民体験)※スライドあり (アムハラ語(エチオピアの公用語)→スペイン語→韓国語→中国語→英語→日本語) ・グループで感情の共有 英語って何だろう? ・世界共通語の理解≠国際理解 ②国際理解って何だろう? 国って何だろう?[グループ] ⇨色んな人が居る集団 ③自己理解、他者理解を深める(アイズレーキグ2つ) ④「幸せ」とは?(自分にとって/皆にとって/その繋がり)【派生図】【回す】 ⑤ビデオの視聴「飢える国、飽食の国」 ⑥国名カード・繋がりカード・影響カードで「繋がり」について考える(GW) ⑦感想記入 	4C communication collaboration critical thinking contribution ・スライド、模造紙、マジック 高校生のアンケートとエチオピアでのアンケートのスライド ・国名/繋がり/影響カード
	2	<ul style="list-style-type: none"> ①自己理解、他者理解を深める(アイズレーキグ2つ) ②好きなおでんの具はどこから来てる?(生産国や自給率を知る) ③前回の影響カードの振り返り ④「より良いつながり」について考える ⑤エチオピアについて(どんなイメージ?【おカマ】 →[クイズ]やスライドで[おカマ]) ⑥感想記入 	・スライド ・エチオピアクイズ ・現地での写真/音楽
	3	<ul style="list-style-type: none"> ①パースデーライン(ハバール)でグルーピング→アイズレーキグ ②エチオピアについて考える※スライドの鑑賞 (共通点・相違点→相違点の原因)【対比表】 ③「あってはならない違い」に気が付く ④あなたならどうする?(GW) (日本では? エチオピアでは?) ②③④ に共通していること=「知る」機会の欠如 に気が付く ⑤「夢」について考える (自分の夢、そもそも夢って?) ⑥パラグアイについて考える ※英文での状況シートを理解し、自分の役割(A/B)で問題の解決法を考える【個人】-[グループ] ⑦実際にその町のとった行動を紹介する([クイズ]→映像) ⑧感想記入・これから世界に飛び出すみんなへのお願い 	・現地での写真 ・スライド ・英文(高1レベル)と写真 ・映像 landhill harmony in Paraguay
成果	<ul style="list-style-type: none"> ・実際の映像や写真のおかげで生徒(一般の方も)は世界を身近に感じ、自分のことを振り返る機会となっていたようだ。アクティビティに参加する意義を確認してから行ったので、初めての取り組みにも積極的に取り組み、異年齢から刺激を受けあっているようであった。当然のように受ける「教育」の素晴らしさを改めて気が付いた生徒が多かった。色々な教科での学びが線となって繋がった感覚を持つ生徒もいた。 		
課題	<ul style="list-style-type: none"> ・取れる時間が少なく、じっくりと考えてほしい課題なのに時間に追われてしまった。毎時間の受講者が違うので、なかなか深まった感じが得られなかった。特に2回目はエチオピア紹介で終わってしまった。PC がフリーズしてしまうと時が止まってしまうので、繋ぎのものを準備しておく方がよかった。 		
備考	<ul style="list-style-type: none"> ・オープニングやスライドショーや感想の記入時はエチオピアソングをバックミュージックで流した。 ・一番小さい子は年中さんから年配の方は還暦越えの方まで参加者の幅があった。 		

[授業実践の詳細]

1 時限目「地球人としてより良い繋がりを築こう」

この時限のねらい

- ・世界には様々な解決せねばならない問題があること、自分が地球に住む一人であること、一人一人が繋がっていることに気が付く
- ・自己理解→他者理解→異文化理解→国際理解に繋がることを理解し、自分や家族や友達を大切に思えるようになることが、世界平和へと繋がることを理解する。
- ・遠く離れたところに住む人の「幸せ」も自分の「幸せ」と同じように考えることができる。
- ・より良い繋がりを築くために自分にできる一歩を考える。

1 児童生徒の活動の流れ

- ① 一般の方もクラスも性別もバラバラになるように声をかけてグループごとに偏りがないように着席する。
(※以後、一般の参加者(年中からご年配の方まで)も含むが表記を「生徒」と統一する)

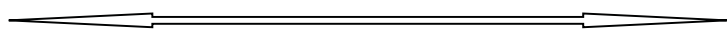
- ① グローバルイシューのスライドを見ながら、大まかに世界で起きている問題を知る。

- ② 参加型の活動の心構え4Cを理解する。

4C: communication(コミュニケーション能力), collaboration(協力、協働力),
critical thinking(多面的思考力), contribution(貢献力) ← 一番日本人が頑張らないといけない、
現在国際社会で求められている力

- ③ ・いきなり難民体験をする。スライドを使いながら教師の自己紹介を6か国語で聞く。

アムハラ語(エチオピアの公用語)→スペイン語 →韓国語 →中国語 →英語 →日本語)

一番遠い言語  一番近い言語(母語)

- ・グループで感情の共有をする。

- a) 全然知らない言葉で囲まれたらどんな気持ちになるだろう？
- b) 日本語が聞こえてきた時の感情はどうだったかな？
- c) ただ、英語(世界共通語)が良くできる≠国際理解ができる ということを知る

- ④ 国際社会、国際理解って何？ 「国」について考える。「国」って何だろう？ 国境って何だろう？

- ⑤ アイスブレイキング 【GW】

- a) 自分について考える 「自分の一番いいところ」、
「自分の直した方がいいところ」、
「自分をモノで例えるなら？ その理由も」

- b) 身近な人に思いを寄せる 「昨日の夕ご飯は？」
「おむすびの好きな具は？」
「昨日の10時何してたのかな？」

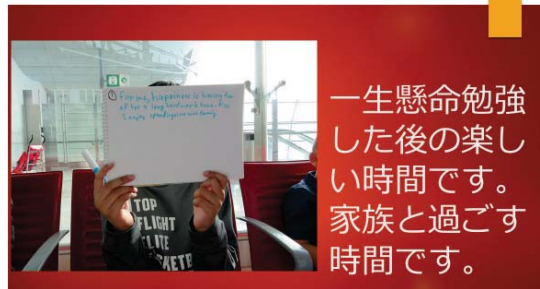
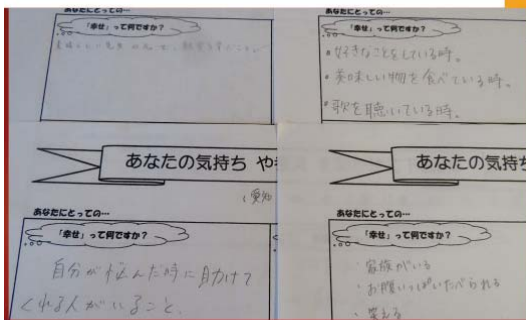
- ⑥ ④⑤を通して自己理解→身近な人の理解→その社会・文化の理解→国際理解 を理解する

⑤b) で勝手に自分のことを決めつけられても、きちんとしたコミュニケーションをとれば誤解や勘違いは訂正できることを知る。正しく情報を伝えることが、問題を大きくさせないポイントであることも理解する。

- ⑦ 今の生活を振り返って…皆さん、幸せですか？ 自分の幸せって何だろう？ 10個書き出す。

3つ使ってグループで発表。事前にアンケートをしておいたもの(高校生編とエチオピアで出会った人々編)をスライドで見る。

- ⑧ そこから見えてくる、「みんなの幸せ」を一つ選び、それを核としてその「幸せ」に繋がるものを派生図で書いていく。【派生図・GW】



※なぜ、少年は顔を隠しているのだろうか？→イスラム教徒であることを想像できるかな？イスラム教徒って？宗教って？



<左:愛知高校生のアンケートの一部>

<右:研修で出会った人々のアンケートの一部>

- ⑧ そこから見えてくる、「みんなの幸せ」を一つ選び、それを核としてその「幸せ」に繋がるものを派生図で書いていく。【派生図・GW】
- ⑨ 派生図を描いてみて、気付いたことをグループでシェアする。
- ⑩ 派生図内の「人」に関わることを○、「モノ」に関わることを□で囲む。
- ⑪ 他のグループの「幸せの繋がり」も見てみる。

コラム的に 人が生きていくうえで欠かせないもの=食べ物

愛知高校(曹洞宗)は必ず、お昼の食事の前には食事訓をお話します。一般の方々もいらっしゃいましたし、せっかくなので愛知高校生全員が、起立し合掌&食事訓を披露してもらいました。

Key word: 食べるもの
愛知高校 曹洞宗 食事訓 があります！

- ▶一つには功の多少を計り、彼の栄枯を置る。
- ▶二つには己が徳行の全欠を付って、供に応ず。
- ▶三つには心を防ぎ、過を離るることは、貪等を宗とす。
- ▶四つには正に良業を事とするは、形枯を煮げんがためなり。
- ▶五つには成道のための故に、今この食を受く。

- ⑫ ビデオの視聴「飢える国、飽食の国」を通し、「つながり」について考える。飽食の国と飢える国の原因や歴史について学ぶ。負の連鎖に気が付く。
- ⑬ カードを使って各国との繋がりを可視化する。
 - a) 10 か国の国名カードと繋がりカードをグループで協力してマッチングさせる。
 - b) 影響カードも配り、繋がりからさらにマッチングさせていく。
 - c) 教師からの答え合わせで、良いつながりと良くないつながりがあることを知る。
 - d) 良い繋がりの中に、先進国で生きる自分が知らず知らずに、問題の一端を担ってしまっていることに気が付く。→今後、どういう行動がより良い関係作りに繋がるのだろうか？
- ⑭ 自分の幸せは誰かと繋がって成り立っていることに気が付き、さらにそれが良いつながりでなければ、持続可能な「幸せ」は訪れないことを知る。
- ⑮ みんなの幸せのために、今の自分にできそうな一歩が何かを考える。

2 児童生徒の活動の成果・反応

- ◇ 一般の方と共に、いきなりの多言語の環境に入り、緊張で顔がこわばり、非常に静かな様子であった。
 - a) どんな気持ち？」と聞かれても、「??」の表情であったが、「不安や恐怖」という言葉に大きくうなずき、b)で「日本語＝安心や嬉しい」という表現にほほ笑む姿があった。c)で英語は実はみんなの中では非常に身近な言葉であること、そして何より受験勉強だけのためではなく、世界中でたくさんの困っている人を助けられる力のある言葉であることを話すと、英語への関わり方も変わり、また違った引き締まった表情となった。
- ◇ 自分の幸せが単独では成り立たず、必ずどこかの誰かにお世話になっていることに気が付くことが出来た。目に見えない繋がりが、遠い国々まで続いていき、今の自分たちの生活があることを知り、開発途上国に住む人々の願う幸せもまた自分たちとほとんど変わらないことにも気が付けた。みんなの願う「幸せ」が持続可能である世の中であるためにはどうしたらよいか、を自分の言葉でまとめることが出来た。
- ◇ 「飢える国、飽食の国」の現状や、その原因が人工的に招いたものであることを知り、心を痛める生徒もいた。
- ◇ 参加型の活動自体初めてであり、しかもほぼ初対面の異年齢集団であったが、生徒は楽しそうによく取り組んでいた。



<成果物の例>

<生徒の感想>

- ・もっともっと世界のことが知りたい、日本がどんなことを支援しているのか知りたい。
- ・世界では食糧を作らせないために現地の人の体の一部を切断するという残酷なことが起こっていたことを知り、言葉が出ませんでした。自分が知らないこと(無知)って怖いな、と思いました。
- ・関係ないと思うことも、自分に何かしらの影響があるということを知りました。自分が生きていることに幸せを感じるのですが、まず自分ができる一歩かな。
- ・自分が得た情報や体験を共有できそうな場で発信することが大事だと思った。世界の状況にアンテナを張ること、身近な人を大切にすることから始めます。(多数)
- ・どこの国の人も同じように「幸せ」を感じる！ことが分かりました。なぜ裕福な国と貧しい国ができたのか、その歴史に興味が出ました。

<一般の方の感想>

- ・国が貧しくなるには理由があり、人間が原因だったりするのだと知り、悲しくなりました。色んな国、色んな人に関心を持って、可能性を広げていける学生さんが育ってくると素敵だなと思いました。私もその可能性を広げられるような環境を自分のできることで作っていきたいと思いました。
- ・いろんな国で開発支援に携わる人のことが知りたいです。
- ・家族の帰りを笑顔で迎え入れることが大切にしていきたいことです。

3 使用した教材

- <教材1> 事前にとったアンケート
- <教材2> エチオピア研修で出会った人々のアンケート
- <教材3> 「飢える国、飽食の国」 地球データマップ <https://www.youtube.com/watch?v=7R9knZLXH8Q>

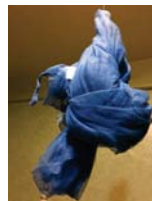
2 時限目「エチオピアと肯定的に出会う」

この時限のねらい

- ・自分を見つめ、他者との違いを認め、受け止める→日本を見つめ、他国との違いを受け止める
- ・日本の食卓を振り返り、自給率の低さを知り、他国に頼っている現状を理解し、より良い繋がりを考える。
- ・研修国エチオピアについて肯定的に出会う。
- ・教師の話やクイズや写真からエチオピアを知り、日本との共通点や相違点に気が付く。

1 生徒の活動の流れ

- ① 前回までの流れを教師が口頭で復習する。
- ② アイスブレーキング
 - a) 自分について・・・「自分の長所と短所」「好きなおでんの具」
 - b) 他者との違いを認め合う・・・ピンクの付箋「はい」「どちらかというとはい」
 青い付箋「いいえ」「どちらかというといいえ」を用いて教師からの質問に同時に答え、その理由を手短かに話す
 [質問例] ・私は猫派だ / ・日本はいい国だ / ・制服は要らない / ・自分のことが大好きだ / ・死刑制度に賛成だ など
- ③ みんなが好きなおでんの具(大根・卵・こんにゃく・ウインナー・牛筋・もち巾着・じゃがいも・ちくわ)の日本の自給率を推測させた上で、実際の数字を知る。またそれがどこから来ているのかを考える。
 日本の食糧自給率が低いことを知り、他国にかなりの割合で頼っていること、頼らないでは今の食生活が成り立たないことを理解する。
- ④ 前回の「良い繋がり」を築くことが欠かせないことを確認する。
 その繋がりが、昔より現在の方が目に見えにくくなっていること、生産者やその工程や製品が出来上がるまでの計り知れない人の手がかかっていることに気が付く。昔よりお世話になっている人や手間の数は増えているのでは？感謝の気持ちは反比例していないか？
- ⑤ エチオピアについて知っていることをグループで話す。→クラス全体でイメージをシェアする。【ポップコーン】
- ⑥ エチオピアについて3択クイズを通して楽しく知る。
 [クイズの例]
 Q1 エチオピア人と日本人が最初に会ったのは何時代でしょう？〔室町・江戸・明治〕 A 室町
 Q2 10年前エチオピアに行く日本人観光客は年間何人くらいでしょう？〔1000人・2000人・3000人〕 A 約2000
 Q3 エチオピアから多く輸入しているものは次のうちどれでしょう？〔紅茶・緑茶・コーヒー〕 A コーヒー
 Q4 エチオピアで5月5日は何の日でしょう？〔こどもの日・愛国者勝利の日・体育の日〕 A 愛国者勝利の日
- ⑦ エチオピアで撮った写真を通して「これは何でしょうクイズ」
 異文化と楽しく出会う 写真例 ①トイレの水桶 ②歯ブラシ ③蚊帳 ④靴磨き機 など



- ⑧ その他の写真を見て、エチオピアと日本との共通点、相違点を見つける。(約80枚)

⑨ 感想の記入

2 児童生徒の活動の成果・反応

- ◇ 自分のことを振り返りつつ、その理由を述べるアイスブレイキングでは慣れていないせいか、時間がかかっていた。日頃から、自分の内面を表現する機会の必要性を感じた。
- ◇ 身近に食べている和食でさえ、国際化(×西洋化)が進んでいることを知り、驚き少し残念な様子の生徒もいた。
- ◇ 自給率の低さに驚き、改めて他国への感謝を表す生徒もいた。
- ◇ エチオピア自体の認知度が低く、アフリカ大陸のどこにあるかもよく分からず、想像すらできない様子であったが、3択クイズを通じて興味を持ち始めている様子であった。
- ◇ 「これは何でしょうクイズ」は実際の写真なので、グループ内で色々な意見が出て面白そうに取り組んでいた。
- ◇ エチオピアの写真のスライドを見て、日本とエチオピアの共通点と相違点を書き出す活動では、一人一人が一生懸命に取り組み、グループ内で気づいたことを発表できた。

3 使用した教材

<教材4> 日本の食料自給率:農林水産省 www.maff.go.jp/j/zyukyu/zikyu_ritu/012.html

<教材5> エチオピアで撮った写真

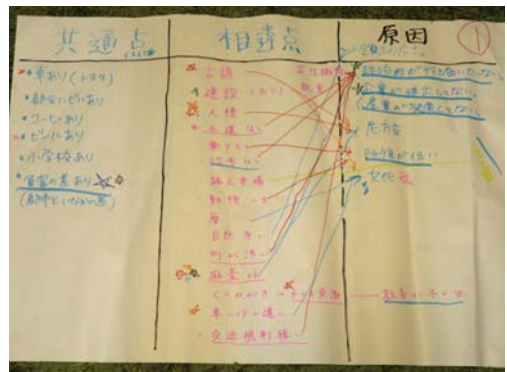
3 時限目「『知る』を知る」

この時限のねらい

- ・できるだけ異年齢の人とたくさん意見を交換する。
- ・エチオピアに肯定的に出会い、日本との共通点、相違点に気が付く
- ・「あってもよい違い」「あってはならない違い」に気付き、「あってはならない違い」の原因を考える。
- ・エチオピアでの体験話を聞き、「知識」を得る機会の重要性＝教育の重要さに気が付き、自分の関心のアンテナを高く張れる人となる。
- ・パラグアイでの「貧困」に対する取り組みを知り、「貧困」について考え、自分の言葉で表すことができる。

1 児童生徒の活動の流れ

- ① アイスブレイキング(異年齢を均等にグループ分けするため)
バースデーラインを作り、グルーピング。言語は使わず、教室内で生年月日の順に並ぶ。
→実際のコミュニケーションの8割がノンバーバルで伝わっていると言われることもあり、言葉だけでなく、表情や服装や状況で人はその場を読み取ることをする生き物であること、言葉を正しく使えば、さらに深く物事を伝えることができること、人には誤解を解いたり、質問したり、する力があることを伝える。
- ② 前回までの学びの復習を教師が口頭で行う。
- ③ 簡単にエチオピアのイメージをグループ内でシェアし、クラス内でもシェアする。
- ④ エチオピアの写真を見て、日本との共通点、相違点を見つける。(約80枚)
・個人でA4の紙に対比表を書かせ、全てスライドを見終わった後にグループで一枚模造紙に【対比表】を右端1/3を空けて作る。



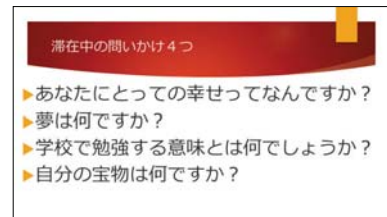
- 出来上がった対比表を見て、グループで感想を述べる。
- 相違点の中に日本との違いの中で「あってよい違い」と「あってはならない違い」があることに気が付く。「あってはならない違い」にアンダーラインを引く。
- 空けておいた空白部分に、相違点の原因となっているものを書き上げていく。



【因果関係図】【ブレンストーミング・出来上がった模造紙を回覧し、「なるほど!」と思ったり、新しい視点があれば、☆印を付けていく。

→肯定的に評価されると人は意欲的に学ぼうとする。

- ⑤ こんな時あなたならどうする?クイズをし、自分の意見をグループ内で話す。
→教師は「エチオピアではね・・・」とエチオピアでの体験を話す。
エチオピアでの私が不思議だなと思った点を、生徒に考えてもらう。
→教師は「実は・・・らしいよ。」とエチオピアでの体験を伝える。
- ⑥ ④⑤を通して、エチオピアの抱える問題が、「国民の知識の欠如=『知る』機会の欠如」であることを認識する。→様々な問題を解決するためにはそもそも「知識」を得る環境が整っていないといけないということに気が付く。
- ⑦ 夢とは何か?
• 教師が派遣期間中に会った人たちに問い続けてきた4つの質問を紹介し、自分の夢って何だろう?そもそも「夢」って何だろう?を考える。
• エチオピアで出会った17歳の靴磨きの少年について教師の話を書く。
- ⑧ パラグアイについて、教師からざっくりと基本情報(開発国の一つであること、エチオピアよりは経済力がある国、日本から一番遠い国である・・・etc)を得る。
- ⑨ パラグアイのカテウラ地区で生活する子供たちと地域の問題を解決したいと考えるソーシャルワーカーのファビオさんの話を英語で読み A/B の役になりきる。
A:カテウラ地区の子供たち 役になりきって「どういう気持ちか?どうしてもらいたいのか?」を書き出す。
B:ファビオさん 役になりきって「問題解決のために何ができるか。」を書き出す。
- ⑩ グループで自分の意見をシェアする。
- ⑪ 実際のファビオさんのとった行動を考える。
1つ目: 路上生活をしている親子に雨風のしのげる家を作ってあげた。
→一年後様子を見に行くとなったでしょうか?(A 家の前の路上で暮らしていた)
→モノ(やお金)で人は変わらない。希望がない(hopeless)の状態がホームレスの状態に繋がるので、と考える人々に生きる希望を与えたいと思うようになる。
2つ目: 廃材から楽器を作り、オーケストラをするようになった。
- ⑫ 実際の映像を視聴する。
- ⑬ 教師から次の時代を担う生徒へのメッセージを送る。
- ⑭ 感想の記入。貧困とはいったい何だろ?自分の言葉でまとめてみよう。



2 児童生徒の活動の成果・反応

- ◇ エチオピアの現状に興味深く耳を傾け、「あってはならない違い」の原因を考えていた。
- ◇ 海外に興味のある生徒が多い会だったので、積極的に問題解決に向けてどうしていく方がいいのかを話し合っていた。

＜生徒の感想＞

- ・貧困はお金がない状態の生活を指すことだと思っていた。でも、スライドにあったように、「生きる力」「希望」「心」がない人のことを示すのかなと思った。未来という希望が貧しいから困る、新しい一歩を踏み出さない、そういうことを貧困というのかなと思った。
- ・自分が当たり前に行っていることができない国があり、生きるのが必死としり、とても罪悪感を感じた。自分の英語力を向上させ、それらの国を学び、自分ができることを探し、役に立ちたいと感じた。
- ・日本人は世界を表面上でしか理解していない。教科書で学ぶ事以外でのことも知るべき。
- ・モノやお金がないことよりも希望や夢がないことの方が悲惨な貧困だと思いました。自分や周りの人の利益のために行動するのではなく、もっと広い視野で物事をみることが大事だと気が付きました。
- ・世界の問題を他人事だとは思わず、自分にできることはないかを考えていけるような人になりたい。

3 使用した教材

＜教材6＞ エチオピアで撮った写真

＜教材7＞ English Communication, PROMINENCE I L4 “Landfill Harmonic” Part1

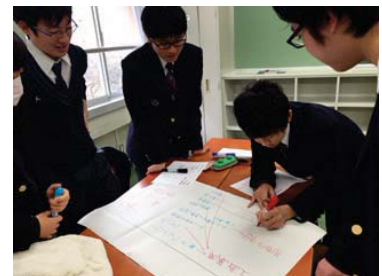
＜教材8＞ Landfill Harmonic

<https://www.youtube.com/watch?v=fXynrsrTKbI>

■ 全体を通して

1 授業の様子

一コマ90分という長さで、異年齢の入り混じる初対面同士の時間ということで、アイスブレイキングの時間が重要となる。アイスブレイキングや参加型の授業の概念を理解させるということが、90分生徒が活動的に過ごせられるかどうか、自分の気持ちを素直に表現できるかにかかっていることがよく分かった。一回限りの授業の中で、どうしたら生徒たちの心に残る授業ができるのか、遠い遠い国の話を自分事のように考えられるのか、今後の生活をほんの少しでも世界平和のために変えられるのか(生徒がスモールステップを踏めるか)を考え授業を作ってみた。しかし、どの授業もどちらかというじっくり考える時間より情報提供の時間の方が多くなってしまったように感じている。限られた時間の中で、伝えたいことを厳選する必要性を痛感した。生徒の感想の中に、現状を引き起こした歴史的背景や日本のサポート体制について興味を持った意見が多く見られたので、開発国と日本との関係や日本の取り組みもこれから紹介していきたいと思っている。教科を超えて、学年を超えて、色んな生徒の様子が見ることができ、授業展開は難しかったものの、改めて学年を超えて意見を交わせた時間が持てて生徒にとっても私にとっても貴重な時間となった。もっともっと世界のことを勉強しなくては！と思った。



2 参考文献・資料

- 1) 2016年度 教師海外研修「パラグアイ・エチオピア」報告書 JICA 中部

世界とのつながり ～日本で生きる自分と世界で生きるあなた～

所属	三重県いなべ市立藤原中学校	実践者	児玉 恵理
対象	中学校2年生	時間数	6時間
場所	教室	実践教科	英語
ねらい	<ul style="list-style-type: none"> ・他国と肯定的に出会い、その国や日本の良さに気づく。 ・世界と自分(日本)がどのように関わっているかを知る。 ・日本で生きる自分と、世界で生きるあなた、自分の可能性やこれからについて考える。 		
実践内容	回	プログラム	備考
	1	<ul style="list-style-type: none"> ① 「アフリカのイメージは？」(ペアで) ② これって何？エチオピアと日本の違い(班対抗) ③ エチオピアと日本のつながり、それぞれの国の魅力を知る 	<ul style="list-style-type: none"> ・スライド、ペン ・Teddy Afro の音源、デッキ ・ワークシート
	2	<ul style="list-style-type: none"> ① Why do you study? なんで勉強するの？(勉強の役割、自分の役割)【派生図】 ② 自分なりの考えを班で交流した後、エチオピアでインタビューしてきたアンケート、写真、動画をスライドで見る。 ③ 自分なりの思いや理由を英語で書く。 ④ 感想を書いて発表。 	<ul style="list-style-type: none"> ・中学生のアンケートとエチオピアでのアンケート・インタビューのスライド ・B4の紙とペン ・ワークシート
	3	① 世界にはどんな仕事があるのか考える。	・スライド
	4	② エチオピア研修で出会った5人の生き方について読みとる。	・ワークシート、5人の写真
	5	<ul style="list-style-type: none"> ③ 読みとった内容を班で交流する。【他者紹介】 ④ What is your dream? / What do you want to do?(将来について考える) ⑤ 自分の「将来」を英語で書く。 ⑥ 発表会を行う。 	
	6	<ul style="list-style-type: none"> ① 世界とのつながりを知ろう。 ② 昨日の夜ごはんは？(ペアで) ③ チョコバナナ、お好み焼きは「どこから？」「何から？」【ブレインストーミング】 ④ 「植物油脂」=「パーム油」世界とつながっている私たち(日本) ⑤ パーム油のいいところと問題点 ⑥ 感想を書いて交流。 	<ul style="list-style-type: none"> ・B4の紙とペン ・どうなってるの？世界と日本 ・パーム油についての資料、スライド ・感想用紙
成果	日本以外の国に興味を持って楽しそうに授業を受けていたのが印象的である。また、世界の人々の生活やその様子を紹介したことで、日本に住む自分の生活を振り返ることができ、「自分にできること」や「自分のこれから」について考えることが出来ていたのが良かった。		
課題	授業時間を十分に取る事が出来なかった。また、英語の時間しか取れなかったので内容が英語の授業に少し偏ってしまうことがあった。研修で教えていただいた手法をあまり使えなかったため、これからはもっと使っていき、練習していきたいと思う。		
備考	<ul style="list-style-type: none"> ・映像や音楽があると生徒は興味を持つので、資料をしっかりと準備しておく。 ・学校の家庭の教科でもフェアトレードについて学ぶそうなので、連携して授業をしていけるといい。 		

[授業実践の詳細]

1 時限目「エチオピアについて知ろう」

この時限のねらい

- ・エチオピアと肯定的に出会う。
- ・エチオピアと日本のちがい、共通点を知る。

1 児童生徒の活動の流れ

- ① ホットポテトでウォーミングアップ(二人組に消しゴム一つでお題について一言言っていく)
お題は「アフリカのイメージ」！たくさん言えた人の勝ち！
- ② 班対抗「エチオピアクイズ」(文化、生活の様子、伝統の踊り)
- ③ エチオピアに触れよう！(お金、コーヒーセレモニーグッズ、テフ粉、帽子やスカーフなど)
- ④ 授業で分かったこと、感想を書く。

2 児童生徒の活動の成果・反応

- ◇ 教師が撮ってきた写真をクイズ形式で見せることで興味を持つことができ、班員と相談しながら楽しくエチオピアについて考えていた。また、日本とエチオピアのちがいについても興味津々な様子だった。
- ◇ エチオピアの同じ世代の子の様子を見て、日本の様子との違いにも驚いていた。
- ◇ 実物に触れることでエチオピアを身近に感じているようだった。



【生徒の感想】

- ・エチオピアの場所も知らなかったけど、生活の様子を知ることができて良かった。
- ・同じくらいの年の子でも、学校に行けず働いている人もいるんだと知らなかった。学ぶことができるんだからちゃんと勉強しようと思う。
- ・エチオピアの伝統的な踊りを見ることができて面白かった。インジェラの味が気になった。

3 使用した教材

- ＜教材1＞ エチオピアで撮影してきた写真・ビデオ(パワーポイント)
(トイレ、主食、踊り、ワニ、トヨタの車・電化製品など)

2 時限目「Why do you study?」

この時限のねらい

- ・世界の人々のインタビューから「なぜ勉強するのか」について考える。
- ・色々な人の生き方を知り、自分なりの生き方について考える。

1 児童生徒の活動の流れ

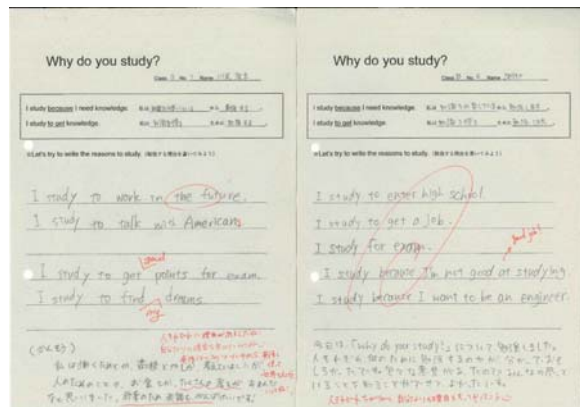
- ① 「Why do you study?」について班でそれぞれの意見を出し合う。【派生図】
→班で交流し、様々な理由があることに気が付く。
- ② 空港やエチオピアで撮ってきたインタビュー内容を見る。
→英語からどんなことを言っているかを想像する。
→自分たちが出した意見とどう同じか、異なるかを見つける。
- ③ いろんな人の理由を聞き、自分の理由について考える。
→「～するために」と英語で理由を書く。
→インタビューを見て感じたこと、自分で考えたことについて書く。

2 児童生徒の活動の成果・反応

- ◇ 「なぜ勉強するのか」という質問に困っている子が多かった。特に多かったのは、「受験のため」「将来のため」という理由。
- ◇ インタビューの内容を見て、自分たちの意見と全然違うことに驚いていた。
- ◇ いろいろな考えがあり、価値観の違い・考え方の広さを感じているようだった。
- ◇ 2年生の進路指導でちょうど将来について考えていた時だったので、関連して自分について考える良い機会となった。

【生徒の感想】

- ・人それぞれやっぱ違うなと思った！
- ・人にはいろいろな夢があるし、育ってきた環境も違うからこそ夢もたくさんあると思う。一つひとつ、一人ひとりの夢を大切にしたい。
- ・自分の中で考えていたことと違う意見がたくさんあり、面白かった。将来の夢を持っている人が多くて、とても良いと思った。
- ・勉強が嫌だと思うことは毎日あるけど、嫌なことや苦手なことに立ち向かって乗り越えれば楽しいことが待っている。そんな「目的」のためにやっているんだと気がきました。



3 使用した教材

- <教材2> 教師が撮影してきたインタビュービデオや写真(パワーポイント)
(Why do you study? / 日本の子どもたちへ、出会った人たち、JICA 職員)

3-5 時限目「My Dream」

この時限のねらい

- ・様々な人の生き方を知り、自分の将来像や将来の夢について考える。
- ・世界に目を向け、さまざまな状況があり、色々な仕事があることを知る。
- ・自分の将来について考え、進路指導につなげる。

1 児童生徒の活動の流れ

- ① ホットポテト(英語で「職業」について)ペアで交流。
- ② 生徒が知っている職業を出す。ALT にも紹介してもらい日本であまりなじみのない職業について知る。
- ③ 教師が出会った5人の紹介文を英語で読みとる。(班で)
- ④ 英語で読みとった内容を日本語でメモし、その内容を他の班員に伝える。【他者紹介】
- ⑤ 5人の生き方を聞き、自分の未来について考える。
- ⑥ 考えた「これから」について英語で書く。授業の感想を書く。→交流しあう
- ⑦ 自分の「My dream (Mu future)」について英語でスピーチを書く。
- ⑧ スピーチ発表会をする。



2 児童生徒の活動の成果・反応

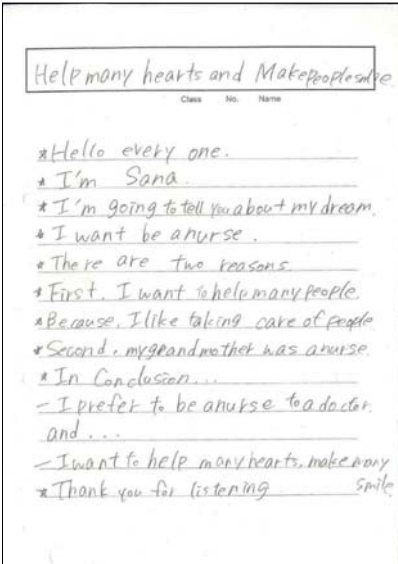
- ◇ 世界にはたくさんの仕事があることに興味を持っていた。
- ◇ 住んでいる環境や状況は、生活に大きく影響しているということに驚いていた。
- ◇ 一生懸命に生きている姿から自分の将来についても考えていた。
- ◇ 自分の生きている環境から、自分の可能性感じ、恵まれていることに感謝をしているようだった。

【生徒の感想】

- ・勉強することはとても大切なんだと思いました。
- ・夢をあきらめずに、挑戦したり、仕事に誇りを持つことなどもとても大切なんだと感じました。
- ・目標に向かい頑張る人や誰かのために頑張る人の文を読み、私も目指していかないと考えた。
- ・楽しいこと、好きなことだけが職じゃない。未来をつくる。誇りに思えるようなことが仕事と言っていて私も好きだからとやるんじゃなくて、何か大きな目標を持ってやっていきたいし、自分の仕事が誇りに思えるようにしたい。

【スピーチ文】

Hello, everyone. I'm ○○. I'm going to tell you about my dream. I want to be useful to other people. I have two reasons. First, I don't have any dreams. But I want to make money by myself. In conclusion, I want to be useful to other people. Then I'll study hard to find dreams. I want to try. Thank you for listening.



3 使用した教材

<教材3> 教師が撮ってきた写真、インタビュー内容(ワークシート)
(JICA 職員、シニアボランティア、エチオピアの少年、小学校の先生、等)

6 時限目「世界とのつながり」

この時限のねらい

- ・自分に身近なもの、食べ物等が世界とつながっていることを知る。
- ・普段何気なく買っている商品の背景について思いを馳せる。

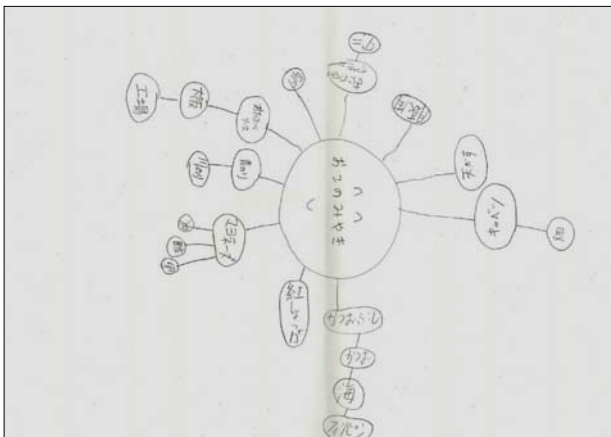
1 児童生徒の活動の流れ

- ① ホットポテト「昨日の夜ごはんは？」ペアで出し合う。
- ② 初詣での出店のメニューは「何から？どこから？」班で出し合う。【ブレインストーミング】
- ③ みんながよく食べるお菓子の袋を渡し、品質表示を見る。そこからどの製品にも共通して入っているものを見つけ交流する。→「植物油脂」
- ④ パーム油(植物油脂)についてパワーポイントで説明。何気なく食べているものが世界とつながっていることを確認する。

- ⑤ パーム油の良いところと問題について知る。パーム油の問題点から世界の状況を知る。
- ⑥ 1つの商品を買うにも、その背景にはさまざまな人が関わっていることに気付く。
- ⑦ 感想を書く。

2 児童生徒の活動の成果・反応

- ◇ 夜ごはんの具材が「made in Japan」と思っている子がほとんどだったので、いろんな国の具材から1つの料理が生まれているんだということに驚いていた。
- ◇ 1つの製品が生まれるにあたって多くの国と人が関わっているという事に興味を持っていた。



【生徒の「自分にできること」】

- ・働いてくれている人たちに心を込めて感謝する。
- ・今、おいしく食事ができるのは外国の油のおかげなので、感謝してこれから食事する。
- ・パーム油を作るには、たくさんの犠牲が伴っていることを忘れない。
- ・パーム油についてもっと知り、使っていく。

【生徒の感想】

- ・植物油脂というのが身近な物のいたるところで見ることができたので、これがなくなったらとても大変なことになるなと思いました。
- ・パーム油を作るのに、生産国の環境破壊やさまざまな問題を起こしてしまっているのは、とても厳しい問題だと思いました。
- ・私たちが食べているものに使われているパーム油は、環境問題にも関わっているので、真剣に考えておかないといけないなと思いました。
- ・私たちが食べているものには必ず誰かが関わってくれているということと、大変な思いをして働いている人がいるということを頭に入れて考えて買っていきたいです。

3 使用した教材

<教材4> パーム油を紹介するパワーポイント

<教材5> 独立行政法人 国際協力機構『どうなってるの？世界と日本』

<教材6> 「危ない油 パーム油のリスク 知っていますか」 <http://plantation-watch.org/palmoil/>

■ 全体を通して

1 授業の様子

エチオピアに行って一番したいと思っていた授業は「世界に目を向け、自分について(日本も)知る」ということだった。エチオピアを通して他国のことについて紹介し、日本のいいところはもちろん、他国とのちがいや魅力について伝えることができた。また、エチオピアに行った際に出会った人々の生き方を紹介することで、生徒たちは自らの将来や生き方について考えるきっかけになったと思う。中学校では卒業することで義務教育を終え、自分の進路を決めていかなくてはいけないので、2年生という時に世界の人々の姿から進路指導につなげることができて良かった。しかし、英語の授業を通して行ったため、生徒が本音の本音まで気持ちを出したり交流したりはできなかったと思う。引き続き、国際理解教育・開発教育を行っていきたい。

2 参考文献・資料

- 1) 2017年度 開発教育指導者研修(実践編)第1回 資料2, 3, 4
- 2) FAIR spirits FAIRTRADE CHANGE THE WORLD Free
- 3) JICA ホームページ <https://www.jica.go.jp/>

笑顔をつやそう！～違いを認めて～

所属	愛知県名古屋市立宮前小学校	実践者	三小田 京子
対象	小学校3年生	時間数	9時間
場所	教室	実践教科	道徳・特別活動
ねらい	<p>テーマ【共生・コミュニケーション】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・エチオピアを通して、世界の国の文化や出来事に興味をもち、多様性や、同一性に気付く。 ・他者とよりよい関係を築くために、違いを受容することや、話し合うことの必要性に気付く。 ・周りの人のために、自分のできることを考える。 		
実践内容	回	プログラム	備考
	1	<ul style="list-style-type: none"> ◆エチオピアを知ろうⅠ <エチオピアに興味をもつ> ・コーヒークイズ・エチオピアの紹介【クイズ】 ・エチオピアのこれが知りたい！【ポップコーン】 	<ul style="list-style-type: none"> ・パワーポイント、 ・コーヒー資料
	2-3	<ul style="list-style-type: none"> ◆エチオピアを知ろうⅡ <エチオピアに肯定的に出会う> ①笑顔いっぱい、エチオピアってこんな国 ・エチオピアの写真や動画を見る【クイズ】 ②エチオピアを体験しよう【体験】 ・挨拶・民族衣装・アクセサリー・楽器・コーヒーセレモニー・ダンス 	<ul style="list-style-type: none"> ・パワーポイント(エチオピアの写真・動画) ・現地で購入した物(民族衣装・コーヒーポットなど)
	4	<ul style="list-style-type: none"> ◆エチオピアと日本は違いだけ？【フォトランゲージ・対比表】 ・違いだけでなく、つながりや同一性があることに気付く 	<ul style="list-style-type: none"> ・エチオピアの人々の写真
	5-6	<ul style="list-style-type: none"> ◆いろんな違い～あっていい違い・ダメな違い～【フォトランゲージ】 ①エチオピアの悲しみ<民族対立、靴磨きの少年> ②「違い」について考えよう 	<ul style="list-style-type: none"> ・靴磨きの少年(動画)、民族の旗
	7	<ul style="list-style-type: none"> ◆違いを認め合っていくには、どうしたらいいのかな ・自分の中にある「思い込み」に気付く【レヌカの学び(エチオピア版)】 	<ul style="list-style-type: none"> ・開発教育協会(DEAR)発行『レヌカの学び』
	8	<ul style="list-style-type: none"> ◆世界の悲しみ ～笑顔を増やそう～ ・世界の挨拶(中国・ロシア・ウズベキスタン・コロンビア)【体験】 ・ロヒンギャの人々の現状を知り、自分なりの思いをもつ【ホー・ポノポノ】 	<ul style="list-style-type: none"> ・中日新聞『ロヒンギャ』(世界と日本大図解シリーズ No.1331)
	9	<ul style="list-style-type: none"> ◆中国からの転校生を笑顔にしよう ・転校生の気持ちを考える【ポップコーン】 ・自分達のできることを考え、行動目標をたてる【派生図】 	
成果	<ul style="list-style-type: none"> ・エチオピアに興味をもち、日本以外の国の文化や出来事に興味をもつことができた。 ・問題を解決するには、話し合うことが大切だと気付くことができた。 ・自分の考えや行動を変える必要性を感じ、行動しようとすることができた。 		
課題	<ul style="list-style-type: none"> ・児童の世界の出来事、問題への興味・関心や、多様性を受容する態度の継続。 ・問題解決の手段としての話し合いの習慣化。 ・気付きを深めて、行動するプログラムの工夫、効果的な参加型手法の取り入れ方。 		
備考			

[授業実践の詳細]

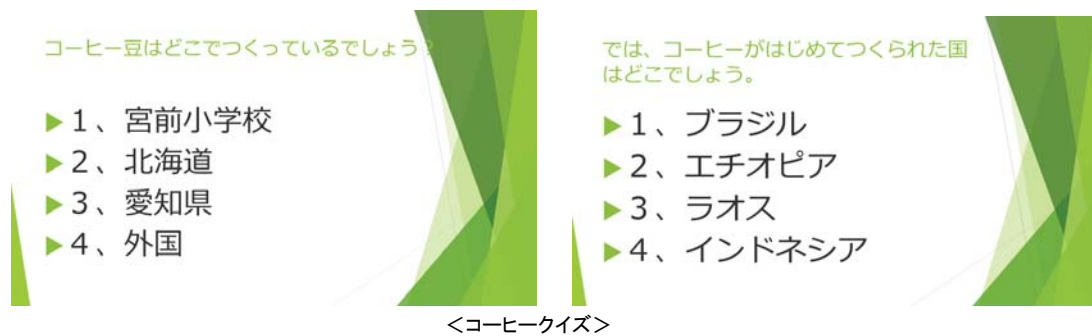
1 時限目「◆エチオピアを知ろう！＜エチオピアに興味をもつ＞」

この時限のねらい

- ・エチオピアの国について知る。
- ・エチオピアと日本のつながりがあることを知り、興味をもつ。

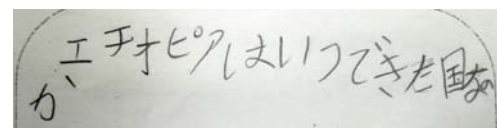
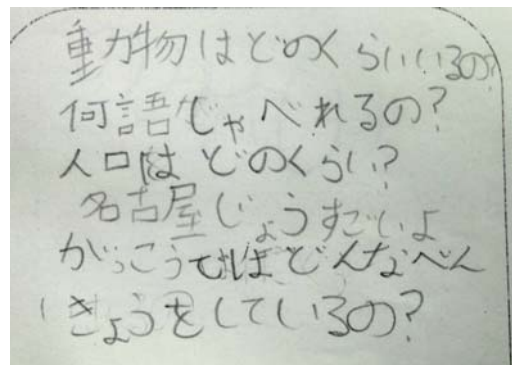
1 児童生徒の活動の流れ

- ① コーヒークイズ【クイズ】
 コーヒーとエチオピアについてのクイズに答えた。コーヒーは木の実から作られていることや、初めて作られた地がエチオピアであること、日本にも輸出されていることを知る。
- ② エチオピアの概要を知る。(スライド)
 グーグルマップで、エチオピアの位置や地形を確認した後、エチオピアの人や動物の紹介を見る。
- ③ エチオピアのこれが知りたい！【ポップコーン】
 調べてほしいことや、知りたいと思ったことを発表する。



2 児童生徒の活動の成果・反応

- ◇ エチオピアを初めて知る児童がほとんどで、遠く離れた国でも日本と同じコーヒーを飲んでいるのが不思議そうだった。人々の写真を見せると、見慣れない服や髪形に驚いた様子だった。
- ◇ アフリカと知り、石油や狩猟を思い浮かべる子どもがいた。しかし、エチオピアでは、身近な飲み物であるコーヒーを作り、飲んでいることを確認すると、子ども達は、自分のもっているイメージと違うことに気が付き、衣食住や文化に興味をもった。そして、知りたいことだけでなく、逆に見てもらいたいことも挙げる事ができた。



＜知りたいこと、見てもらいたいもの＞

3 使用した教材

＜教材1＞ コーヒークイズ パワーポイント

＜教材2＞ AGF <http://www.agf.co.jp/enjoy/cyclopedia/zatugaku/circumstances.html>

2-3 時限目「エチオピアを知ろうII <エチオピアに肯定的に出会う>」

この時限のねらい

- ・エチオピアの人々や文化に出会う。
- ・体験をすることを通して、異文化を肯定的に受け入れる。

1 児童生徒の活動の流れ

① 笑顔いっぱい、エチオピアってこんな国【エチオピアクイズ】

- ・前時で、子ども達が「知りたい」と思っているエチオピアの写真や動画を見て、クイズに答える。



<エチオピアクイズ>

② エチオピアを体験しよう【体験】

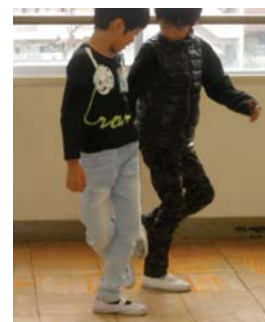
- ・民族衣装やアクセサリを身につけたり、楽器を鳴らしてみたりする。
- ・エチオピアと同じように、お湯にコーヒーの粉を入れて煮るのを見たり、一緒に食べるコロを手にとったりして、コーヒーセレモニーを体験する。
- ・エチオピアの子どもが遊びでするダンスに挑戦する。



<民族衣装を着る児童>

2 児童生徒の活動の成果・反応

- ◇ とても意欲的に、楽しんで参加していた。また、教師が実際に行って取ってきた写真は、子ども達にとって、異文化を“本当のこと”だと受け入れやすいと感じた。
- ◇ コカ・コーラに書かれたアムハラ文字やアボガドのジュースなど、これまで知らなかった文化を知ることで、世界にはいろいろな文化があると、多様性に気付くことができた。
- ◇ サッカーをしている近くにヤギがいたり、レストランで手洗いの水をかけてくれる人がいたりするなど、環境や習慣の違いもあつたことに気付くことができた。
- ◇ 民族衣装を着てアムハラ語で挨拶しエチオピア人になりきってみたり、楽しんでダンスを繰り返して踊ったりすることで、エチオピアという国に親しみを感じてきたようだ。「テレビでエチオピアをやっていた。」と、うれしそうに話に来る子どもがだんだんと増えている。
- ◇ また、蚊よけの独特の香りのするアクセサリを身につけたり、手織りのスカーフを実際に手に取ったりすることで、工夫や技術に気付くことができた。



<ダンスを練習する児童>

3 使用した教材

<教材3> エチオピアクイズ パワーポイント(教師海外研修で撮った写真・動画)

<教材4> 民族衣装・アクセサリ・コーヒー粉・コーヒーセレモニー用ポット・コロ・インジェラ粉・楽器

4 時限目「エチオピアと日本は違いだけ？」

この時限のねらい

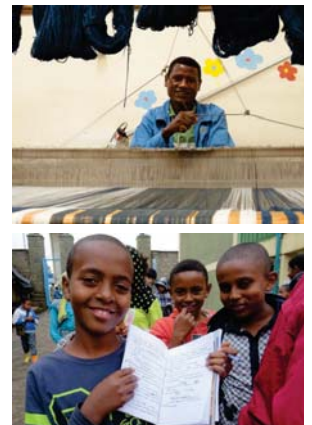
- ・エチオピアと日本の間には、違いだけでなく、つながりや同一性があることに気付く

1 児童生徒の活動の流れ

- ① 前時のエチオピアについての思ったことや、気付いたことを思い出す。【ポップコーン】
- ② 初めての見る写真を、グループで説明し合う。【フォトランゲージ】
- ③ 気付いたことを発表し、日本と違うこと、そうでないことに分ける。【ポップコーン・対比表】

2 児童生徒の活動の成果・反応

- ◇ 小学校の写真から、子ども達は「僕は、学校で英語を勉強しています。友達がたくさんいます。」と、楽しそうに説明していた。また、機織りの写真では「この仕事が好きだ。お金持ちの日本人にたくさん買ってほしいと思っている。」など、日本とのつながりに気付くことができた。
- ◇ 肌の色や食事などの目に見える違いや、家族を思う気持ちや、笑顔といった心情などの同一性に気が付くことができた。



3 使用した教材

- <教材5> 教師海外研修で撮った写真

5-6 時限目「いろんな違い ～あっていい違い・ダメな違い～」

この時限のねらい

- ・世界の中には、同じ国の中に民族対立があったり、学校に行けず、家族のために働く子どもがいたりすることを知る。
- ・違いには、あってもいい違いと、あってはいけない違いがあることに気付く。

1 児童生徒の活動の流れ

- ① キター ゲーム【アイスブレイク】
 - ・クラスみんなで手をつなぎ、手の握りを全員に伝える時間を計る。
- ② エチオピアの悲しみ<民族対立・靴磨きの少年>【フォトランゲージ】
 - ・エチオピアの陸上選手の写真や靴磨きの少年の動画を見て、何をしているのか考える。
- ③ 前時までの日本とエチオピアの違いと、今回の違いについて考える。【ポップコーン】

<靴磨きの少年>

2 児童生徒の活動の成果・反応

- ◇ 靴磨きの少年の理解が難しく、親に保護されない子どもがいる、ということに納得するまでに時間がかかった。「かわいそう、エチオピアの子どもはすごい。」という意見が出た。
- ◇ 前時までの日本とエチオピアの違いと、今回の違いについて、「これまでの違いは、当たり前の違いだけど、今回の違いは悲しい。可哀そう。」という意見が出て、あっていい違いと、あってはいけない違い

について気付くことができた。

3 使用した教材

- <教材6> 教師海外研修で撮った写真・動画
- <教材7> 朝日新聞デジタル <http://www.asahi.com>
- <教材8> 民族旗のデザインのポーチ

7 時限目「違いを認め合っていくには、どうしたらいいのかな」

この時限のねらい

- ・自分の中に、「思い込み」があることに気付く。
- ・違いを認め合うには、自分の中の考えも変える必要性があることを実感する。

1 児童生徒の活動の流れ

- ① エチオピアの小学校について知る。
- ② エチオピアの校長先生がエチオピアにいた時の習慣と、日本に来た時の習慣や、日本とエチオピア歴史等のカードがバラバラになったものを、グループで話し合いながら、国別に分ける。

【レヌカの学び(エチオピア版)】

- ③ カードを裏返し、パズルをして、分けたカードの答え合わせをする。
- ④ カードの解説を聞き、自分の中に「思い込み」があることを知る。



<カードを日本とエチオピアに分ける子ども>

2 児童生徒の活動の成果・反応

- ◇ 全員意見が一致したカードにも間違いがあり、自分だけでなく集団の中にも「思い込み」があることに気付くことができた。
- ◇ 人には「思い込み」があり、そのために事実と違うことでも「正しい」と考えることがあることや、「思い込み」は、人の見目で判断すること等から起こることに気付くことができた。そして、それは自分の心の中に問題があることに気付く子どもがいた。また、「思い込み」のために、人が悲しい思いをすることにも気付くことができた。
- ◇ 人が悲しい思いをしないためには、話し合いをする、協力をするという意見や、「自分の考えが間違っていることがあるから、本当のことを調べる」という意見もあり、自分の中の考えを変える必要性を感じる子どもがいた。

学校におやつや飲み物を持ってきて、食べたり、のんだりする子がいます。	きょう育にかけるとお金は、せかいだい185位です。	3000年の歴史があります。	学校で、食べ物全員にくばります。	きょう育にかけるとお金は、せかいだい115位です。	食べるときに、音をたてる時があります。
わたしはトイレで用をたした後に、いつも水で洗います。	わたしは朝ごはんは、かならず食べます。	わたしはごはんを食べる前にかならずせけんを洗います。	わたしは、まちあわせの時間におくれません。	わたしは朝ごはんを、食べないこともあります。	子どもたちは、手作りのおもちやあんどんていることもあるます。
やさしいくだものを買うときはよくえらんで買います。	子どもたちは、よくちこくしてきます。	学校ではちがう年の子どもがいっしょにべん強します。	わたしは、「おそね、おどおき」をします。	子どもたちは、めったにちこくしてきません。	学校では同じ年の子どもがいっしょにべん強します。

<レヌカの学び エチオピアのカード>

<レヌカの学び 日本のカード>

85位。	なんできょう育にかけるとお金のエチオピアの
こ	ほうかたかいの?
ちこくしてくる。	おきるのが早いのにごうして、
こ	ちこくするのかな?

<間違えたカードとその感想>

みんなと自分の心のちがいをいってけしてそれがこわいわけじゃなくてみた目がこわいだけだからはなせばいいの

<レヌカの学びの感想>

3 使用した教材

<教材9> 特定非営利活動法人 開発教育協会/DEAR 『レスカの学び』

8 時限目「世界の悲しみ ～笑顔を増やそう～」

この時限のねらい

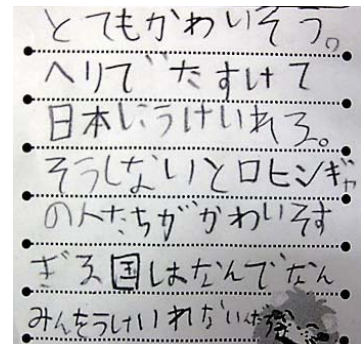
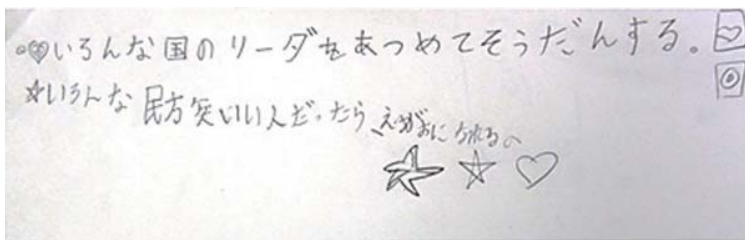
・ロヒンギャの人々について知り、自分なりの思いをもつ。

1 児童生徒の活動の流れ

- ① 世界の挨拶(中国・ロシア・ウズベキスタン・コロンビア)【体験】
クラスの子どもの家で話している言葉で、「こんにちは」と挨拶する。
- ① 新聞を読み、笑顔のないロヒンギャ人々の現状を知る。
- ② 思ったことをグループで聞き合う。【ホー・ポノポノ】
- ⑤ グループで出た感想を発表、共有し、自分の気持ちをプリントに書く。

2 児童生徒の活動の成果・反応

- ◇ 「ニイハオ。」「オラ。コムエスタス。」等と挨拶を行うことで、言葉の違いを楽しんで活動することができた。また、手本となった日本語以外の言語で話す友達に、称賛する声があがったため、普段は言葉の壁があり、なかなか活躍できない子どもが、とても嬉しそうにしていた。
- ◇ 国も家もなくなり、大勢の子どもが殺されている事実を知り、日本とは大きく違うことに衝撃を受けていた。そして、「このままではいけない」という思いを強くもつことができた。
- ◇ 思ったことを聞き合うときは、いつもよりも静かに真剣な面持ちで話していた。そして、思いを聞いてもらえて、スッキリしたようだった。



<個人の感想>

3 使用した教材

<教材10> 中日新聞『ロヒンギャ』
(世界と日本 大図解シリーズ No.1331)



誰かのことを想うとき、あなたと世界の枠が外れる。

所属	愛知県愛西市立立田中学校	実践者	白神 大典
対象	中学校1年生・2年生	時間数	8時間
場所	体育館・武道場・視聴覚室	実践教科	道徳・総合的な学習の時間・数学
ねらい	一人一人がお互いを尊重して、共に支えあって課題を解決し、それぞれが何のために成長し、私たちが暮らすこの世界に何ができるかを考える。		
実践内容	回	プログラム	備考
	1	◆『エチオピアってこんなところ』 ①エチオピアの遊び『足を合わせて、1・2・3・4・5!』をペアで行う。 ②エチオピア紹介ビデオを鑑賞する。 ③エチオピアBOXを使って、現地の物に触れる。 ④感じたことをまとめる。	パワーポイント資料 エチオピア紹介ビデオ、エチオピアBOX エチオピアから持って帰ってきたもの
	2-3	◆『ぼくたちわたしたちは、なんのために学校で勉強するのか?』 ①エチオピアの人たちへのインタビュー動画を見る。 ②グループに分かれて、『なんのために学校で勉強するのか?』を考えて、模造紙に書き出す。【ブレインストーミング】 ③グループごとに発表しあい、共有する。	付箋 模造紙(ブレインストーミング) エチオピアで撮影したインタビュー動画
	4	◆『勉強するとどうなるの? 勉強しないとどうなるの?』 ①前回ブレインストーミングして作った成果物をもとに、勉強するとどうなるか、勉強しないとどうなるかの【対比表】を作成する。 ②作成した表を共有する。 ③2つの対比表を学年掲示物として、掲示する。	付箋 B4用紙(対比表)
	5	◆『みんな違ってたって、それでいい。』 ①体験型ワークショップ【レヌカの学び】を行う。 ②のびたの悪い所、ジャイアの悪い所をリフレーミングして、良い言葉に言い換えて、模造紙に貼っていく。【カード式整理法】 ③グループごとに成果物を発表する。	レヌカの学び 模造紙(KJ法)
	6-8	◆『僕たちは世界を変えることができない。だけど。』 ①映画「僕たちは世界を変えることができない。」を視聴する。 ②JICA、青年海外協力隊の紹介をする。 ③シートに感想を書く。	DVD プロジェクター パワーポイント資料 感想シート
成果	普段は別々の教室で過ごしている生徒同士がクラスを超えて協力し、参加型のグループ活動を行うことで、信頼関係が生まれ、楽しく堂々と発表する姿が見られた。また、『なんのために勉強するのか』という大人でもなかなか答えの見つからない問いに、熟考し、自分たちだけの答えを導き出す良い機会となった。		
課題	講義形式ではなかなかこちらの意図通りに生徒へ伝えることが難しいと感じた。生徒に体感させる手法を多用すれば生徒の興味関心を惹き、伝えたい思いも浸透しやすいことを体感した。そのためには伝え手側が伝える手法について熟知していないといけないと感じた。		
備考	今年、自分が教師海外研修に参加することで、国際交流に興味のある生徒と話す機会が増え、本校としては初めて、一名ではあるが JICA エッセイコンテストに応募した生徒がいたことは非常に嬉しく感じた。		

[授業実践の詳細]

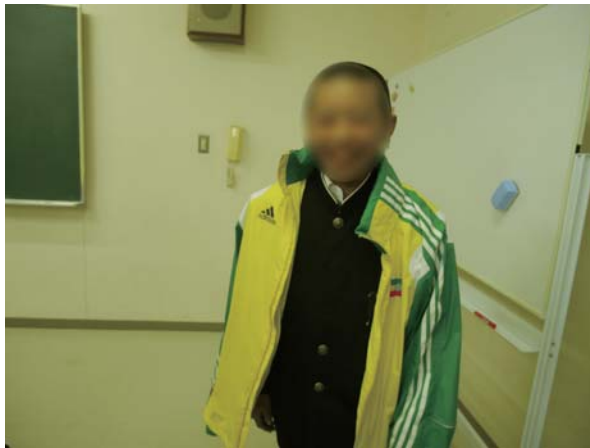
1 時限目「エチオピアってこんなところ」

この時限のねらい

- ・遠く離れたアフリカのエチオピアという国に興味を持つ。
- ・他国の文化に実際に触れて、楽しむ。

1 児童生徒の活動の流れ

- ① エチオピアについてまとめたパワーポイント、ビデオを鑑賞し、エチオピアという国について知る。
- ② 現地のものに実際に触れて、エチオピアに住む人々の文化や雰囲気に触れる。
- ③ 各自で感想をまとめる。



<エチオピアのサッカーユニフォームを着ている生徒>



<エチオピアの伝統的な工芸品に触れる生徒>

2 児童生徒の活動の成果・反応

- ◇ エチオピアの物に見て触れて、興味を持って楽しく授業に参加している様子が見られた。
- ◇ 木製の歯ブラシや、藁でできたほうきやうちわ等、私たちが日常的に使うものが、エチオピアでは全然違ったものであったことに非常に驚いている様子だった。
- ◇ 絵本や CD、コカ・コーラのペットボトル等にかかれているアムハラ語に興味を持つ生徒が多く見られた。学校で勉強している英語とは全く違った言葉に興味津々の様子で、「サラムノウ」や「アムセグナッロウ」などの挨拶を実際に使っている生徒の様子を見ることができた。

3 使用した教材

- <教材1> パワーポイント、ビデオ(2017年度教師海外研修)
- <教材2> エチオピア BOX(JICA なごや地球広場)

2-3 時限目「ぼくたちわたしたちは、なんのために学校で勉強するのか？」

この時限のねらい

- ・『なんのために学校で勉強するのか?』という根源的な問いに対して、仲間と協力して、自分たちだけの答えを出して、ほかの仲間と共有できる。

1 児童生徒の活動の流れ

- ① エチオピアの人たちへのインタビュー動画『あなたは、何のために学校で勉強すると思いますか?』を見る。
- ② グループに分かれて、『なんのために学校で勉強するのか?』を考えて、模造紙に書き出す。
【ブレインストーミング】
- ③ グループごとに発表しあい、共有する。

2 児童生徒の活動の成果・反応



<成果物1>



<成果物2>

- ◇ 生徒にとってブレインストーミングをすることは初めての経験で、自由な発想で『なんのために学校で勉強するのか?』という根源的な問いについて考えるという事に、とても楽しそうに取り組んでいるのが印象的だった。
- ◇ 『プロ野球選手になるから、する必要はない』『つまらないから勉強する意味はない』といった否定的な意見も出た。
- ◇ 『将来のため』や『良い高校に行く、良い会社に入るため』といった自己実現の意見が多く出る中、『友達と勉強することで協力することや信頼関係を築ける』など他の誰かと共に何か大切なものを得るために勉強するといった意見が出たことが印象深かった。

3 使用した教材

- <教材3> エチオピアで出会った人たちへのインタビュー動画 『私たちはなぜ学校で勉強するのか?』
- <教材4> ブレインストーミング実践例 パワーポイント資料

4

時限目「勉強するとどうなるの？勉強しないとどうなるの？」

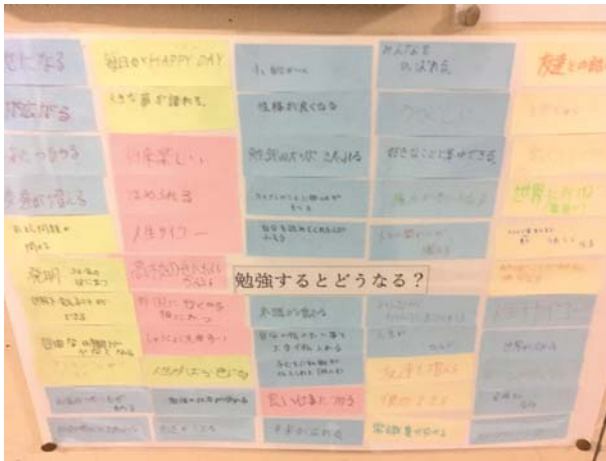
この時限のねらい

- ・前時のテーマを発展させ、その先にある未来を思い描き、自分の将来の目標を設定できる。

1 児童生徒の活動の流れ

- ① 前回ブレインストーミングして作った成果物をもとに、勉強するとどうなるか、勉強しないとどうなるかの【対比表】を作成する。
- ② 作成した表を共有する。
- ③ 2つの対比表を学年掲示物として、掲示する。

2 児童生徒の活動の成果・反応



＜作成した対比表＞

◇ 『勉強するとどうなる?』の方では、『将来楽しい』や『良い仕事につける』といった肯定的な意見ばかりで、ほぼ否定的な意見がなかった。それに対して『勉強しないとどうなる?』の方では『将来恥ずかしい』や『ニートになる』といった意見が大半だったが、『ずっと友達と遊んでいられる』や『恋に走る!』など生徒個人々人で独自の意見が出たことが興味深かった。

3 使用した教材

- ＜教材5＞ 前時で作成したブレインストーミングの成果物
- ＜教材6＞ 対比表実践例 パワーポイント資料

5 時限目「みんな違ったって、それでいい。」

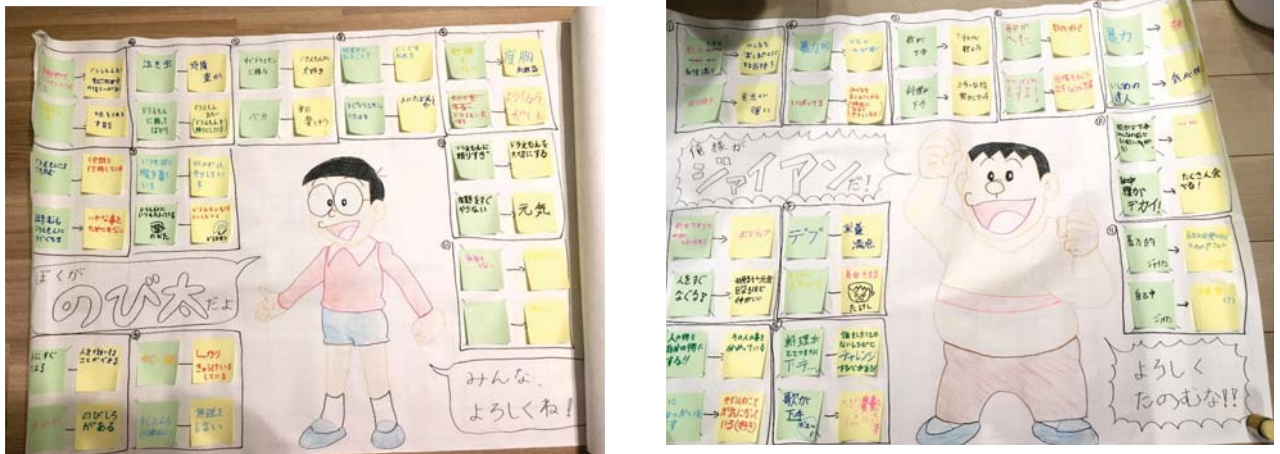
この時限のねらい

- ・知らず知らずのうちに自分の中に生まれた偏見や思い込みに気づく。
- ・人にはいろいろな側面があり、自分のとらえ方ひとつで悪い印象にも良い印象にもなることを知り、他者を認めることができるようになる。

1 児童生徒の活動の流れ

- ① グループに分かれて体験型ワークショップ【レヌカの学び】を行い、絵合わせを完成させる。
- ② のびたの悪い所、ジャイアの悪い所をリフレーミングして、良い言葉に言い換えて、模造紙に貼っていく。【カード式整理法】
- ③ グループごとに成果物を発表する。

2 児童生徒の活動の成果・反応



<リフレーミングを行った成果物>

- ◇ レヌカの学びでは、一見すると日本でレヌカさんが感じたとは思えないようなカードがあり、生徒が自分自身の思い込みに気づく良い機会となった。
- ◇ リフレーミングでは、「0点をよく取る」→「0点を取る才能がある」や、「ドラえもんにすぐ頼む」→「仲間を信じている」、「歌が下手」→「大きな夢を持っている」等、こちらも笑顔になってしまうような意見が多く出た。

3 使用した教材

<教材7> DEAR 開発教育研究会『レヌカの学び』2004年、あおもり開発教育研究会

http://www.dear.or.jp/book/book01_renuka.html

<教材8> リフレーミング実践例 パワーポイント資料

6-8 時限目「僕たちは世界を変えることができない。だけど。」

この時限のねらい

- ・自分一人の力では限られていたとしても、それでも世界のためにできることを考えられる。
- ・わたしたちが生きるこの世界は広く、良いことも悪いことも含めて知らないことがたくさんあり、心を動かすようなものに出会いに行くだけでも、生きる価値がある世界であることに気づく。

1 児童生徒の活動の流れ

- ① 映画「僕たちは世界を変えることができない。」を視聴する。
- ② JICA、青年海外協力隊の紹介をする。
- ③ シートに感想を書く。

2 児童生徒の活動の成果・反応

- ◇ 泣いている生徒がいた。実践しているこちらが心を打たれる思いだった。
- ◇ どの感想文にもこちらの胸に迫るような文章が多く書かれていた。



<映画を鑑賞する生徒>

<生徒の感想文(抜粋)>

映画に出てきた男の子は毎日つらい現実と向き合わなければいけなくて本当に大変だなと思いました。でも私はかわいそうとは思いたくないし、思いません。彼らにとってそれは日常で、その中で幸せを見つけて生きているのだから。「かわいそう」は上から目線で、とても失礼だと思いました。わたしはそんな彼らを救いたいです。彼らに少しでもゆとりをもって暮らして欲しいです。私はもっとたくさんの幸せを彼らに知ってもらいたいです。もう少し大きくなったら青年海外協力隊に入って彼らのために尽くしたいです。そして大きくなったら世界を見てみんなに伝えたいです。

世界を変えることができないかもしれないけれど、変えることができなくても世界の人々を笑顔にすることができるのではないか、と考えられるようになりました。私のいとこのお姉ちゃんは、日本で貯めたお金で、世界をとりまわり、たくさんのボランティア活動で多くの人を笑顔にしてきました。だけど、アフリカで亡くなってしまって、もう帰らぬ人となってしまいました。お仏壇のとなりにいつも、ボランティアをしにいった国々の子どもと、笑っている写真がかざってあります。そしていとこのお姉ちゃんから学んだことは、自分が何かを変えるために、たくさんの新しいことを求めて、たくさんの笑顔を見るために行っていたことです。私は決して忘れません。

3 使用した教材

- <教材4> キングレコード『僕たちは世界を変えることができない』DVD
- <教材5> パワーポイント資料

■ 全体を通して

私は、4つの質問をもって、教師海外研修でエチオピアを訪れさせて戴いた。

- ① 幸せとは何ですか？
- ② 何のために学校で勉強すると思いますか？
- ③ あなたの夢は何ですか？
- ④ あなたの最も大切なものは何ですか？

そして、私は自分の答えを得た。少なくともそのときはそう感じた。

日本に帰り、学校に戻り生徒の前に立った。伝えたい思いが先行していた。しかし、うまく生徒の心へ伝えることができない。アイスブレイキングをして、様々なグループ分けを考え、グループワークを行い、生徒に主体的な学びを得る機会を作ったが、生徒の心へ私の言葉が、思いが浸透していないことが分かっていった。私の伝え方が未熟だったせいだろう。心が折れそうな思いがした。しかし、エチオピアで仲間や、JICAの方々やそこで出会った人たちの事を思い出し、『一人でもいいから、心をこめて思いを伝えよう』と決心してもう一度、もう一度、と授業を実践していった。最後の8時間目での視聴覚室での空気は、言葉で表すことができない。生徒の表情はこちらをまっすぐに見ていたように思う。ともに流した涙は嘘ではない。これから世界へ羽ばたくかもしれない生徒が、幸せに近づきかけとなっていたらこんなに嬉しいことはない。エチオピアに行き良かったと心から思う。支えてくれた関係者の方と、すべてに感謝しています。ありがとうございました。

1 授業の様子



<レヌカの学びを行う生徒>



<発表している様子>



<ブレインストーミングしている様子>



<感想文を書く生徒>

2 参考文献・資料

- 1) JICA 中部 2016 年度教師海外研修報告書

食から広がるMY WORLD

所 属	岐阜県揖斐郡大野町立東小学校	実践者	白木 純子
対 象	小学校4年生(46人)	時間数	12時間
場 所	教室・ランチルーム	実践教科	総合的な学習の時間
ねらい	テーマ【貧困】 <ul style="list-style-type: none"> ・世界には、様々な食があることを知る。 ・食は生命と関わっていることに気付く。 ・自分の食生活を見直す。 		
実践内容	回	プログラム	備 考
	1	◆身近な水について知ろう ・自分たちが一日に使う水の量はどのくらいだろう。 ・水は何にどのくらい使っているのだろう。 ◆世界の水事情①	社会科「くらしをささえる水」でも学習済み
	2	・水クイズ～いろんな言葉で水を言ってみよう～ ・水から連想できる言葉 ・国あてクイズ～水が使われている各国のことわざを知る～ ◆世界の水事情②	テキスト 「水から広がる学び」
	3-4	・地球上に占める水の割合とその中で生活に利用できる水の割合を知る ・資料から、どこの国が1人あたりの水の使用量が多いのかを探す ・エチオピアの少女「タムリさんの一日」を想像し、写真を並びかえる	・コロ ・エチオピアの料理の写真
	5	◆「先生、エチオピアへ行く」～エチオピアの水&食について知ろう～ ・エチオピアの地域の水事情を紹介する ・JICAの支援で作った井戸の仕組み ・その他「エチオピアの子ども達の一日」	・井戸や水汲みをしている少女の写真 ・エチオピアで汲んできた水を紹介
	6-7	◆世界の様々な食を見てみよう ・「世界の食卓」の資料を使って、各国一週間分の食事の種類と量を知ろう。 ・なりきり家族で発表	・資料 「世界の食卓」
	8	◆食と生命との関わりについて知ろう ・もしも、大地震が起き、食糧が足りなくなったら・・・	食料自給率表
	9	◆日本と世界との食のつながりについて ・夕飯の献立を立てよう！～食料自給率表をみて～	地球データマップ 「飢える国・飽食の国」
	10	◆食が満足に得られない人々 ・【フォトランゲージ】で原因を想像。地球データマップ	授業参観で保護者へ発表する
	11-13	◆自分たちができることはどんなこと?!～伝えていこう、食問題～ ・グループごとに、まとめて発表する	
成 果	日本以外の世界の国に目を向けるきっかけとなった。エチオピアを紹介するに当たり、食に絞ったことで、日本と世界とのつながりを知るだけでなく、子どもたちは改めて自分の食生活を見直すことができた。		
課 題	子どもたちが知っている世界の情報が少ないため、こちらから資料を提示することが多く、結果、教師の想定内のまとめになってしまったこと。		
備 考	自分たちが知ったことを最後の授業参観で親の前で発表する活動では、張り切って準備をしていた。学んだことを一生懸命伝えようとして言う姿が、やってよかったというやりがいを感じた。		

[授業実践の詳細]

1 時限目「身近な水について知ろう」

この時限のねらい

- ・蛇口から1分間でどのぐらいの水が出るのか知る。
- ・普段の暮らしの中で、何にどのぐらいの水を使用しているかを知り、自分の生活を見直す。

1 児童生徒の活動の流れ

- ① 1日の生活を思い出しながら、いつ、何のために水を使ったか、いくつかあげてもらおう。
- ② 水道の水を1分間出しっぱなしにすると、どのぐらいの水が流れるか調べる。
- ③ 実際に1日に使っているかを調べ、ワークシートに記入する。
- ④ 気付いたことをワークシートに書く。



<1分間の水の量を調べる>

2 児童生徒の活動の成果・反応

- ◇ 子ども達は「1分間にどのぐらいの水が出るのか想像できなかったけど、予想を超えてこんなにも大量に流れることを知ってびっくりした。」
- ◇ 「1日にこんなに水を使っていると思わなかった。」「手を洗う時も、水を勢いよく出すのではなく、少しずつ出そう」などと水を無駄遣いしないようにしようという感想が多かった。

3 使用した教材

<教材1> 阿部秀樹『水から広がる学び』2014年、開発教育協会「暮らしの中の水」

2 時限目「世界の水事情① ～水とわたしたち～」

この時限のねらい

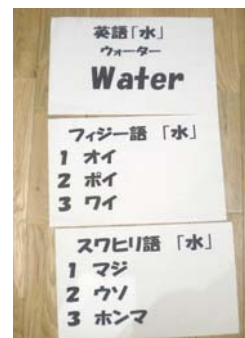
- ・「水」を通じて、世界には様々な生活があることに気付く。
- ・世界地図や地球儀を用いて、世界の中の日本の位置を確認する。

1 児童生徒の活動の流れ

- ① アイスブレイク～水クイズ「いろんな言葉で「水」を言ってみよう～
- ② 「水」から思い浮かぶ言葉を探してみよう。
- ③ 世界にある「水」に関係することわざを世界地図で場所を確認しながらつなげる。

2 児童生徒の活動の成果・反応

- ◇ 「カンボジアは水(川)の流れで、船に乗って食べ物やフルーツを売りに行く生活なんだということが分かった。」「井戸は日本だけだと思っていたけれど、イギリスにもあることを知った」など、水を通じて日本とは違う生活やあるいは井戸を使って生活するという共通点に気が付くことができた。
- ◇ 世界地図や地球儀を初めて使う子ども達にとって、日本からの近い国や



<水を表す言葉>

遠い国など、日本を中心に様々な国の名前や位置を知ることができた。

3 使用した教材

- <教材2> 阿部秀樹『水から広がる学び』2014年、開発教育協会
「世界の水の言葉たち」
- <教材3> インターネット google 画像検索



<水に関係することわざ>

3-4 時限目「世界の水事情② ～地球上の水の割合～」

この時限のねらい

- ・地球上の水の割合と生活に利用できる水はどのくらいあるのかを知り、日本が水に恵まれた国だということに気付く。
- ・アフリカに住むタムリさんの一日の生活について知ること、日本の子ども達との違いに気付く。

1 児童生徒の活動の流れ

- ① 宇宙から撮った地球の写真を見せながら、「水の惑星」と呼ばれる地球上には、どのくらい水が占めているのかを想像し、どこにその水があるのかを知る。
- ② その中で、生活に使える水(海は使えない)はどのくらいあるのかを想像する。
- ③ 世界地図を見せて、生活に使える水が多い国と少ない国があることに気付く。
- ④ 1年の水の使用量が少ない国、「エチオピア」に住む小学5年生「タムリさんの一日」生活の様子を写真並び替えて、想像する。【フォトランゲージ】



<世界の水事情>

2 児童生徒の活動の成果・反応

- ◇ 「地球上には98%の水があるのにも関わらず、生活に使える水はたったの0.01%しかないことにびっくりした。」「世界では、住む場所によって水をたくさん使っている所と少ししかない所があり、びっくりしました。」
- ◇ 「エチオピアでは、蛇口がなく、子どもが歩いて水を汲みに行くのが仕事だと聞いて、かわいそうだと思いました。」「アフリカ大陸の子ども達全員が働いているのかな。子ども達はいつ勉強するのだろう。」
- ◇ 成果:未収得である割合など、子ども達にとって分かりづらかったけれど、円グラフを見せることによって0.01という微量な数を示した。一番効果的だったのは、【フォトランゲージ】でタムリさんの生活を推測したことだ。写真に生えている木や建物から想像して、何をしているところなのかを想像して、グループで話しあったことは、参加型の手法が生きたと感じた。



<写真を並び替える様子>

3 使用した教材

- <教材4> 阿部秀樹『水から広がる学び』2014年、開発教育協会
「地球上の水の割合」「タムリさんの一日の写真」
- <教材5> JICA地球ひろば『国際理解教育実践資料編』2014年、廣済社

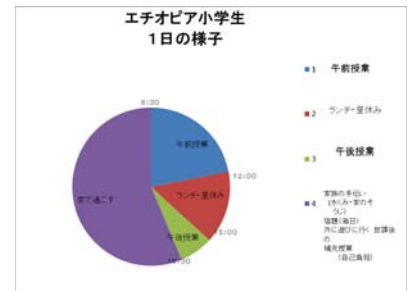
5 時限目「先生、エチオピアへ行く ～エチオピアの水&食、その他～」

この時限のねらい

- ・エチオピアで発見した水事情について知り、水を得るための工夫や努力について考える。
- ・エチオピアの食やその他について興味をもって考えたことを伝え合う。

1 児童生徒の活動の流れ

- ① エチオピアで汲んできたペットボトル(都市の排水・チャモ湖)の水を見せ、この水の物語を語る。
- ② 地方と都会での水の状況について写真を見せながら、紹介する。
- ③ 日本とのつながりで、JICAが支援した井戸や井戸の仕組みを紹介する。
- ④ 自分たちの一日の様子とエチオピアの子ども達の一日の様子を比べ、相違点を探す。【対比表】



<エチオピアの小学生の一日>

2 児童生徒の活動の成果・反応

- ◇ 「靴磨きの男の子たちの話」子どもたちが生活のために働いているのが大変そう」「女の子が水を汲みに来ている。」「ロバに水を運ばせている」「蛇口をひねっても水がでないことや、雨水をためてそれを飲むことにびっくりした」などと、日本と違いすぎたので、いろんな疑問と反応が返ってきた。
- ◇ 2つの国の対比表では、共通点として宿題があることや同じような勉強をしていることがあった。相違点では、帰ったら炊事などの家の手伝いをしていることや、外で遊ぶことが多いということだった。どこの国でも勉強は大切だということが伝わったようだった。エチオピアで取材したことが生かせる場があったことが嬉しかった。

3 使用した教材

- <教材6> 現地で汲んだ水や現地で購入したコロ(食材)
- <教材7> 現地で取った写真・動画
- <教材8> 取材した統計グラフ
- <教材9> 自分たちが書き込む円グラフと対比表



<実際に汲んできた水>

6-7 時限目「世界の様々な食を見てみよう」

この時限のねらい

- ・世界には様々な料理があることを知り、日本は色々な食が揃っていることに気付く。
- ・1家族に対して食事の量が違うことに知り、それについて疑問や関心をもつ。

1 児童生徒の活動の流れ

- ① アイスブレイク「今日の朝ごはん」で四隅に分かれる。
- ② 給食の献立表から白米やパンがどれだけ食べられているか探す。
- ③ 「なりきり家族」各大陸10か国程度の1週間分の食料が陳列されている食卓写真を取り上げ、1班に1枚自分たち家族と家族の食べるものを他の班に紹介する。【ロールプレイ】
- ④ その国がどこなのかを予想し、黒板に貼る。
- ⑤ 気が付いたことを発表する。



<なりきり家族を実践中>

2 児童生徒の活動の成果・反応

- ◇ 「日本は米をよく食べるけど、国によっても食べ物や飲み物が違うことが分かった。」「いろんな国の写真を見たり、想像するのが楽しい。」「食べ物が少ない国や多い国がある。」「マリ、チャドは食材が少ないがドイツが多い。」「肌の色と食料の量」の関係を読み取るこもいた。
- ◇ 成果: 子ども達は写真を見て想像するのが楽しく、班の中でも話が弾んだ。いろいろな意見の中で「日本にある物が世界にある」ということに気付いた意見を取り上げ、日本が食料を他国から輸入しているという次々の授業の布石を打てた。



<世界から食が集まる日本>

3 使用した教材

- <教材10> 学校給食の献立表
- <教材11> 開発教育協会『世界の食卓』2010年

8 時限目「食と生命の関わり」

この時限のねらい

- ・食が乏しくなると、自分の体や生活がどのように変わっていくのかを想像し、食について考える。

1 児童生徒の活動の流れ

- ① 「もしも、大地震が起こったら・・・」の想定のもと、その後をワークシートに書いていく。【派生図】
- ② 想像してみて、思ったことを共有し合う。

2 児童生徒の活動の成果・反応

<もしも大地震が起こったら・・・>

- ◇ 「もしも、大地震が起こったら・・・」→「町が孤立する」→「栄養不足になる」までは、こちらで状況を固めておいた上で、「体が動かせない」→「友達と遊びに行けない」→「引きこもりになる」→「話せないストレスがある」→「家族が悲しむ」→「死を選ぶ」等と栄養不足がすぐに死に至るという直結した考えではなくて、日々の生活に基づき、思考ができていた。
- ◇ 授業後の振り返りでは、「大地震に備えて非常食を蓄えておこう」や「地震は改めて怖いと思った」など、そちらに感想が流れてしまったため、既習事項を掲示しておけば、子ども達がつながりを感じ、このような結果にならなかったかもと反省する。

●今日の授業で楽しかったことは何ですか。

食材の自給率を調べたことが楽しかったです。

●今日の授業で考えたことや分かったこと、思ったことを教えてね。(39行)

人が止まったら、ほとんどの食材が食べられなくなってしまうので、こわいなと思いました。食べ残しをしないようにしていきたいです。

<児童の振り返り>

3 使用した教材

- <教材12> ワークシート2枚(派生図と振り返り用)

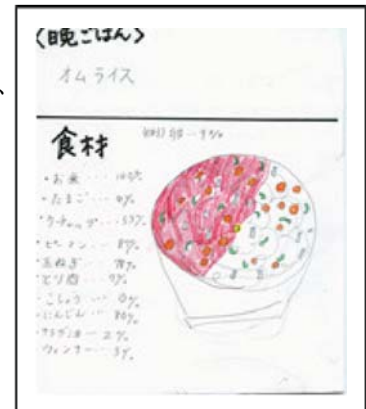
9 時限目「日本と世界との食のつながり」

この時限のねらい

- ・日本は他国から食料を輸入し、食料自給率が低いことを知ることで、「もし輸入が止まってしまったら」どうなるのかを想像する。
- ・他国からの輸入の背景にどんな問題があるのかを考える。

1 児童生徒の活動の流れ

- ① 好きなお寿司のネタを3つの中から1つ選ぶ。もし、輸入が止まったら、お寿司はどれだけ食べられるか見せる。寿司の写真を切る。(アイスブレイク)
- ② 「もしも、輸入が止まったら・・・、どんな献立ができるだろう」食料自給率表を元に、自分の好きな献立を考え、輸入が止まったら、食材はどれだけ手に入って、どれだけ作れるのかを考えてみる。
- ③ 日本の食料自給率について知り、原因と課題を読み取る。
- ④ 今後どうしていったらよいのかを考える。



<自給率を考えて立てた献立>

2 児童生徒の活動の成果・反応

- ◇ 「例えば、ジャガイモは66%しか作っていないことを知り、絵にかくとこんなにも少なくなるということが分かった。」「日本以外からたくさんの食材をもらっておきながら、27.7%も残飯にしていることを知り、これから残さず食べていきたい。」「バナナなど自分の好きなものが輸入されなかったら、食べられなくなることが分かった。」「もっと有難く食べなければならぬと思った。」
- ◇ 割合を学んでいない子ども達なので、一つ一つの食材を計算で求め、どのくらい作れるかという具体的な量までは出さなかったが、大体のイメージで輸入が止まったら、食べられるものが少ないということは分かった。また、その背景に残飯が多いことを初めて知りショックだという感想が多かった。

3 使用した教材

- <教材13> 食料自給率表 <http://www.foodpanic.com/index2.html>
- <教材14> JICA地球ひろば『世界の食料』2009年



<食料自給率表>

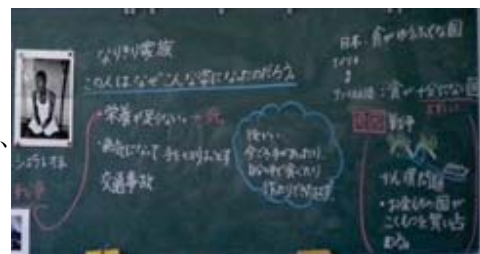
10 時限目「食が満足に得られない人々」

この時限のねらい

- ・食が満足に得られない人々の背景にはどんな問題があるのかを知り、私たちの生活にも気付く。
- ・それらの問題に対して自分たちができることを考える。

1 児童生徒の活動の流れ

- ① 両手を失った男性の写真を見せ、なぜこんな姿になってしまったのかを想像する【フォトランゲージ】
- ② ドキュメント『地球データマップ 飢える国・飽食の国』を見て、説明を加える。
- ③ 班ごとに自分たちができることをまとめる。



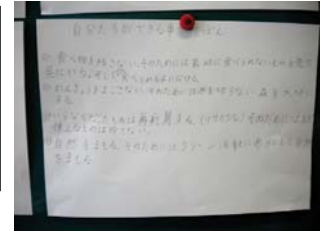
<どうして食が満足に得られないのか>

2 児童生徒の活動の成果・反応

- ◇ 「戦争で手足を切断されたり、子ども達が栄養が亡くなるのはかわいそうだと思う。」「なぜ同じ人間なのにこんなにも人の姿や食が違うのか疑問に思った。」

<自分たちができること>

「川や森を大切にする」「食べ残しをしない」「他の国ばかりたよらない」
「できるだけ自分の国で取れたものを食べる(地元食材)」「なるべく日本の食べ物を選んで買う」



<自分たちができること>

3 使用した教材

<教材15> ドキュメント『地球データマップ 飢える国・飽食の国』2007年、NHK

<教材16> ワークシート

11-13 時限目「伝えていこう、食の問題」

この時限のねらい

- ・東小学校の給食における残飯の様子を調べ、全校に伝え食の現状や課題を知らせる。
- ・家族の人に、学んだことを伝え家庭でできることを話し合う。

1 児童生徒の活動の流れ

- ① 給食後に各クラスの残飯調査をし、現状の様子を探る。
- ② 班ごとに学んできたことの発表の準備を進め、年度末の授業参観で伝える。



<残飯調べ>

■ 全体を通して




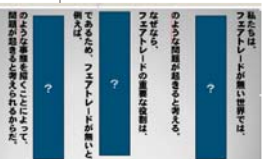
1 授業の様子

海外研修で学んできたことを素材に大きなテーマ「食の格差」について取り組んできた。授業を進めていく中で、改めて自分が何を伝えたいのかがはっきりしてくることがあったり、資料を作っていく中で、初めて知ったことも多かった。世界への関心が薄い小学4年生にとって、世界との初めての出会いを肯定的に受け止めてもらえたらいいなと思いつつも、やはり「かわいそう」につながってしまうことが多かった。すべてを理解するのは難しいと思いつつも、今回の授業で何か心にひっかかってくれると嬉しいなと思いつつ、食の現状を考えさせる切り口は沢山あるので、またいろいろな方法で試してみたいと思った。また、参加型の手法を使うことで、考える力やまとめて発表する力がついてくることが分かったので、他教科でも生かしていけたらいいなと感じた。

2 参考文献・資料

- 1) 阿部秀樹『水から広がる学び』2014年、開発教育協会
- 2) JICA地球ひろば『国際理解教育実践資料編』2014年、廣済社
- 3) 開発教育協会『世界の食卓』2010年
- 4) 食料自給率表 <http://www.foodpanic.com/index2.html>
- 5) JICA地球ひろば『世界の食料』2009年
- 6) ドキュメント『地球データマップ 飢える国・飽食の国』2007年、NHK

「ものがたり」を知って豊かになるわたしと世界

所 属	愛知県立天白高等学校	実践者	谷口 加恵
対 象	高校3年生	時間数	4時間
場 所	被服室・教室	実践教科	国語
ねらい	<p>テーマ【共生・貧困】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・肯定的な出会いによって広がる自分の世界を自覚し、挑戦することを前向きにとらえる。 ・フェアトレードの仕組みを理解し、持続的な社会の発展について考える。 ・自分の意見を明確な根拠によって示し、論旨を明確にして説明する。(書くこと) 		
実践内容	回	プログラム	備 考
	<1>	<p>起 「伝統料理インジェラを食べてみたい？食べてみたくない？」</p> <p>☆Aネットの情報とB先生の感想</p> <p style="text-align: center;">挑戦リストを作ってみよう【リスト】</p> <p style="text-align: center;">挑戦に必要な〇〇【派生図】</p>  <p>承 ☆「ニセバナナの木から何を作っている？」【フォトランゲージ】</p>	<p>インジェラレポート (ネット上のブログ)</p> <p>ドルゼ村の写真</p> 
	<2>	<p>第1回の振り返り</p> <p>「物語(背景)」知って印象が変わった体験について (記述)</p>	
	<3>	<p>転 「フェアトレードについて知ろう」</p> <p>☆フェアトレードコーヒーの食レポ</p> <p>「フェアトレードが無い世界ではどんな問題が起きる？」(論理的文章)</p> <p>ラベルとその仕組みについて知ろう【ジグソー法】</p> <p>フェアトレード会社「sabahar」について知ろう</p> <p>☆世界で起きている貧困(ビデオ)</p> 	<p>フェアトレード・ジャパンのホームページ</p> 
	<4>	<p>☆フェアトレード会社を経営するキャシーさんの話(ビデオ)</p> <p>持続可能な社会の発展について自分の意見を述べてみよう。(記述)</p> <p>結 学習全体の振り返り【ルーブリック】</p> <p>自分の中で変化したことについて話し合う。</p>	
成 果	<p>生徒たちの国際的なニュースへの関心が高まった。主張につづけて根拠を述べる姿勢が身についた。十年後を見据えた目標を見据え、今身につけるべき能力について考えることができるようになった。</p>		
課 題	<p>フェアトレードの仕組みを理解した上で、国際社会の抱える課題を身近なものとして捉えるための活動や話し合いの時間をさらに設定したい。(今回は「消費者の行動選択に伴う責任」というテーマで意見を記述。)</p>		
備 考	<p>ルーブリックの評価規準を学習のはじめに提示することにより、学習全体を通した目標を意識させるべきであった。ルーブリック評価を引き続き自己評価を重ねていきたい。</p>		

3 時限目「フェアトレードについて知ろう」

この時限のねらい

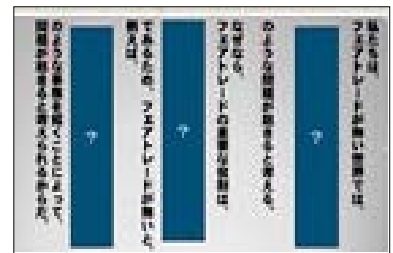
- ・持続可能な社会実現に向けた課題や、世界の状況・課題について基礎的な知識を得る。
- ・社会の一員としての自覚をもち、社会の抱える問題に関心を持つ必要性に気づく。
- ・具体的な根拠を述べて自らの主張を論理的に述べる。

1 生徒の活動の流れ

- ① フェアトレードコーヒーを飲んだ生徒の食レポを聞く。
- ② フェアトレードラベルとその仕組みについて知ろう。【ジグソー法】
 - ・4人グループで①司会 ②書記 ③タイムキーパー ④発表者を決める。
 - ・それぞれが担当の資料を読み込み、順番に説明をする。
 - ・資料①「フェアトレードの基礎知識について」
 - ・資料②「フェアトレードの歴史」
 - ・資料③「FLO認証の仕組み」
 - ・資料④「生産者は誰か」
 - ・資料⑤「アラビカコーヒーの国際取引価格で見る最低価格保障の仕組み」(5人班のみ)
- ③「フェアトレードが無い世界ではどのような問題が起きるのか」について、論理的な文章で説明できるよう、グループで話し合っってワークシートを完成する。
 - ・シートの空欄を埋めるときに、資料から学んだことを根拠にして考える。
- ④ エチオピアのフェアトレード会社「Sabahar」について学ぶ。
- ⑤ エチオピアで教員が感じた貧困について話を聞く。



<担当した資料を説明する様子>



<論理ワークシート>

2 生徒の活動の成果・反応

- ◇ ワークシートに記入する時に、与えた資料の読み取りができ、班ごとに異なる視点や根拠を用いてフェアトレードの必要性について考えることができた。
- ◇ グラフから読み取った内容を根拠にして、グループごとに主張することができた。
- ◇ 担当する資料を、短時間で読み取って他者に説明するため、真剣に取り組んでいた。

<生徒の感想(授業を受けて変化したこと)>

- ・ネットの情報と実際の体験とで違ってくると理解し、自分から挑戦してみることを意識するようになりました。また、視野を広げようとニュースを見るように心がけています。
- ・日本と違う文化に触れることによって自分の知識の幅が広がった。フェアトレードに関係する英文を読んだときに頭に入ってきやすくなった。
- ・論理的な文章の書き方が分からなかったため、骨組みを作ることで少し理解できた。

3 使用した教材

- <教材4> 佐藤寛『フェアトレードを学ぶ人のために』2011年、世界思想社
- <教材5> 「フェアトレードジャパン」 <http://www.fairtrade-jp.org/#>
- <教材6> 「SABAHAR- Fair Trade, Ethiopian crafted textiles」 <http://sabahar.com/>

4 時限目「持続可能な社会の発展について」

この時限のねらい

- ・現実と理想の差をふまえながら、広い視野で既知の事実について批判的に考えることができる。
- ・社会に貢献する意欲と、社会の主体としての意識をもち、自分の考えを語るすることができる。

1 生徒の活動の流れ

- ① フェアトレード会社を経営するキャシーさんのビデオを見てメモをとる。
 - ・1 日本の若者について 2 日本の若者の義務・責任とは 3 服を買いに行ったときは・・・
 - ・キャシーさんが遠隔地日本の学生にメッセージを送ってくれたことに気づく。
 - ・キャシーさんへのメッセージを書く。
- ② テディアフロ(エチオピアで今流行している曲)を聴く
 - ・JICA職員のサラさんのアムハラ語訳・英訳を見る。
 - サラさんが遠隔地日本の学生がエチオピアの曲を楽しむために訳を送ってくれたことに気づく。
 - ・地球規模で自らの存在について捉え直し、国際社会の抱える課題に自らどう関わるべきかを考える。
- ③ 持続可能な社会の発展について自分の意見を述べてみよう。
 - ・400字の記述をする。
 - ・前回のワークシートを思い出し、根拠を明確にし、論理的な文章を書くことを意識する。
- ③ 学習全体の振り返り【ルーブリック】
 - ・学習全体の振り返りをルーブリックで行う。
 - ・ルーブリックの記述をもとに自分の中で変化したことについて話し合う。

2 生徒の活動の成果・反応

- ◇ キャシーさんのビデオは1回では聞き取れなかったため3回流したが、かなり生徒は集中していた。
- ◇ テディアフロの曲に合わせて身体を揺らしている生徒もおり、関心を寄せている様子が見られた。

<キャシーさんへのメッセージ>

- ・十分な賃金を支払われずに作られている製品は世界の人々を平等にすることの妨げになるため、買う製品にはしっかり気をつけたいと思いました。
- ・服の生産地は気にしたことがなかった。そこから労働者を救うことができるのなら、今後気をつけたい。

<テディアフロを視聴した感想>

- ・どこか懐かしい感じの曲調で、思っていたより親しみやすいなと思いました。

<記述の主な意見(抜粋)>

- ・消費者の行動によって経済構造を変化させることは可能なのではないかと私は思います。たしかに～
- ・商品がいかにか作られたかをアピールすることによる人々の購買意欲の変化はあると考える。～
- ・私は、商品がいかにか作られたかをアピールすることで人々の購買意欲は変化すると思います。なぜなら～
- ・スクリーン越しに見たエチオピアの靴磨きの少年の笑顔に胸を打たれた。彼の笑顔は虚偽ではなく、～

3 使用した教材

<教材7> 「Lebo」TeddyAfro(音楽データ)

■ 全体を通して

教員海外研修に参加させていただき、授業外にもエチオピアの活動を披露する機会を得た。

PTAとの共同発表として、学校祭では国際交流会を開き、来場した保護者や生徒に向けてエチオピアの魅力や国際社会の抱える課題について話をする事ができた。また、学校誌「爽風」の特集記事において、生徒が「なぜ勉強するのか」のテーマについて悩み、作業が滞った際に、エチオピアで得た多くの現地の方のインタビューを見せることにより、考えを深めさせる事ができた。

エチオピアという離れた環境に関心を持てる生徒が増えたと感じるとともに、「いつか、海外に行きたい。」「国際社会に貢献したい。」などの意見が聞かれ、頼もしく感じた。社会の主体として今後どのように行動したいのかについて視野を広げるとともに、進路決定後に身につけるべきスキルなどについて捉えることができ、大学生活への展望を広げて欲しいと願うばかりである。

1 授業の様子



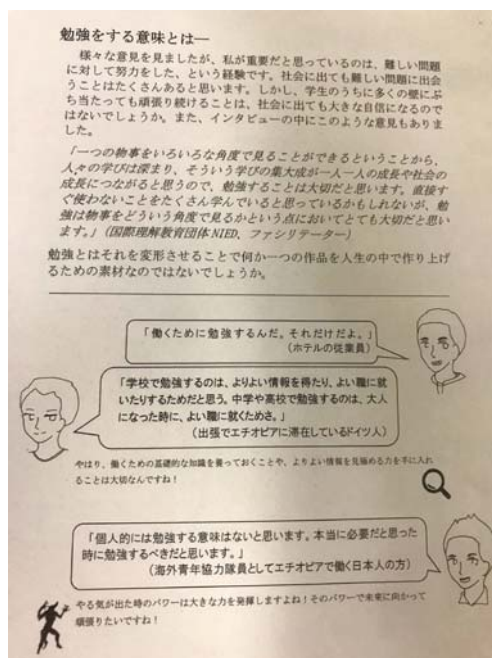
<コーヒーの食レポの様子>



<発表の様子>



<学校祭の国際交流行事>



<学校誌の記事>

2 参考文献・資料

- 1) 佐藤寛『フェアトレードを学ぶ人のために』2011年、世界思想社
- 2) 「フェアトレードジャパン」 <http://www.fairtrade-jp.org/#>

エチオピアを知り、自分を知る

所属	三重県津市立一身田小学校	実践者	前地 直樹
対象	小学校4年生	時間数	4時間
場所	教室	実践教科	総合
ねらい	<p>テーマ【国際理解】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日本以外の国を知ることで、今まで気付かなかった身のまわりのことに気付き、日本やエチオピアの人々の知恵にも気付くことができる。 ・世界のことや身の回りの知恵や工夫に興味・関心を持つ。 		
実践内容	回	プログラム	備考
	1	<p>○エチオピアの国について知り、日本とのつながりについて考える。</p> <p>1. エチオピアという国について知る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・エチオピアクイズをグループで行い、どんな国か予想する。 ・日本と比較する。 <p>2. 日本とエチオピアのつながりについて知る。</p>	パワーポイント
	2	<p>○ドルゼ村の生活と知恵について考えよう。</p> <p>1. ドルゼ村について知る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ドルゼ村についてのクイズを班で行い、どんな村か予想する。 <p>2. コチヨの活用について知る。</p>	パワーポイント
	3	<p>○日本の生活の知恵について考えよう。</p> <p>1. 稲の活用について考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・グループで、稲の様々な活用について予想する。 ・パワーポイントを用いながら、フォトランゲージで話し合った内容を確認する。 	【フォトランゲージ】 パワーポイント
	4	<p>○日本とエチオピアのそれぞれのちがいを考えよう。</p> <p>1. 日本とエチオピアの良い点、問題点を考える</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日本とエチオピアのいいなと思ったこと、問題だなと思ったことを班で模造紙にまとめる。 <p>2. 全体で交流する。世界には様々な問題があることを知る。</p>	【対比表】
成果	<ul style="list-style-type: none"> ・いろいろなグループワークでお互いの意見を述べ合って考えることを楽しんでいった。 ・エチオピアのいろいろな予想外の生活を知ることで、海外への関心を深め、自分の身の回りの生活を見つめなおすきっかけとなった。 		
課題	<ul style="list-style-type: none"> ・校内ではグループワークに関する関心が高いのだが、国際理解教育にまで手をつけられていない学級が多い。外国につながる児童が多い学校でもあるので広げていきたいと思う。 		
備考	<ul style="list-style-type: none"> ・本校は国際理解に関する授業が少なかったため、国際理解教育の授業の例を示す機会を作ることができた。 		

[授業実践の詳細]

1 時限目「エチオピアってどんな国？」

この時限のねらい

- ・エチオピアという国について知り、日本とのつながりについて知る。
- ・エチオピアに肯定的に出会う。

1 児童生徒の活動の流れ

- ① エチオピアという国について知る。
 - ・エチオピアの場所を知る。
 - ・エチオピアクイズを班で行い、どんな国か予想する。
 - ・写真やビデオで解答を確認して概要を理解する。
 - ・人口等を日本と比較する。
- ② 日本とエチオピアのつながりについて知る。
 - ・写真やビデオを見て考える。
- ③ 振り返りをする。
 - ・振り返りのワークシートを記入する。
予想と違っていたこと、エチオピアの良い所、お互いの国のつながりについて記入する。

2 児童生徒の活動の成果・反応

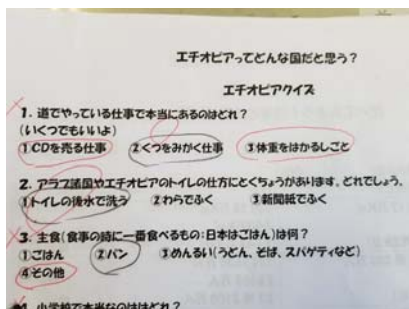
- ◇ エチオピアについてのイメージがあまりない児童ばかりだったので、3 択のクイズにして予想しやすいようにした。予想することで児童同士の話し合いや自分なりのイメージを持って楽しく学習することができた。
- ◇ 日本とエチオピアのデータを比較することによって日本についても理解することができた。
- ◇ 4 年生は大きな数を 2 学期に習ったばかりで、具体的な大きな数に触れる機会にもなった。

3 使用した教材

<教材1> エチオピアクイズ(グループ用のクイズとパワーポイント)

<教材2> 日本とエチオピアのデータ比較クイズ

データは日本とエチオピアのウィキペディアより



<エチオピアクイズの一部>



	エチオピア	日本
面積	約 117 万 km ²	約 38 万 km ²
	(世界 26 位)	258 万 km ²
人口	約 1 億 200 万人	約 1 億 2700 万人
	(13 位)	(1 位)
時差	6 時間 (お昼)	9 時間 (お昼)
GDP (1 年にかせぐお金)	約 14 兆 3 千億円	約 566 兆 1 千億円
	(73 位)	256 兆円
ひとりあたり	約 116 万円	440 万円
1 年間にせぐお金	約 216 万円	約 23 兆円
ギネスやかんどう		

<比較クイズの一部>

2 時限目「ドルゼ村の生活や知恵について考えよう」

この時限のねらい

- ・ドルゼ村の生活と知恵に気付く。

1 児童生徒の活動の流れ

- ① ドルゼ村について知る。
 - ・ドルゼ村についてのクイズを行い、どんな国か班で相談しながら予想する。
 - ・パワーポイントで解答を確認してドルゼ村の概要を理解する。
- ② 偽バナナの活用について知る。
 - ・パワーポイントをみて食用それ以外の様々な活用について知る。
 - ・このような偽バナナのように様々な活用する知恵が日本にもないのかを考える。
- ③ 振り返りをする。
 - ・振り返りのワークシートを記入する。

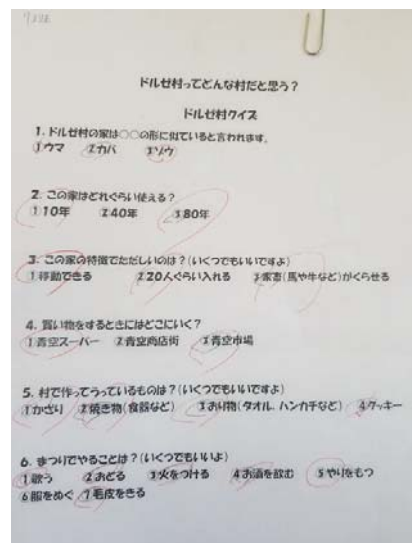
2 児童生徒の活動の成果・反応

- ◇ 日々物に囲まれている我々日本の生活だが、物が不足しているドルゼ村では、長年の豊かな知恵を働かせていることに児童は感心していた。
- ◇ ドルゼ村の紹介と偽バナナの活用を通して児童は、ドルゼ族の生活の知恵に感心していた。開発途上ではあるが、その現実を見た上でも多くの児童が彼らの生活に敬意を持ってくれたことが私には嬉しかった。肯定的な海外との出会いができたと思う。

3 使用した教材

<教材4> ドルゼ村クイズ[上]と偽バナナ[下]のパワーポイント

<教材5> ドルゼ村クイズ



3 時限目「日本の生活の知恵について考えよう」

この時限のねらい

- ・稲の活用の知恵に気付く。
- ・稲もニセバナナと同様に無駄無く使っていることを知り、それぞれの知恵の素晴らしさに気付く。

1 児童生徒の活動の流れ

- ① 稲の活用について考える。【フォトランゲージ】
 - ・グループでフォトランゲージを行い、稲の様々な活用について予想する。
 - ・児童がそれぞれの写真について説明する。
 - ・パワーポイントで話し合った内容を確認する。

<フォトランゲージでのグループ活動の様子>



2 児童生徒の活動の成果・反応

- ◇ 様々な稲を使った物についての予想をするフォトランゲージでは、児童は楽しそうに取り組んでいた。児童にとって初めての活動だったが、グループ内で活発に話し合っている様子が見られた。
- ◇ 3年生の社会で農業や昔の生活を学んでいたため、そのことを思い出しながら学んでいた。
- ◇ 毎日食べるお米ができるまでの物について知らない児童が多かった。断片的に知識として知っている状態だったが、理解を深めることができたと思う。

3 使用した教材

<教材4> フォトランゲージ(写真から児童が予想して説明)で用いた写真の一部



<しめ縄づくりの様子>



<糠の漬物での活用>

<教材5> フォトランゲージの解説で用いたパワーポイント



<縄ないと縄>



<蓑>

4 時限目「日本とエチオピアのそれぞれのちがいを考えよう」

この時限のねらい

- ・外国を知ることは自分の身のまわりを知ることに気付く。
- ・世界の問題点を知り、解決しようとする動きがあることを知る。

1 児童生徒の活動の流れ

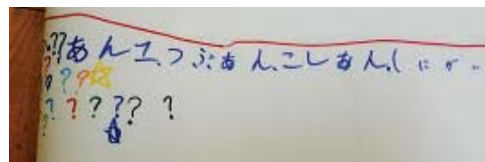
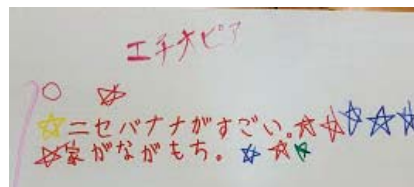
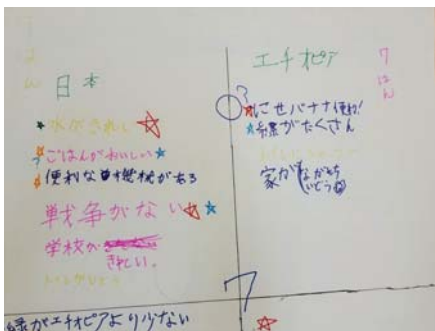
- ① アイスブレイキングをする。
 - ・背中に貼った自分の動物を当てる。
- ② 日本とエチオピアの良い所、問題点を考える。
 - ・班で模造紙にまとめる。【対比表】
 - ・両方に当てはまるものに印をつける。
 - ・全員が各班の模造紙を読んで共感したもの、分からない所に印をつける。
- ③ 全体で交流し、世界には様々な問題があることを知る。
 - ・②でまとめた意見を全体で交流する。
 - ・日本とエチオピアと同様に世界にはいろいろな問題点があることを知る。



<対比表にまとめる様子>

2 児童生徒の活動の成果・反応

- ◇ 児童は模造紙にまとめる活動を意欲的に行っていた。
- ◇ 他の班の児童から自分の意見に☆(なるほど)や?(疑問)のマークが沢山付いているのを喜んでいて、自分の意見に肯定的に反応が返ってきたり、それらを交流したりすることが楽しそうだった。参観した先生方にも好評でいろいろな活動で使えそうだった。
- ◇ エチオピアが素敵な所だと思ったと振り返りを書く児童が多く、肯定的な受け止め方をしていたことが分かった。
- ◇ 様々な問題があることを知った上で、色々な国を知りたい、という意見を書いた児童が多かった。



<児童同士で意見に☆や?を書き込む>

3 使用した教材

- <教材7> SDGs(持続可能な開発目標)
持続可能な開発のための 2030 アジェンダ(外務省 HP)



■ 全体を通して

児童は、国際理解に関する授業を今まであまり受けてはいなかったもので、詳しい話よりも様々な写真を見せて現地での経験を簡単に紹介しながら色々な意外性を感じさせられる授業を意識し、海外に対する興味・関心を養いたいと思った。そして、世界にも自分達の身の回りにも様々な問題はあることを認識しながらも、それぞれの素晴らしさを感じて欲しかった。

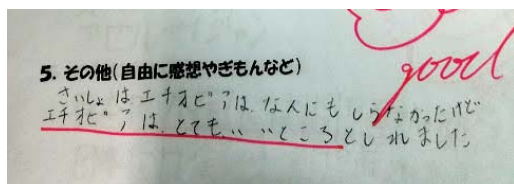
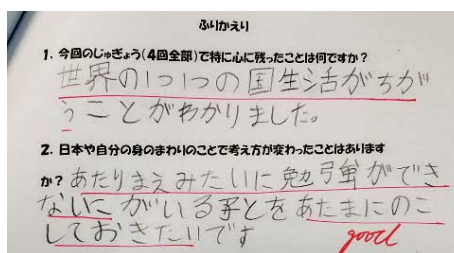
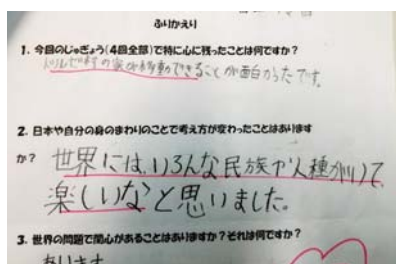
もう1つは、タイトルにもあるように、エチオピアの生活を学ぶと共に、日本や自分の身のまわりの生活を見直すような授業にした。海外と自分の当たり前が違うことを知った後では、自分の身の周りの当たり前が必ずしも当たり前ではないことに気付くこともあったと思う。そのことによって気付かなかった自分の身のまわりの問題点や良さにも気付いたり、考えたりすることができるのではないかと思った。

自分達の文化を大切にしながらも、色々な文化を尊重できる児童になることを願い、今回がそのきっかけとなればと授業をした。

1 授業の様子



<グループ活動の様子>



<授業を終えての児童の感想の一部>

IX. 研修全体のふりかえり・評価

● 研修受講者アンケート結果から

※ 以下項目1～4については、教師海外研修受講者を含む開発教育指導者研修(実践編)受講者に行ったアンケートから、教師海外研修受講者(16名)に特筆すべき結果が得られた設問について記載した。

1. 研修の満足度について

海外研修受講者は「とても満足できた」が94%であり、指導者研修のみの受講者の82%に比べ、より満足度の高い研修であったことがわかる。【設問1】

設問1：研修の満足度

		全回答数 上段：回答数 下段：割合	回答			
			とても満足できた	満足できた	ある程度満足できた	あまり満足できなかった+満足できなかった
教師海外研修	受講あり	16	15	1	0	0
		100%	94%	6%	0%	0%
	受講なし※	22	18	4	0	0
		100%	82%	18%	0%	0%

※ 教師海外研修 受講なし：開発教育指導者研修(実践編)のみ受講した者

2. 開発教育・国際理解教育の実践について

(1) 実践時間及び前年度からの変化

海外研修受講者の一人平均実践時間は15.0時間と、指導者研修のみの受講者の10.1時間に比べ、平均5時間多い。これは、指導者研修のみの受講者と比べ、海外研修受講者で1～4時間の短時間の実践が少なく、10時間以上の長時間の実践が多いことによる。【設問2】

実践時間の前年度からの変化では、海外研修受講者の100%が増加しており、指導者研修のみ受講者よりも27ポイント高くなっている。【設問3】

これらのことから、海外研修受講者は、指導者研修のみ受講者よりも、研修を契機に、前年度よりも実践時間が増加し、実践時間もより多い傾向にあったといえる。

設問2：本年度の実践時間

		全回答数 上段：回答数 下段：割合	回答					一人平均 実践時間
			1～4時間	5～9時間	10～14時間	15～19時間	20時間以上	
教師海外研修	受講あり	16	1	3	8	0	4	15.0
		100%	6%	19%	50%	0%	25%	
	受講なし	22	8	5	3	2	4	10.1
		100%	36%	23%	14%	9%	18%	

設問3：前年度に比べた開発教育・国際理解教育の実践時間の変化

		全回答数 上段：回答数 下段：割合	回答		
			増加	変わらず	減少
教師海外研修	受講あり	16	16	0	0
		100%	100%	0%	0%
	受講なし	22	16	2	4
		100%	73%	9%	18%

(2) 実践内容の深まりについて

海外研修受講者は「とても深まった」が69%であり、指導者研修のみの受講者の36%に比べ、より実践内容が深まっていることがわかる。【設問 4】

設問 4：実践内容の深まり度

		全回答数 上段：回答数 下段：割合	回答			
			とても深まった	深まった	ある程度深まった	あまり深まらなかった + 深まらなかった
教師海外研修	受講あり	16 100%	11 69%	2 13%	3 19%	0 0%
	受講なし	22 100%	7 36%	8 36%	6 27%	0 0%

3. 学習者のより良い変化について

研修の学びを活かして学校で当該教育の授業実践を行った結果、学習者により良い変化があったかとの設問に対し、海外研修受講者は「とても変化があった」が44%であり、指導者研修のみの受講者の18%に比べ、より学習者のより良い変化を感じ取っていることがわかる。【設問 5】。

「当該教育の実践により、学習者にどのようなより良い変化がありましたか」との設問に対して、指導者研修のみの受講者に比べ海外研修受講者の回答が多い項目は、「自分と他者・地域・世界のつながりを意識するようになった」、「自分とは異なる他者への共感、周りに対する思いやりの気持ちが育った」、「自らの生き方や共生について考えるようになった」、「自分に出来る国際協力への取組みに関心を持つようになった」であった。開発途上国の生の教材を使うことにより、世界とのつながり、多様性受容、国際協力に対する関心や日本人の取組みへの尊敬につながっていることが特徴的である【設問 6】。

設問 5：学習者のより良い変化度

		全回答数 上段：回答数 下段：割合	回答			
			とても変化があった	変化があった	ある程度は変化があった	あまり変化はなかった + 変化はなかった
教師海外研修	受講あり	16 100%	7 44%	5 31%	4 25%	0 0%
	受講なし	22 100%	4 18%	6 27%	11 50%	1 5%

設問 6：学習者のより良い変化の内容（複数回答）

		全回答数 上段：回答数 下段：割合	回答								
			開発途上国や国際協力に関する話題に興味や関心を持つようになった	自分と他者・地域・世界のつながりを意識するようになった	自分とは異なる他者への共感、周りに対する思いやりの気持ちが育った	自分の生活を振り返り、世界の人権や環境を大切にする意識が高まった	学ぶことを楽しむようになり、主体的または継続的な学びに取り組む意欲が育った	話す・聴く能力と態度が向上し、良好な人間関係を築くことにつながった	自らの生き方や共生について考えるようになった	自分に出来る国際協力への取組みに関心を持つようになった	その他
教師海外研修	受講あり	16 100%	10 63%	10 63%	11 69%	6 38%	5 31%	6 38%	7 44%	9 56%	1 6%
	受講なし	22 100%	13 62%	10 48%	12 57%	11 52%	13 62%	9 43%	7 33%	10 48%	2 10%

4. 研修内容への評価

(1) 事前研修

事前研修の一つの重要なポイントである「学びの3つの柱に沿ったねらいごとの情報収集シートの作成」に対する受講者の評価を聞いた。受講者の75%が「とても役立った」、19%が「役立った」と回答しており、事前研修における情報収集シートの作成が海外研修での学び等に対して役立っていると評価できる【設問7】。

設問7：「事前研修」における「情報収集シート」作成への評価

No.	選択肢	回答者数	割合
1	とても役立った	12	75%
2	役立った	3	19%
3	ある程度は役立った	1	6%
4	あまり役立たなかった + 役立たなかった	0	0%
	全体	16	100%

役立った主な理由及びより良くするための提案は、以下のとおりである。

<よかったこと>

- ◇現地で何をすれば良いかが明確になった（研修時間を有効に使うことができた）。
- ◇事前に考えていたことで、行ってから実際に何をすればよいかの指標となった。
- ◇予め何のためにどんな情報を得たいのかなどを考えておくで研修がより充実したものにできた。
- ◇学校種の異なるメンバーで対象の学年や年齢も様々だが、現地で得られる情報は膨大にあるので、学びの柱を基にチームで事前検討する機会があって良かった。
- ◇たった一度のチャンス、現地に行く前に、できるだけ何を集め、どう生かすかを準備できた。
- ◇限られた時間のなかで、研修メンバーで協力・役割分担をすることができた。
- ◇現地に行った時に取材したことをまとめるのに役立った。事前準備をすることで現地に行ってから考えたりするロスが少なく、効率的に学べた。
- ◇共有した情報をもって現地にいった。大量の情報なので、各自人数分印刷して当日もって行き、空港やフライト時間を活用してしっかり共有できた。
- ◇担当したテーマについて、ネットで調べ、みんなで空港にて勉強できた。
- ◇昨年パラグアイに行った方の生の話を聞けるのはとてもありがたい。

<より良くするための提案>

- ◇あまり内容がありすぎると、十分調べきれなくなるので、割り切って調べてくることも必要。
- ◇テーマは、重なる部分があった。明確に分けることができると、すべきこともより明確になってくる。
- ◇チームは、同じことに興味がある人同士だと、教材にするときに写真や情報にアクセスしやすい。
- ◇テーマの分類方法は、もう少し授業実践につながるように大きな項目にしてやればよかった。

(2) 事後研修

事後研修の重要なポイントである「現地教材を生かしたアクティビティづくりやねらいを達成するための実践プログラムの作成・評価」に対する受講者の評価を聞いた。受講者の81%が「とても役立った」、6%が「役立った」と回答しており、事後研修は、その後の実践に十分に役立っていると評価できる【設問 8】。

設問 8 : 「事後研修」での実践プログラムづくりへの評価

No.	選択肢	回答者数	割合
1	とても役立った	13	81%
2	役立った	1	6%
3	ある程度は役立った	2	13%
4	あまり役立たなかった + 役立たなかった	0	0%
	全体	16	100%

役立った主な理由及びより良くするための提案は、以下のとおりであった。

<よかったこと>

- ◇実践プログラムを組んで授業のイメージがもてた。提案してもらい、より内容が深まった。
- ◇帰国後すぐに学んだことを整理し、みんなで共有することでよりよい実践プログラムにつながった。
- ◇今後の授業の見通しを立てて、実践の内容やタイミングを考えることができた。
- ◇授業を組み立てる上でポイントとなる点を確認しながら授業作成ができた。
- ◇教材化の検討や実践プログラムの作成・評価を行うことによって、他の方からアドバイスをもらい、自分が持っていない視点に気づくことができて、より良いものを作ることができた。
- ◇授業展開の作り方が分かり、イメージができた。
- ◇仲間の授業プログラムも見られ、自分のプログラムの改善にもつながった。自分のプログラムのよいところやアドバイスをもらい、温かい気持ちになり、これからの意欲にもつながった。
- ◇自分一人では思いつかないアイデアをもらうことができた。
- ◇一人で考えていると、なかなかまとまらないので、助かった。 ◇勇気をもらえた。
- ◇授業案をみんなに見てもらい気づけなかった部分を知ることができ、実際の現場で利用できた。
- ◇同じものを見てきても考えることは人それぞれで、みんなの考えを共有してから教材化に臨めた。
- ◇お互いに最後にコメントをした時は本当に感動した。実践に向けて気合が入った。

<より良くするための提案>

- ◇時間が足りなかったので、事前にこんな感じで進めて行くのと準備ができるよ良かった。
- ◇実践プログラムの評価では、同じグループの人たちから沢山のアドバイスをもらったので、個々で教材化の検討の際にもっとグループ内で相談する時間や作る段階でアドバイスをし合えたら、さらに効果な手法が取り入れられただけでなく、修正が少なくて済んだのかもしれないと思った。
- ◇現地で集めた子どもの絵やアンケート、写真を教材にしたものを、他の受講者ともっとシェアできるとさらに良い教材になると思った。
- ◇何時間くらいの時間でどのようなねらいでやればよいかの目安にはなったが、実際に生徒達を目の前にして実践を行うと、なかなか指導案通りに進まなかった。
- ◇研修の時間の後に引き続き、会場で教材を自由に紹介し合える時間があると良い。

5. 教師海外研修の良かったところ、より良くするための提案

「教師海外研修の良かったところ」と「より良くするための提案」の主な回答は以下のとおり。

<良かったところ>

- ◇自分1人では絶対にできない経験できた。 ◇これ以上ない素敵な経験ができた。
- ◇現地でしかわからない異文化と同一性を、見聞きし、経験できた。
- ◇世界のさまざまな課題に向き合う方と出会え、話を聞き、旅行ではできない貴重な学びとなった。
- ◇いくつかの学校、様々な職種の海外協力隊の現場、いくつかの地域の視察、現地の人々との交流などいろいろな角度のエチオピアをみて学べた。
- ◇多分野の国際協力の現場を見て、体験することができた。五感で感じたこと・ものは大きい。
- ◇現地で先生との交流があったこと。 ◇自分ではいけないようなアフリカ大陸だった。
- ◇様々な分野の隊員の話が聞け、いろんな生き方があることを知ることができた。
- ◇自分の興味・関心以外の切り口で物事が見られるので、3つの学びの柱は良かった。
- ◇毎日のふりかえりの時間で、思いや感じたこと、気づきを伝え聞くことで、ずいぶん思いがまとった。
- ◇これからのことを一緒に考えていける仲間に出会えたこと。 ◇良い仲間ができた。
- ◇県外の方、校種の違う方と思いを共有できる仲間に出会えた。 ◇毎日の夜の話し合い。
- ◇仲間との話し合いの時間。 ◇現地でのワークがより学びを深くした。
- ◇現地での研修を通して改めて考えた「教育とは」という自身の信念、また仲間からもらった「みんながみんなのサポーター」のメッセージはずっと大切にしたい。
- ◇さまざまな年代・校種の先生が集まって、寝食を共にして学ぶことができたこと。
- ◇すべての訪問地、出会い、見たこと、感じたこと、得たモノすべてが、教育に生かせるものとなった。
- ◇同行ファシリテーターの存在は大きい。すべての訪問先で、それぞれが感じたことをシェアしたり、思いをぶつけあったりできた。
- ◇同行ファシリテーターが気づいたこと感じたこと分かったことを共有する機会をたくさん作ることで間違いなく学びが深まった。
- ◇かけがえのない仲間と出会い、開発途上国に行くと多くの人たちと話すうちに誰かを愛することの素晴らしさに気が付いたこと
- ◇子どもたちに実体験からの異文化を知らせ、体験させたりすることで学びを深めることができた。
- ◇中間発表は人前で未完成な状態を見せることも次のステップのために必要な時間だった。
- ◇マナビノオトは宝物。
- ◇受講者それぞれが資料を集めてきて、長時間の往路で学び合う機会は本当によかった。
- ◇8人くらいの小グループだったので、まとまりがよかった。

<より良くするための提案>

- ◇もっと現地で働いている方とゆっくりと話せる時間があればよかった。
- ◇現地の子供たちと触れ合う機会がもっともっとほしかった。一緒に遊びたかった。
- ◇アムハラ語をもっと使って交流したかった。事前に挨拶くらいは徹底して覚えていけばよい。
- ◇交流のための歌は、もっと「つながり」や「仲間」を連想させる日本の歌を準備していけばよかった。
- ◇今後受講者同志で交流する場があるとありがたい。
- ◇パラグアイは、夏休みに入ってすぐの研修でバタバタしたので、あと2~3日後だとよい。

● 実践内容の評価

※実践報告書の内容について下記の指標から評価を行った結果をまとめた。

評価は、4 人の評価者が、実践度合いを「なし」0点～「特にあり」2点まで点数化しその平均値で行った。「特あり」は 1.5 点以上、「あり」は 0.5～1.4 点、「なし」は 0.4 点以下とした。

● 開発教育・国際理解教育における「学習者の学びの3つの柱」に関する指標

指標① 柱1：学習者が、「訪問国に肯定的に出会う」次のような学びがあるか。

- ① 訪問国を身近に感じられるようになる。
- ② 自分たちとは異なるやり方、考え方、文化をオモシロイ!それもアリ!と思える。
- ③ 自分の当たり前が世界の当たり前ではないことに気付く。
- ④ 自分の中のステレオタイプ/思いこみに気付く。

指標② 柱2：学習者が、「日本と訪問国とのつながりや同一性に気づく」次のような学びがあるか。

- ⑤ 多様な中にも人々の暮らしや感情・希望には多くの同一性があることに気付く。
- ⑥ 人、ものなどを通し、日本と訪問国がつながっていることに気付く。
- ⑦ 訪問国と相互に依存しあい、途上国から様々な恩恵を受けていることに気付く。
- ⑧ 海外で頑張る日本人の想いや活動内容から、生き方・働き方について考える。

指標③ 柱3：学習者が、「共通の課題について共に考え・共に越える」次のような学びがあるか。

- ⑨ 訪問国には誇りがあると同時に、残念なことがあることに気付く。
- ⑩ 各課題の原因を知り、日本や自分たちとの関わりに気付く。
- ⑪ 各課題の現状を知り、放っておくとその国の人や自分たちにどんな影響があるか考える。
- ⑫ 課題解決のためお互いの国が学び合い、協力し合えることに気付く。
- ⑬ 訪問国の課題から、翻って日本の課題を考える。

● 学習者主体の参加型、収集教材の活用に関する指標

指標④ プログラムに流れがあり、気づきから行動へとつながるものとなっているか。

- ◇ 学習者の年齢・関心の程度に応じて、その意識の流れに沿ったプログラムとなっているか。
- ◇ 学習者が、「知る、気づく」に留まらず、気づきを基に、「自分にできることを考える、実際に行動できるようにするためのスキルを身につける」ことができるようなプログラムとなっているか。

指標⑤ 学習者が、主体的に考え、学習者同士が学び合えるような問いかけや手法となっているか。

- ◇ 学習者が内発的に気づいたり、主体性に考えたりできる問いかけや参加型手法を使っているか。
- ◇ 知識伝達のみ・予定調和の答えではなく、学習者が学びあう中で答えを見つけたり、新しい発見ができるようなプログラムとなっているか。

指標⑥ 現地で収集・整理した教材が効果的に活用されているか。

- ◇ 現地に行ったからこそ得られる素材や情報(教材)を活用できているか。
- ◇ 教材の活用として、単に現地について知ってもらうために見せたりするだけでなく、教材をもとに、「想像する」「読み取る」「対比する」「表現する」などができるような加工や問いかけの工夫があるか。

1. 学びの3つの柱についての実践度

教師海外研修では、3つの学びの柱に沿って、現地での情報収集や実践プログラムづくりを行った。各授業実践に、3つの学びの柱がどれだけ盛り込まれたかについて、受講者の実践報告書の評価を行った。その結果は下表のとおりである。

各柱の実践度を見ると、「柱3：共通の課題について共に考え・共に越える」の実践度が高く、次いで「柱1：訪問国に肯定的に出会う」、「柱2：日本と訪問国とのつながりや同一性に気づく」の順となっている。本年度は、柱3に関する実践が進むような働きかけを行ったこともこの結果につながっていると

一方、実践対象や確保実践時間の都合、訪問国で体験できた内容など個々の事情はあるが、実践度が「なし」に区分された実践も柱1と柱3であった。

学びの3つの柱からみた実践内容の評価結果

学びの柱	実践度(上段:人数、下段:割合)		
	特にあり	あり	なし
柱1:訪問国に肯定的に出会う	7 44%	8 50%	1 6%
柱2:日本と訪問国とのつながりや同一性に気づく	1 6%	15 94%	0 0%
柱3:共通の課題について共に考え・共に越える	8 50%	6 38%	2 13%

2. 参加型、収集教材活用の実践度

本研修では、開発教育・国際理解教育を通して、世界における共通の課題解決に向けた行動につながるプログラムの作成、学習者の主体的な学び合いを支援する参加型手法の活用ができる指導者育成をめざしている。また、海外研修においては、現地で得られる教材を活かして実践をすることも求めている。受講者の実践において、関連する3つの指標について評価した結果は下表のとおりである。

3つの指標ともに、すべての受講者が実践していると評価できた。

参加型・現地教材の活用	実践度(上段:人数、下段:割合)		
	特にあり	あり	なし
気づきから行動へとつながるプログラムの流れ	6 38%	10 63%	0 0%
主体的に考え、学習者同士が学び合えるような問いかけや手法	11 69%	5 31%	0 0%
現地で収集・整理した教材の効果的な活用	9 56%	7 44%	0 0%

2017年度 教師海外研修報告書

発 行 2018年3月

発 行 者 独立行政法人国際協力機構 中部国際センター（JICA中部）

〒453-0872 名古屋市中村区平池町4丁目60-7

Tel : 052-533-0220 (代表) Fax : 052-564-3751

<http://www.jica.go.jp/chubu/>

